

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

見川塚畑遺跡

広域公園偕楽園公園園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

み が わ つ か は た
見川塚畑遺跡

広域公園偕楽園公園園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



第19号竖穴建物跡遺物出土状況



第19号竖穴建物跡出土遺物

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に伴って実施した、水戸市見川塚畑遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、弥生時代の竪穴建物跡が多数確認でき、水戸市における弥生時代の集落跡の一端が明らかとなりました。これらの成果は、当地域における弥生時代の様相を知る上で欠くことのできない貴重な資料となります。本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成30年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 野口 通

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成 27・28 年度に発掘調査を実施した、茨城県水戸市見川 1 丁目 1234 番地 1 ほかに所在する見川塚畑遺跡^{みがわつかはた}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 28 年 1 月 1 日～3 月 31 日
平成 28 年 4 月 1 日～7 月 31 日
整理 平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
平成 27 年度
首席調査員兼班長 寺内久永
次席調査員 木村光輝
調査員 天野早苗
平成 28 年度
首席調査員兼班長 奥沢哲也
次席調査員 三浦祐介
調査員 盛野浩一
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、次席調査員盛野浩一が担当した。
- 5 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。
- 6 第 3 号竪穴遺構から出土した炭化材の樹種同定及び弥生土器の底面についての圧痕分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。結果については、付章で掲載した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 41,720 \text{ m}$ 、 $Y = + 54,760 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HG - 遺物包含層 P - ピット SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑
SS - 集石遺構 TM - 塚

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品

土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		火床面・炉石被熱痕・竈範囲
	粘土範囲・石器磨痕		柱痕跡・柱あたり
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	- - - -	硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SI 4 → 第 1 号竪穴遺構 SI 20 → 第 2 号竪穴遺構 SI 26 → 第 3 号竪穴遺構

SS 3 → 第 2 号遺物包含層

欠番 SK 1

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
見川塚畑遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
遺物包含層	11
2 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 竪穴遺構	85
(3) 土坑	87
3 古墳時代の遺構と遺物	88
竪穴遺構	88
4 平安時代の遺構と遺物	90
竪穴建物跡	90
5 江戸時代の遺構と遺物	97
塚	97
6 その他の遺構と遺物	98
(1) 道路跡	98
(2) 溝跡	99
(3) 土坑	101
(4) 集石遺構	106
(5) 遺物包含層	108
(6) 遺構外出土遺物	108

第4節	まとめ	110
付	章	121
写真	図版	PL 1 ~ PL 24
抄	録	
付	図	

見川塚畑遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

見川塚畑遺跡は、水戸市の中央部に位置し、桜川左岸の標高 24 ～ 26 m の台地上に立地しています。広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成 27・28 年度に 8,000㎡ について発掘調査を行いました。



調査の内容

調査の結果、縄文時代の遺物包含層 1 か所、弥生時代の竪穴建物跡 25 棟、竪穴遺構 2 基、土坑 1 基、古墳時代の竪穴遺構 1 基、平安時代の竪穴建物跡 3 棟、江戸時代の塚 1 基などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（蓋・高坏・広口壺・壺）、土師器（椀・壺・甕）、須恵器（坏・蓋）、灰釉陶器（瓶）、土製品（紡錘車）、石器（鎌・磨製石斧・磨石・敲石・砥石・炉石）、銭貨（寛永通寶）などです。



群在する竪穴建物跡



北西上空から見た見川塚畑遺跡(左奥が千波湖)



完全な形で出土した弥生土器



竪穴建物跡の調査



出土した紡錘車

調査の成果

調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけて断続的に利用されていたことがわかりました。特に弥生時代の遺構からは、^{なか}那珂川や^{くじ}久慈川流域を中心とした地域で使われていた^{じゅうおうだい}十王台式土器が出土しており、弥生時代後期（約1,800年前）にムラが営まれていたことがわかりました。那珂川流域でこの時代のムラが確認された遺跡では、弥生時代以降にも人々が生活し、古い時代の遺構や遺物が壊されていることが多いのですが、当遺跡では良好な状態で残されていました。完全な形になる土器や紡錘車も数多く出土しており、十王台式土器を使用した人々の生活を復元するための貴重な資料となります。

また、平安時代（約1,200年前）の竪穴建物跡を3棟確認しました。3棟ともコーナー部に竈を持つ特徴的な作りをしています。灰釉陶器や灯明皿として利用されたことが考えられる須恵器の坏が出土しており、当時の一般的なムラとは違う様子がうかがえます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、県土発展の基盤となる社会インフラの整備や維持管理に取り組んでおり、その一環として広域公園偕楽園公園園路広場整備事業を行っている。

平成26年5月13日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、広域公園偕楽園公園園路広場整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は、平成26年5月22日に現地踏査を行い、続いて、同年7月15・24日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成26年12月11日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に見川塚畑遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成27年2月10日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成27年3月13日、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

平成27年3月16日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成27年3月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、見川塚畑遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成28年1月1日から3月31日まで、及び同年4月1日から7月31日まで、発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

見川塚畑遺跡の調査は、平成28年1月1日から3月31日まで、同年4月1日から7月31日までの7か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	平成27年度			平成28年度			
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
調査準備 表土除去 遺構確認		■	■		■	■		
遺構調査		■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■	■	■	■	■	■
撤収				■				■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

見川塚畑遺跡は、茨城県水戸市見川1丁目1234番地1ほかに所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置している。市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶏足山塊に属する標高60～200mの丘陵地、中央部が東茨城台地の北東部にあたる標高20～30mの水戸台地、北部の一部が標高30～40mの那珂台地、北部から東部へ流れる那珂川の流域が標高10m以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられる。

台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、その上に、下から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である砂礫層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる¹⁾。

当遺跡は、沢渡川と桜川に挟まれた見和台地上に立地する。二つの川が合流する地点から西側の標高24～26mの台地先端部に位置しており、低地との比高は約15mである。調査前の現況は山林である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する水戸市は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている²⁾。ここでは、当遺跡に関連する遺跡を中心に、時代ごとに記述する。

旧石器時代に関しては、市域北部の台地上のニガサワ遺跡^に、二の沢遺跡^{さわ}、ドウゼンクボ遺跡などで石器が採集されており、^{じゅうまんぼら} 十萬原遺跡では石器集中地点や集石土坑などが確認されている³⁾。

縄文時代では、^{あたごちよう} 愛宕町遺跡〈15〉、アラヤ遺跡^{わたりちよう}、渡里町遺跡などが上市台地の縁辺部に位置し、この地域が早い時期から生活域として利用されていたことがわかる。また、『常陸國風土記』に巨人伝説が記され、古代からその存在が知られていた^{おおぐし} 大串貝塚をはじめ、^{やぎさき} 柳崎貝塚〈23〉や^{よしだ} 吉田貝塚など、那珂川・桜川の流域が豊かな資源を与える生活に適した場であったことがうかがえる。

弥生時代では、那珂川流域の台地上を中心に遺跡や遺物が確認されている。吉田台地上では、古くから当該期の遺跡の調査が行われてきており、集落が確認されている遺跡だけで、^{しもやしき} お下屋敷遺跡⁴⁾、^{やくおういんひがし} 薬王院東遺跡⁵⁾、^{おがまち} 大鋸町遺跡⁶⁾、^{ひがしぐみ} 東組遺跡⁷⁾、^{まちつき} 町付遺跡⁸⁾が挙げられる。これらの遺跡は後期後半の十王台式期を中心とするものであり、この時期に流域の開発が進んだことがうかがえる。また、出土する土器に時期差がみられることから、吉田台地で生活した人々が少しずつ移動を行いながら集落を営んでいたことが考えられている⁹⁾。こうした集落遺跡から出土する土器には、福島県域や茨城県西部及び南部の特徴を持つ土器などもあり、多様な交流関係を持っていたようである。上市台地上においても^{ほり} 堀遺跡¹⁰⁾、^{あたごやま} 愛宕山古墳群〈16〉¹¹⁾で集落が確認されている。見和台地上において当該期の遺跡に調査の手が入ったのは当遺跡が初めてとなる。

十王台式期の末期になると、十王台式土器と古墳時代の土器が共伴することが知られており、漸次古墳時代の文化に移行していくことが考えられている。古墳時代の遺跡としては、上市台地上に愛宕山古墳群があり

国指定史跡である愛宕山古墳が存在している。県内では石岡市の舟塚山古墳^{ふなつかやま}、常陸太田市の梵天山古墳^{ぼんてんやま}に次ぐ全長136.5mの大型前方後円墳である。また、台渡里官衙遺跡群^{だいわたりにかんが}では豪族居館跡に伴うと考えられている一辺75mの方形の堀が発見されており、国造の存在が考えられている。集落遺跡は、大鋸町遺跡や東組遺跡など、前時代の立地を踏襲している遺跡も多くみられる。

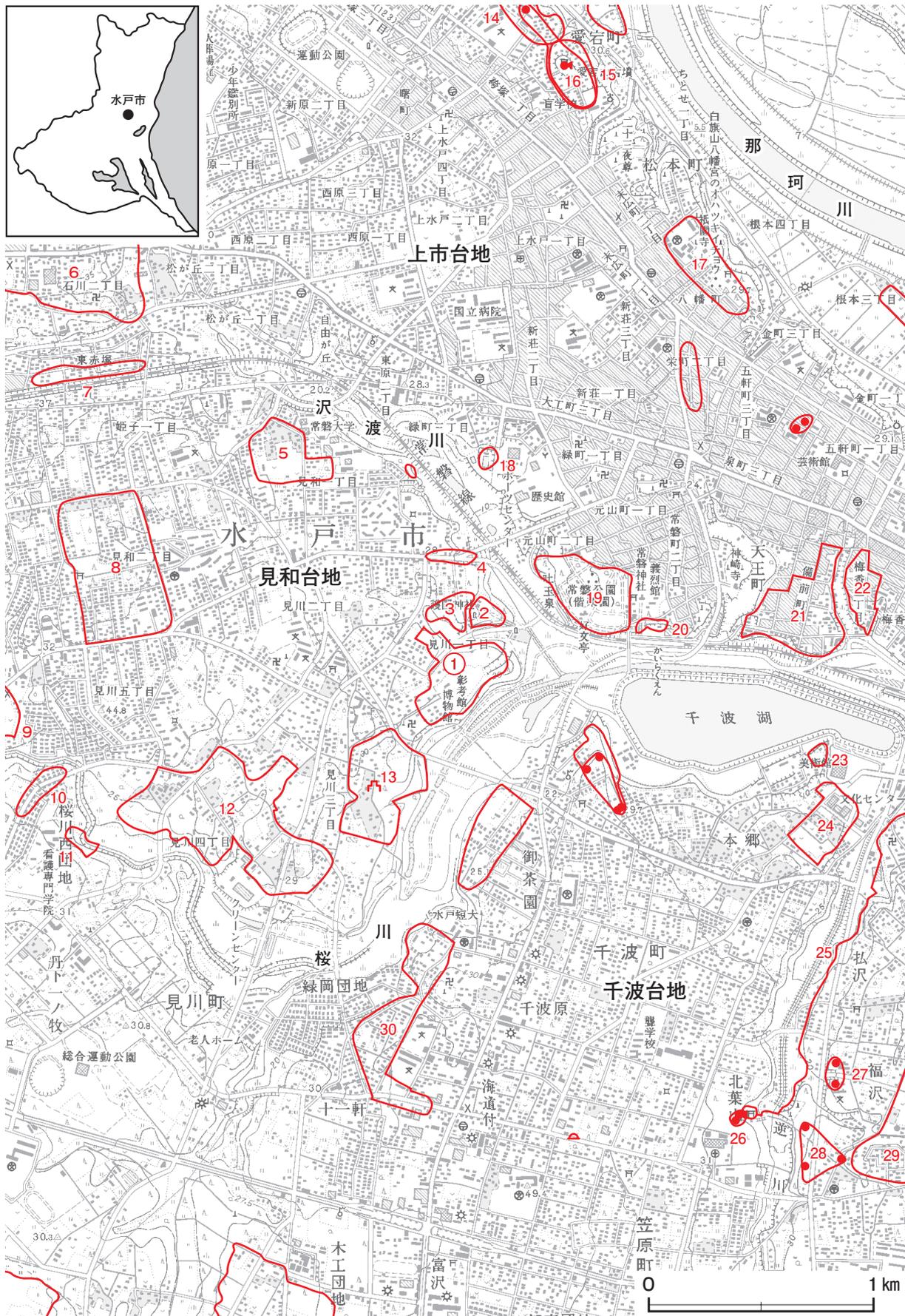
奈良・平安時代の主な遺跡としては国指定史跡の台渡里官衙遺跡群^{ちやうじややま}があげられる。長者山地区^{ちやうじややま}が那賀郡衙の正倉院に比定されており、観音堂山地区^{かんのんどうやま}では7世紀後半、南方地区^{なんぽう}では9世紀後半の時期の異なる寺院跡が確認されている。周辺にはアラヤ遺跡、渡里町遺跡、西原遺跡^{にしはら}、堀遺跡、文京二丁目遺跡^{ぶんきやうにちやうめ}などが分布しており、台渡里廃寺跡を中心としたこれらの遺跡群は、那賀郡の郡庁院、正倉院、寺院、集落が一体となった官衙関連遺跡として捉えられている¹²⁾。集落遺跡は、上市台地上においては堀遺跡や水戸城跡¹³⁾で、吉田台地上においては薬王院東遺跡や大鋸町遺跡などで確認されている。

中世以降になると、水戸地方においても戦乱が続き、多くの城館が築かれている。平安末期から鎌倉時代初期には馬場資幹が後の水戸城となる場所に館を構える。そのほかにも周辺には数多くの城館が確認されており、那珂川を望む台地上において、有力領主層を頂点とする領地支配のネットワークがみてとれ、政治的・軍事的に重要な地であったことがうかがえる¹⁴⁾。水戸城はその後、江戸氏の居館となり城郭としての構えを成立させ、戦国時代末期には常陸国を統一した佐竹氏の領国支配の本拠となった。佐竹氏は城の整備・拡張や城下の整備を進め、徳川時代の城郭及び城下町の基礎を作った。

江戸時代に入ると、佐竹氏は秋田へ転封を命じられ、水戸徳川家が水戸藩を治めることとなる。徳川家はさらに水戸城の整備を進めており、発掘調査等でその状況が分かる地点も増えている¹⁵⁾。城下には旧借楽園^{かいらくえん}(19)、七面製陶所跡^{しちめんせいとうじよ}(20)、笠原水道^{かさはらすいどう}(25)等、水戸藩に関連する遺跡が複数存在している。また、当遺跡には、徳川家の屋敷地が存在しており、古くは徳川家宅地内縄文遺跡・同弥生遺跡と呼称されていた。

註

- 1) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 2) 水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財包蔵地分布地図(平成24年度版)」2012年3月
- 3) 皆川修「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集 2001年3月
- 4) 伊藤重敏「お下屋敷遺跡」『茨城県資料 考古資料編 弥生時代』1991年3月
- 5) 井上義安『薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 6) 井上義安『水戸市大鋸町遺跡(仮称)元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988年12月
- 7) 南田法正ほか「東組遺跡(第1地点) -物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」『水戸市埋蔵文化財調査報告』第25集 2009年3月
- 8) 南田法正ほか「町付遺跡(第1地点) -集合住宅建設に伴う発掘調査報告書-」『水戸市埋蔵文化財調査報告』第24集 2009年3月
- 9) 色川順子ほか「薄内遺跡(第1地点) -移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」『水戸市埋蔵文化財調査報告』第18集 2008年8月
- 10) 井上義安「水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市堀遺跡発掘調査会 1995年12月
- 11) 根本康弘「愛宕山古墳群 旧水戸生涯学習センター解体撤去事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第414集 2016年3月

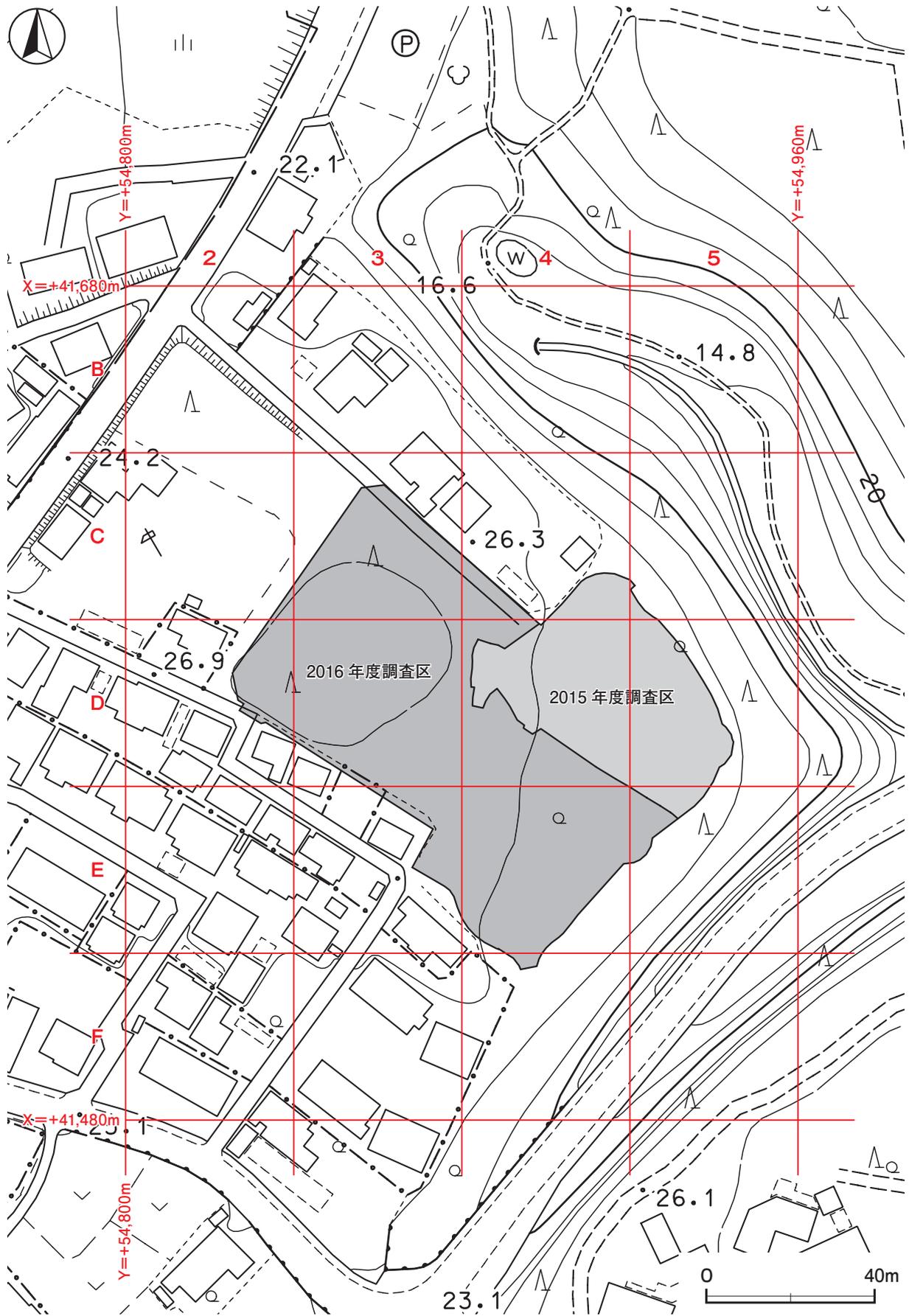


第1図 見川塚畑遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000分の1「水戸」「ひたちなか」)

表1 見川塚畑遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	見川塚畑遺跡		○	○	○	○		○	16	愛宕山古墳群		○	○	○			○
2	植松遺跡	○	○	○	○				17	茨城高等学校遺跡		○			○		
3	横西遺跡					○			18	東町遺跡				○	○		
4	坂上遺跡				○				19	旧偕楽園							○
5	見和一丁目遺跡					○			20	七面製陶所跡							○
6	西堀原遺跡					○			21	釜神町遺跡		○					
7	宮西遺跡		○		○				22	鷹匠町遺跡					○		
8	見和二丁目遺跡					○			23	柳崎貝塚		○					
9	若林遺跡		○						24	下本郷遺跡		○					
10	見和遺跡		○		○				25	笠原水道							○
11	丹野一ノ馬土手							○	26	笠原古墳群				○			
12	台内田遺跡		○		○				27	払沢古墳群				○			
13	見川城跡						○		28	福沢古墳群				○			
14	文京一丁目遺跡		○	○	○	○			29	米沢町遺跡			○	○	○		
15	愛宕町遺跡		○	○	○				30	杳掛遺跡				○			

- 12) 佐々木藤雄他 「台渡里廢寺跡－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月
- 13) 盛野浩一「水戸城跡 水戸地方検察庁仮庁舎建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第396集 2015年3月
- 14) 井上琢哉 「主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 加倉井忠光館跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第294集 2008年3月
- 15) 宮田和男 関口慶久「水戸城大手門・大手道の調査」『第39回茨城県考古学協会研究発表会 資料』2017年6月
清水哲「水戸城跡 一般県道市毛水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第329集 2010年3月



第2図 見川塚畑遺跡調査区設定図（水戸市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

見川塚畑遺跡は、水戸市の中央部に位置し、桜川左岸の標高24～26mの台地上に立地している。桜川は、千波湖の西側で沢渡川と合流し東へ向かい、那珂川と合流している。当遺跡は、桜川と沢渡川が合流する地点から西側にある見和台地の先端部に南北約440m、東西約420mの範囲で広がっている。今回の調査区は、遺跡の北西端にあたる。調査面積は8,000㎡で、調査前の現況は山林である。

調査の結果、竪穴建物跡28棟（弥生時代25・平安時代3）、竪穴遺構3基（弥生時代2・古墳時代1）、塚1基（江戸時代）、土坑44基（弥生時代1・時期不明43）、道路跡1条（時期不明）、溝跡18条（時期不明）、遺物包含層2か所（縄文時代・時期不明）、集石遺構2基（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に70箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（高坏・蓋・広口壺・壺・甕）、土師器（椀・壺・甕・小形甕）、須恵器（坏・蓋）、灰釉陶器（瓶）、土製品（紡錘車）、石器（鏃・磨製石斧・磨石・敲石・砥石・炉石）、銭貨（寛永通寶）などである。

第2節 基本層序

調査区西部（C3h1区）及び中央部（D4a2区）の台地上の平坦面にテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は表土を除き9層に分層できる。土層観察は以下の通りである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土である。ロームブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は普通で締めりはやや弱く、層厚は8～12cmである。

第2層は、黒褐色を呈する層である。ローム粒子・炭化粒子を少量含み、粘性・締めりは普通で、層厚は18～27cmである。調査区壁際で確認できる遺構覆土との関係から、弥生時代以降の堆積である。調査区東部では残存しておらず、ほとんど確認できない。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。地点によっては第2層との漸移層も含まれる。炭化粒子・赤色粒子・白色粒子を極微量含み、粘性はやや弱く締めりは普通で、層厚は10～24cmである。赤色粒子・白色粒子は、今市軽石または七本桜軽石と考えられる。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。炭化粒子を極微量含み、粘性・締めりは普通で、層厚は20～34cmである。

第5層は、第3・4層よりやや明るい褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で締めりは強く、層厚は19～31cmである。

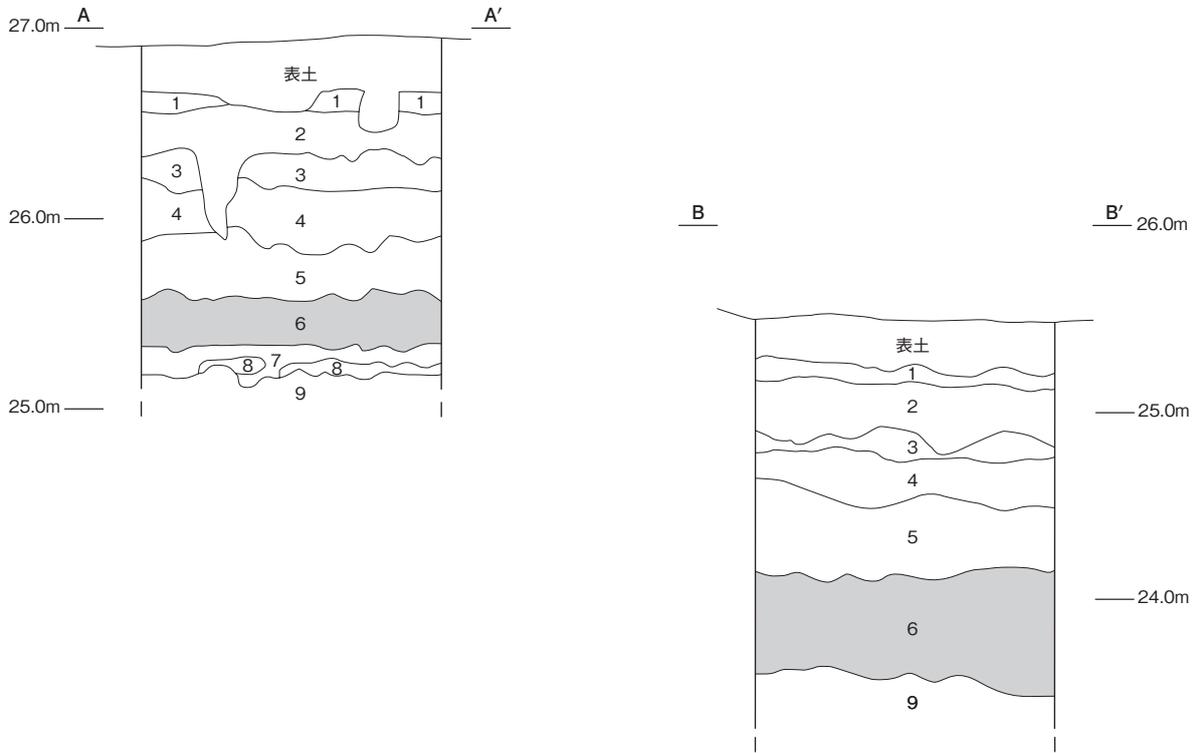
第6層は、第3・4層よりやや暗い褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く締めりはやや強く、層厚は21～51cmである。第2黒色帯に相当すると考えられ、中央部では下層と不整合に堆積している。

第7層は、黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石を少量含み、粘性・締めりはやや強く、層厚は5～15cmである。

第8層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石を多量含み、粘性はやや弱く締めりは普通で、層厚は0～20cmである。

第9層は、黄橙色を呈する鹿沼軽石層である。粘性は弱く締まりは強い。下層が未掘のため、層厚は不明である。

遺構は、第3層中から第4層の上面で確認した。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、遺物包含層1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

遺物包含層

第1号遺物包含層（第4・5図 PL2）

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD5d2～D5g4区にかけての標高24mほどの緩斜面部に位置している。

規模 東西幅・南北幅それぞれ約12mにかけて確認した。標高差は約0.8mである。

遺物出土状況 縄文土器片267点（深鉢）、石器36点（鏃1・磨石31・敲石2・敲砥石1・石皿1）、石核10点、剥片・チップ類41点、被熱礫46点のほか、弥生土器片8点（広口壺）、自然礫片9点が基本層序の第3層中から出土している。

所見 縄文時代早期中葉の土器が85%と主体をなしており、当該期に捨て場として利用されたと考えられる。また、瑪瑙を中心とする石核、剥片・チップ類も出土しており、付近で石器製作が行われたと考えられる。

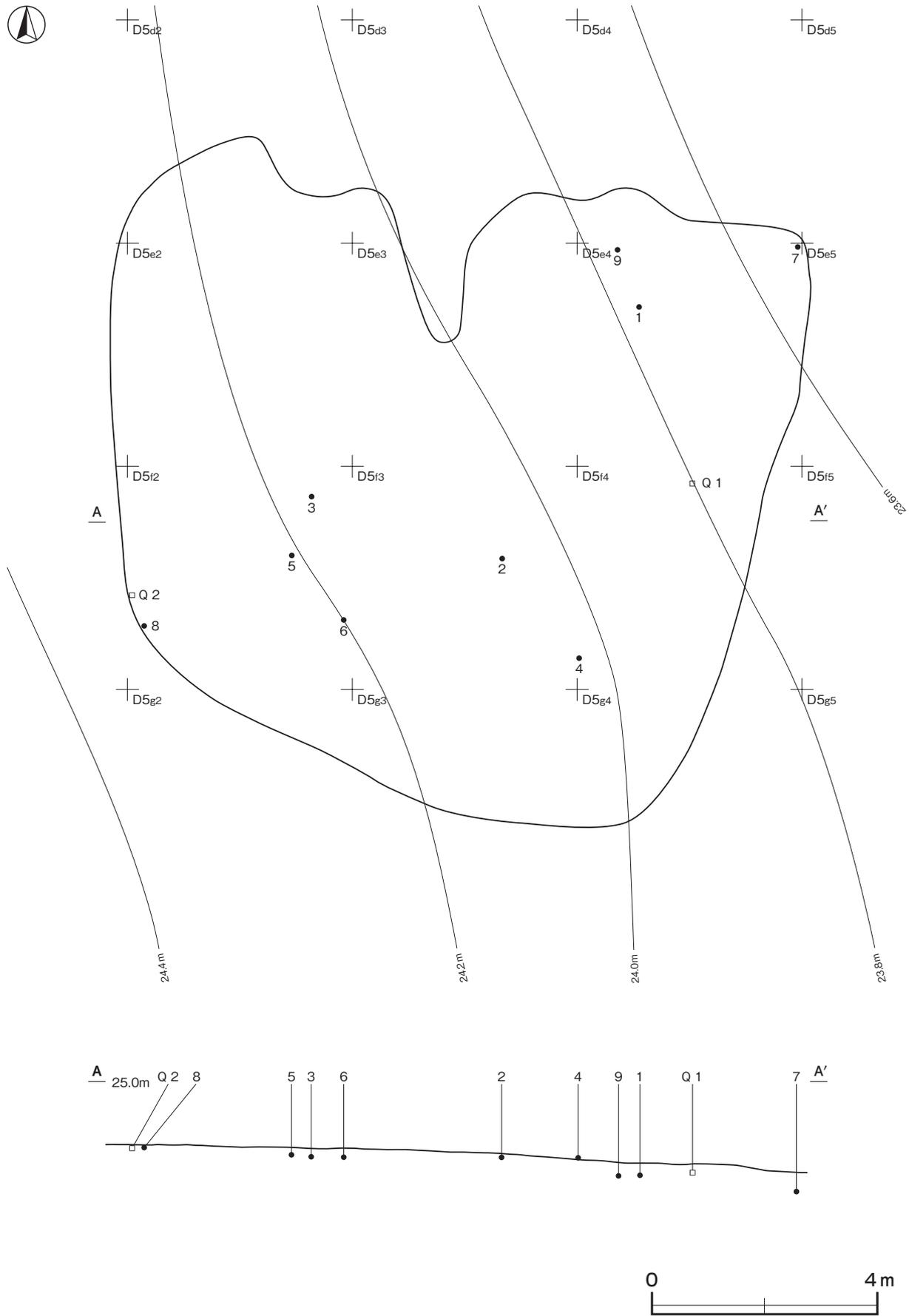
第1号遺物包含層出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	波状口縁 斜位・横位の沈線	D5e4	PL22 早期中葉
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	平行沈線 菱形区画の沈線内に刺突文	D5f3	PL22 早期中葉
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	平行沈線 斜位の条痕文	D5f2	PL22 早期中葉
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	波状口縁 斜位・縦位の沈線	D5f4	PL22 早期中葉
5	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部斜位の沈線 連続刺突文と横位の沈線	D5f2	PL22 早期中葉
6	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英	橙	普通	縦位のナア	D5f2	5% PL22 早期中葉
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	貝殻腹縁圧痕 平行沈線 斜位の沈線	D5e4	PL22 前期中葉
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部に縄文原体押圧	D5f2	PL22 早期中葉
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	横位の単節縄文LR後横位の沈線	D5e4	PL22 晩期中葉

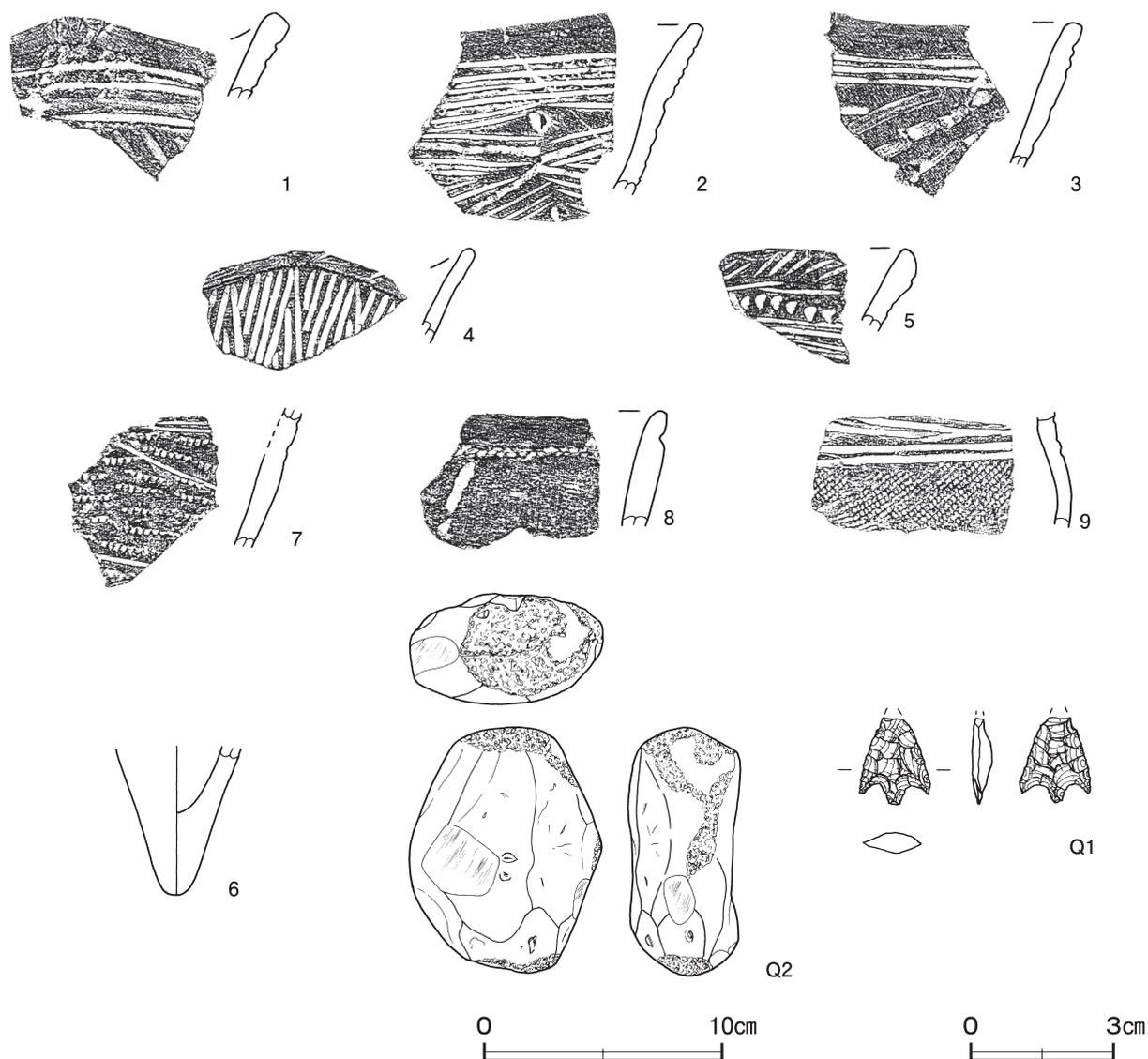
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	鏃	(1.9)	1.5	0.5	(1.0)	瑪瑙	有茎 先端部欠損	D5f4	PL23
Q2	敲砥石	10.6	8.2	4.7	564.3	チャート	楕円礫の両端・側縁部に敲打痕・砥面	D5f2	PL23

表2 第1号遺物包含層グリッド別出土遺物集計表

グリッド		D5d2	D5d3	D5d4	D5e2	D5e3	D5e4	D5f2	D5f3	D5f4	D5g2	D5g3	D5g4	合計
縄文土器	早期	9		5	22	18	18	52	55	31	2	10	4	226
	前期					1	2		2			1		6
	中期		1				1	1						3
	後期			1					14					15
	晩期				1		1							2
	不明					1			13		1			15
小計	9	1	6	23	20	22	53	84	31	3	11	4	267	
弥生土器（後期）		2	2						1				3	8
石器	鏃									1				1
	磨石（被熱数）	2			4	2 (1)	1	5 (3)	12 (11)			3 (1)	2 (1)	31 (17)
	敲石・敲砥石					1		1	1					3
	石皿（被熱数）								1 (1)					1 (1)
小計	2	0	0	4	3	1	6	14	1	0	3	2	36	
石核					1	1		2	6					10
剥片・チップ		1			3	8	5		14	10				41
礫（被熱数）		2 (2)	1		2	2 (1)	5 (5)	12 (10)	16 (13)	2 (2)	2 (2)	7 (7)	4 (4)	55 (46)



第4図 第1号遺物包含層遺物出土状況図



第5図 第1号遺物包含層出土遺物実測図

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 25 棟、竪穴遺構 1 基、土坑 1 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第6～9図）

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD 4 c2区、標高 25 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.86 m、短軸 5.70 mの隅丸方形で、主軸方向はN - 34° - Wである。壁は高さ 18～33cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、出入り口部から炉の周辺にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径 92cm、短径 83cmの楕円形で、深さ 8 cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼ

んでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第1層は覆土第6層に相当する。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ57～65cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1層は柱痕跡、第2層は埋土である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片804点（高坏1, 広口壺803）、土製品3点（紡錘車2, 不明1）、石器12点（石鍬1, 磨製石斧1, 磨石5, 敲石3, 台石1, 炉石1）、剥片1点のほか、縄文土器片12点（深鉢）、須恵器片3点（坏2, 蓋1）、土師器片11点（高坏1, 甕10）、土師質土器片1点（羽釜）、陶器片1点（播鉢）、磁器片1点（碗）、粘土塊1点、自然礫7点が出土している。11は北西壁際の床面から逆位で、12・15は、南東壁側の床面から横位で、それぞれ遺棄された状態で出土している。10は、西コーナーから中央部にむかって破片が投棄されたような出土状況を示している。Q3・Q4は出入り口付近の床面から出土している。

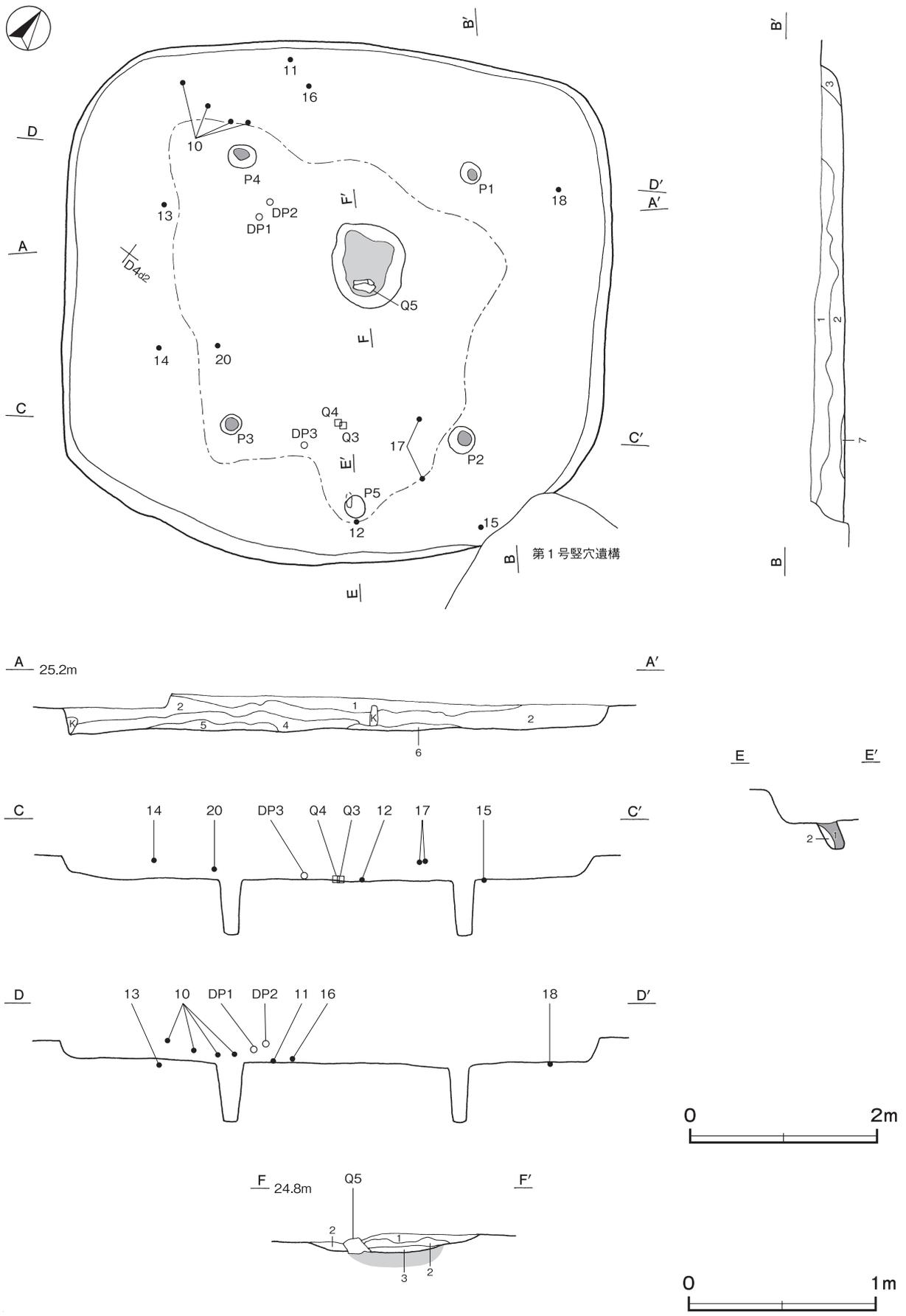
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第7～9図）

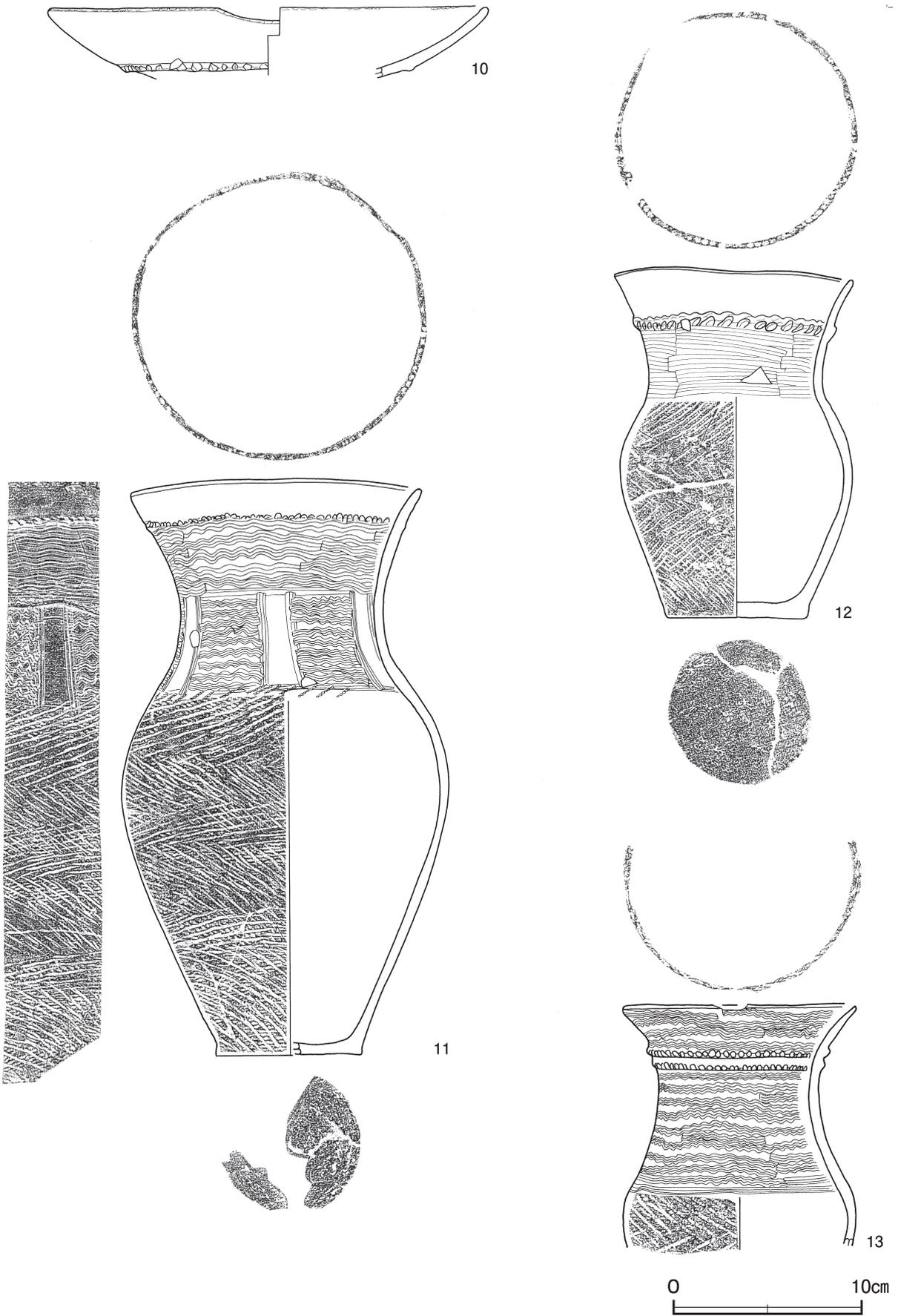
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	弥生土器	高坏	[23.4]	(37)	-	長石・石英・金雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏片口部残存 口唇部縄文原体による刻み 坏下部隆帯に棒状工具で押圧	覆土中層	30%
11	弥生土器	広口壺	15.3	31.0	7.8	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本櫛歯状工具スリットにより6区画 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面多方向のナデ調整	床面	90% PL15 内面煮沸痕
12	弥生土器	広口壺	12.8	18.6	7.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本櫛歯状工具附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	90% PL20 二次焼成
13	弥生土器	広口壺	12.6	(13.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 4本櫛歯状工具 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成	床面	40% PL20
14	弥生土器	広口壺	10.9	16.9	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土中層	70% PL20
15	弥生土器	広口壺	11.8	16.8	5.8	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面多方向のナデ調整	床面	90% PL20
16	弥生土器	広口壺	-	(17.2)	6.6	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	3本櫛歯状工具 スリットにより4区画 胴部下端横ナデ 附加条二種（附加1条）縄文 内面輪積み痕 底面布目痕	覆土下層	80% PL20
17	弥生土器	広口壺	[15.2]	(9.0)	-	長石・石英・雲母・針状鉱物	灰黄褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 2本の平行沈線	覆土上層	10% PL22
18	弥生土器	広口壺	-	(21.3)	[7.7]	長石・石英・雲母・黒色粒子・細礫	にぶい黄橙	普通	縄文原体による帯状刺突列 5本櫛歯状工具 附加条一種（附加2条）縄文 内面輪積み痕	床面	30% PL21 内面煮沸痕
19	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	隆起線に貼瘤2個 附加条二種（附加1条）縄文	覆土中	
20	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・細礫	にぶい黄橙	普通	縄文原体による刺突文 附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成	覆土中層	

番号	器種	径/長さ	厚さ/幅	孔径/厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	3.8	2.1	0.5	31.5	長石・石英・雲母	黒褐	全面指ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土上層	PL21
DP2	紡錘車	(3.8)	2.0	0.6	(14.8)	長石・石英・細礫	にぶい黄橙	半分遺存 一方向からの穿孔	覆土上層	風化
DP3	不明土製品	3.4	2.3	2.5	21.5	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい黄橙	指による成形	床面	底面圧痕

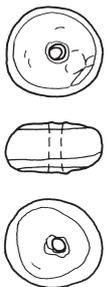
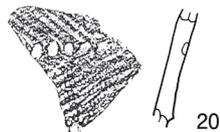
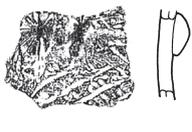
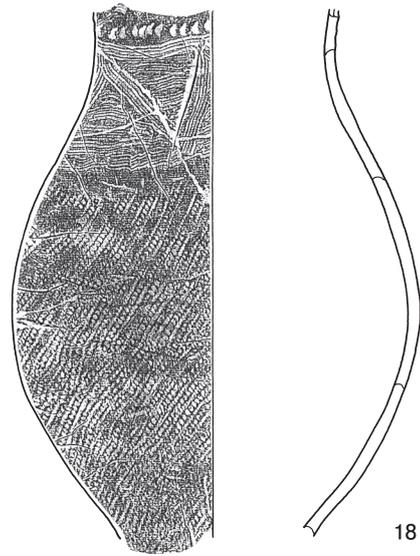
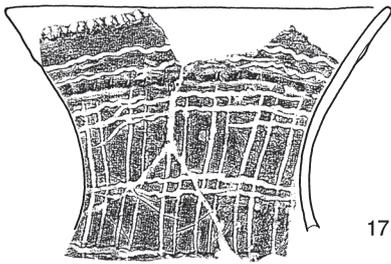
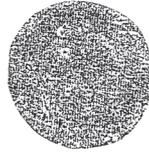
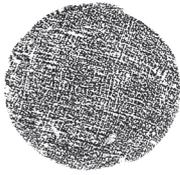
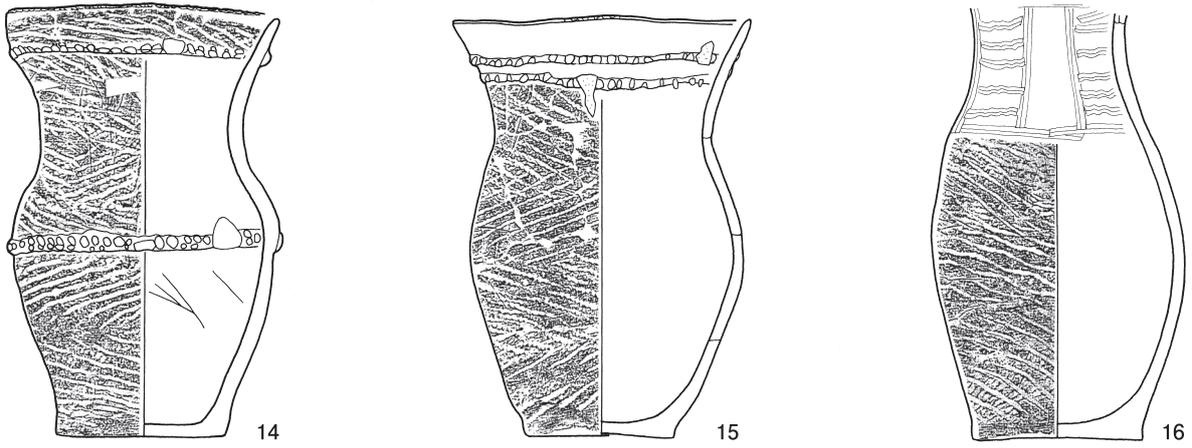
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	磨製石斧	(6.0)	(3.0)	1.3	(37.9)	蛇紋岩	刃部欠損	床面	
Q4	石鍬	11.7	9.5	2.4	(335.2)	ホルンフェルス	一面剥離 表面擦痕	床面	風化
Q5	炉石	25.4	13.3	8.3	3,355.1	流紋岩	火熱を受け赤変・破砕	炉火床面	PL23



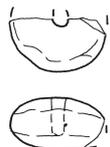
第6図 第1号竖穴建物跡実測図



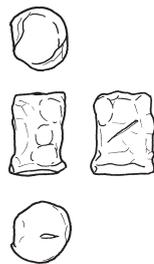
第7图 第1号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



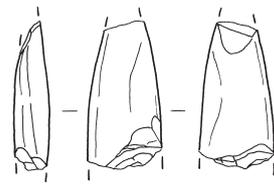
DP1



DP2



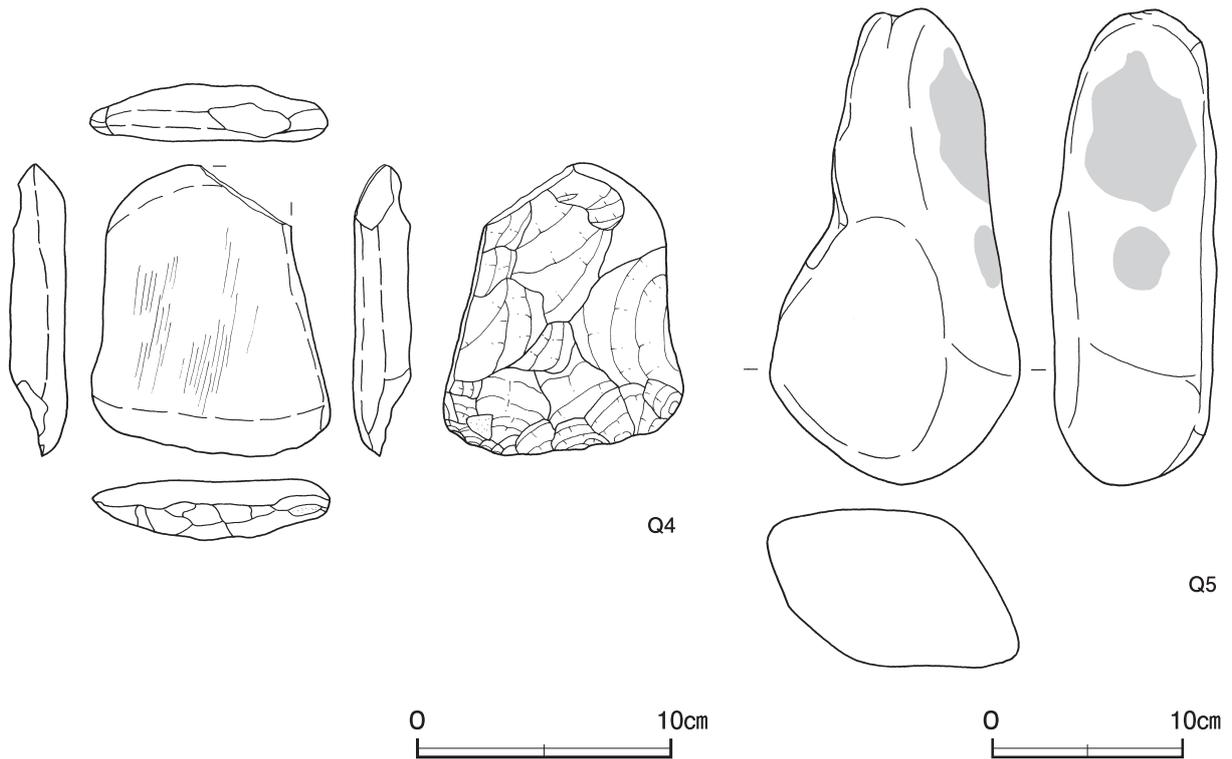
DP3



Q3



第8図 第1号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第9図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第2号竪穴建物跡 (第10～13図 PL 3)

調査年度 2015年度

位置 調査区北東部のC4j0区, 標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.52m, 短軸5.13mの方形で, 主軸方向はN-41°-Eである。壁は高さ35～46cmで, 外傾している。

床 平坦で, 炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径109cm, 短径102cmの円形で, 深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ55～80cmで, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ60cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

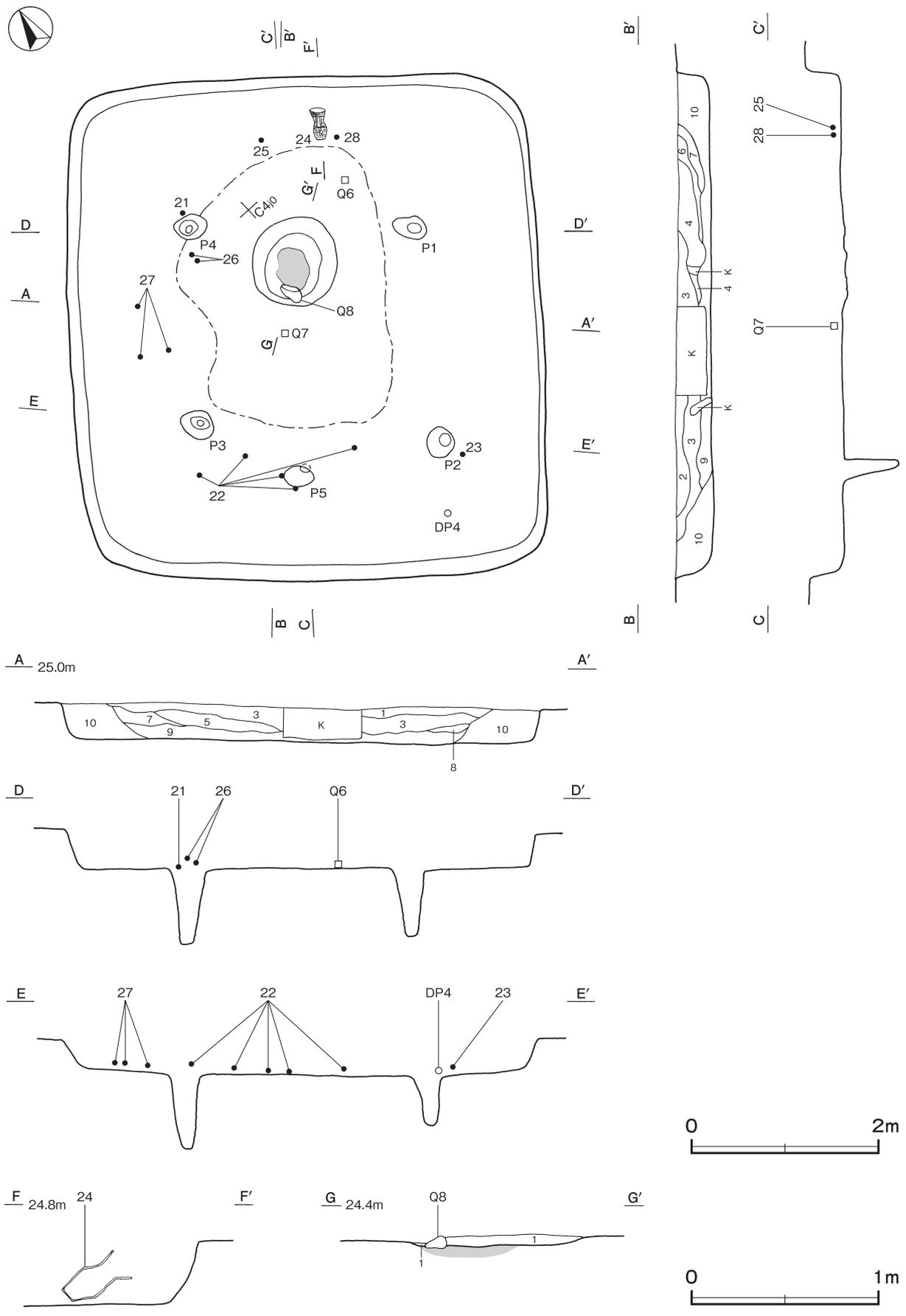
覆土 10層に分層できる。ロームブロックが多く含まれる第6～10層が埋め戻された後, 第1～5層が自然堆積している。

土層解説

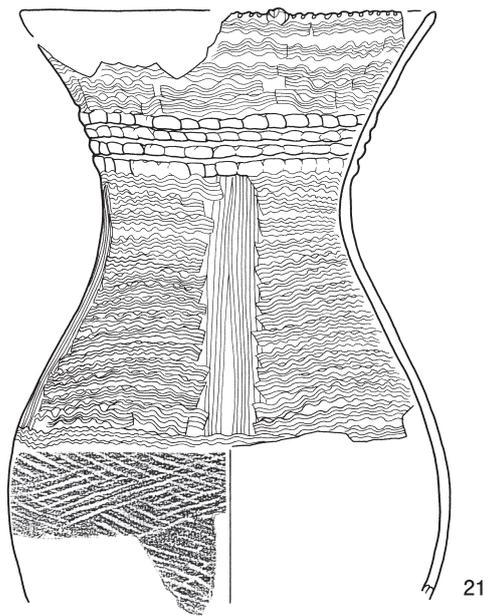
1 黒褐色 ローム粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック微量
 3 黒褐色 ローム粒子少量
 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒子中量

6 暗褐色 ロームブロック中量
 7 褐色 ロームブロック中量
 8 暗褐色 ロームブロック少量
 9 褐色 ローム粒子多量
 10 褐色 ロームブロック多量

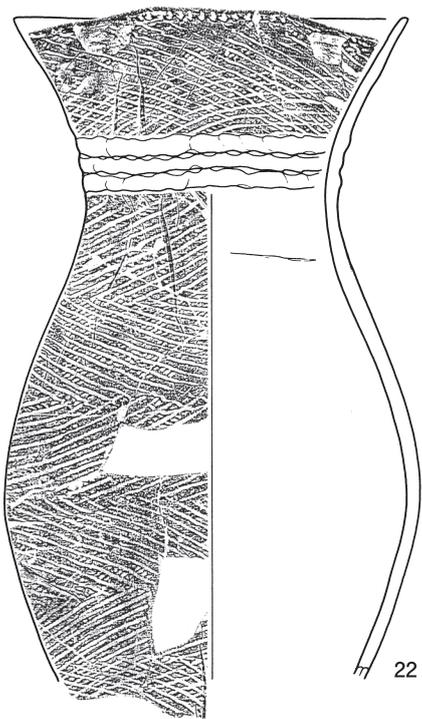
遺物出土状況 弥生土器片773点(高坏1, 広口壺772), 土製品1点(紡錘車), 石器20点(鏃2, 磨製石斧1, 磨石2, 敲石6, 砥石5, 台石3, 炉石1), 石核4点, 剥片14点のほか, 縄文土器片26点(深鉢), 自然礫



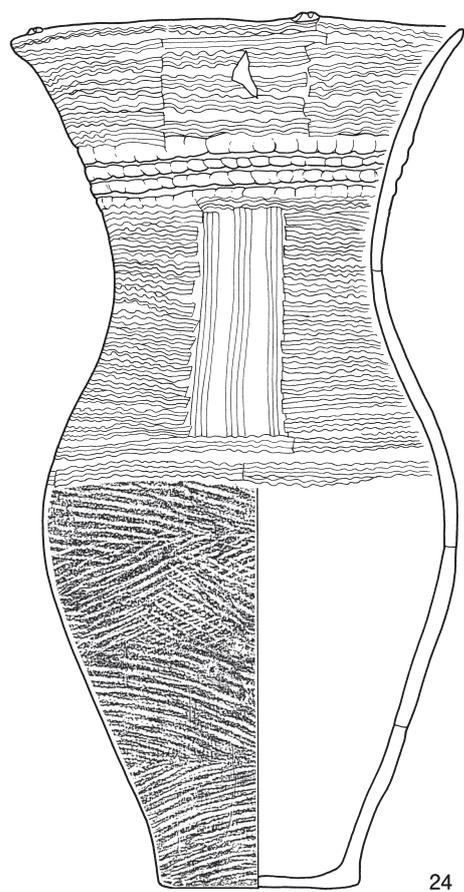
第 10 图 第 2 号竖穴建物迹实测图



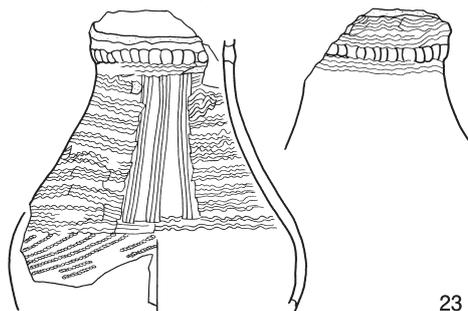
21



22



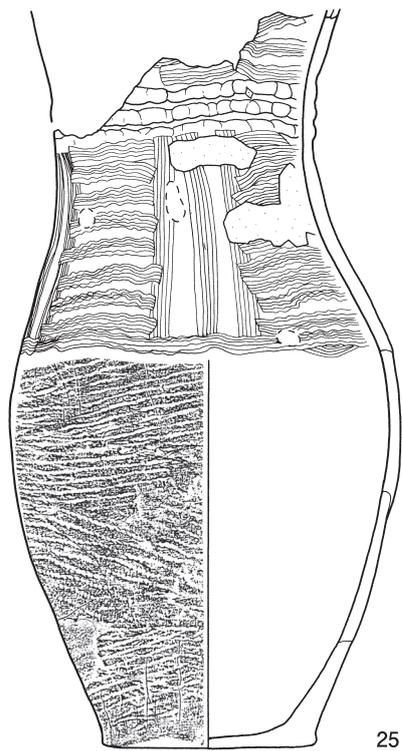
24



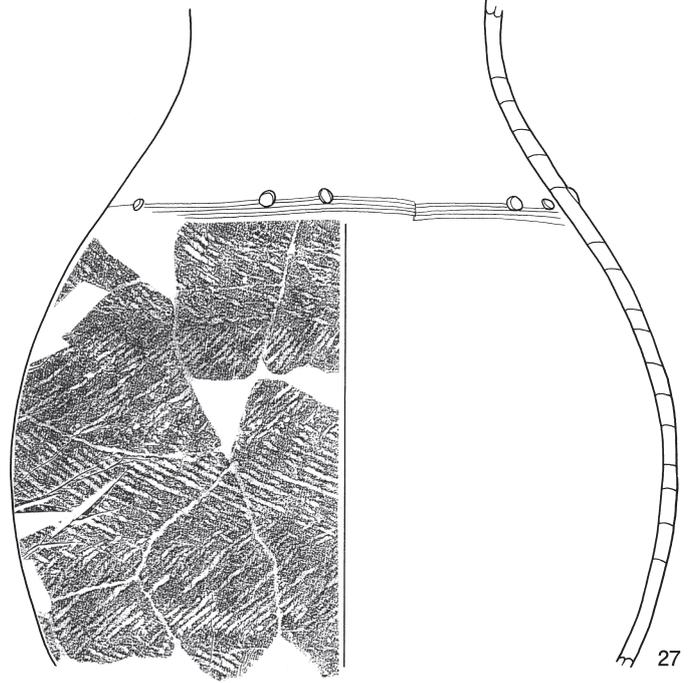
23



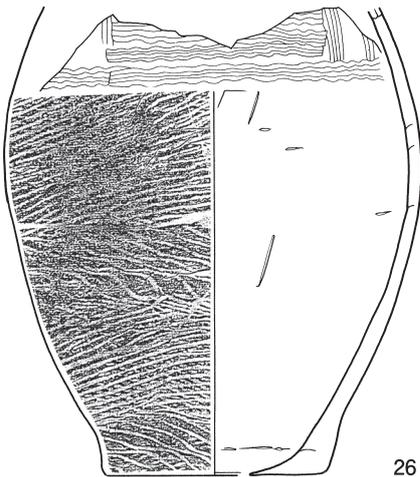
第 11 图 第 2 号竖穴建物跡出土遺物実測图(1)



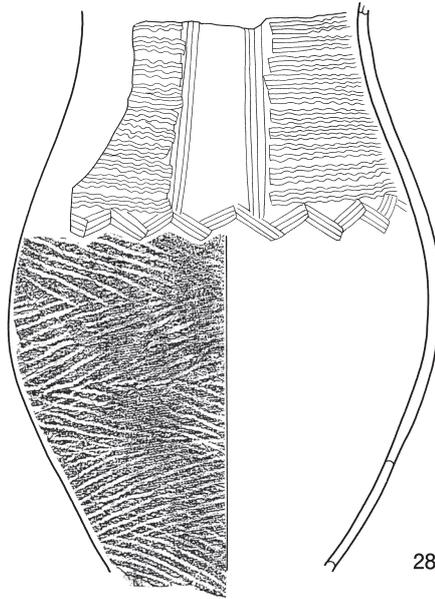
25



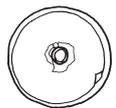
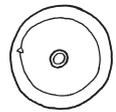
27



26



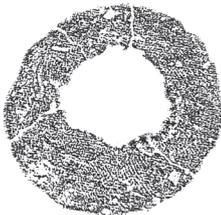
28



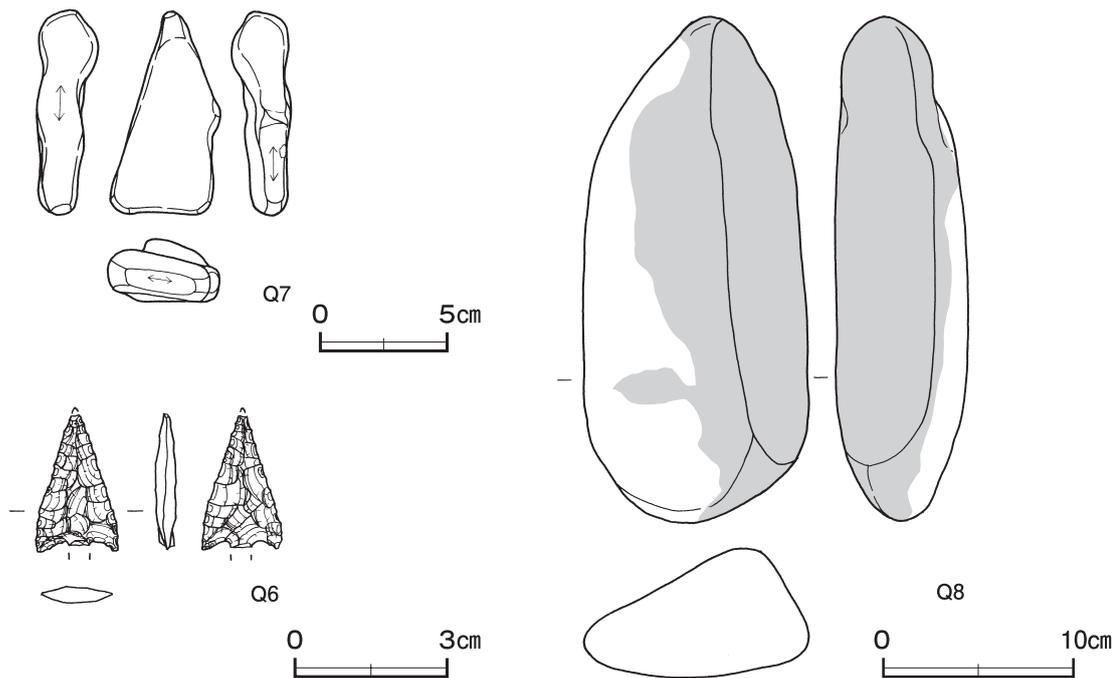
DP4



29



第 12 图 第 2 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第13図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

10点が出土している。24はほぼ完形で、北東壁側の床面から斜位で、遺棄された状態で出土している。21～23・25～28、DP4は、覆土下層から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。Q7は、炉の南側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表(第11～13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	弥生土器	広口壺	16.4	(23.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み突起4単位。5本櫛歯状工具 スリットにより4区画 胴部 附加条軸不明縄文による羽状構成	覆土下層	50% PL16
22	弥生土器	広口壺	15.6	(26.5)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条一種(附加2条) 縄文による羽状構成	覆土下層	50%
23	弥生土器	広口壺	-	(12.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	4本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条軸不明縄文	覆土下層	30%
24	弥生土器	広口壺	18.4	35.2	7.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み突起4か所 4本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条軸不明縄文による羽状構成 胴部下端ナデ 底面布目痕	床面	95% PL15 外面煤 内面煮沸痕
25	弥生土器	広口壺	-	(29.5)	8.4	長石・石英・雲母	橙	普通	6本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条二種(附加1条)と附加条軸不明縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	80% 外面煤 内面煮沸痕
26	弥生土器	広口壺	-	(18.6)	8.8	長石・石英・金雲母	にぶい橙	普通	5本櫛歯状工具 縦2条のスリット 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	50% 外面煤 内面煮沸痕 底部穿孔
27	弥生土器	広口壺	-	(26.7)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	5本櫛歯状工具 ボタン状突起貼付 附加条軸不明縄文による羽状構成	覆土下層	20% PL21 内面煮沸痕
28	弥生土器	広口壺	-	(22.9)	-	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	4本櫛歯状工具 スリットにより4区画。附加条軸不明縄文による羽状構成	覆土下層	20% 外面煤
29	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 附加条軸不明縄文による羽状構成後貼箱	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP4	紡錘車	4.1	2.9	0.5	56.5	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	全面ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	鎌	(2.7)	1.6	0.4	(1.2)	チャート	有茎 先端・基部欠損	覆土下層	PL23
Q7	砥石	8.1	4.4	2.4	81.8	砂岩	砥面3か所	床面	
Q8	炉石	26.9	12.1	6.8	2,814.0	安山岩	火熱を受け赤変	炉火床面	

第5号竪穴建物跡（第14・15図）

調査年度 2015年度

位置 調査区北東部のD4a6区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているため、南西北東軸は6.57mで、北西南東軸は5.50mしか確認できなかった。楕円形と推測でき、主軸方向はN-38°-Wである。壁は高さ37~51cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

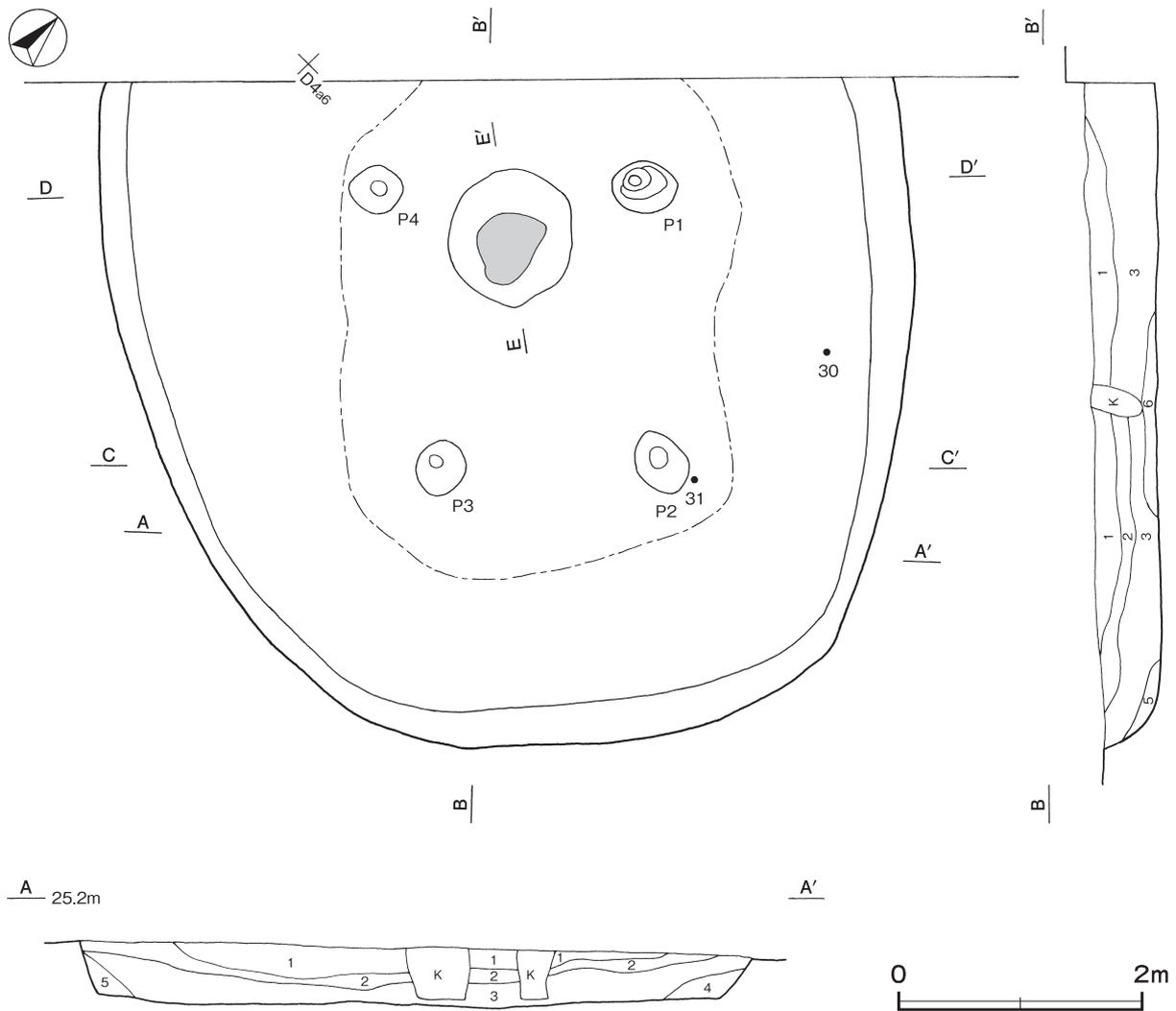
炉 中央部に付設されている。長径115cm、短径101cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

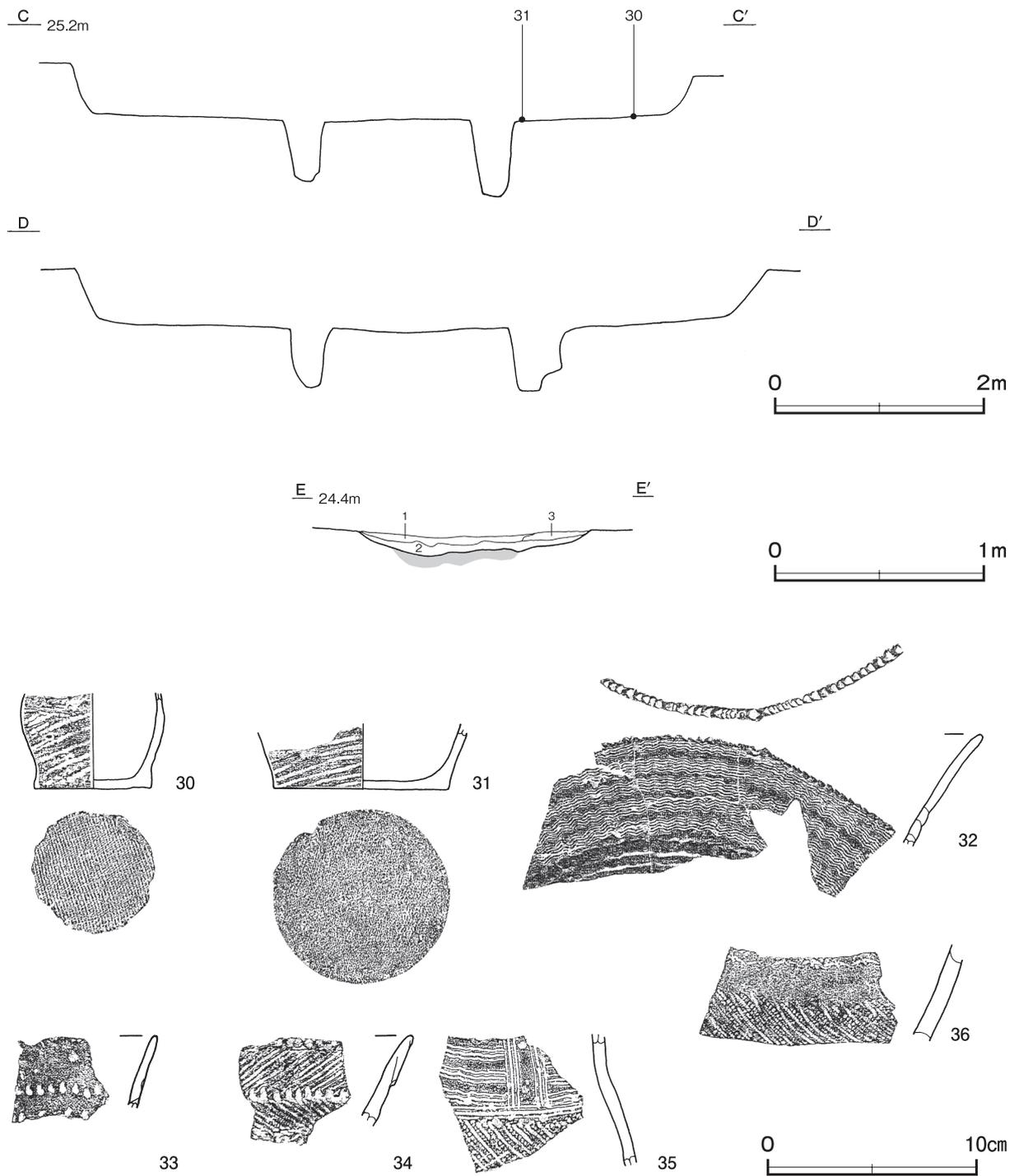
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

ピット 4か所。P1~P4は深さ59~75cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3~6層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。



第14図 第5号竪穴建物跡実測図



第15図 第5号竪穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片 267点 (高坏1, 広口壺266), 石器5点 (磨石4, 石皿1), 剥片3点のほか, 縄文土器片18点 (深鉢), 陶器片1点 (鉢) が出土している。土器片はほとんどが細片で, 全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第5号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	弥生土器	広口壺	-	(4.6)	5.7	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	3本以上の櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文 底面布目痕	床面	25%
31	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	8.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	附加条軸縄不明縄文 底面布目痕	床面	10%
32	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口唇部に突起 5本櫛歯状工具	覆土中	
33	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 縄文原体による2段の連続刺突文	覆土中	
34	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	明赤褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 2段の折返し口縁 下端に縄文原体による押圧 附加条一種 (附加2条) 縄文による羽状構成	覆土中	PL22
35	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	3本櫛歯状工具 附加条一種 (附加2条) 縄文	覆土中	
36	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条一種 (附加2条) 縄文	覆土中	

第6号竖穴建物跡 (第16・17図)

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD4b6区, 標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第23号土坑に掘り込まれ, 埋没後に第1号塚が構築されている。

規模と形状 長軸3.08m, 短軸2.75mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-60°-Wである。壁は高さ34~55cmで, 外傾している。

床 平坦で, 炉の周辺がわずかに硬化している。

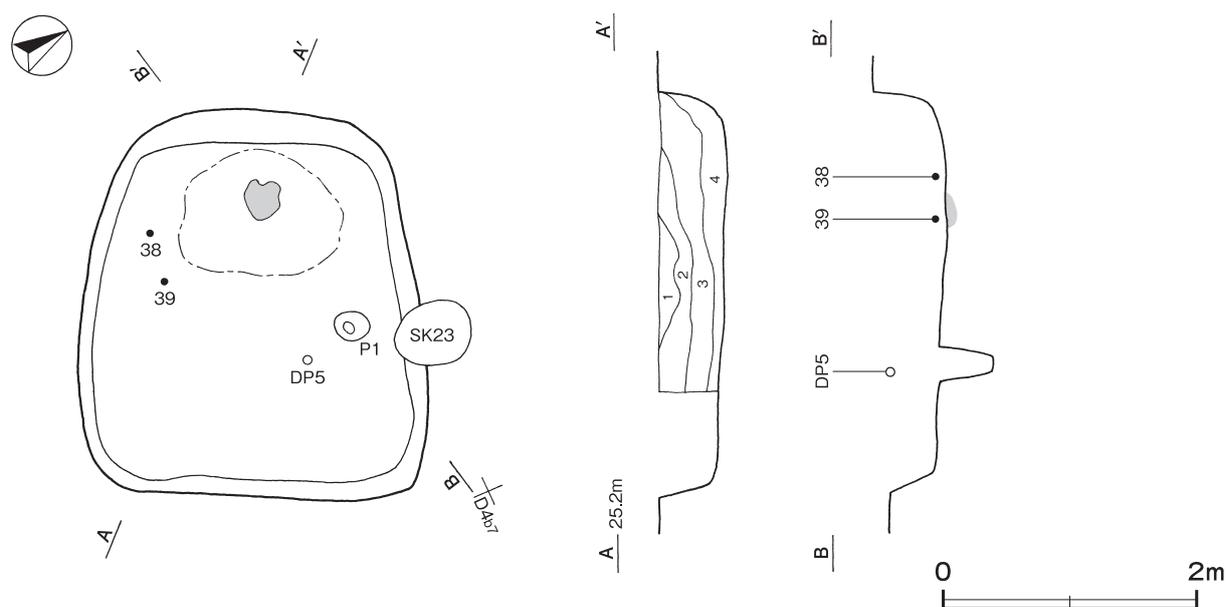
炉 中央部の西壁近くに付設されている。長径65cm, 短径56cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さである。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット P1は深さ41cmである。通常とは異なる配置であるが, 出入り口施設に伴うピットの可能性がある。

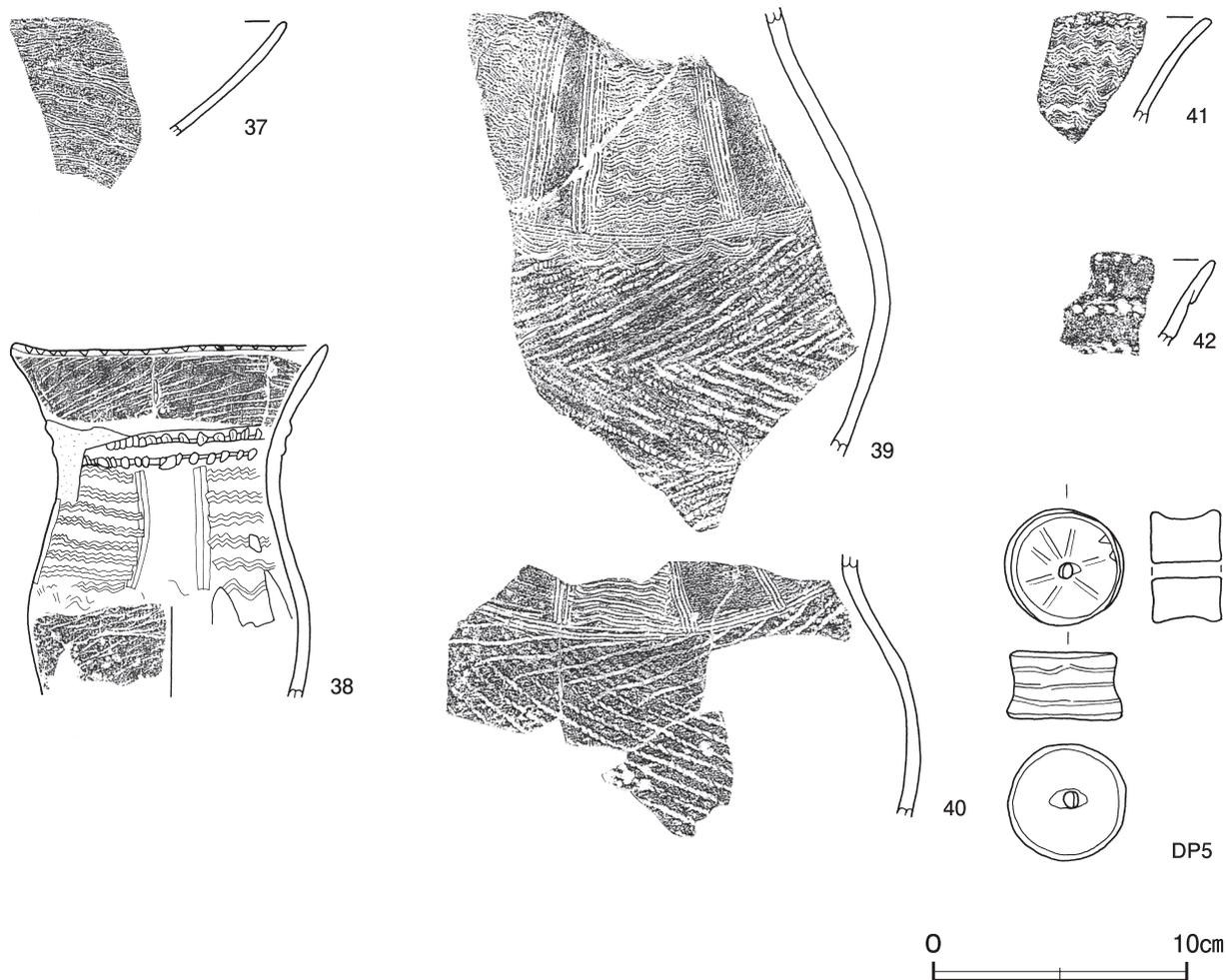
覆土 4層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子が含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |



第16図 第6号竖穴建物跡実測図



第17図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片148点（高坏1，広口壺147），土製品1点（紡錘車），石器5点（磨石2，敲石2，台石1），剥片9点のほか，縄文土器片5点（深鉢），自然礫4点が出土している。38は炉の南西部の床面から斜位で，遺棄された状態で出土している。39，DP5は，覆土上層から出土しており，埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 ほかの竪穴建物跡と異なる規模と形状であるが，遺物の出土と炉を確認したことから竪穴建物跡と判断した。時期は，出土土器から後期後半に比定できる。

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
37	弥生土器	高坏	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 口縁部片口一部遺存 5本櫛歯状工具	覆土中	
38	弥生土器	広口壺	12.5	(14.1)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体押圧 隆帯に縄文原体による刻み 3本櫛歯状工具 スリットにより4区画 口縁及び胴部に附加条軸縄不明縄文	床面	60%
39	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	5本櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土下層	
40	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	灰黄褐	普通	4本櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土中	
41	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本櫛歯状工具	覆土中	
42	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 2段の折返し口縁 下端に縄文原体による押圧	覆土中	
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
DP5	紡錘車	4.6	2.8	0.5	67.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	全面ナデ調整 2本の平行沈線 一方向からの穿孔	覆土上層	PL21	

第9号竪穴建物跡(第18～20図 PL3・4)

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC3d6区, 標高26mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部は第2号溝に掘り込まれ, 北東部が調査区域外へ延びているため, 北西南東軸は5.56m, 南西北東軸は4.56mしか確認できなかった。長方形と推測でき, 主軸方向はN-52°-Wである。壁は高さ40～45cmで, ほぼ直立している。

床 平坦で, 炉を中心として北西部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径137cm, 短径103cmの楕円形で, 深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第2層は火熱を受けていない白色粘土ブロックを含む層で, 炉床面を横断するように確認できることから, 廃絶時に意図的に配置された可能性がある。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ60～85cmで, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが多く含まれる第3～6層が埋め戻された後, 第1・2層が自然堆積している。

土層解説

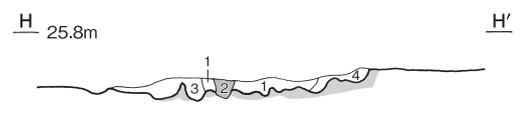
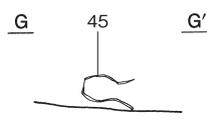
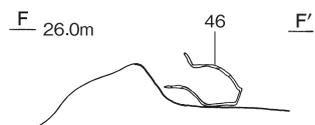
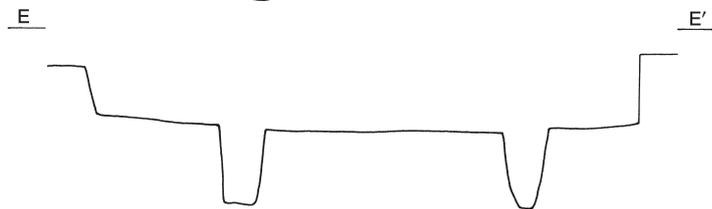
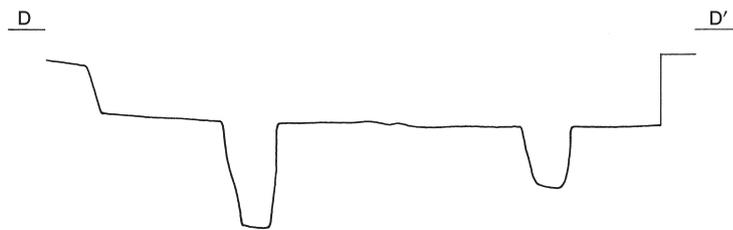
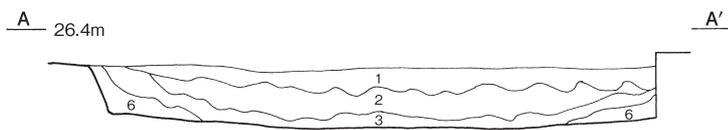
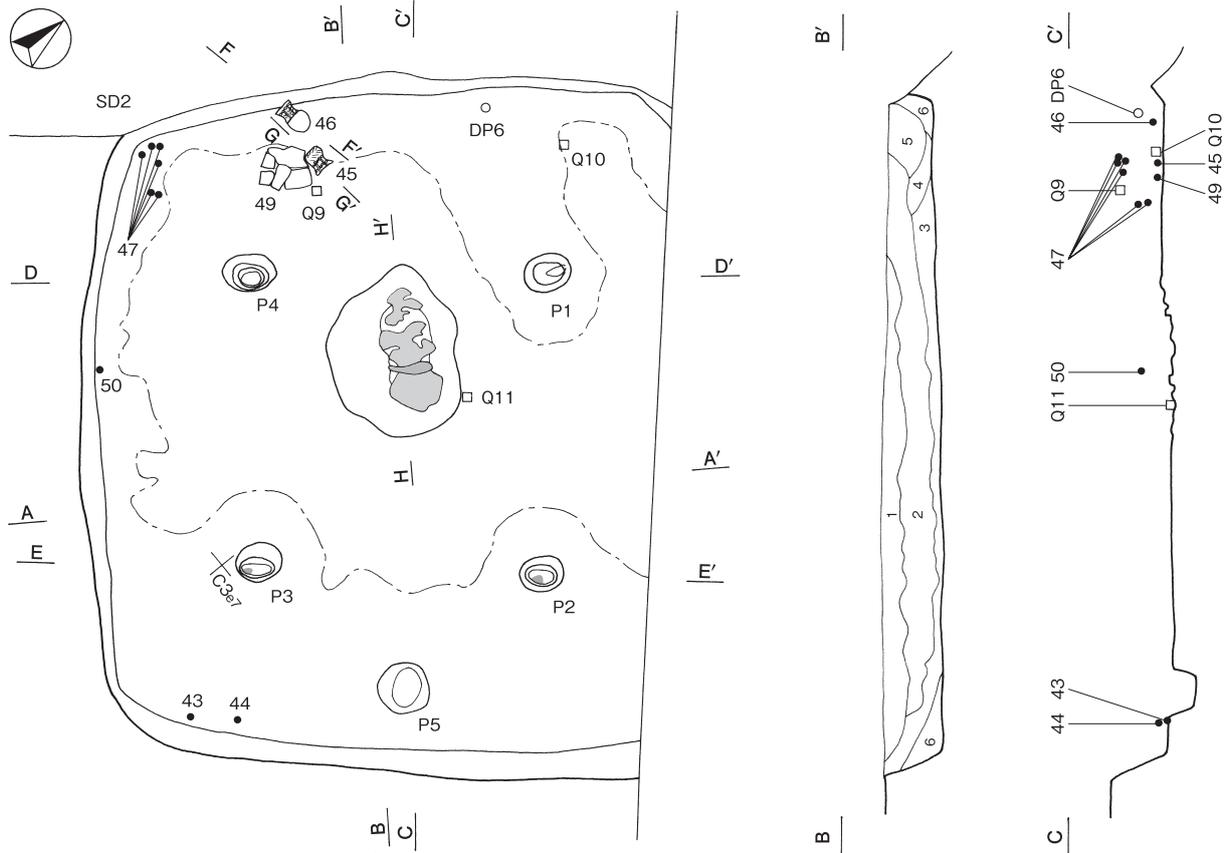
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 弥生土器片487点(高坏1, 広口壺486), 土製品1点(紡錘車), 石器13点(鏃1, 磨石5, 敲石3, 砥石1, 台石3), 剥片3点, 石核1点のほか, 縄文土器片4点(深鉢), 土師器片1点(甕), 粘土塊4点が出土している。45・46はほぼ完形の状態で北西壁側の床面から横位で, 43・44は南コーナー付近の床面から, それぞれ遺棄された状態で出土している。47は西コーナーの覆土下層から破片がまとまった状態で出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。Q10は北東壁側の床面から出土している。

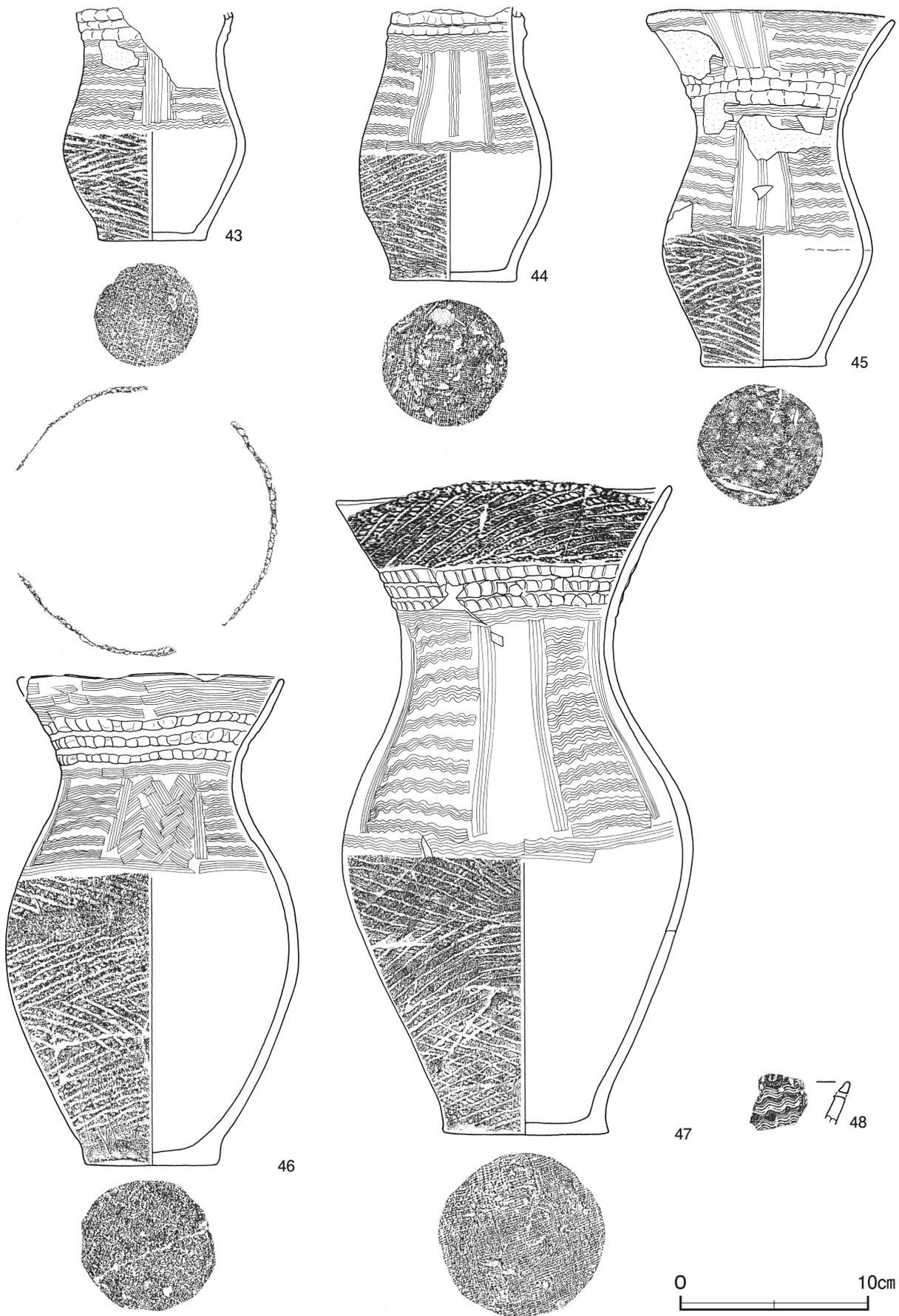
所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表(第19・20図)

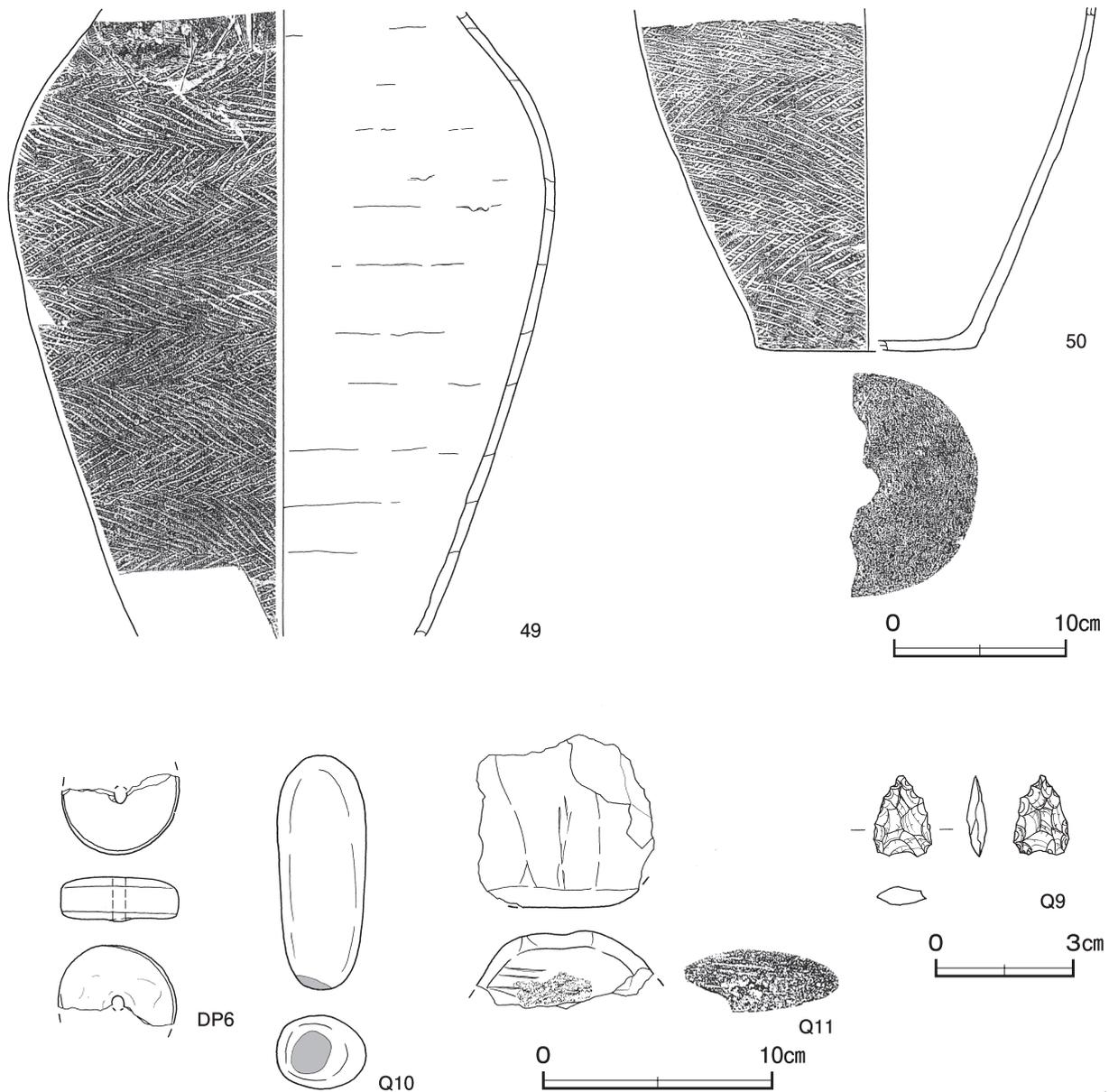
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	弥生土器	広口壺	-	(12.5)	5.8	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	4本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	50% 二次焼成
44	弥生土器	広口壺	-	(14.9)	6.9	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	6本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	75% 二次焼成
45	弥生土器	広口壺	13.5	19.5	6.7	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 4本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	95% PL20 二次焼成
46	弥生土器	広口壺	14.0	26.7	7.0	長石・石英・金雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体押圧 5本櫛歯状工具 スリットにより8区画 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 胴部下端調整 底面砂目痕	床面	95% PL16 内面煮沸痕 底面圧痕
47	弥生土器	広口壺	18.0	35.1	8.9	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条二種(附加1条) 縄文および1条の絡条体 5本櫛歯状工具 スリットにより5区画 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	90% PL15 外面煤
48	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 4本櫛歯状工具 焼成前穿孔1か所	覆土中	PL22
49	弥生土器	広口壺	-	(37.0)	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	4本櫛歯状工具 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成	床面	30%
50	弥生土器	広口壺	-	(20.2)	12.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面摩滅一部布目痕	覆土下層	20% 外面煤 内面煮沸痕



第 18 图 第 9 号竖穴建物迹实测图



第 19 图 第 9 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 20 図 第 9 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

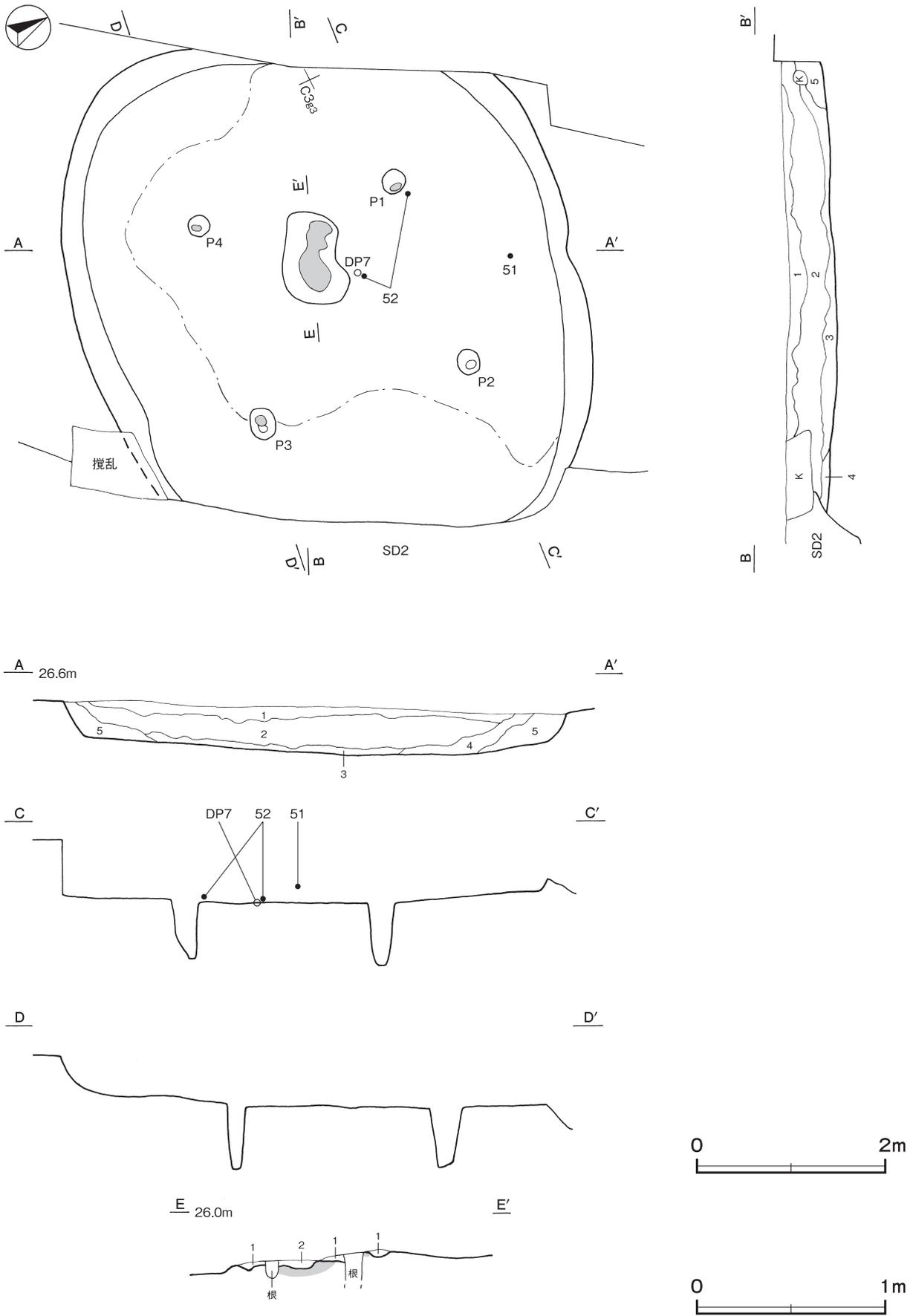
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	紡錘車	5.2	2.0	0.6	(34.9)	長石・石英・雲母	灰黄褐色	半分遺存 全面ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q 9	鎌	1.8	1.3	0.4	0.9	チャート	無茎	覆土上層	PL23	
Q 10	磨石	10.5	3.9	3.4	206.4	安山岩	磨面 1 か所	床面	PL23	
Q 11	敲石	(7.7)	(7.9)	(3.5)	(291.1)	砂岩	敲面 1 か所 2 面に細い溝状痕 砥石転用。	覆土下層		

第 10 号竪穴建物跡 (第 21・22 図 PL 4)

調査年度 2016 年度

位置 調査区北西部の C 3 g3 区, 標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 2 号溝に掘り込まれている。



第 21 图 第 10 号竖穴建物迹实测图

第 10 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 22 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
51	弥生土器	広口壺	15.4	(13.3)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み スリットにより4区画 6本櫛歯状工具	覆土下層	30%
52	弥生土器	広口壺	-	(8.2)	6.3	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	5本櫛歯状工具 附加糸軸繩不明縄文を一方向底面布目痕	覆土下層	30%
53	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口縁部片口一部遺存 7本櫛歯状工具	覆土中(上層)	
54	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・黒色粒子・砂多量	明黄褐	普通	複合口縁部に縄文原体押圧 附加糸一種(附加2条) 縄文による羽状構成	覆土中(下層)	
55	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・金雲母	明黄褐	普通	4本櫛歯状工具	覆土中(下層)	
56	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	黄褐	普通	縄文原体による2列の帯状刺突文 3本櫛歯状工具	覆土中(上層)	

番号	器 種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
DP 7	紡錘車	4.4	3.5	0.5	58.2	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	全面ナデ調整 上面穿孔部周辺丁寧なナデ 一方向からの穿孔	床面	PL21

第 11 号竪穴建物跡 (第 23・24 図 PL 4)

調査年度 2016 年度

位置 調査区北西部の D 2 b9 区, 標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 6.24 m で, 南北軸は 6.28 m しか確認できなかった。隅丸長方形と推測でき, 主軸方向は N - 41° - W である。壁は高さ 15 ~ 35cm で, 外傾または緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で, 炉の北西側が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。北西部が攪乱を受けており, 長径は 114cm で, 短径は 55cm しか確認できなかった。不整形円形で, 深さ 9cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒 色 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量 2 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子多量, ローム粒子中量

ピット 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 53 ~ 73cm で, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 36cm で, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 は深さ 60・50cm で, P 1・P 4 を立て替えた主柱穴の可能性はある。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

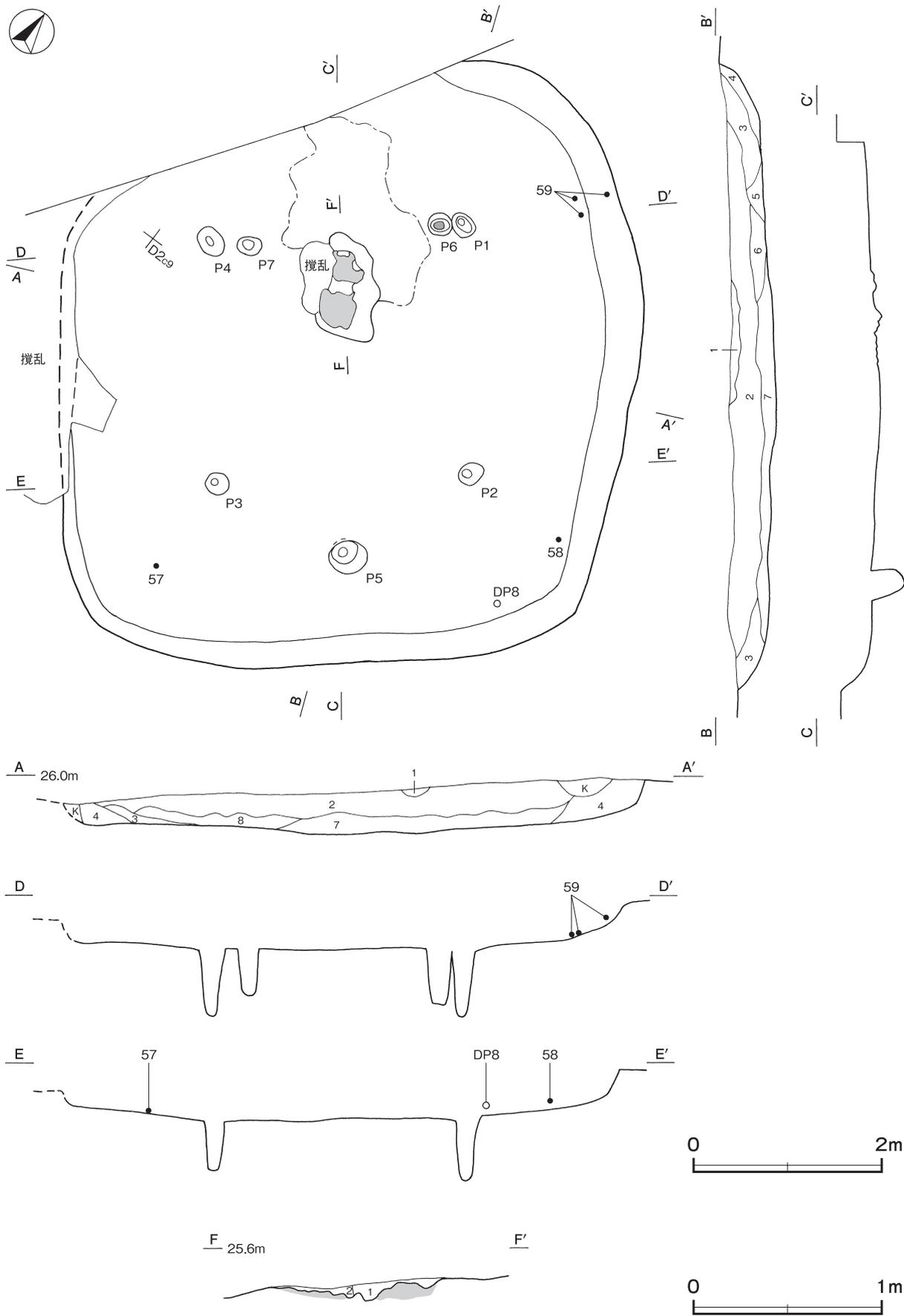
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 3 ~ 8 層が埋め戻された後, 第 2 層が自然堆積している。第 1 層は流入土である。

土層解説

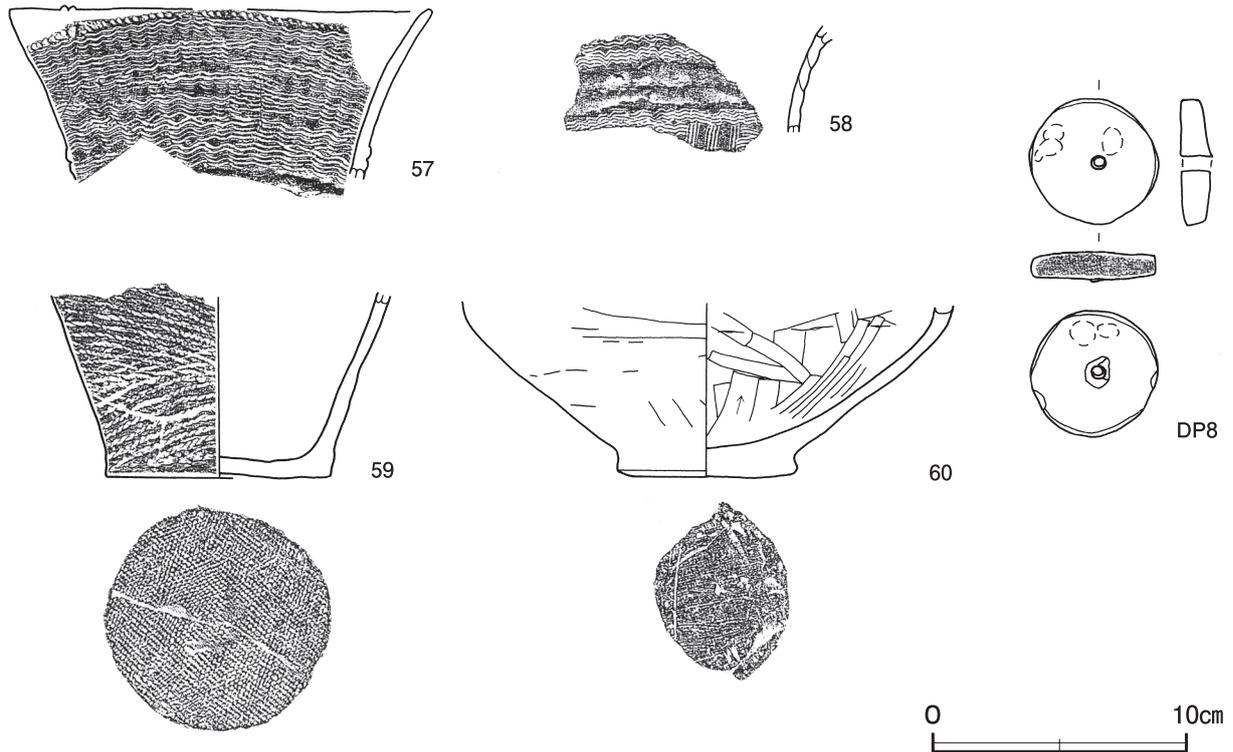
- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量 5 暗 褐 色 ロームブロック少量
 2 黒 色 ローム粒子・炭化粒子少量 6 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
 3 暗 褐 色 ロームブロック中量 7 黒 褐 色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
 4 褐 色 ロームブロック多量 8 灰黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 531 点 (広口壺), 土師器片 2 点 (甕), 土製品 1 点 (紡錘車), 石器 7 点 (磨製石斧 1, 磨石 3, 敲石 2, 砥石 1), 被熱礫 1 点のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 自然礫 1 点が出土している。57 ~ 59 は, 出土層位から埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。60 は, 窪地状に堆積した黒色土中から散在した状態で出土しており, 後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。黒色土中から土師器片が出土していることから, 本跡は廃絶後しばらく窪地の状態で残されていたと考えられる。



第 23 図 第 11 号豎穴建物跡実測図



第24図 第11号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11号竪穴建物跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
57	弥生土器	広口壺	16.8	(6.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 突起4単位。 5本櫛歯状工具	覆土下層	10%
58	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 雲母	にぶい赤褐	普通	4本櫛歯状工具	覆土下層	
59	弥生土器	広口壺	-	(7.3)	8.8	長石・石英・ 雲母	にぶい橙	普通	附加糸軸縄不明縄文による羽状構成後胴部下端 調整 底面布目痕	覆土下層	10% 内面煮沸痕
60	土師器	甕	-	(6.9)	6.8	長石・石英・ 赤色粒子・細礫	にぶい橙	普通	外面縦斜位のヘラナデ 内面斜位のハケ目	覆土中 (上層)	10%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
DP8	紡錘車	5.0	1.2	0.5	34.0	長石・石英・ 雲母・黒色粒子	橙	上下面ナデ調整 指頭痕 側面布目痕 一方向か らの穿孔	覆土下層	PL21	

第12号竪穴建物跡(第25図)

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のD2f0区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外へ延びているため、北西南東軸は5.05mで、北東南西軸は2.52mしか確認できなかった。方形または長方形と推測できる。壁は高さ13~22cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除き踏み固められている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる第2~4層が埋め戻された後、第1層が自然堆積している。

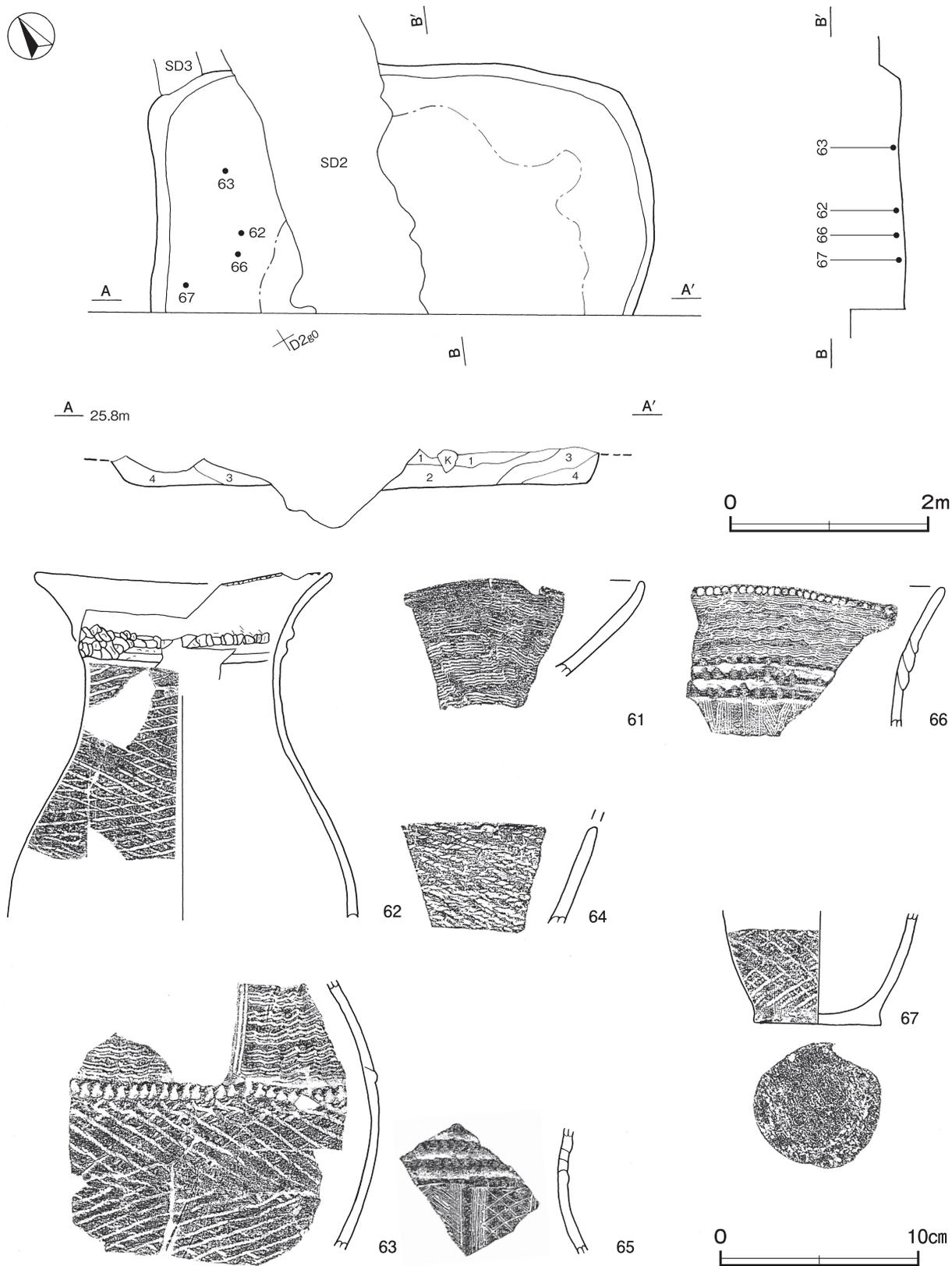
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片365点(高坏1, 広口壺364), 土師器片1点(甕), 土製品1点(紡錘車), 石器4点(磨石2, 敲石1, 石皿1), 剥片1点, 被熱礫2点のほか, 縄文土器片1点(深鉢), 銭貨1点(寛永通寶)が出

土している。62・63・66・67は、出土層位から埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。炉も柱穴も確認できていないが、確認できた北西南東軸の幅や硬化面の状況、遺物の出土状況から竪穴建物跡と判断した。



第25図 第12号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 12 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 25 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	弥生土器	高坏	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	5本櫛歯状工具	覆土中(下層)	
62	弥生土器	広口壺	[15.0]	(17.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 2条 縄文による羽状構成 附加条一種(附加2条)	覆土下層	20%
63	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	3本櫛歯状工具 胴部隆帯に縄文原体による刺突列 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成	覆土下層	
64	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条軸縄不明縄文	覆土中(下層)	擬口縁
65	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	4本櫛歯状工具 平行沈線による格子目文	覆土中(下層)	
66	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	良好	口唇部縄文原体による刻み 4本櫛歯状工具	覆土下層	
67	弥生土器	広口壺	-	(5.7)	6.4	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面ナデ調整	覆土下層	30%

第 13 号 竪穴建物跡 (第 26・27 図 PL 5)

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の C 3h9 区, 標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 5.53 m, 短径 4.94 m の楕円形で, 主軸方向は N - 23° - E である。壁は高さ 18 ~ 40 cm で, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北東寄りに付設されている。長径 134 cm, 短径 87 cm の楕円形で, 深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック多量, 炭化物少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 49 ~ 59 cm で, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 23 cm で, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

覆土 5 層に分層できる。ローム粒子やブロックが多く含まれており, 埋め戻されている。一度第 5 層を床面に敷くように埋め戻した後, 第 1 ~ 4 層を埋め戻している。

土層解説

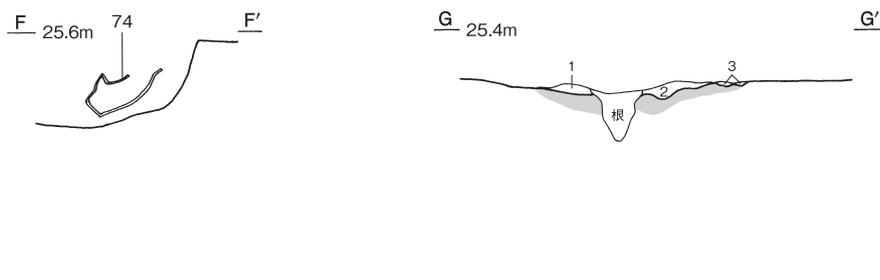
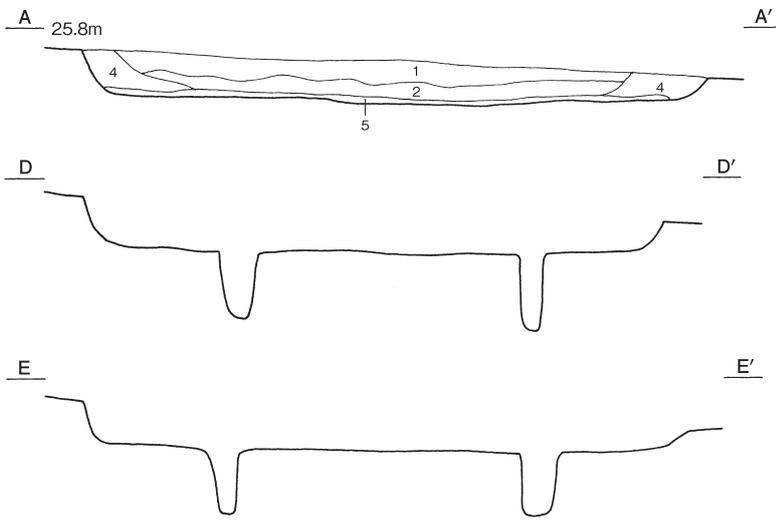
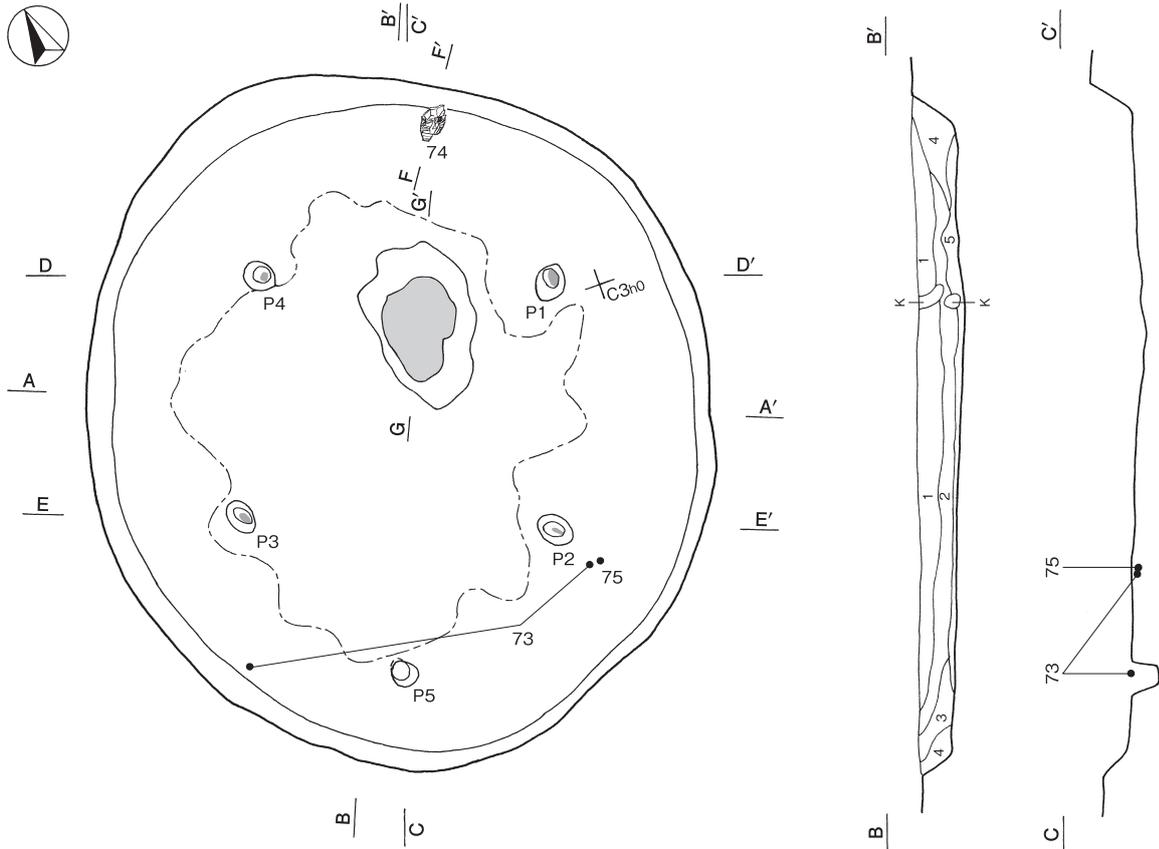
- 1 にぶい黄褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 461 点 (高坏 2, 広口壺 459), 石器 9 点 (磨石 3, 敲・磨石 2, 敲石 1, 砥石 2, 台石 1), 剥片 2 点, 被熱礫 6 点が出土している。73 は第 5 層を埋め戻す際に投棄されたもので, 74・75 は第 5 層埋め戻し後に設置され遺棄された可能性がある。

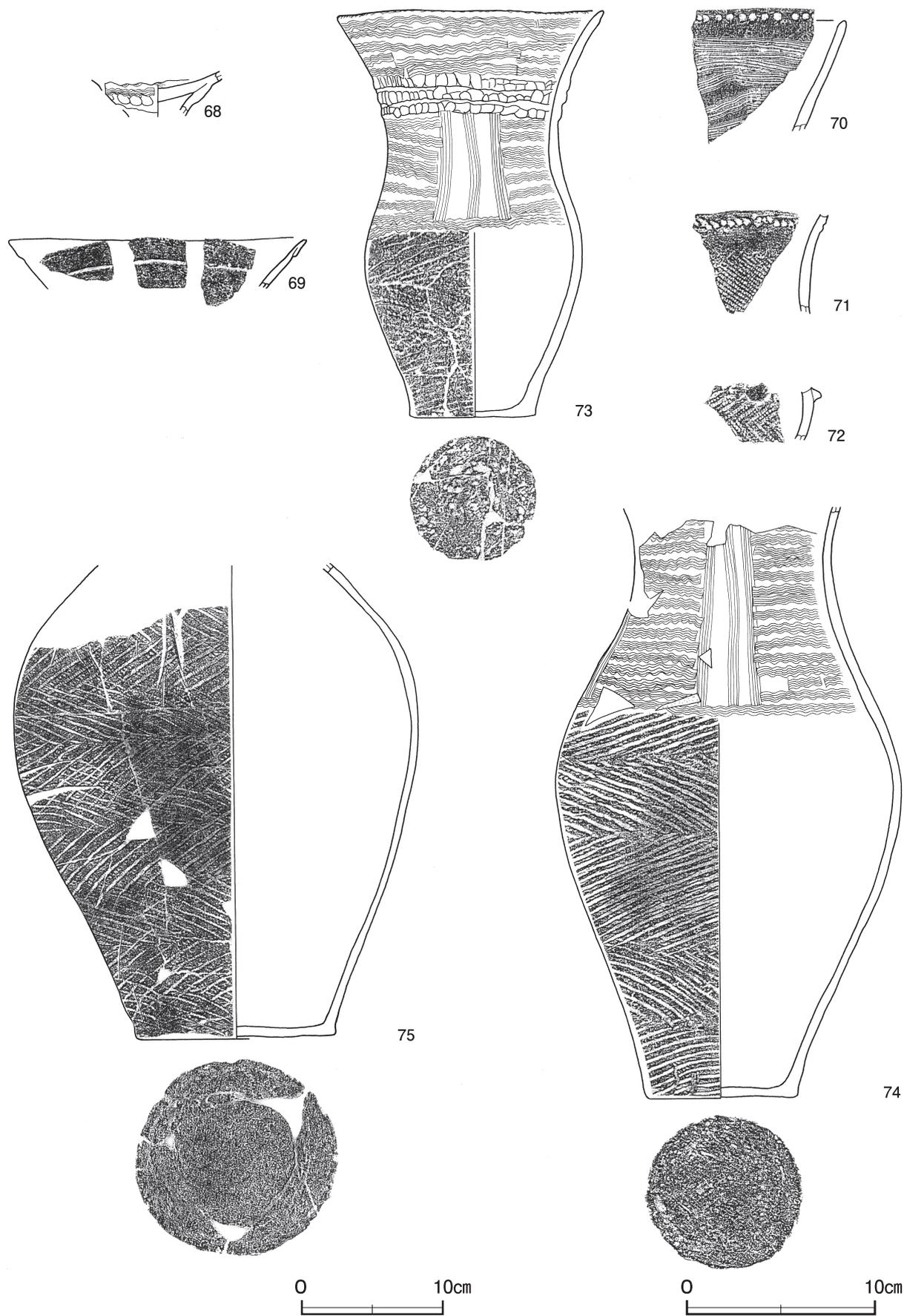
所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第 13 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 27 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
68	弥生土器	高坏	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	5本櫛歯状工具	P 1 覆土中	5%
69	弥生土器	高坏	[16.0]	(2.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	折返し口縁	覆土中	5%
70	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部棒状工具による刻み 7本櫛歯状工具	覆土中	
71	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	縄文原体による帯状刺突列 附加条軸縄不明縄文	覆土中(床直上)	
72	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	貼瘤 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成	覆土中	
73	弥生土器	広口壺	14.2	22.1	6.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み スリットにより4区画 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面周縁ナデ後沈線	床面~ 覆土下層	80% 外面煤 内面煮沸痕



第 26 图 第 13 号竖穴建物跡実测图



第 27 图 第 13 号竖穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	弥生土器	広口壺	-	(32.1)	8.2	長石・石英・ 黒色粒子	にぶい黄橙	普通	5本櫛歯状工具 附加条軸繩不明縄文による羽 状構成 底面布目痕	床面～ 覆土下層	80% 外面煤 内面煮沸痕
75	弥生土器	広口壺	-	(33.6)	14.2	長石・石英・ 雲母・角閃石・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	附加条軸繩不明縄文による羽状構成 底面砂目 痕	床面～ 覆土下層	50%

第14号竖穴建物跡（第28・29図）

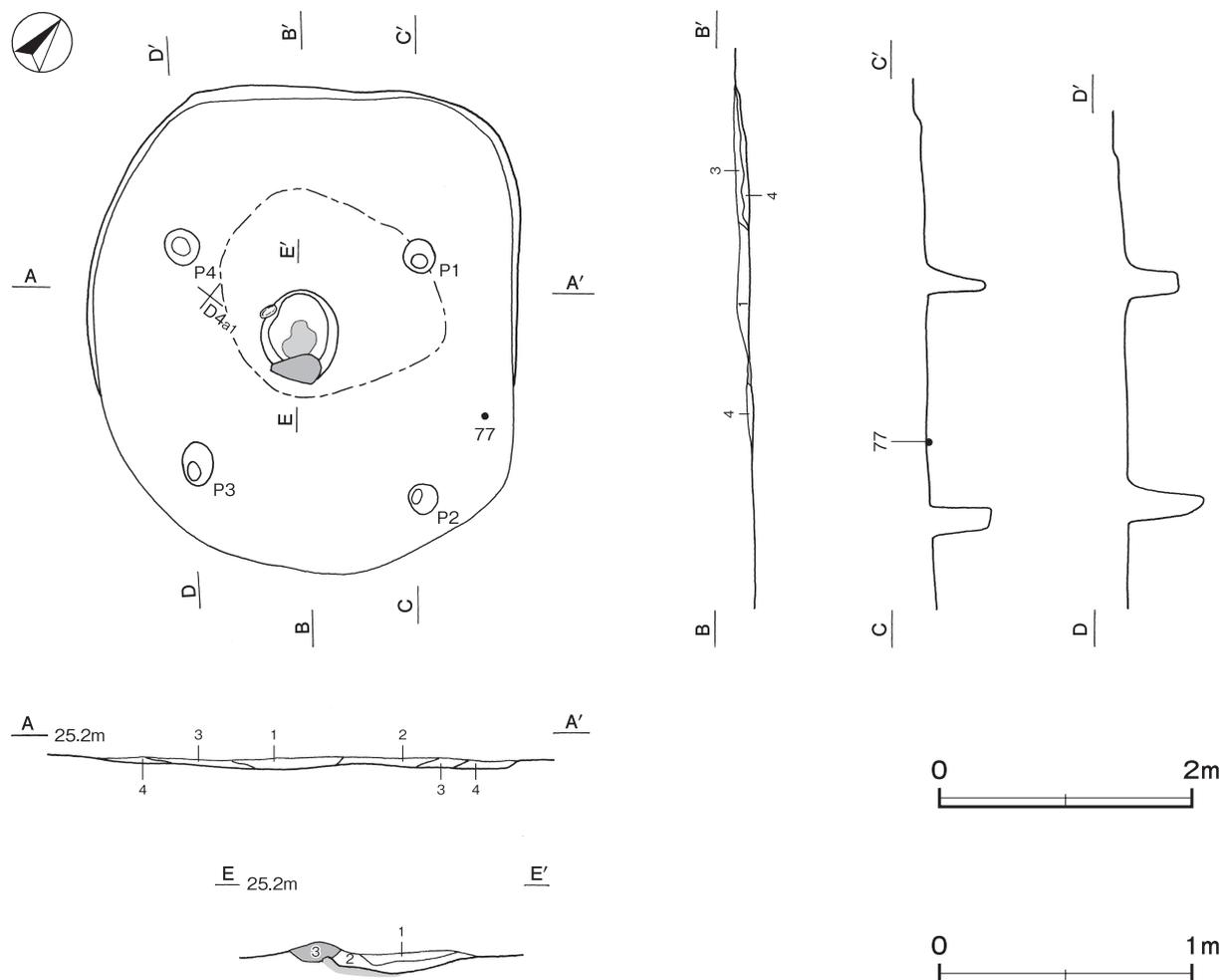
調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のC4j1区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が削平されており、短軸は3.41mで、長軸は3.89mしか確認できなかった。床面の状況やピット、炉の配置から隅丸長方形と推測でき、主軸方向はN-36°-Wである。壁は高さ6~8cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径72cm、短径60cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けてわずかに赤変している。第3層は火熱を受けていない白色粘土ブロックを含む層で、炉床面南東部に確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。



第28図 第14号竖穴建物跡実測図

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量
- 3 灰黄褐色 粘土ブロック多量

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ40～61cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

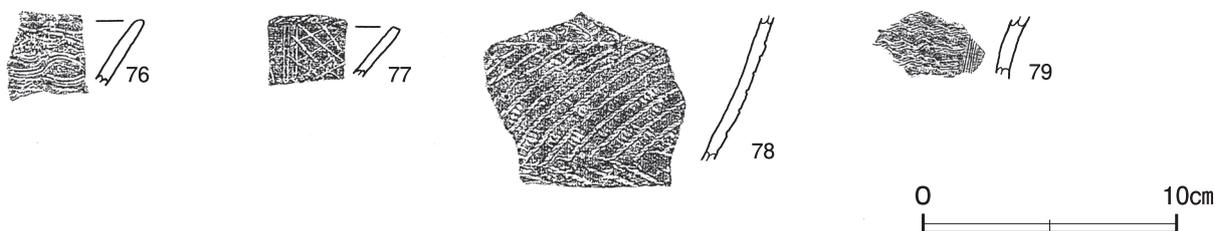
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3・4層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 弥生土器片55点（広口壺）、自然礫2点が出土している。炉の西側の床面からは風化した花崗岩が出土しており、土器製作の際の混和剤として持ち込まれた可能性がある。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第29図 第14号竪穴建物跡出土遺物実測図

第14号竪穴建物跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
76	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み、4本櫛歯状工具	覆土中	
77	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体による刻み、4本櫛歯状工具 平行沈線による格子目文	床面	
78	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成	覆土中	
79	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	4本櫛歯状工具	覆土中	

第15号竪穴建物跡（第30・31図 PL5）

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC3j7区、標高26mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.84m、短軸3.98mの隅丸長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁は高さ12～36cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺及び北西部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径115cm、短径44cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第3層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで、炉床面を横断するように確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

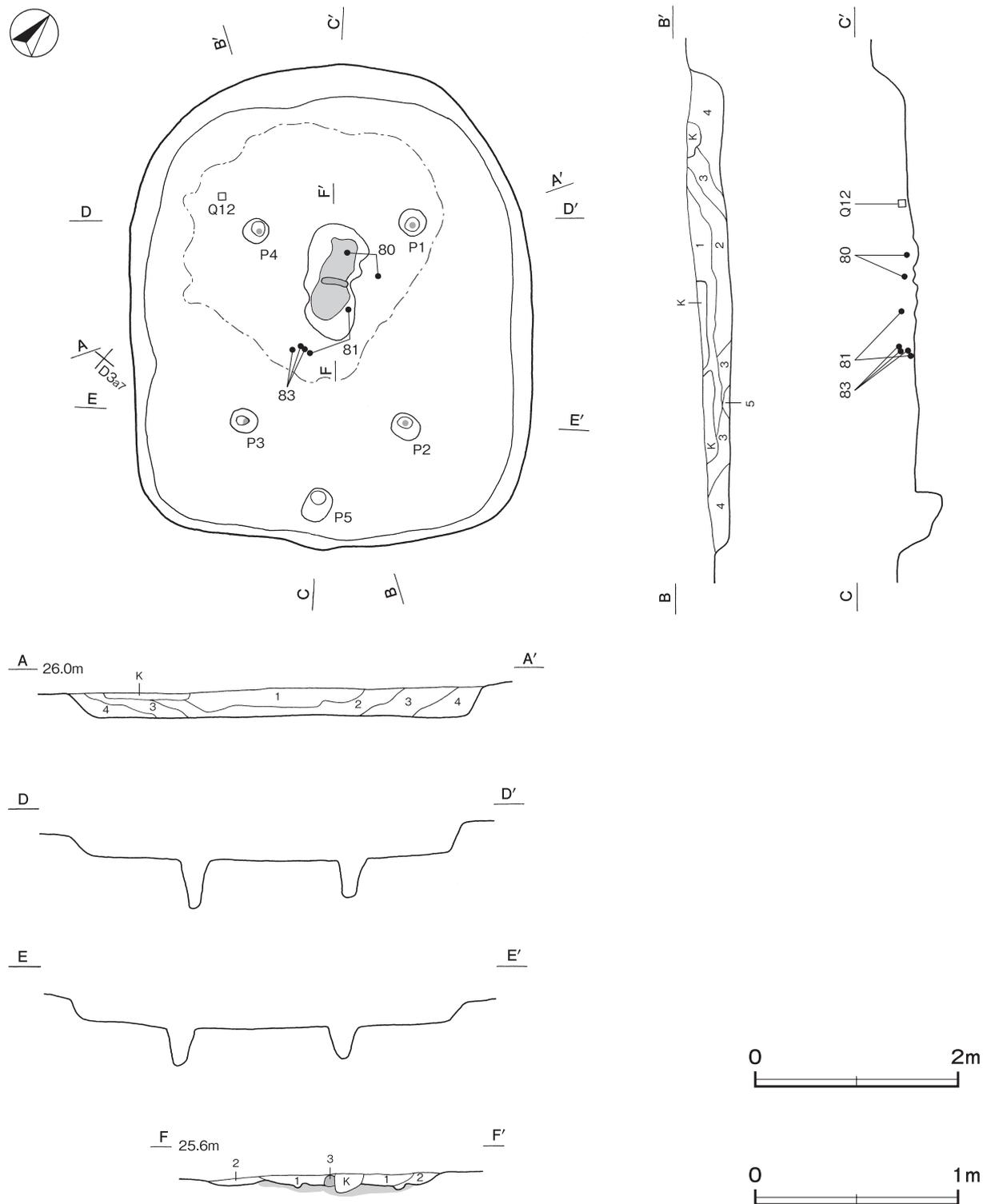
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 灰白色 粘土ブロック多量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ32～46cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3～5層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

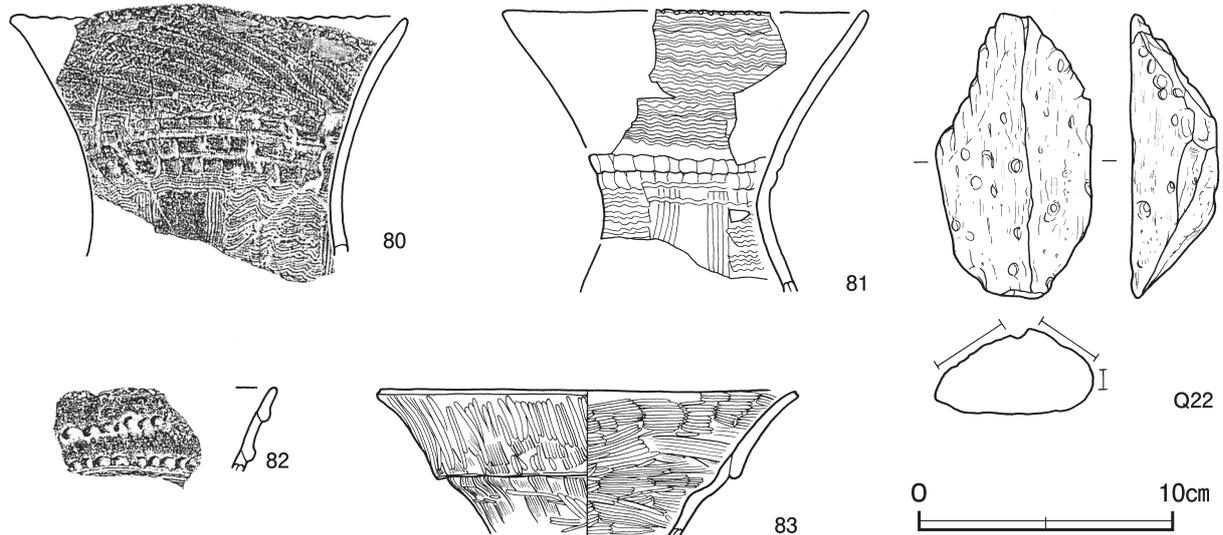
- | | | | |
|-------|----------------------|------|-------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |



第30図 第15号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片 290 点 (広口壺), 土師器片 1 点 (壺), 石器 10 点 (磨石 6, 敲石 2, 石皿 1, 砥石 1), 剥片 3 点, 粘土塊 1 点が出土している。80～83 は, 窪地状に堆積した黒色土中から散在した状態で出土しており, 埋め戻し後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。黒色土中から土師器片が出土していることから, 本跡は廃絶後しばらく窪地の状態で残されていたと考えられる。



第 31 図 第 15 号縦穴建物跡出土遺物実測図

第 15 号縦穴建物跡出土遺物観察表 (第 31 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
80	弥生土器	広口壺	[16.0]	(9.1)	-	長石・石英	灰黄褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 7本櫛歯状工具 スリットにより4区画。 附加条軸縄不明縄	覆土上層	20%
81	弥生土器	広口壺	[14.7]	(11.3)	-	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 5本櫛歯状工具 スリットにより3区画	床面・覆土上層	15%
82	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本以上の櫛歯状工具	覆土中	
83	土師器	壺	16.4	(5.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面縦・斜位のハケ目後斜・横位のミガキ 内面横位のミガキ 口縁部外面赤彩。	覆土上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 12	砥石	11.4	6.2	3.5	63.8	軽石	砥面5か所	覆土下層	PL23

第 16 号縦穴建物跡 (第 32・33 図 PL 5)

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3 d4 区, 標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

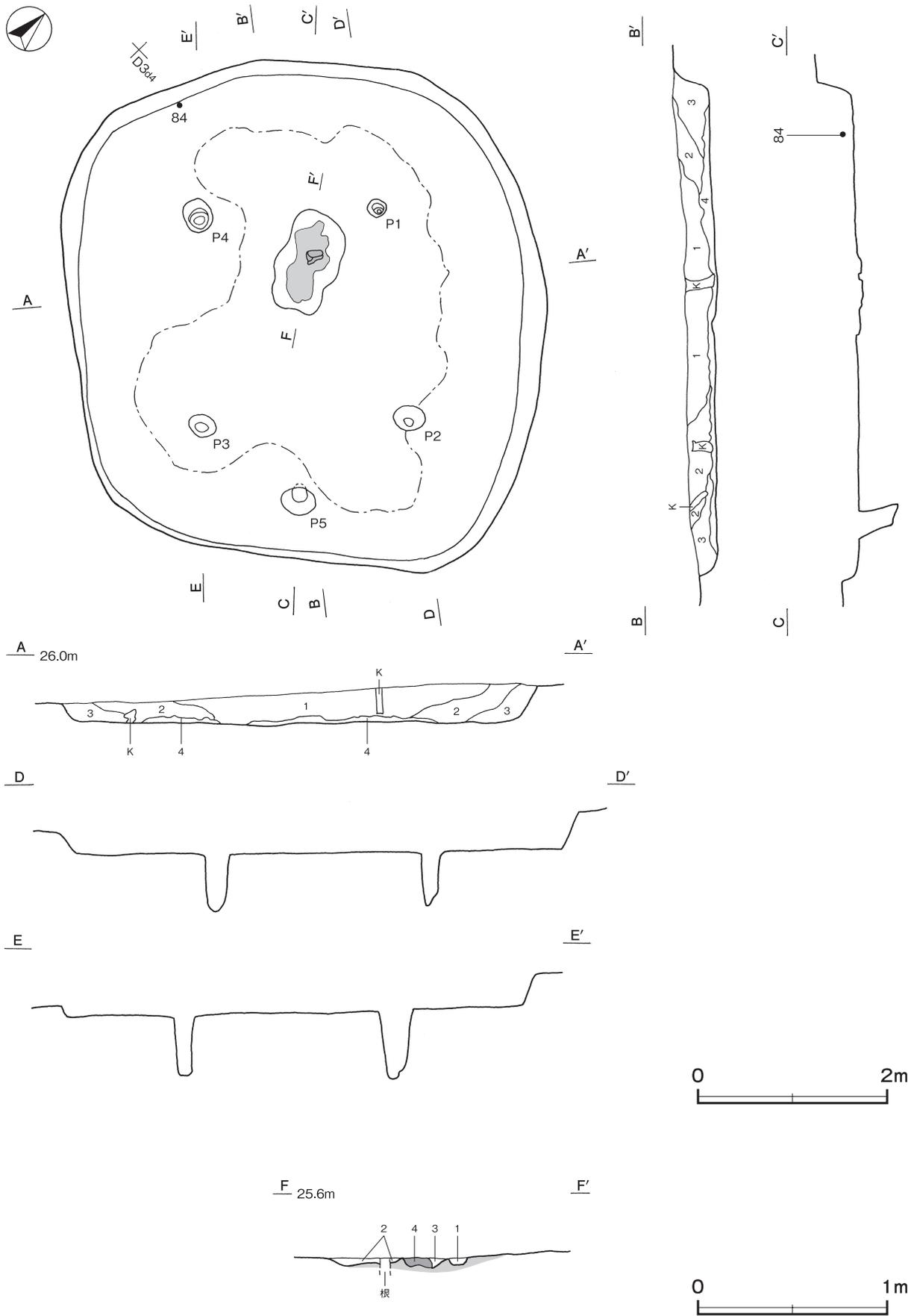
規模と形状 長軸 5.32 m, 短軸 5.05 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 49° - W である。壁は高さ 13 ~ 38 cm で, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 110 cm, 短径 65 cm の楕円形で, 深さ 6 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第 4 層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで, 炉床面を横断するように確認できることから, 廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

- | | |
|---------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量 | 3 黒褐色 炭化物中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 4 灰黄褐色 粘土ブロック多量 |



第 32 图 第 16 号竖穴建物跡実測图

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ57～72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ31cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

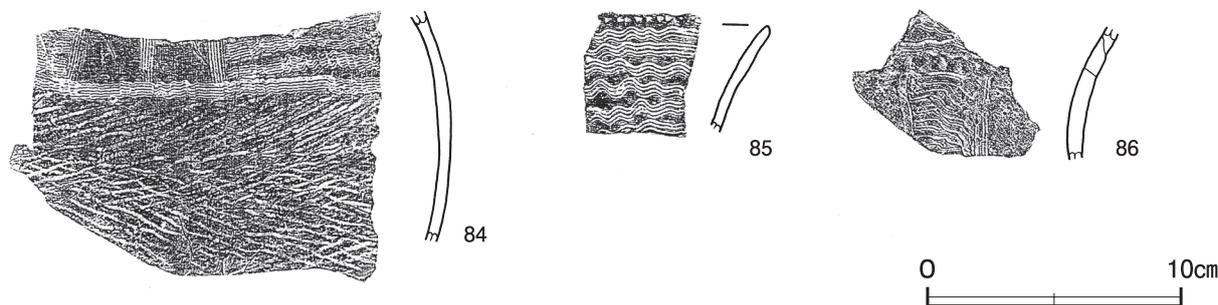
覆土 4層に分層できる。黒褐色土を主体とする第4層が全域に堆積した後、ロームブロックが含まれる第1～3層が埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|------|------------------|-------|------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子多量、ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器片241点（広口壺）、石器6点（磨石3、敲石2、台石1）、被熱礫1点のほか、縄文土器片1点（深鉢）が出土している。土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第33図 第16号竪穴建物跡出土遺物実測図

第16号竪穴建物跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
84	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	6本櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土中層	
85	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	暗褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 4本櫛歯状工具突起1か所	覆土中	
86	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	5本櫛歯状工具	覆土中	

第17号竪穴建物跡（第34・35図 PL 6）

調査年度 2016年度

位置 調査区西部のD 3g2区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径5.46m、短径5.32mの円形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁は高さ12～23cmで、外傾している。

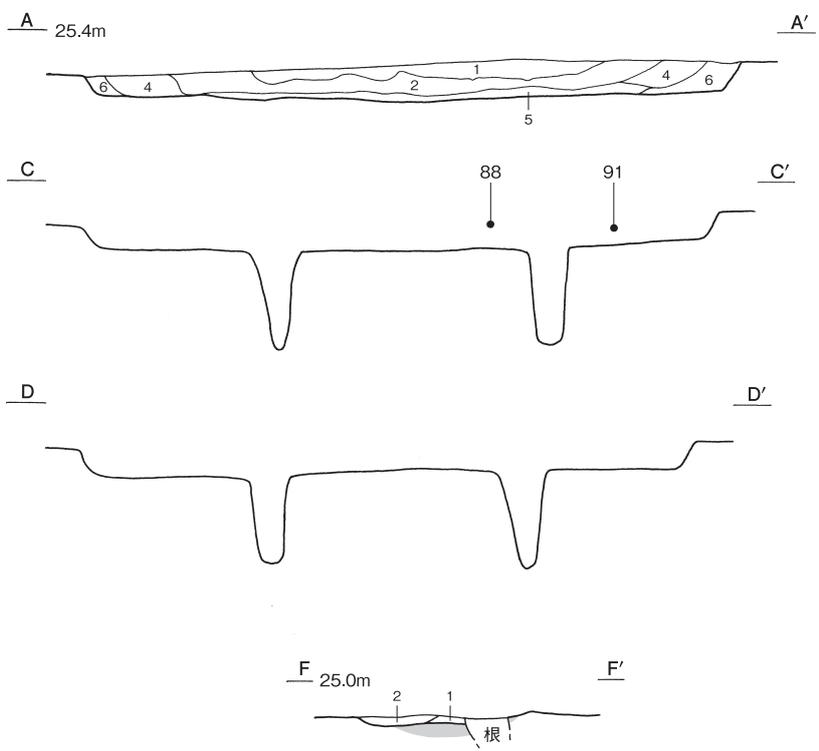
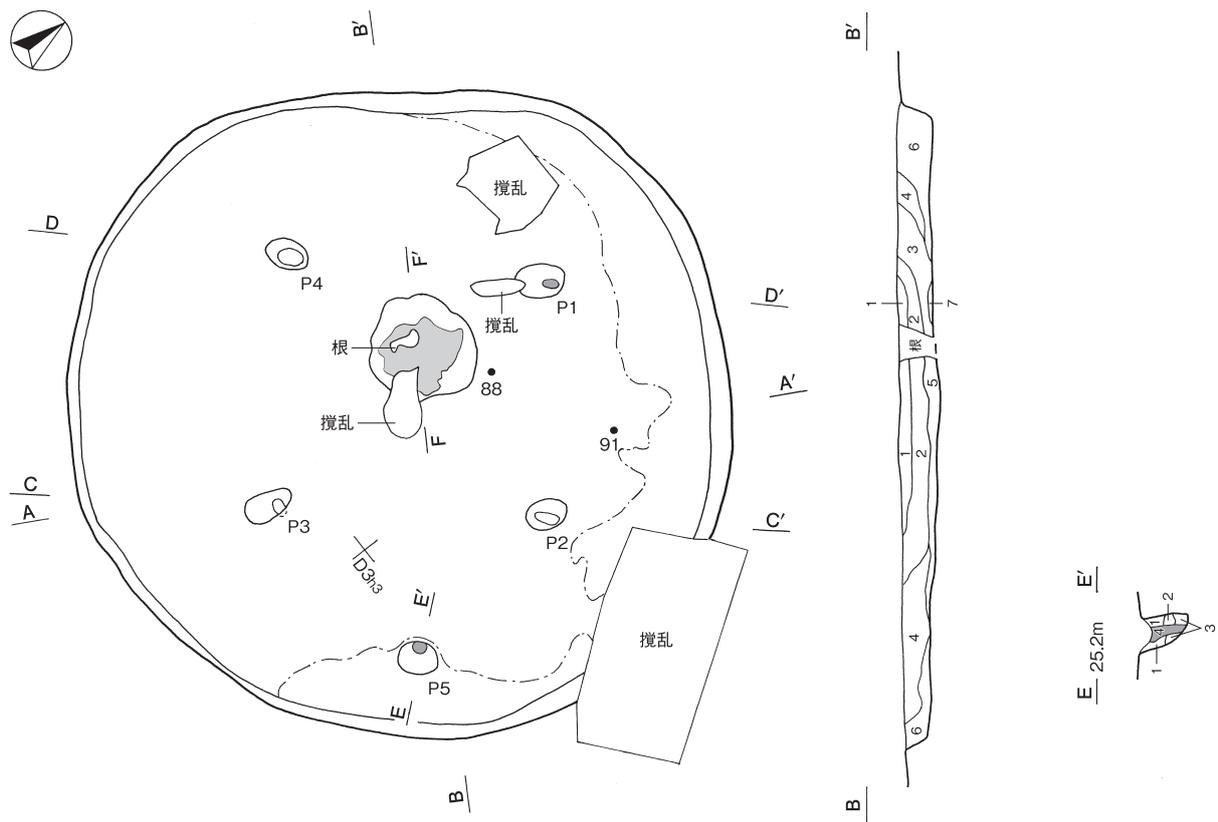
床 平坦で、ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径94cm、短径85cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
|-------|----------------|-------|-------------------|

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ76～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、主柱穴は4本とも抜き取られている。主柱穴の平面形はおおむね楕円形で、割材を柱として利用した可能性がある。P 5は深さ40cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は埋土、第4層は柱痕跡である。



第 34 图 第 17 号竖穴建物跡実测图

ピット土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|---------|
| 1 褐 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 3 褐 色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | 4 黒 褐 色 | ローム粒子微量 |

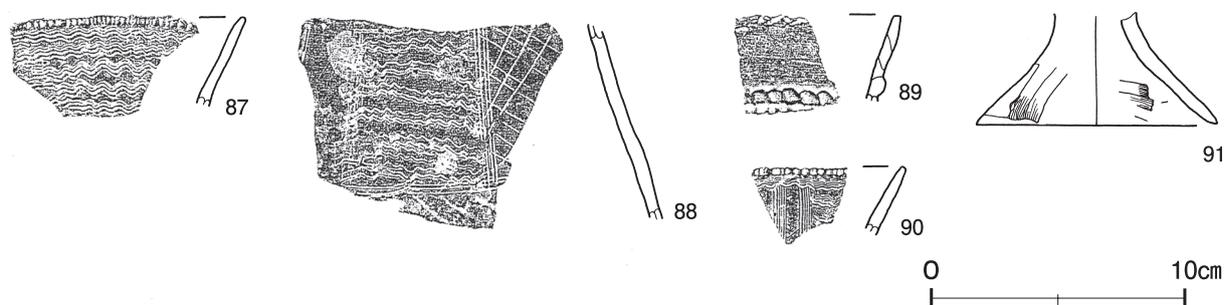
覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3～7層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------|-----------|-------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量 | 5 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 6 極 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | 7 暗 褐 色 | ローム粒子多量, 焼土粒子中量 |
| 4 暗 褐 色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片 219点 (広口壺), 土師器片 1点 (器台), 石器 5点 (磨石 2, 敲・磨石 1, 敲石 1, 台石 1) のほか, 縄文土器片 2点 (深鉢), 土師質土器片 1点 (鉢) が出土している。88・91は, 出土層位から埋め戻し後に投棄された, または混入したものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。



第 35 図 第 17 号 竪穴建物跡出土遺物実測図

第 17 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 35 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
87	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・黒色粒子	浅黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 4本櫛歯状工具	覆土中	
88	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	4本櫛歯状工具 平行沈線による格子目文 附加糸軸縄不明縄文	覆土上層	
89	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体押圧	覆土中	
90	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	黒褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 5本櫛歯状工具	覆土中	
91	土師器	器台	-	(4.5)	[9.2]	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	橙	普通	脚部外面縦位のヘラナデとハケ目 内面斜位のハケ目	覆土上層	10%

第 18 号 竪穴建物跡 (第 36 図)

調査年度 2016 年度

位置 調査区北西部の C 3e3 区, 標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 2 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため, 北東南西軸は 5.00 m で, 北西南東軸は 3.48 m しか確認できなかった。方形または長方形と推測でき, 主軸方向は N - 34° - W である。壁は高さ 30 ~ 42cm で, 直立または外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。確認できた部分は長径 60cm, 短径 50cm で, 楕円形と推定できる。深さ 6cm の地床炉で, 炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

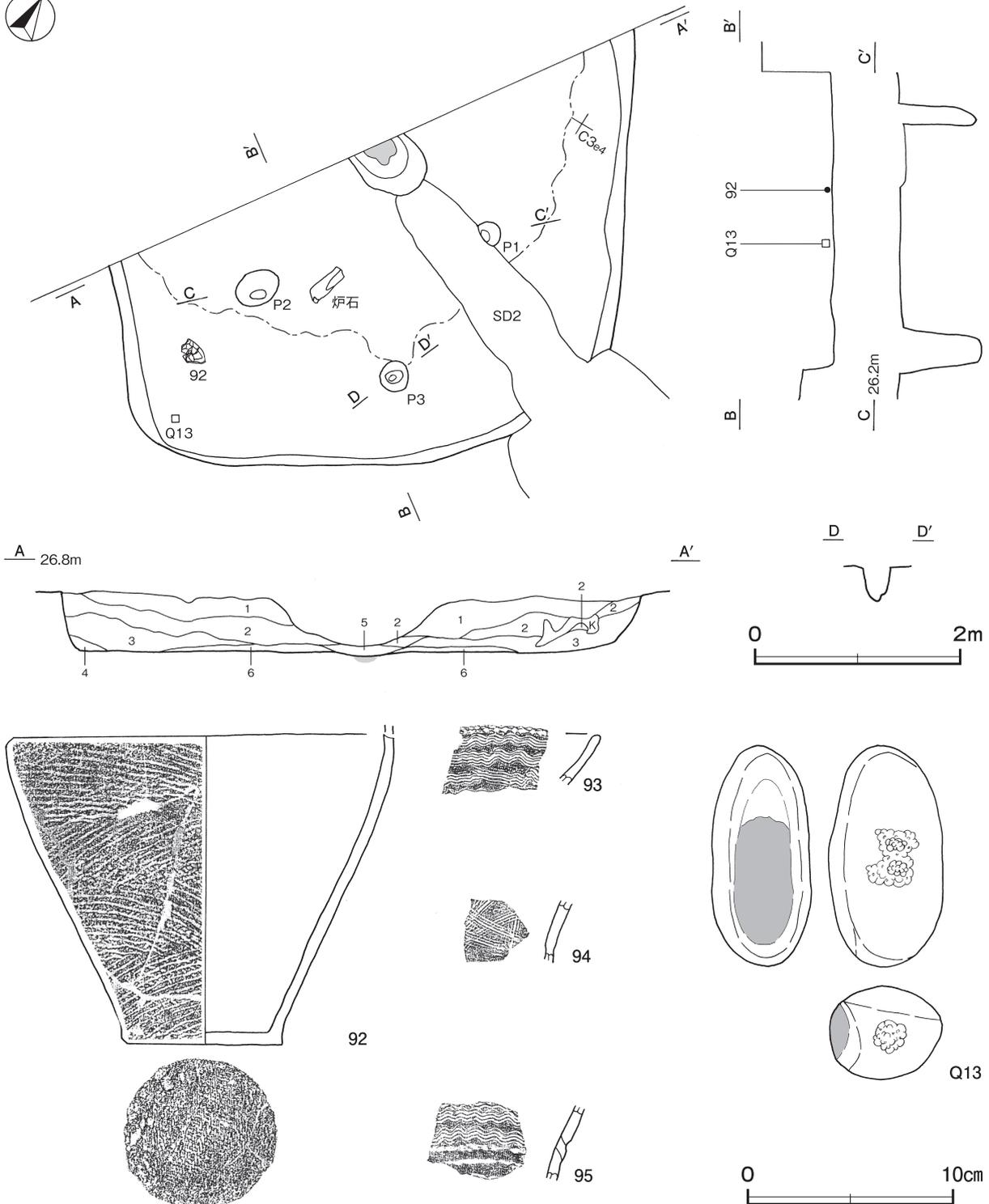
ピット 3 か所。P 1・P 2 は深さ 75・80cm で, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P 3 は深さ 32cm で,

配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。黒色土を主体とする第6層が床面上に堆積した後、ロームブロックを含む第1～4層で埋め戻されている。第5層は炉の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒色 | 炭化粒子多量, 焼土粒子中量, ローム粒子少量 |



第36図 第18号竪穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 162 点（高坏 1，広口壺 161），石器 9 点（磨石 4，敲・磨石 2，凹石 1，台石 1，炉石 1），石核 2 点，剥片 1 点，被熱礫 1 点，瑪瑙原石 1 点のほか，縄文土器片 2 点（深鉢），自然礫 5 点が出土している。92 は覆土下層からつぶれた状態で出土しており，埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。火熱を受けて赤色変化した炉石が出土しているが，炉からは離れており廃絶後に動かされたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から後期後半に比定できる。

第 18 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 36 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	弥生土器	広口壺	18.9	15.4	7.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種（附加 1 条）縄文による羽状構成 底面布目痕周縁ナデ調整	覆土下層	40% 内面煮沸痕 再利用。
93	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 5 本櫛歯状工具	覆土中	
94	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	5 本櫛歯状工具	覆土中	
95	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	普通	4 本櫛歯状工具	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	敲・磨石	11.0	5.5	4.5	426.9	安山岩	敲面 2 か所 磨面 1 か所	覆土下層	PL23

第 19 号竪穴建物跡（第 37～40 図 PL 6・7）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3 c7 区，標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 12 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.48 m，短軸 4.50 m の隅丸長方形で，主軸方向は N - 22° - W である。壁は高さ 15～40cm で，外傾している。

床 平坦で，ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径 98cm，短径 64cm の楕円形で，深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり，炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 | | |

ピット 5 か所。P 1～P 4 は深さ 55～70cm で，規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 37cm で，配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から，柱はすべて抜き取られている。

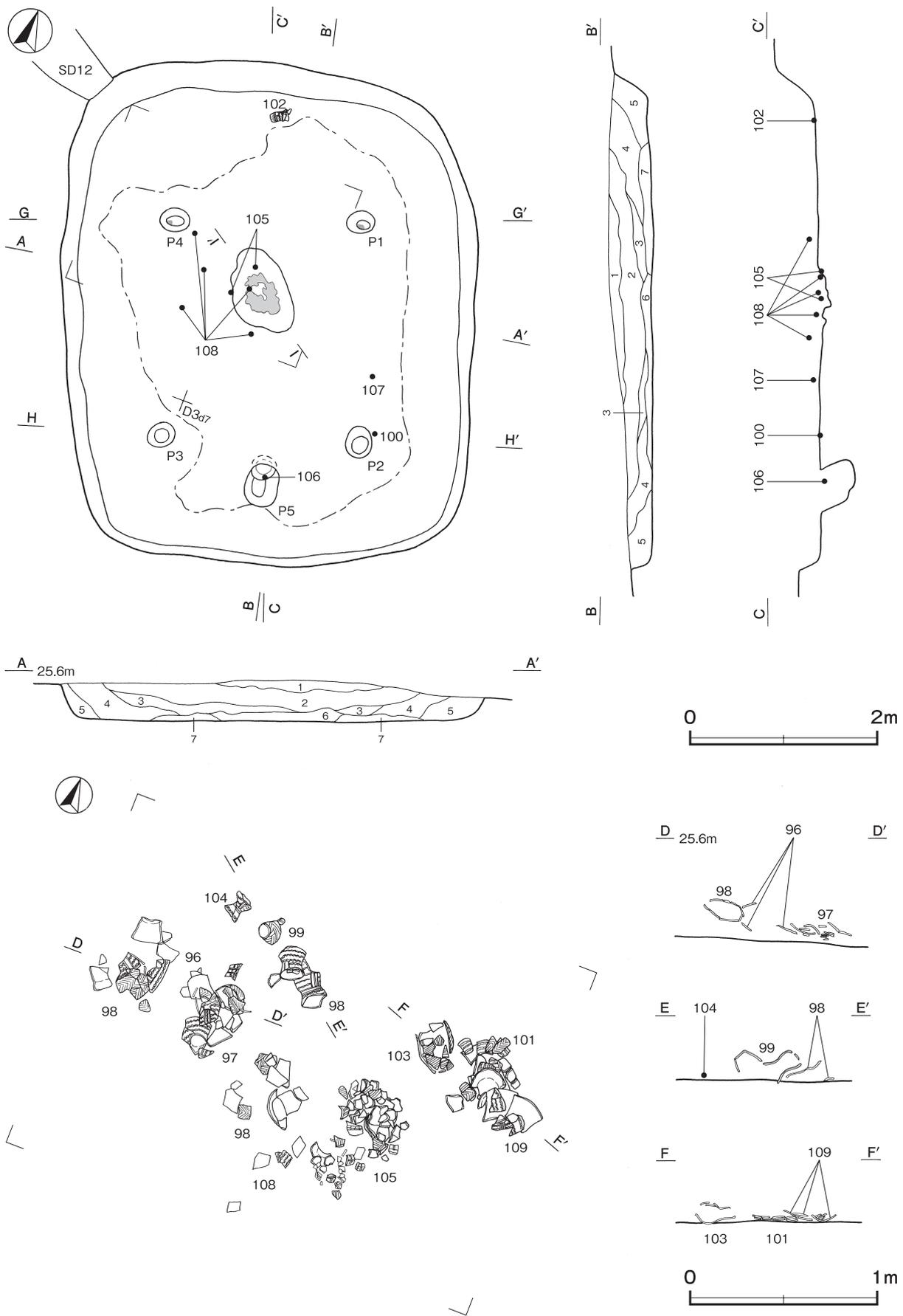
覆土 7 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 3～7 層が埋め戻された後，第 1・2 層が自然堆積している。

土層解説

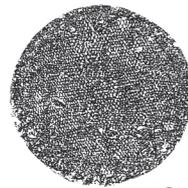
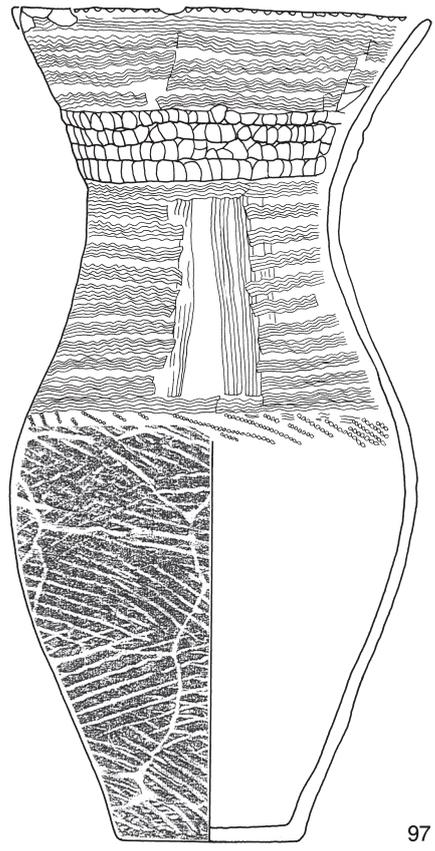
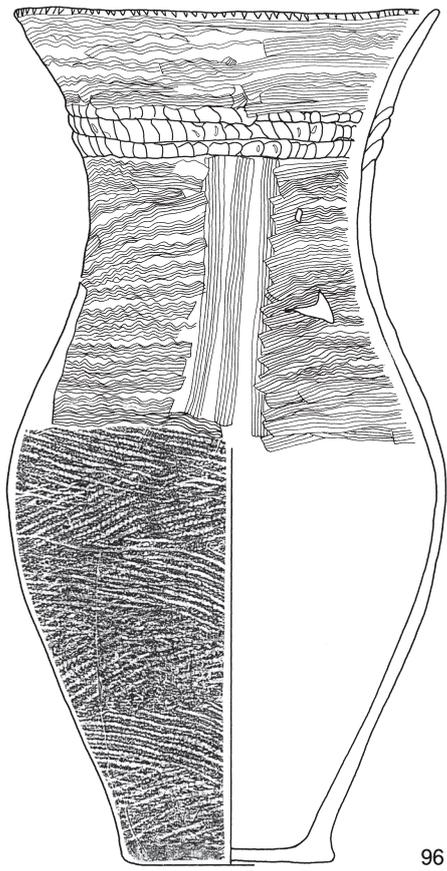
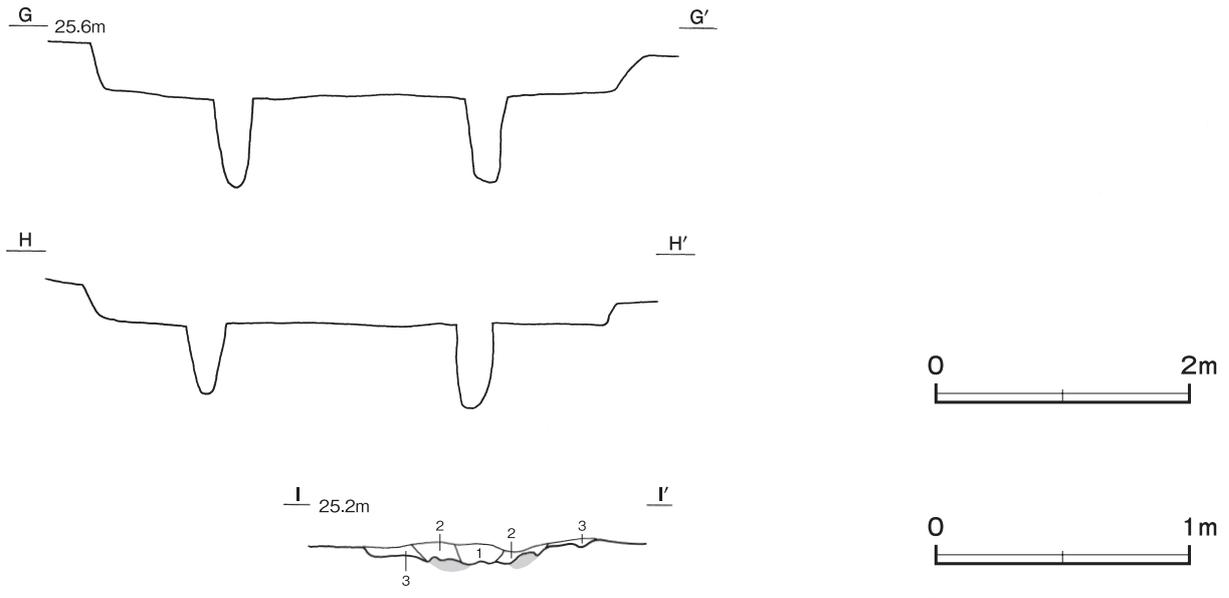
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子極多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量，炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片 1,029 点（高坏 1，広口壺 1,028），石器 8 点（磨石 2，敲石 3，砥石_カ 1，台石 2）のほか，自然礫 5 点が出土している。出土した大形の破片は，ある程度埋め戻した状態で北西コーナーから炉及び P 1 の方向に投棄された様相を呈している。96～109 は，主に床面から覆土下層にかけて破碎された状態で出土しており，埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

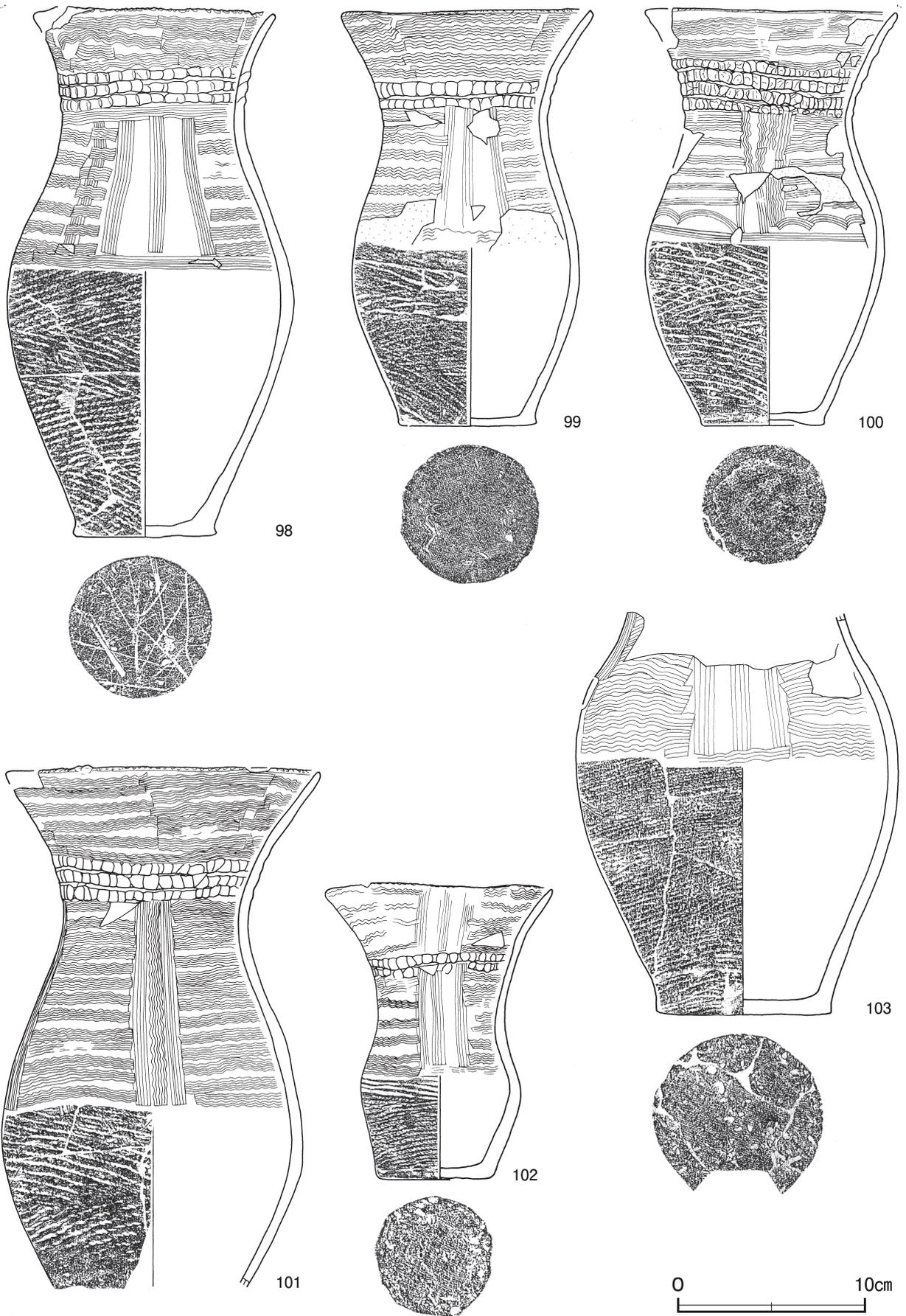
所見 時期は，出土土器から後期後半に比定できる。多量の遺物が出土しているが，すべて破碎された状態で



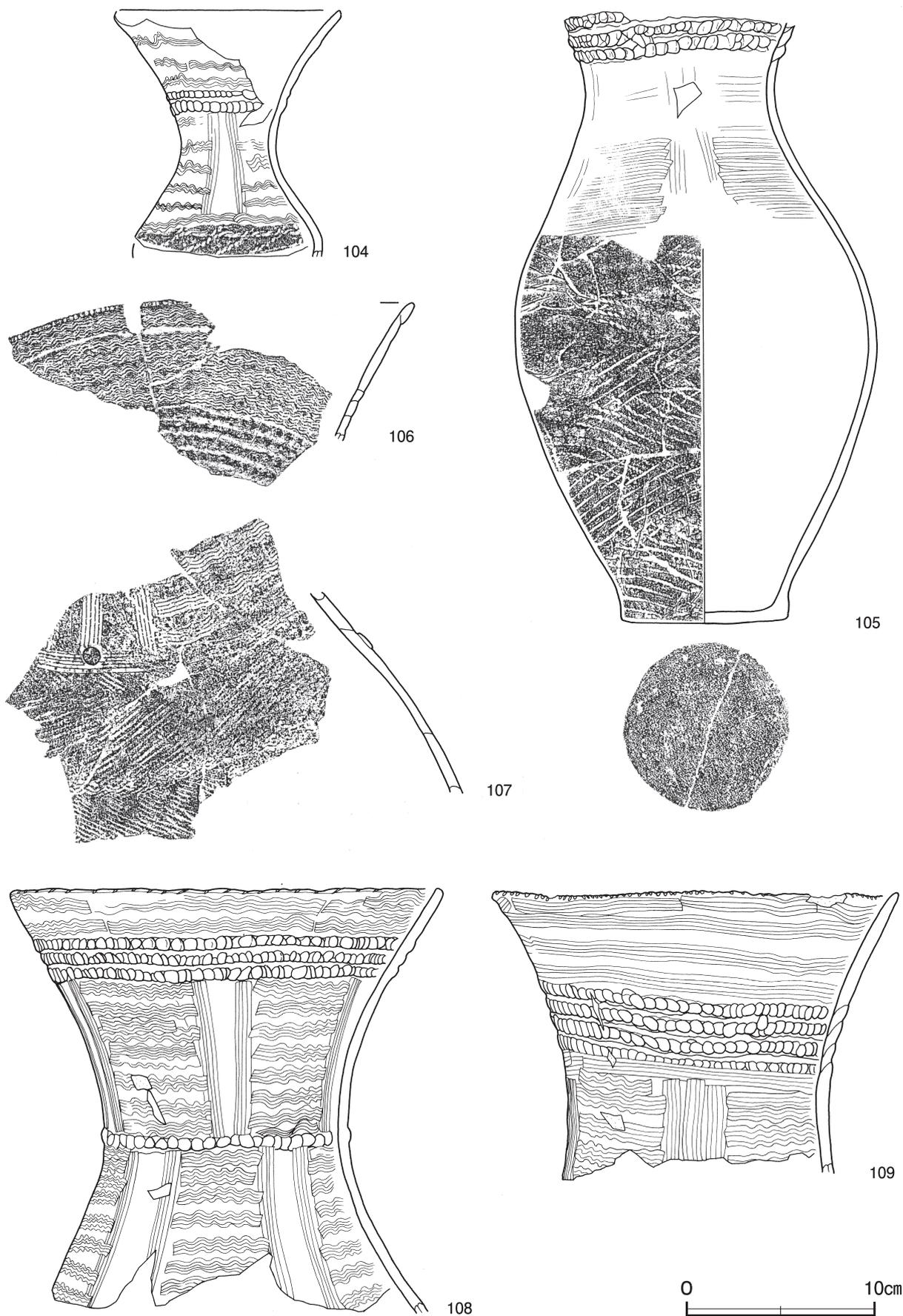
第 37 图 第 19 号竖穴建物跡実测图



第 38 图 第 19 号竖穴建物跡実測図・出土遺物実測図



第 39 图 第 19 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 40 图 第 19 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

の出土であり、二次焼成を受けた破片や風化の著しい破片も確認できる。これらは、本跡を埋め戻す際に不要な土器をまとめて廃棄したと考えられる。

第 19 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 38～40 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	弥生土器	広口壺	16.8	34.5	8.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	良好	口唇部ヘラ状工具による刻み 6本櫛歯状工具スリットにより4区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 胴部下端指頭による調整 底面布目痕周縁ナデ調整	覆土下層	75% PL16 内面煮沸痕
97	弥生土器	広口壺	[16.5]	33.4	7.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 5本櫛歯状工具スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	90% PL15 内面煮沸痕
98	弥生土器	広口壺	13.0	28.8	7.5	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 6本櫛歯状工具スリットにより3区画 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	90% PL16 内面煮沸痕 二次焼成
99	弥生土器	広口壺	13.6	22.7	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 5本櫛歯状工具スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面～ 覆土下層	95% 二次焼成
100	弥生土器	広口壺	13.5	21.7	6.5	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部縄文原体回転押圧 4本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	60% 底面一部剥がれ
101	弥生土器	広口壺	16.6	(28.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 突起4単位 6本櫛歯状工具 スリットにより5区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	床面	70% 外面煤
102	弥生土器	広口壺	12.2	16.3	6.1	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 突起4単位 4本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条一種（附加2条）による羽状構成 胴部下端指頭による調整 底面布目痕周縁ナデ調整	覆土下層	90% PL20 二次焼成
103	弥生土器	広口壺	-	(21.9)	9.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	太い5本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	60% PL20
104	弥生土器	広口壺	[12.0]	(13.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本櫛歯状工具スリットにより3区画 附加条軸縄不明縄文	覆土下層	50%
105	弥生土器	広口壺	-	(33.1)	9.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	4本櫛歯状工具 スリットにより5区画 底面砂目痕	覆土下層	80% 内面煮沸痕 風化著しい
106	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 折返し口縁 4本櫛歯状工具	P5 覆土 上層	
107	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・角閃石・針状鉱物	黄灰	普通	頸部太い5本櫛歯状工具 横走文後ボタン状突起貼付 附加条一種（附加2条）による羽状構成及び結節縄文	覆土下層	
108	弥生土器	広口壺	23.2	(22.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 5本櫛歯状工具 スリットにより5区画	覆土下層～ 中層	30% PL16
109	弥生土器	広口壺	21.6	(15.6)	-	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 太い5本櫛歯状工具スリットにより4区画	床面	30% PL16

第 21 号竪穴建物跡（第 41・42 図 PL 7）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3 e6 区、標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.78 m、短軸 5.64 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 31° - W である。壁は高さ 8 ~ 40 cm で、外傾している。

床 平坦で、ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径 141 cm、短径 88 cm の楕円形で、深さ 9 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

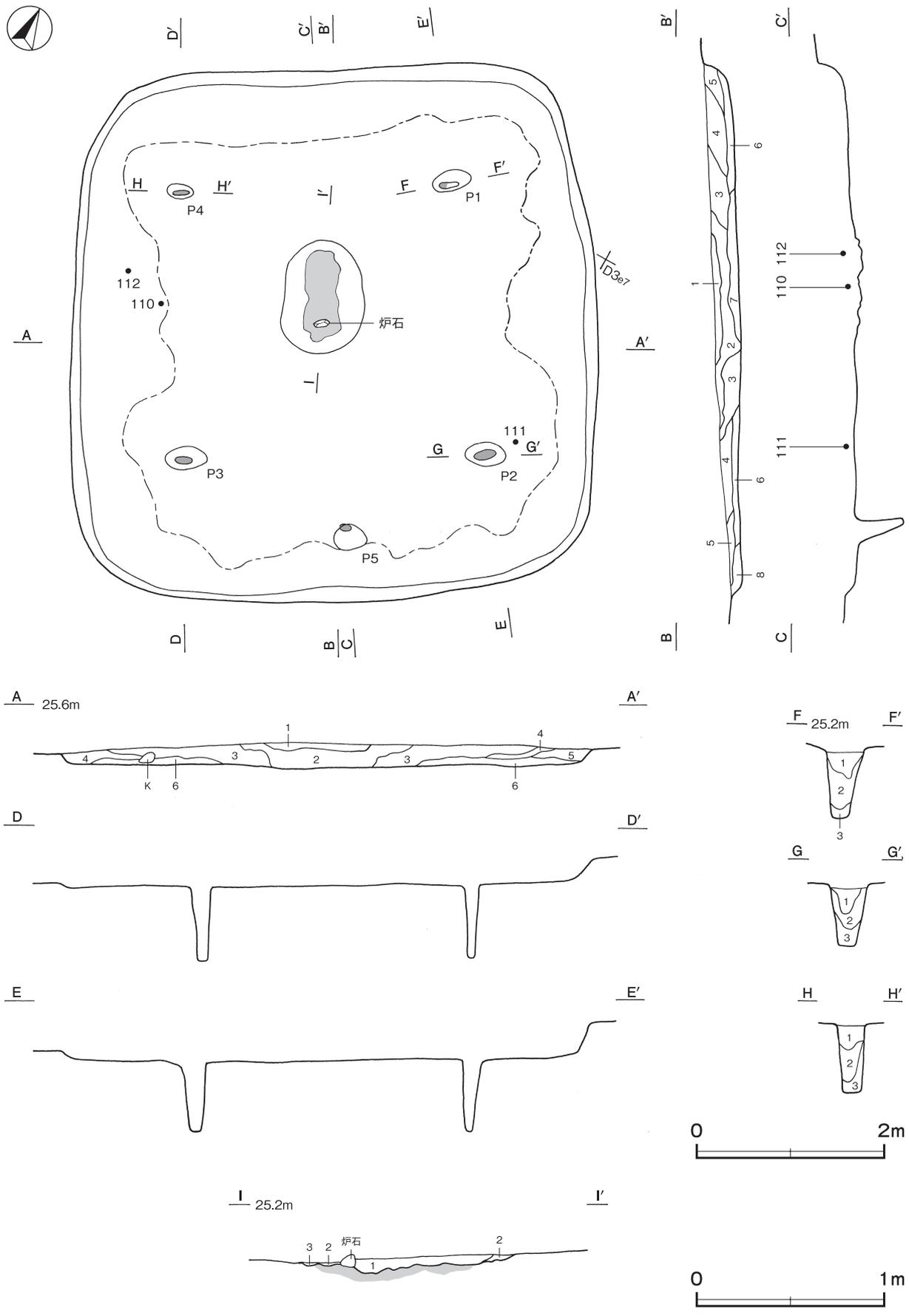
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 74 ~ 82 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。主柱穴の平面形は楕円形で、割材を柱として利用した可能性がある。覆土は柱抜き取り後の堆積である。P 5 は深さ 48 cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱は抜き取られている。

ピット土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

覆土 8 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 7 層が堆積した後、ロームが多く含まれる第 2 ~ 6 層が埋め戻され、第 1 層が自然堆積している。



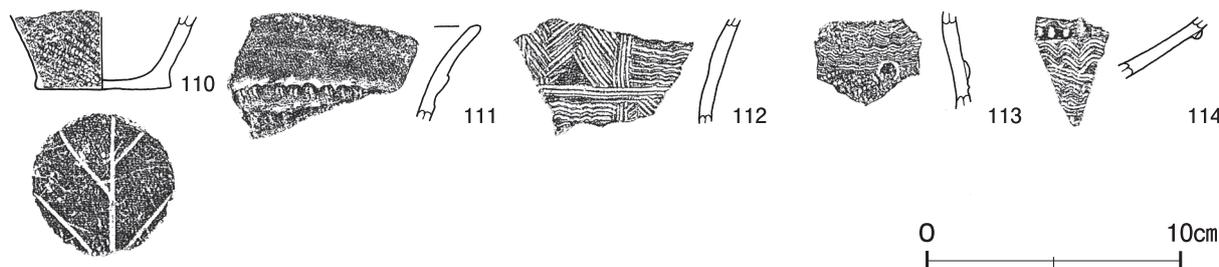
第 41 图 第 21 号竖穴建物迹实测图

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子少量 |

遺物出土状況 弥生土器片 364 点（高坏 2, 高坏_カ 1, 広口壺 361）, 石器 3 点（磨石 2, 炉石 1）, 石核 1 点, 剥片 1 点のほか, 陶器片 1 点（小皿）, 自然礫 1 点が出土している。土器片はほとんどが細片で, 全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。



第 42 図 第 21 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 21 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 42 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
110	弥生土器	広口壺	-	(29)	5.4	長石・石英・雲母・砂多量	にぶい黄橙	普通	附加条一種（附加 2 条）縄文 底面木葉痕	覆土下層	5%
111	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み	覆土下層	
112	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	4 本櫛歯状工具	覆土下層	
113	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	5 本以上の櫛歯状工具 附加条一種（附加 2 条）縄文 ボタン状突起貼付	覆土中（下層）	
114	弥生土器	高坏 _カ	-	-	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	隆帯に縄文原体で刺突 5 本櫛歯状工具 内面赤彩	覆土中（下層）	PL22

第 22 号竪穴建物跡（第 43 図）

調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の D 3 f0 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 8 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.35 m, 短軸 4.77 m の隅丸長方形で, 主軸方向は N - 74° - W である。壁は高さ 1 ~ 5 cm で, 緩やかに傾斜している。

床 平坦で, 炉の周辺が踏み固められている。

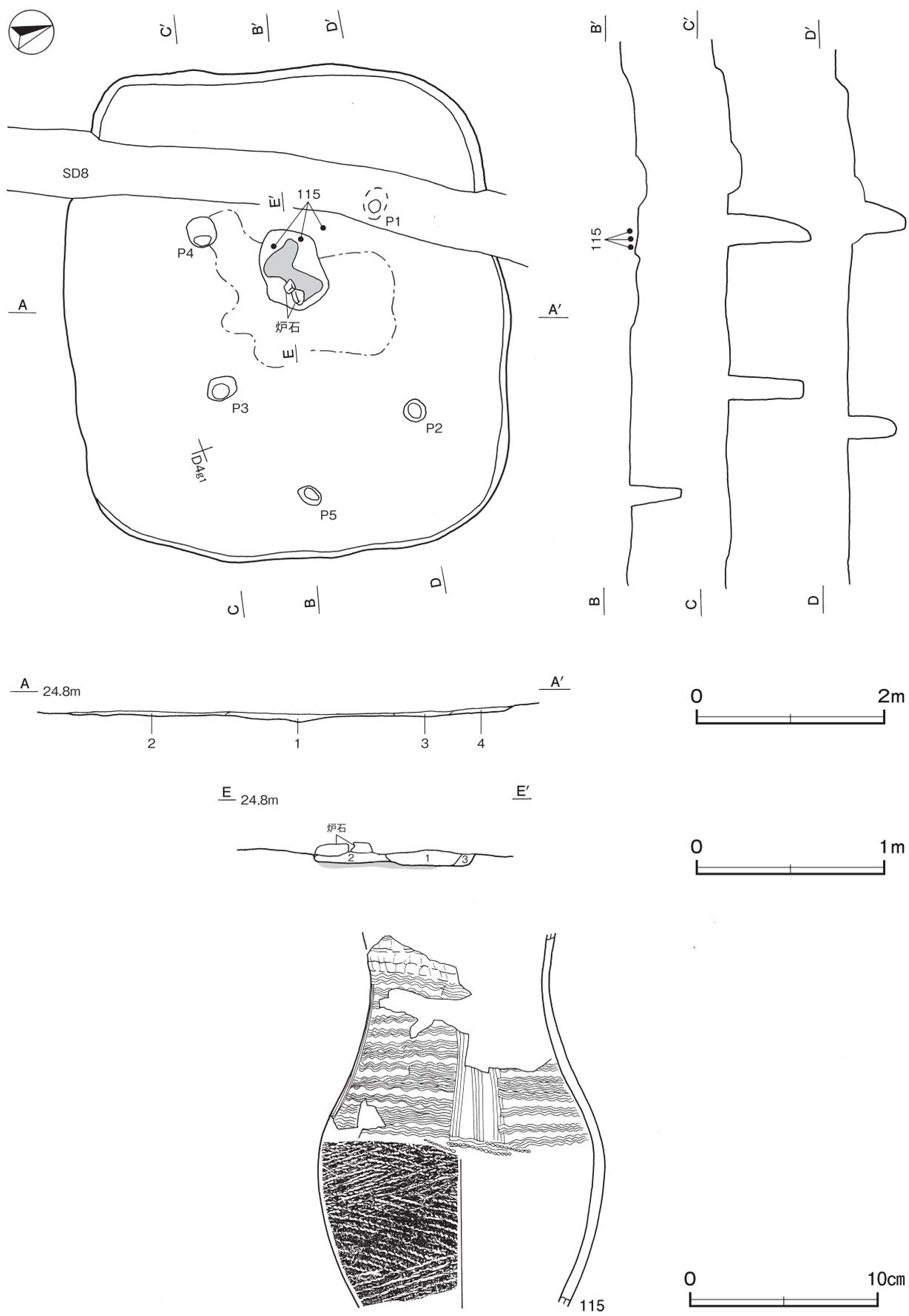
炉 中央部に付設されている。長径 109cm, 短径 67cm の楕円形で, 深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉石が破碎され動いた状態で出土している。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | | |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 49 ~ 89cm で, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 55cm で, 配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

覆土 4 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 1 層が堆積した後, ロームが含まれる第 2 ~ 4 層が埋め戻されている。



第 43 图 第 22 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 3 黒褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 弥生土器片 120 点 (広口壺), 石器 7 点 (磨石 2, 敲石 4, 炉石 1), 被熱礫 1 点のほか, 自然礫 3 点が出土している。115 は, 第 1 層中から投棄された状況で出土している。その他の土器片はほとんどが細片で, 全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第 22 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 43 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
115	弥生土器	広口壺	-	(20.4)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	暗褐	普通	4本櫛歯状工具・スリットにより4区画 附加 糸軸縄不明縄文による羽状構成	覆土下層	50% 内面煮沸痕

第 23 号竪穴建物跡 (第 44・45 図 PL 7)

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3 g8 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 7 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径 5.74 m, 短径 5.66 m の円形で, 主軸方向は N - 45° - W である。壁は高さ 12 ~ 27 cm で, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 93 cm, 短径 67 cm の楕円形で, 深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土ブロック少量, 灰粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子中量, 灰粒子少量 | | |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 50 ~ 60 cm で, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 50 cm で, 配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第 3・4 層は埋土または崩落した埋土で, 第 1・2 層は柱抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |

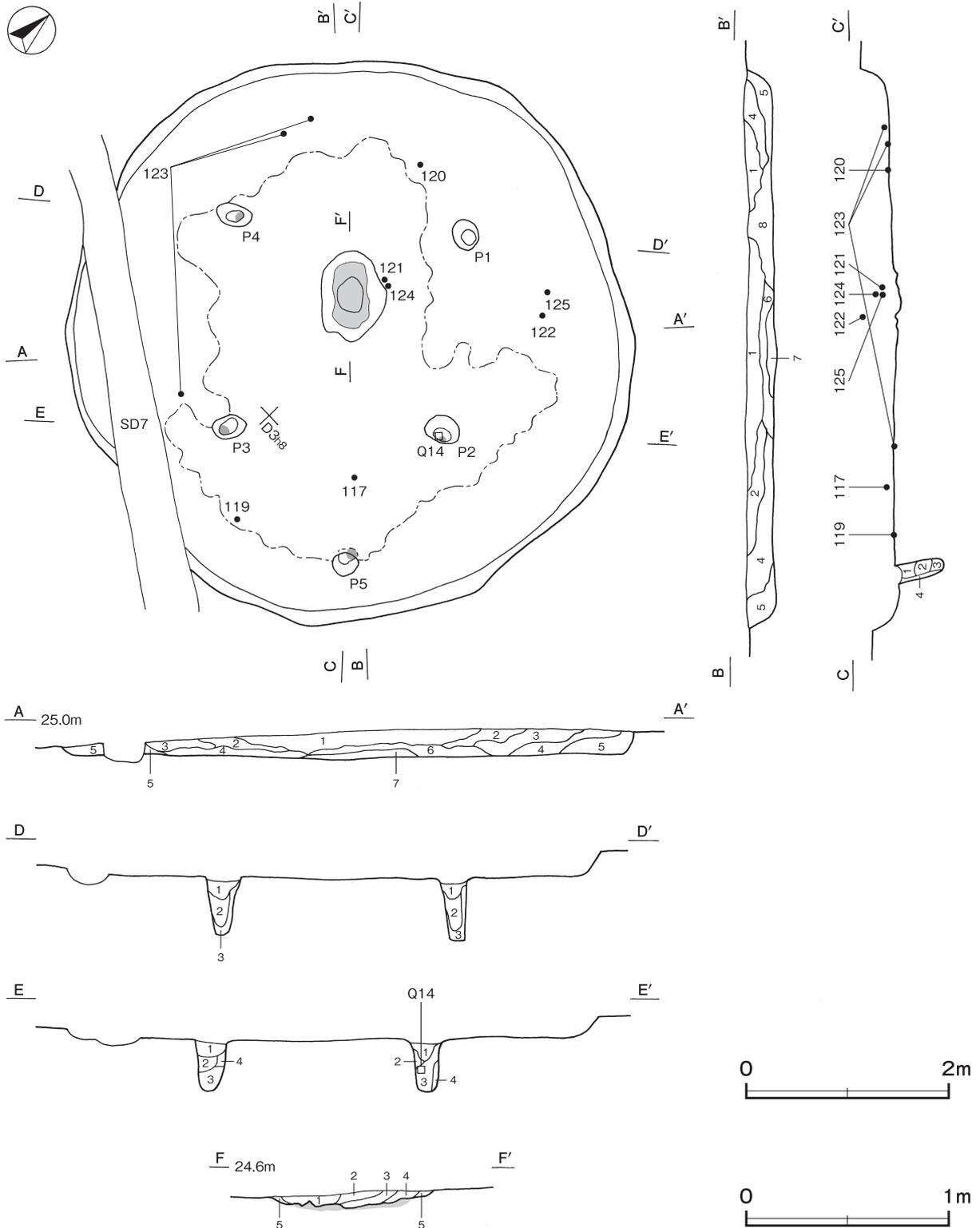
覆土 8 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 7 層が堆積した後, ロームが多く含まれる第 1 ~ 6 層が埋め戻されている。第 8 層は根の影響を受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化物少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 |

遺物出土状況 弥生土器片 586 点 (高坏 1, 蓋 1, 広口壺 583, 壺 1), 石器 17 点 (磨石 8, 磨・敲石 1, 敲石 5, 砥石_カ 1, 台石 2), 被熱礫 3 点のほか, 縄文土器片 2 点 (深鉢), 自然礫 1 点が出土している。119・120・123 は床面から破碎された状態で出土しており, 廃絶時に投棄されたと考えられる。119・120 は二次焼成を受けており, 123 も同様の可能性がある。

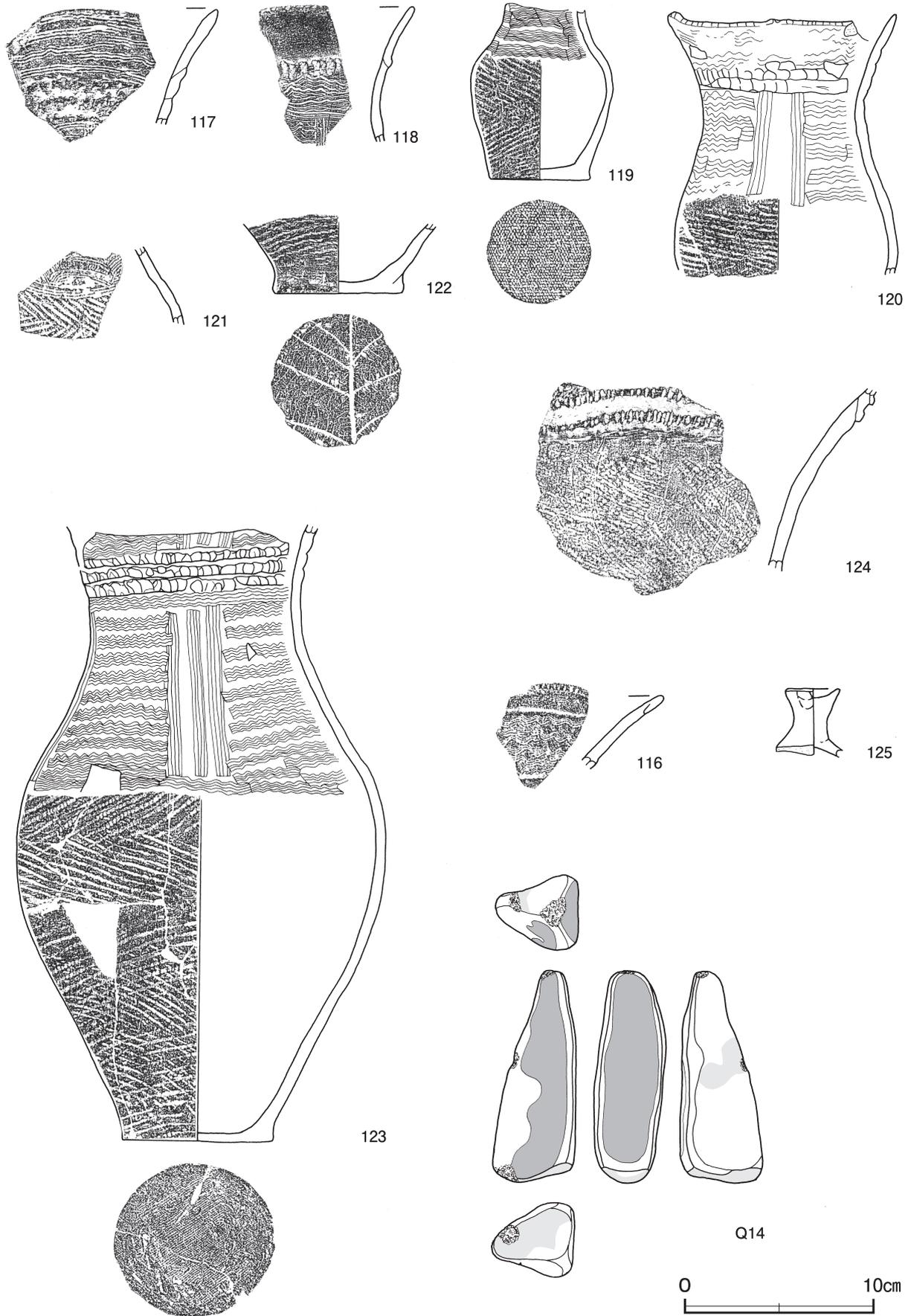
所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。



第44図 第23号竪穴建物跡実測図

第23号竪穴建物跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
116	弥生土器	高環	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 折り返し口縁 4本櫛歯状工具	覆土中	
117	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 3本櫛歯状工具	覆土下層	
118	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 隆帯に縄文原体押圧 4本櫛歯状工具	覆土中	PL22
119	弥生土器	広口壺	-	(9.4)	5.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	7本櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	40% 二次焼成



第45图 第23号竖穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	弥生土器	広口壺	(12.1)	(13.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体回転押圧突起5単位。4本櫛歯状工具 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	床面	60% 二次焼成
121	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	4本櫛歯状工具 附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成	覆土中層	
122	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	7.0	長石・石英・雲母	灰褐	普通	附加条軸縄不明縄文 胴部下端調整 底面木葉痕	覆土上層	5% 底面圧痕 内面煮沸痕
123	弥生土器	広口壺	-	(33.1)	8.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	5本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面布目痕周縁ナデ調整	床面	60% 内面煮沸痕
124	弥生土器	壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	浅黄	普通	隆帯を摘み上げて作出後ヘラ状工具による刻み 附加条一種（附加2条）縄文	覆土中層	PL22
125	弥生土器	蓋	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	つまみ部遺存 指頭による調整	覆土中層	

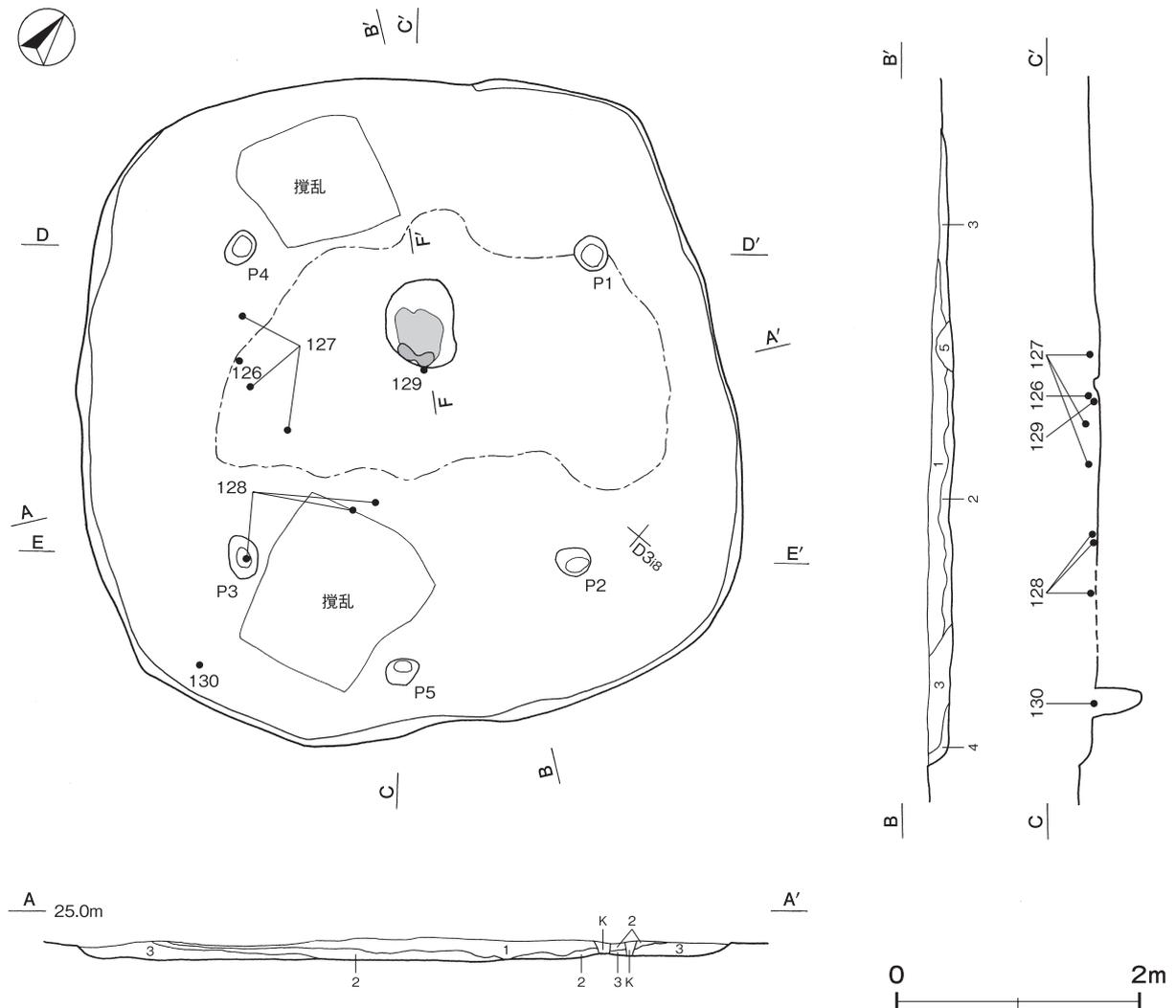
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	磨・敲石	11.4	4.4	4.0	219.5	安山岩	磨面2か所 敲痕3か所 赤色顔料。付着2か所	P 2 覆土中層	

第 24 号 竪穴建物跡 (第 46・47 図 PL 8)

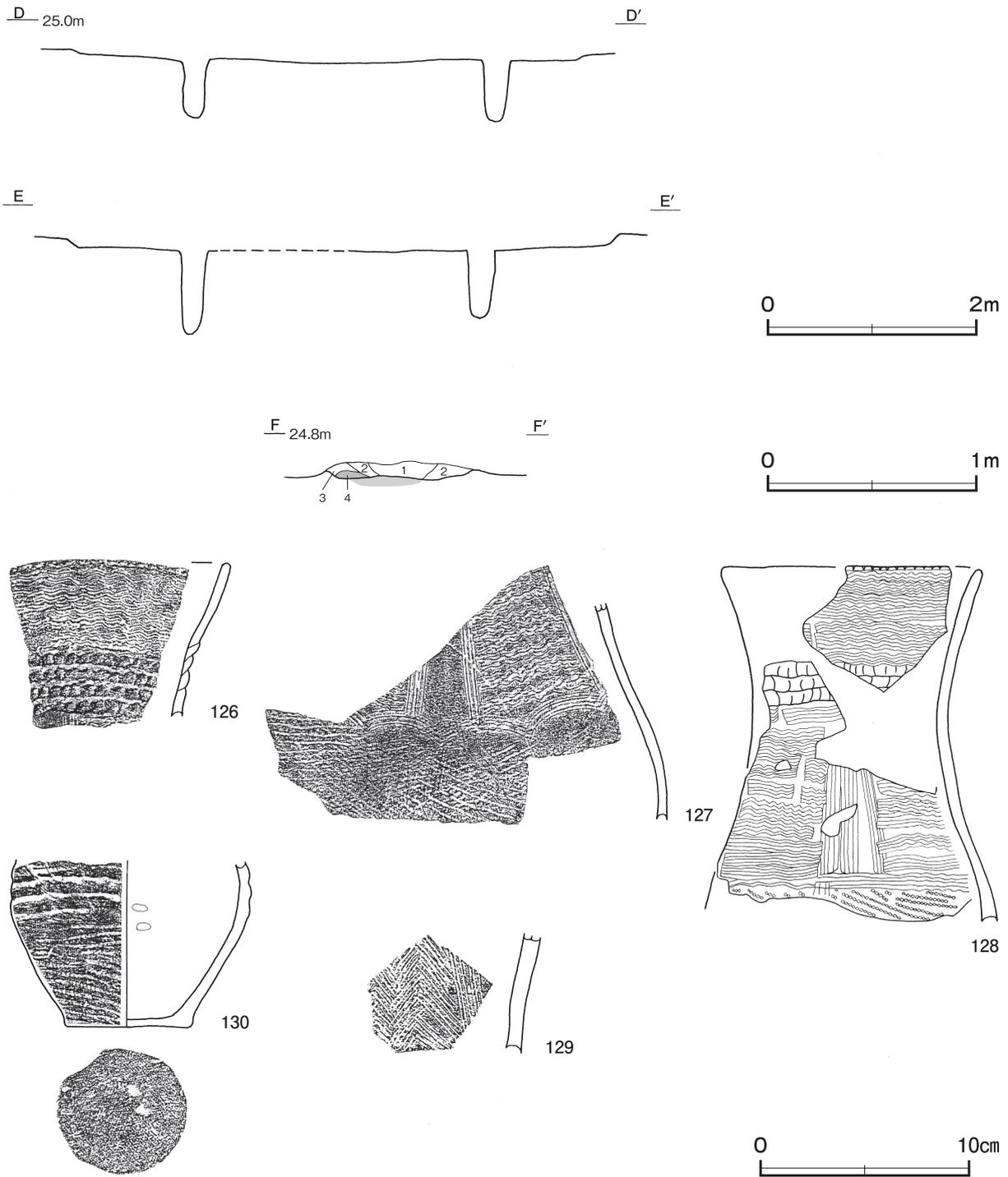
調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の D 3 i7 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.56 m, 短軸 5.46 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 37° - W である。壁は高さ 6 ~ 17 cm で, 緩やかに傾斜している。



第 46 図 第 24 号 竪穴建物跡実測図



第47図 第24号竪穴建物跡・出土遺物実測図

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径77cm、短径57cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けてわずかに赤変硬化している。第4層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで、炉床面南東部を囲むように確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 3 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 4 灰黄褐色 粘土ブロック多量 |

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ58～79cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームが多く含まれる第2～5層が埋め戻された後、第1層が自然堆積している。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 黒色 炭化粒子中量, ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 弥生土器片309点(広口壺), 石器1点(磨石)のほか, 縄文土器片6点(深鉢)が上層の黒色土を中心に出土している。130は, 床面からの出土で廃絶時に遺棄されたものと考えられる。128・129は埋め戻しの際に投棄され, 126・127は窪地の状態の際に投棄または流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第24号竪穴建物跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体押圧 5本歯状工具	覆土上層	
127	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	5本歯状工具 附加条二種(附加1条)縄文による羽状構成	覆土上層	
128	弥生土器	広口壺	(12.4)	(17.3)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 5本歯状工具 附加条軸縄不明縄文	覆土下層	15%
129	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	3本歯状工具	覆土下層	
130	弥生土器	広口壺	-	(8.1)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種(附加1条)縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	30%二次焼成 内面圧痕

第25号竪穴建物跡(第48・49図 PL 8)

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のE 3a0区, 標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第30号竪穴建物跡を掘り込み, 第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側が第17号溝に掘り込まれているため, 南北軸は6.92mで, 東西軸は5.93mしか確認できなかった。隅丸方形と推測でき, 長軸方向はN-24°-Eである。壁は高さ25～39cmで, 外傾あるいは緩やかに傾斜している。

床 平坦で, 炉の南側がわずかに硬化している。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径121cm, 短径77cmの楕円形で, 深さ6cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | |

覆土 7層に分層できる。炉の周辺に黒褐色土を主体とする第7層が堆積した後, ロームが多く含まれる第5・6層が埋め戻され, 第1～4層が自然堆積している。

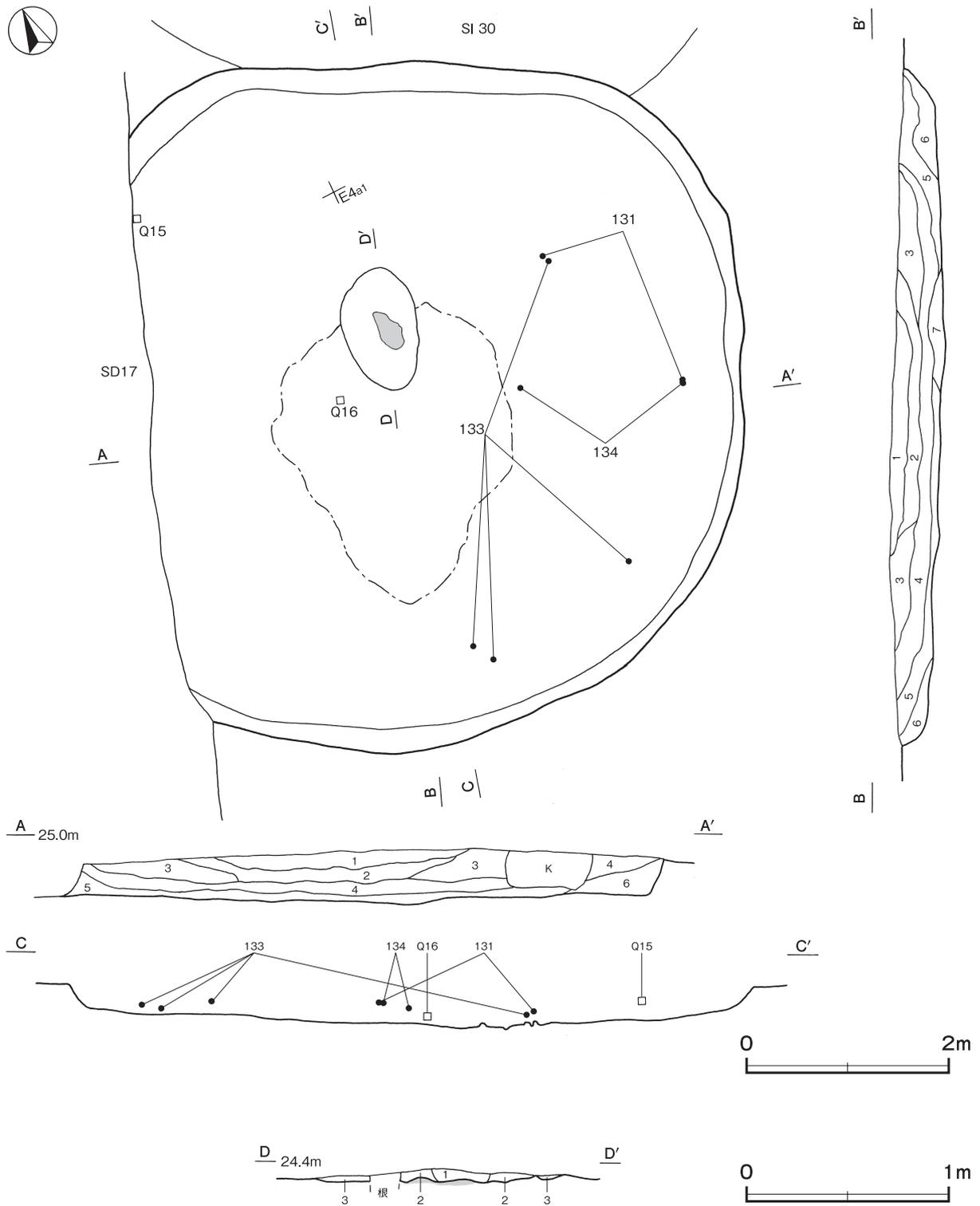
土層解説

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック多量, 赤色パミス微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 4 黒色 ロームブロック少量 | |

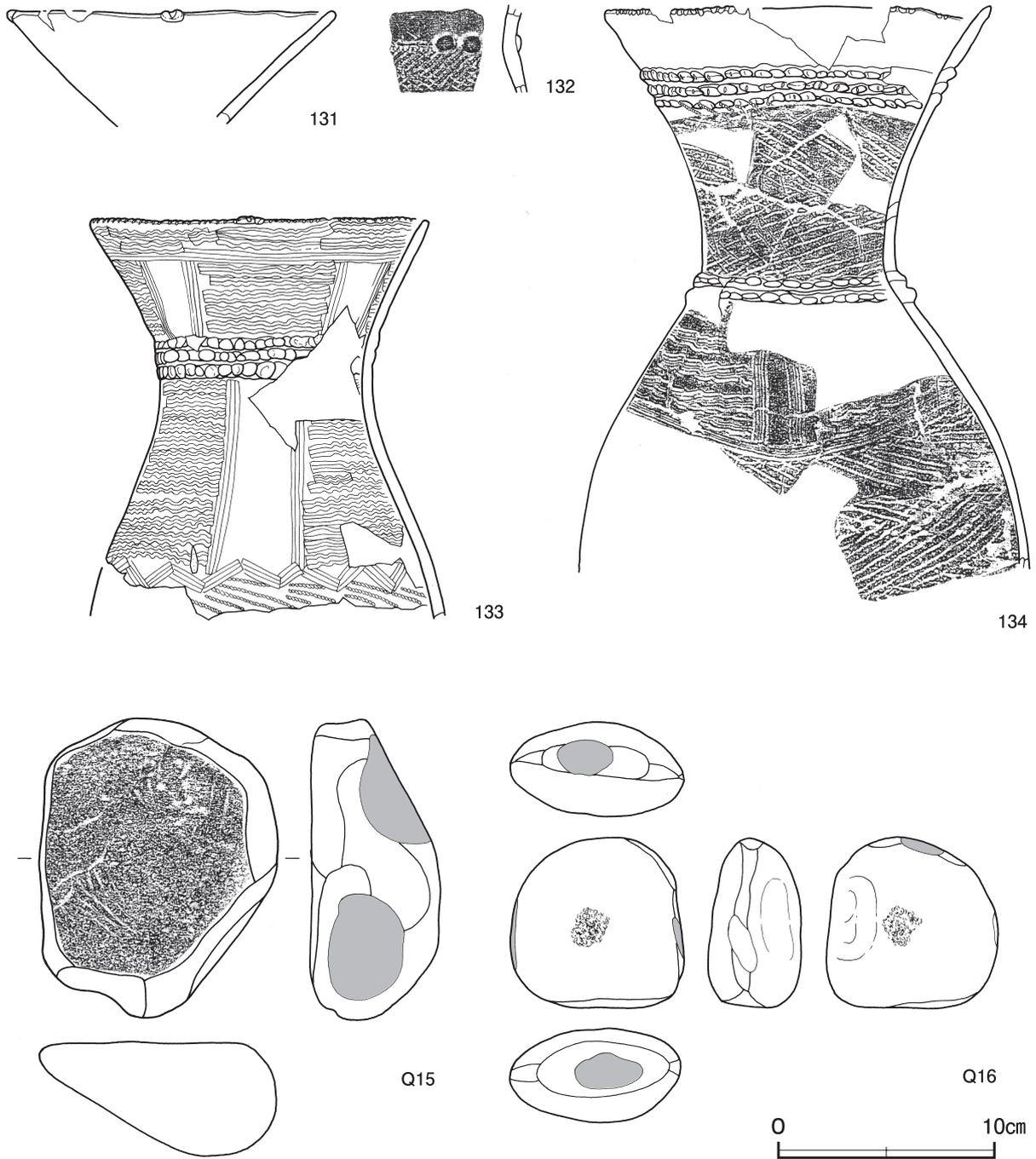
遺物出土状況 弥生土器片492点(高坏1, 広口壺491), 土師器片5点(埴1, 甕4), 石器7点(磨石6, 磨石1), 被熱礫1点が出土している。土器片は全域に散在した状態で出土している。131は, 高坏の坏部片

がまとまった状態で出土したもので、Q 15・Q 16 と同様に埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。133・134 は覆土全域から出土した破片が接合したもので、埋め戻し後に投棄されたと考えられる。

所見 柱穴を確認していないが、遺物の出土と炉を確認したことから竪穴建物跡と判断した。時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第 48 図 第 25 号竪穴建物跡実測図



第 49 図 第 25 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 25 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 49 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
131	弥生土器	高坏	15.0	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部突起4単位。外面縦位のナデ 内面横・斜位のナデ	覆土下層	50%
132	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	附加条一種(附加2条)縄文による羽状構成 ボタン状突起2か所貼付	覆土中	
133	弥生土器	広口壺	15.5	(18.8)	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	口唇部へラ状工具による刻み 突起4単位。4本歯状工具 スリットにより4区画 附加条軸縄不明縄文	覆土下層	40%
134	弥生土器	広口壺	[18.0]	(26.5)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条軸縄不明縄文による羽状構成 太い5本歯状工具	覆土中層・覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	磨石	14.0	6.1	4.9	1,078.1	砂岩	磨面3か所 細い溝状痕 砥石転用。	覆土中層	PL23
Q 16	磨・敲石	8.0	8.1	4.4	337.6	安山岩	磨面4か所 敲痕2か所	覆土中層	

第 27 号 竪穴建物跡 (第 50・51 図 PL 8)

調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の E 4 a5 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.68 m, 短軸 5.33 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 26° - W である。壁は高さ 18 ~ 52 cm で, 緩やかに傾斜している。

床 平坦で, 炉とピットの周辺が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 130 cm, 短径 92 cm の楕円形で, 深さ 7 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・灰粒子少量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 3 は深さ 73 ~ 84 cm で, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P 4 は深さ 33 cm で, 配置や形状から補助柱穴と考えられる。P 5 は深さ 34 cm で, 配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

覆土 7 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 7 層が堆積した後, ロームが多く含まれる第 2 ~ 6 層が埋め戻され, 第 1 層が自然堆積している。

土層解説

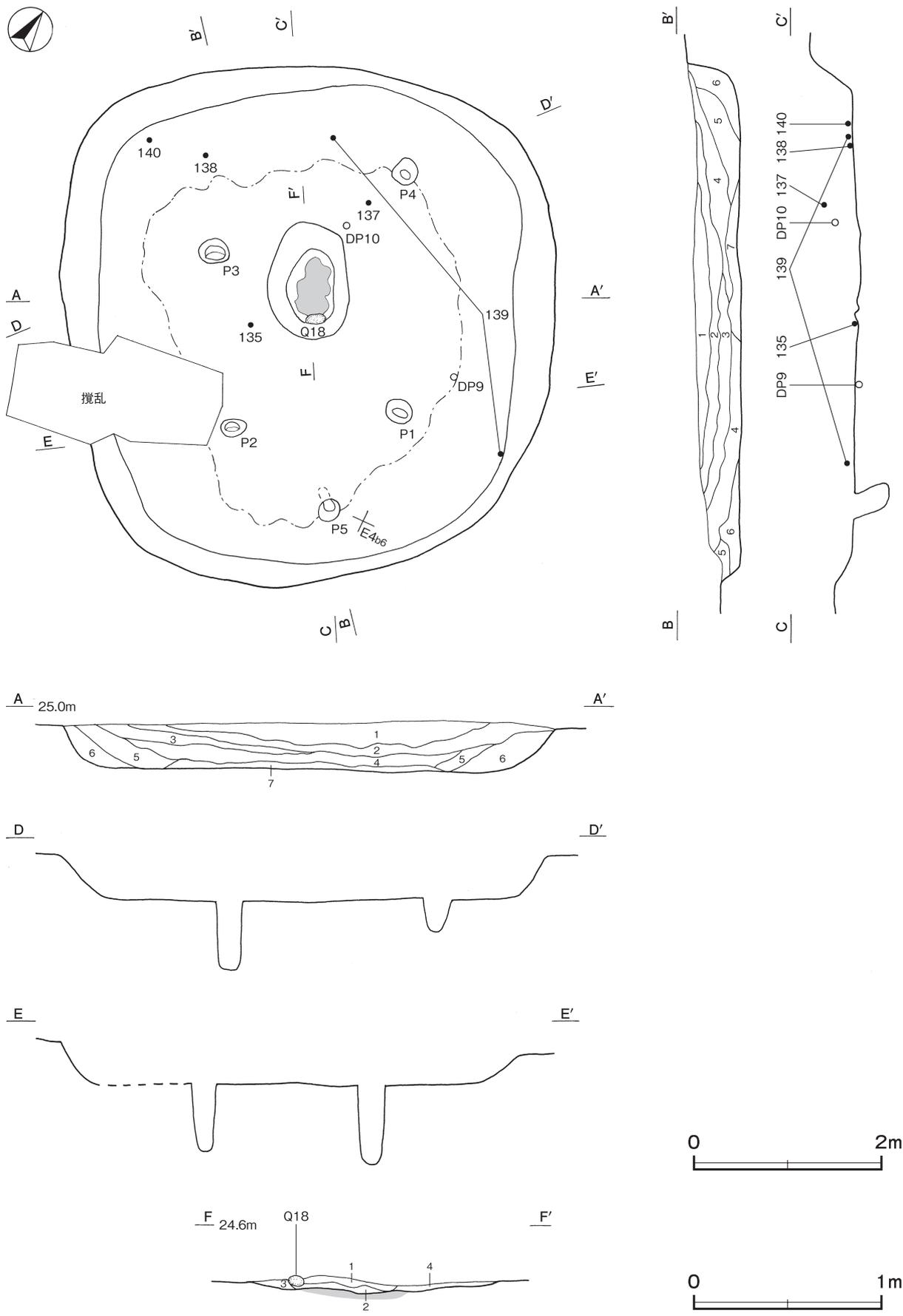
- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 黒色 ローム粒子・赤色パミス微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量 |
| 3 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 弥生土器片 533 点 (高坏 12, 広口壺 521), 土師器片 3 点 (甕), 石器 13 点 (磨石 7, 敲石 1, 敲・砥石 1, 砥石 1, 凹石 2, 炉石 1), 被熱礫 2 点のほか, 自然礫 2 点が出土している。135, DP 9 は, 床面から出土しており, 廃絶時に遺棄されたと考えられる。136・138 ~ 140 は, 覆土下層から出土しており埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。137, DP 10 は, 埋め戻し後の窪地に投棄または流れ込んだものと考えられる。

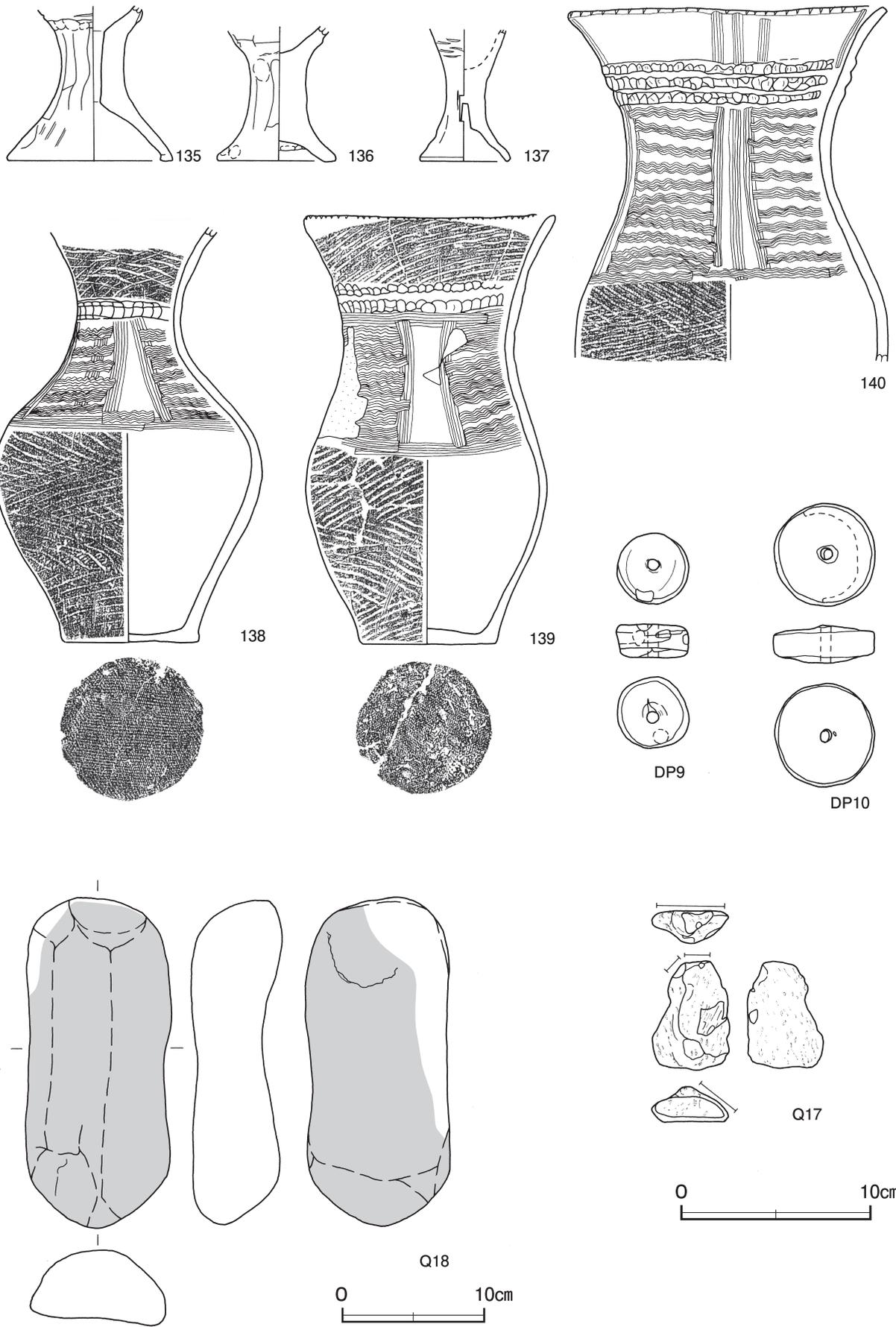
所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第 27 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 51 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
135	弥生土器	高坏	-	(8.3)	8.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	縦位のヘラナデ 裾部擦痕 指頭による調整	床面	30%
136	弥生土器	高坏	-	(7.2)	6.2	長石・石英・砂多量	黒褐	不良	縦位のヘラナデ 指頭による調整	覆土中 (下層)	30%
137	弥生土器	高坏	-	(7.1)	4.6	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	縦位のヘラナデ 横位の擦痕	覆土上層	25%
138	弥生土器	広口壺	-	(22.2)	7.1	長石・石英・雲母	橙	普通	6本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条二種 (附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	80% 外面煤
139	弥生土器	広口壺	13.0	23.0	7.2	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 6本櫛歯状工具 スリットにより3区画 口縁部附加条二種 (附加1条) 縄文, 胴部同原体による羽状構成 底面布目痕	覆土下層	90% 内面煮沸痕 二次焼成
140	弥生土器	広口壺	16.9	(19.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 6本櫛歯状工具 スリットにより5区画 附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土下層	45% 外面煤
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
DP 9	紡錘車	3.9	1.8	0.6	31.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	側面ヘラ成形 全面ナデ調整 一方向からの穿孔		床面	PL21
DP10	紡錘車	5.5	1.9	0.5	63.8	長石・石英・雲母・細礫	黒褐	上・側面ナデ調整 一方向からの穿孔		覆土上層	PL21
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q 17	砥石	5.8	4.1	1.8	6.1	軽石	砥面4か所		覆土中 (上層)	PL23	
Q 18	炉石	23.6	10.5	6.3	2,228.4	安山岩	火熱を受け赤変		炉火床面		



第 50 图 第 27 号竖穴建物迹实测图



第51图 第27号竖穴建物跡出土遺物実測図

第 28 号竪穴建物跡(第 52～55 図 PL 9)

調査年度 2016 年度

位置 調査区南部の E 4 c3 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 6.40 m, 短軸 5.72 m の隅丸長方形で, 主軸方向は N - 12° - E である。壁は高さ 8 ~ 28 cm で, 外傾している。

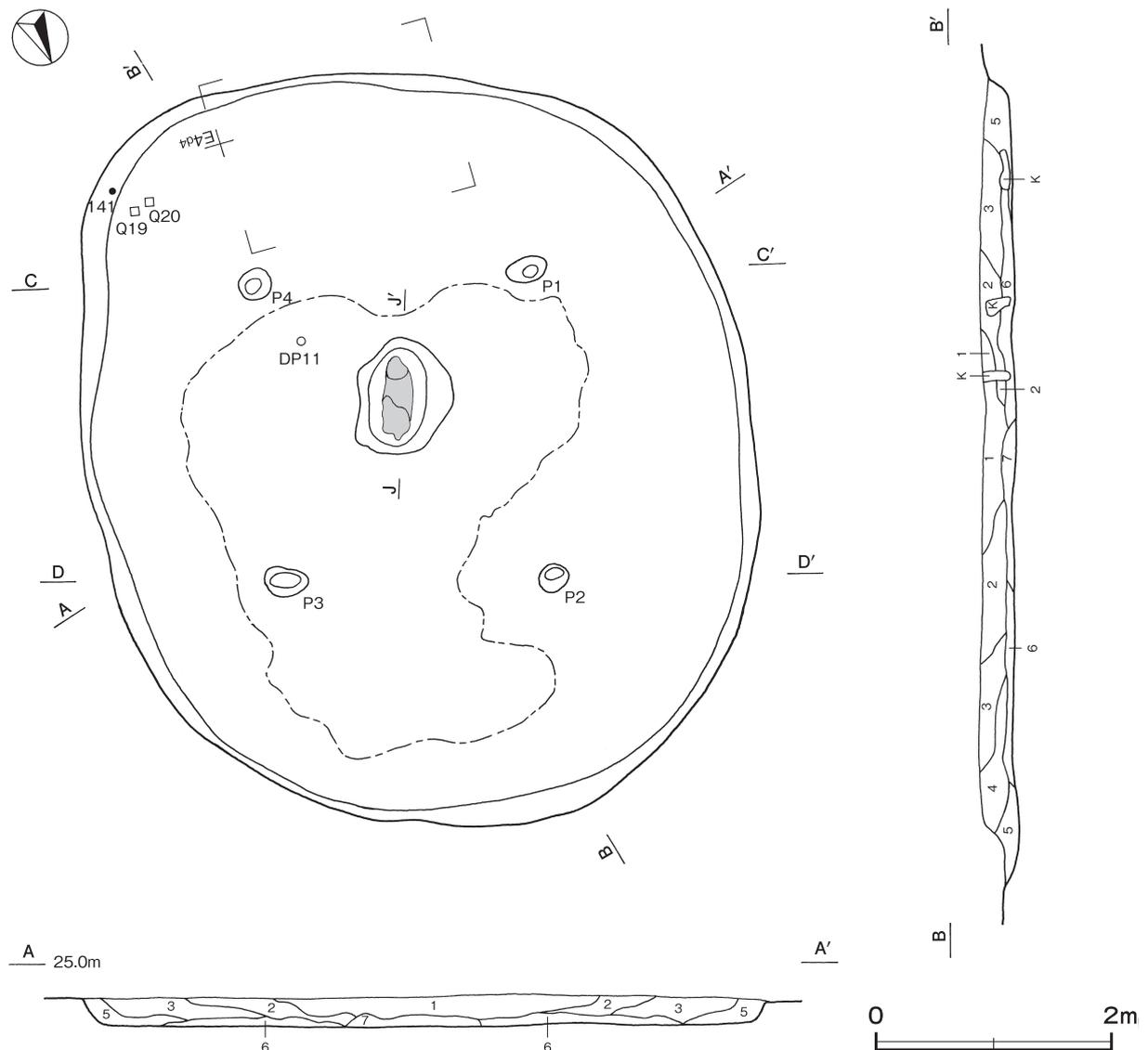
床 平坦で, 炉とピットの周辺が踏み固められている。

炉 中央部の南寄りに付設されている。長径 102 cm, 短径 80 cm の楕円形で, 深さ 9 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

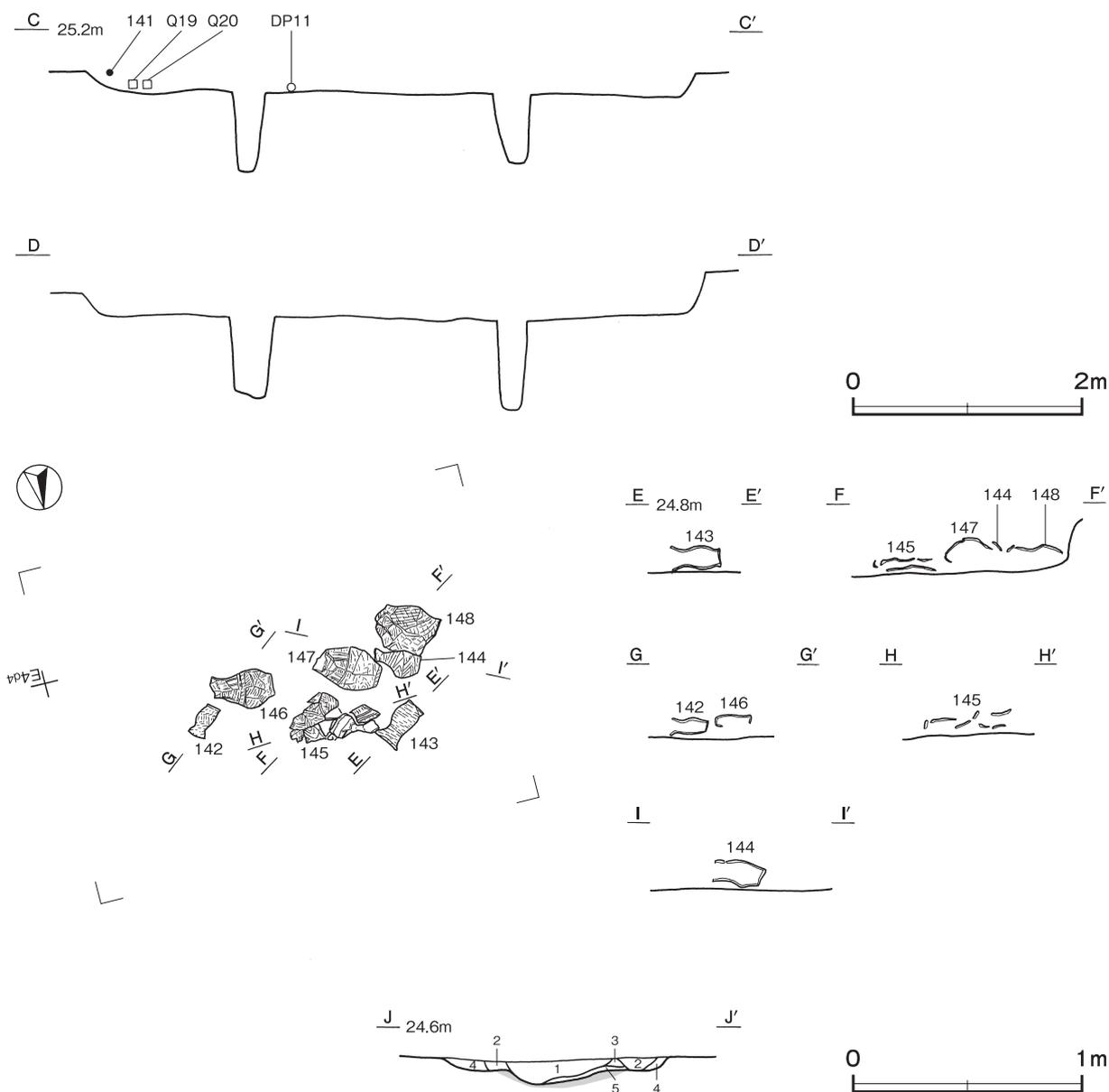
炉土層解説

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・灰粒子少量 | 5 暗褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黄褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量 | |

ピット 4 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 60 ~ 76 cm で, 規模と配置から支柱穴と考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。



第 52 図 第 28 号竪穴建物跡実測図(1)



第53図 第28号竪穴建物跡実測図(2)

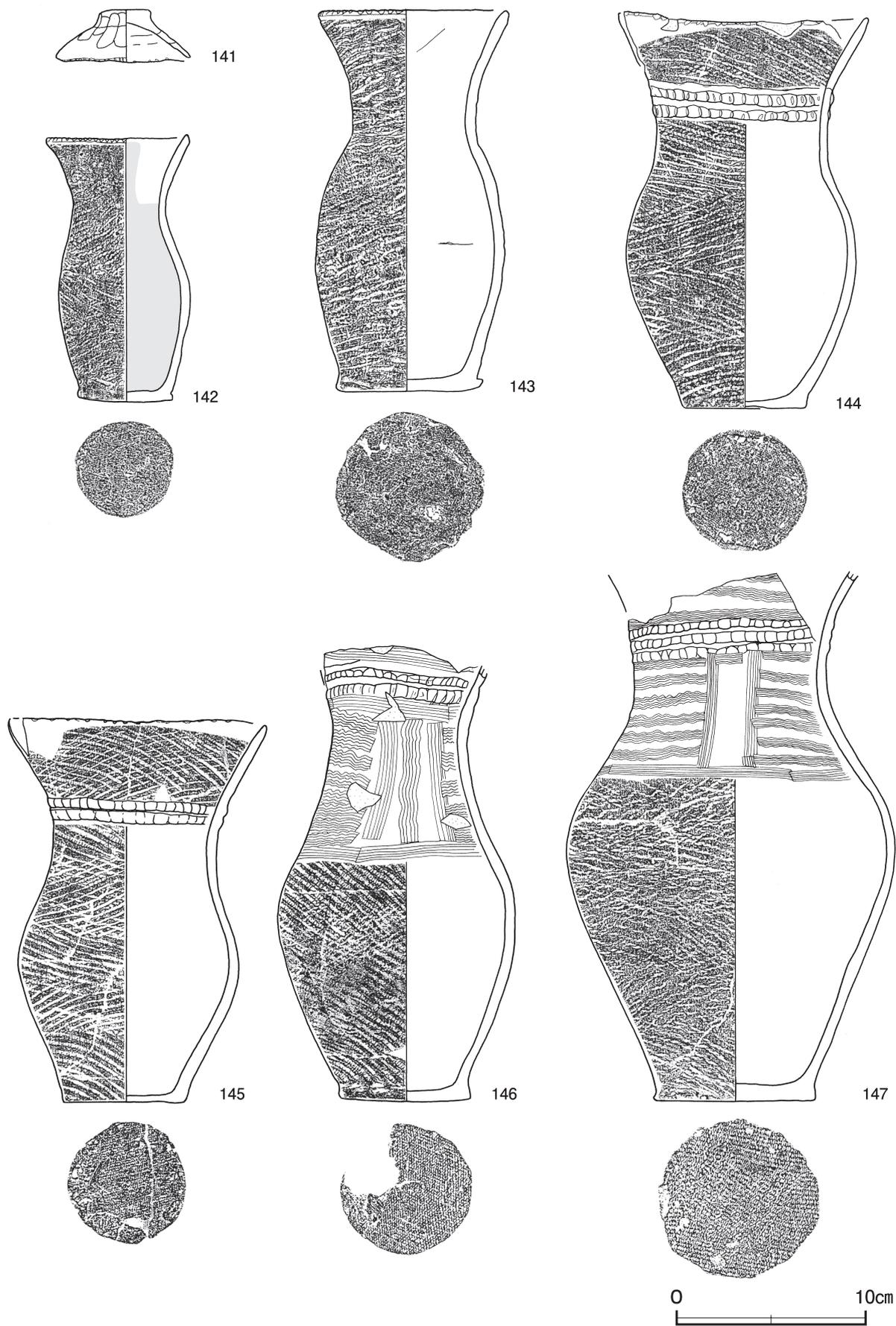
覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

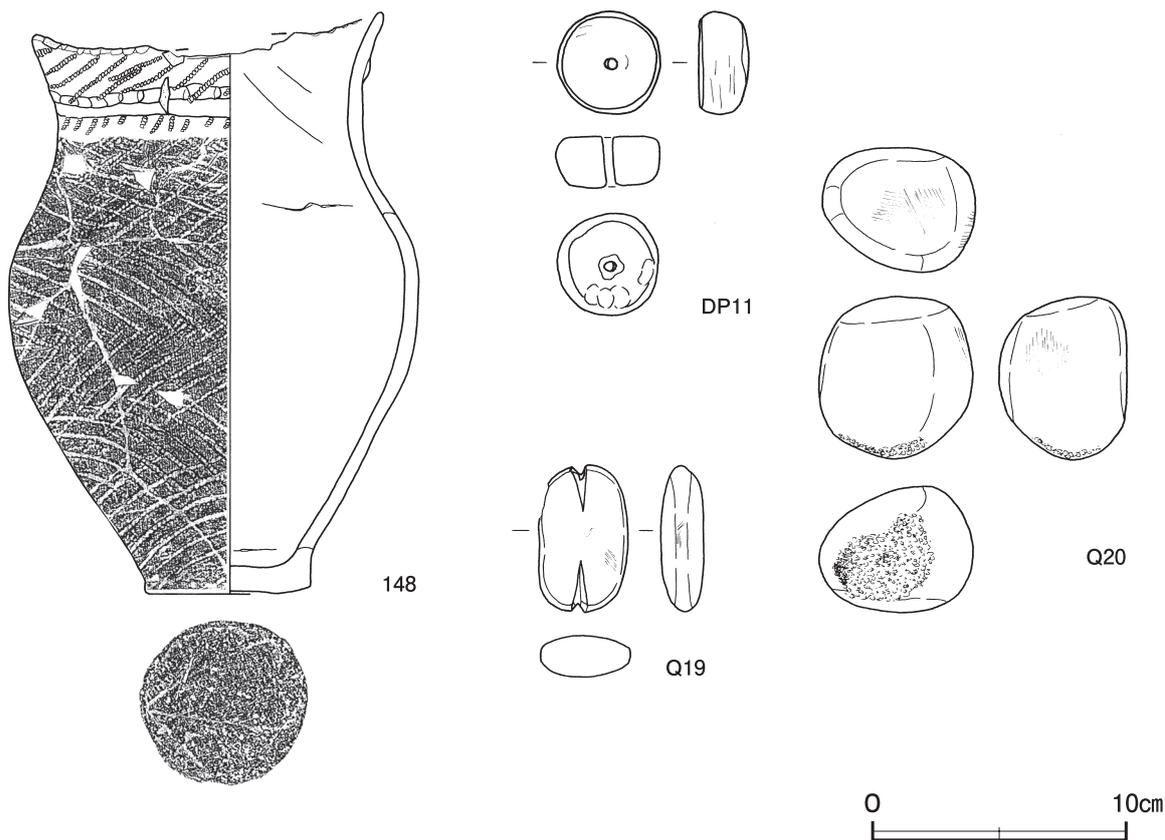
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片 472 点（蓋 1，高坏 3，広口壺 467，甕 1），土製品 1 点（紡錘車），石器 7 点（磨石 4，敲・磨石 1，敲石 1，石錘 1），剥片 1 点のほか、縄文土器片 5 点（深鉢）が出土している。142～148 は、南壁際の床面から完形またはそれに近い形態で集中して出土しており、遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。141, DP 11, Q 19・Q 20 は、覆土下層から出土しており、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。出入り口に伴う施設は確認できなかったが、炉の配置や床の状況から、出入り口は北に存在していたと考えられる。



第 54 图 第 28 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第55図 第28号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第28号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第54・55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
141	弥生土器	蓋	7.1	2.8	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 縦位のヘラナデ 内面輪積み痕	覆土下層	90% PL21
142	弥生土器	広口壺	7.4	14.3	5.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 内面赤色顔料付着	床面	100% PL17
143	弥生土器	広口壺	9.9	20.5	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 附加条二種(附加1条) 縄文を一方方向 底面ナデ調整	床面	100% PL17
144	弥生土器	広口壺	[13.2]	21.3	6.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	70% PL17 底面圧痕
145	弥生土器	広口壺	13.5	20.6	6.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	70% PL17 底面圧痕
146	弥生土器	広口壺	-	(24.5)	7.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	太い6本櫛歯状工具 スリットにより3区画 附加条一種(附加2条) 縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	80% PL17
147	弥生土器	広口壺	-	(28.4)	8.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	6本櫛歯状工具 スリットにより4区画 附加条軸不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	90% PL17 外面煤 内面煮沸痕
148	弥生土器	甕	13.5	23.3	6.5	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 口縁部附加条軸縄不明縄文、胴部同原体による羽状構成 底面ナデ調整	床面	90% PL17 内面煮沸痕 二次焼成

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP11	紡錘車	4.1	2.0	0.4	41.2	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	上面丁寧なナデ 側・下面ナデ調整 側面成形痕 下面指頭痕 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	石錘	5.8	3.5	1.8	(55.2)	粘板岩	切込み2か所 側縁磨ぎ出し 一部欠損	覆土下層	PL23
Q 20	敲・磨石	6.5	6.1	5.0	282.9	安山岩	敲面1か所 磨面2か所に擦痕	覆土下層	PL23

第 29 号竪穴建物跡 (第 56 ~ 58 図 PL10)

調査年度 2016 年度

位置 調査区南部の E 4 e5 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 5.95 m, 短径 5.80 m の円形で, 主軸方向は N - 38° - W である。壁は高さ 22 ~ 40 cm で, 外傾している。

床 平坦で, 壁際を除き踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 88 cm, 短径 70 cm の楕円形で, 深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり, 炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2 か所。P 1 は深さ 55 cm で, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P 2 は深さ 51 cm で, 配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から, 柱はすべて抜き取られている。

覆土 7 層に分層できる。炉の北西部に黒色土を主体とする第 6・7 層が堆積し, 全域に第 5 層が堆積した後, ロームブロックやローム粒子が多く含まれる第 2 ~ 6 層が埋め戻され, 第 1 層が自然堆積している。

土層解説

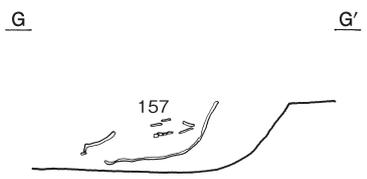
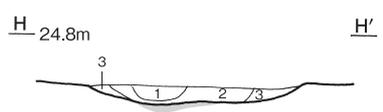
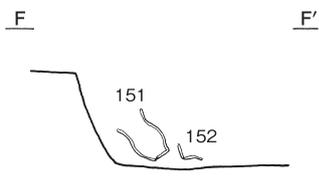
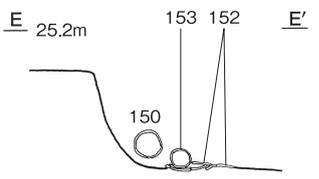
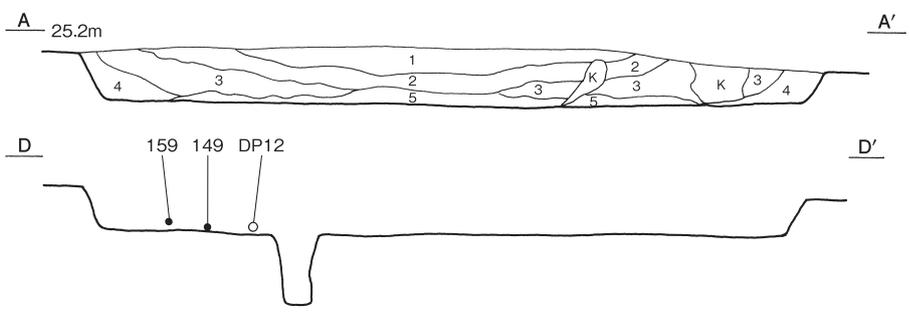
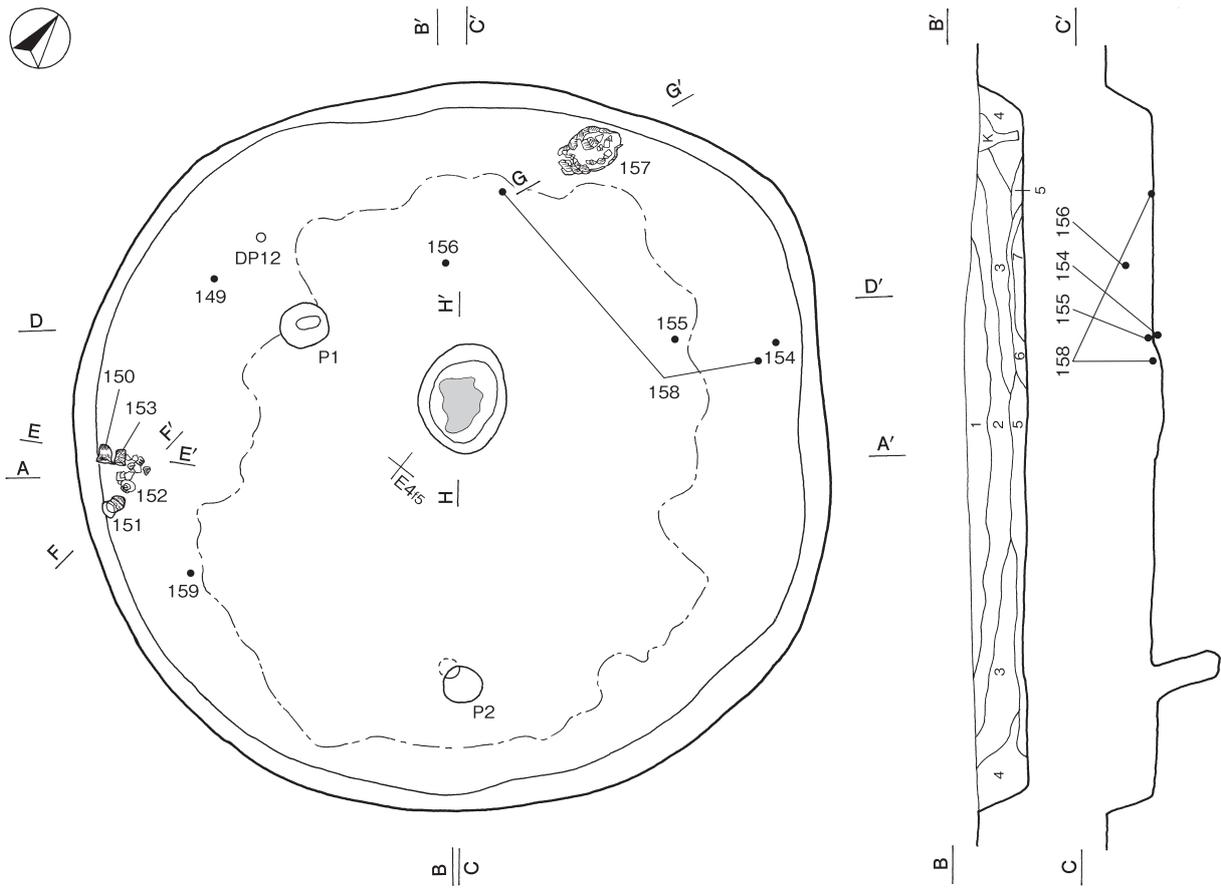
- 1 黒 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 黒 色 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 582 点 (高坏 2, 広口壺 579, 壺 1), 土製品 1 点 (紡錘車), 石器 13 点 (磨石 7, 磨・敲石 3, 凹石 1, 台石 1, 炉石_カ 1), チャート原石 3 点のほか, 自然礫 1 点が出土している。150 ~ 153 は, 南西壁際の床面から 4 個体がまとまって出土したもので, 遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。そのうち 150・151・153 は, 完形またはそれに近い状態で出土しており, 152 は, 穿孔土器で出土状況から, 4 点の土器を遺棄する際に意図的に破碎した可能性がある。149 は西側, 154・155 は北東側の床面からそれぞれ完形に近い状態で出土しており, 遺棄されたものと考えられる。158 は大形の広口壺で, 床面から器形が判別できる状態で出土しており, 埋め戻しの直前に投棄または置かれたことが考えられる。157 も同様に置かれた可能性がある。156・159, D P 12 は覆土中層からの出土で, 埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。

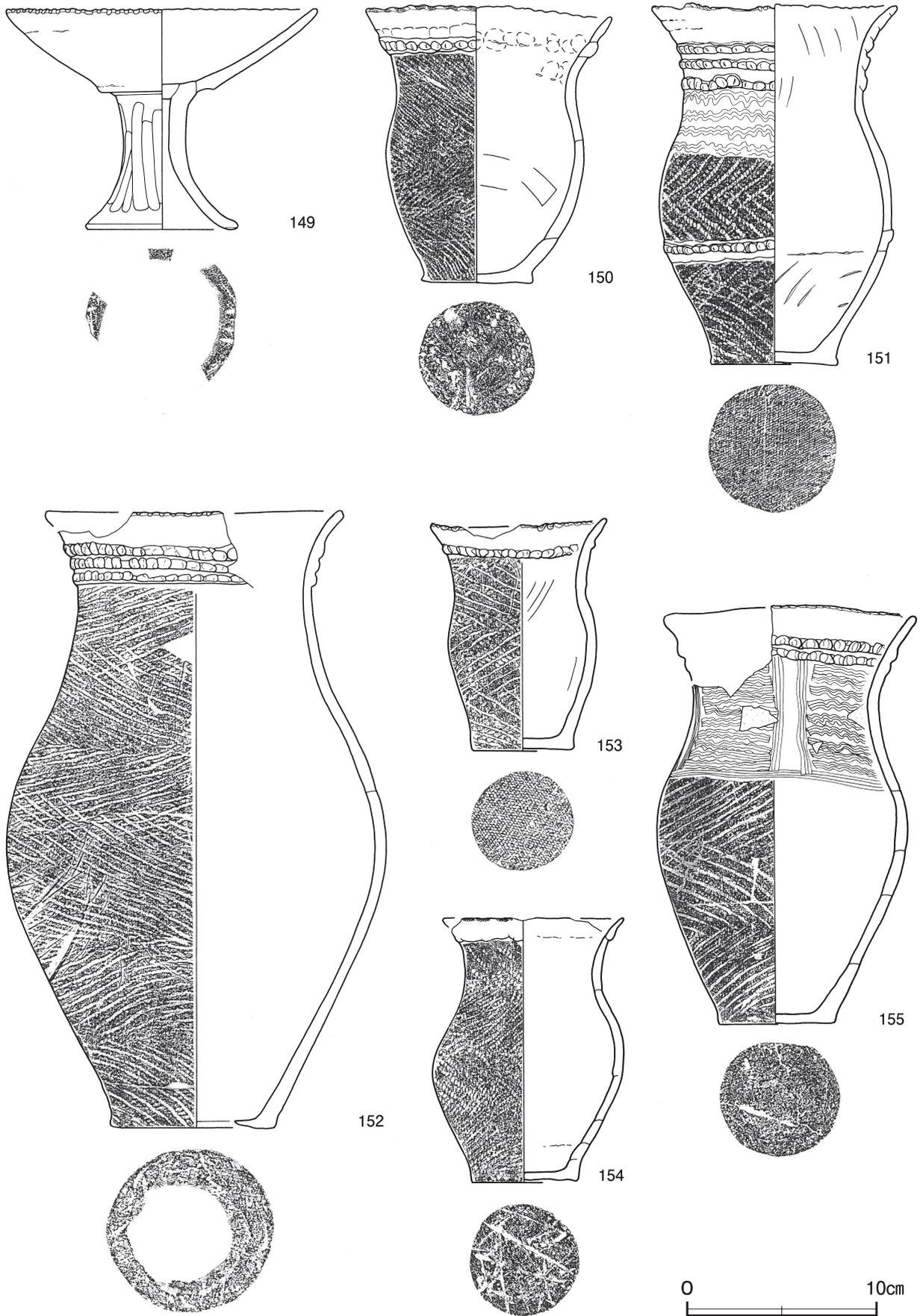
所見 時期は, 出土土器から後期後半に比定できる。

第 29 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 57・58 図)

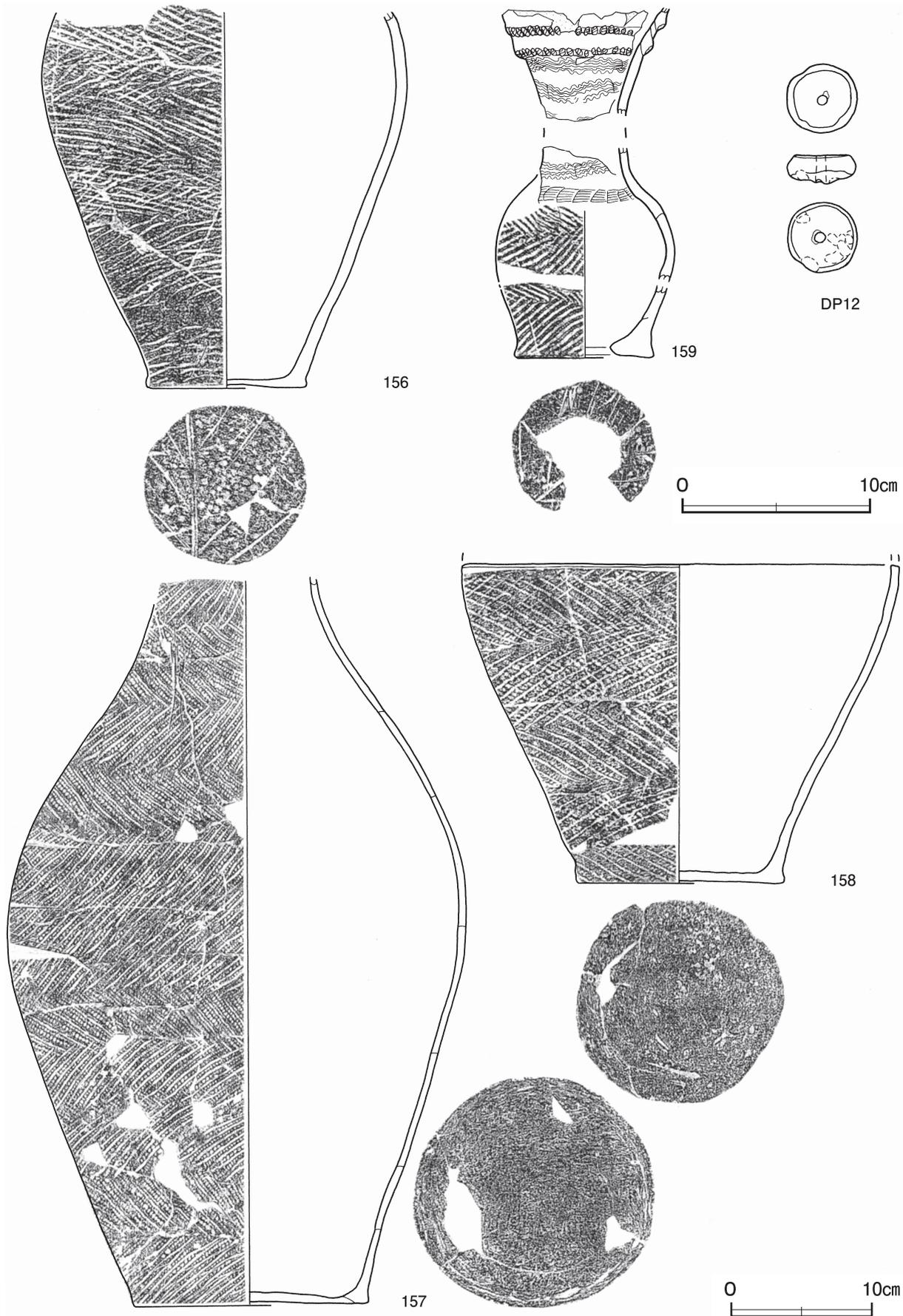
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
149	弥生土器	高坏	16.2	11.8	8.0	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部縄文原体回転押圧 脚部縦位のヘラナデ	床面	80% PL20
150	弥生土器	広口壺	13.0	14.9	6.0	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み (一部回転) 附加条一種 (附加 2 条) 縄文と附加条軸繩不明縄文による羽状構成 内面指頭痕と斜位のヘラナデ底面多方向のヘラナデ	床面	90% PL18 外面煤 内面煮沸痕 二次焼成
151	弥生土器	広口壺	12.8	19.4	6.8	長石・石英・雲母・針状鉱物・黒色粒子	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 太い 3 本櫛歯状工具 附加条二種 (附加 1 条) 縄文による羽状構成 内面縦・斜位のヘラナデ 内面輪積み痕 底面布目痕	床面	100% PL18 二次焼成
152	弥生土器	広口壺	15.6	33.1	8.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部棒状工具による刻み 附加条二種 (附加 1 条) 縄文による羽状構成 底面多方向のヘラナデ	床面	60% PL18 外面煤 内面煮沸痕 底部穿孔
153	弥生土器	広口壺	9.2	12.4	5.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 附加条二種 (附加 1 条) 縄文による羽状構成 内面斜位のヘラナデ底面布目痕	床面	90% PL18 二次焼成
154	弥生土器	広口壺	(9.5)	14.2	5.7	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体回転押圧 _カ 附加条一種 (附加 2 条) 縄文と附加条軸繩不明縄文による羽状構成 底面木葉痕	床面	90% PL20 二次焼成
155	弥生土器	広口壺	(13.3)	22.6	6.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文原体回転押圧 4 本櫛歯状工具 スリットにより 5 区画 附加条一種 (附加 1 条) 縄文による羽状構成 底面砂目痕周縁ナデ調整	床面	70% 二次焼成



第 56 图 第 29 号竖穴建物跡実测图



第 57 图 第 29 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 58 图 第 29 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
156	弥生土器	広口壺	-	(20.4)	8.5	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種（附加1条）縄文と附加条軸縄不明縄文による羽状構成 底面木葉痕中央布目痕	覆土中層	30% 底面圧痕 外面煤 内面煮沸痕
157	弥生土器	広口壺	-	(52.5)	16.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成 底面ナデ調整	床面	70% PL18 二次焼成
158	弥生土器	広口壺	-	(23.0)	14.7	長石・石英・金雲母・赤色粒子・細礫	にぶい橙	普通	附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 底面砂目痕	床面	40% 底面圧痕 再利用 風化
159	弥生土器	壺	-	[17.6]	7.5	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	2段の複合口縁下端に縄文原体で刺突 6本櫛歯状工具 附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成 底面木葉痕	覆土中層	60% 底部穿孔

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP12	紡錘車	3.8	1.5	0.5	23.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	全面ナデ調整 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土中層	PL21

第30号竪穴建物跡（第59・60図 PL11）

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のD4jl区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25号竪穴建物、第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.06m、短軸6.33mの隅丸長方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁は高さ34～50cmで、緩やかに傾斜している。

床 平坦で、壁際を除き踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。堆積や炉床の状況から、第6～8層を埋め戻し、南側に付設し直している。最終段階の形状は、長径90cm、短径80cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉石が炉床面から浮いた状態で出土しており、据え直されたと考えられる。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|----------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・灰微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 7 にぶい黄褐色 | 灰中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子・灰少量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ54～68cmで、配置と柱あたりが確認できたことから主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置や形状から出入口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

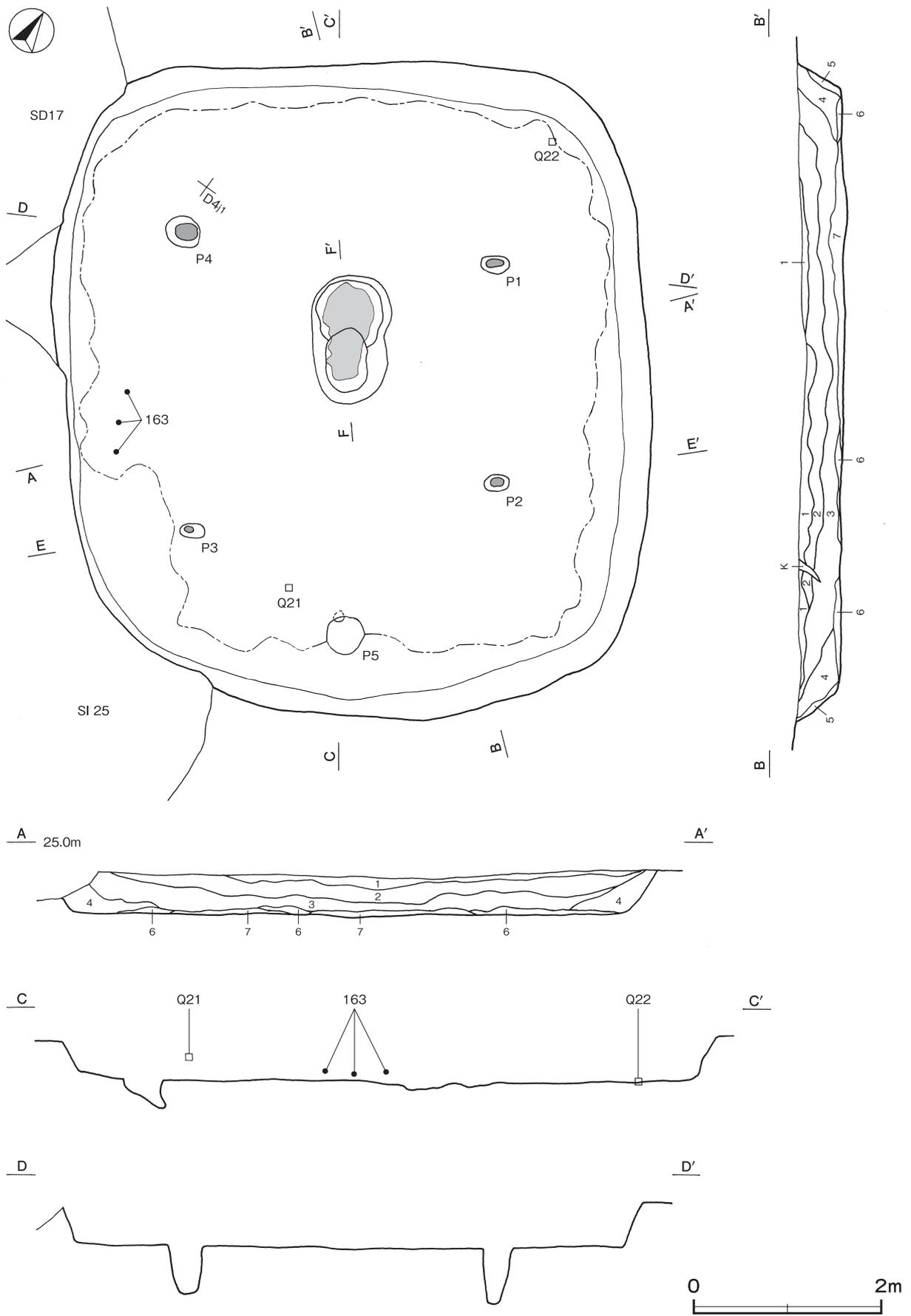
覆土 7層に分層できる。黒色土を主体とする第6・7層が堆積した後、ロームブロックが含まれる第1～5層が埋め戻されている。

土層解説

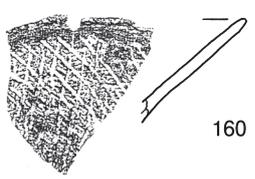
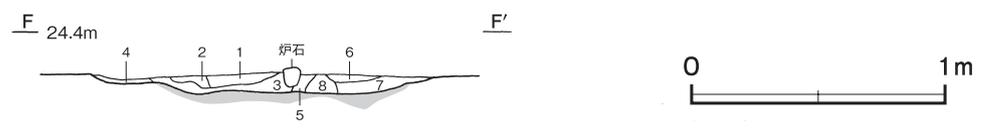
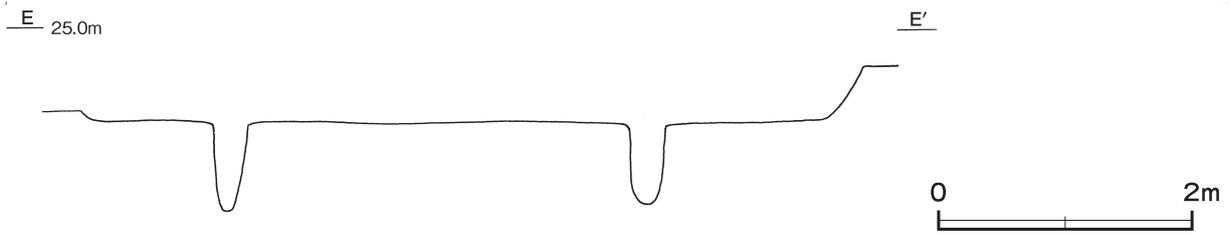
- | | | | |
|----------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 7 黒色 | 炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片1,016点（高坏5, 広口壺1,011）、土師器片6点（甕）、石器29点（磨石12, 磨・敲石6, 敲石1, 砥・敲・磨石1, 砥石6, 台石2, 炉石1）、被熱礫1点のほか、縄文土器片8点（深鉢）が出土している。163は、覆土中層から散在した状態で出土した破片が接合したもので、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。Q21・Q22も出土層位から、同様と考えられる。そのほかの土器片も全域に散在した状態で出土している。

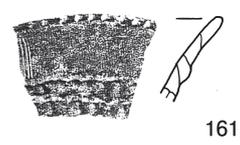
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第 59 图 第 30 号竖穴建物跡実测图



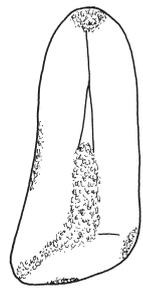
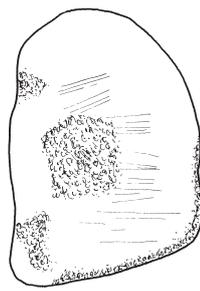
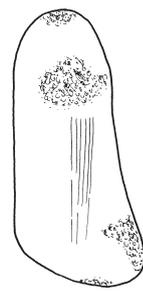
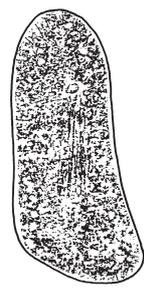
160



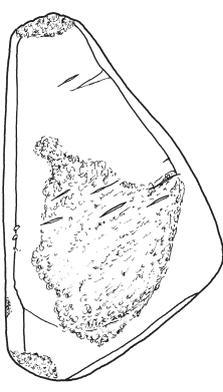
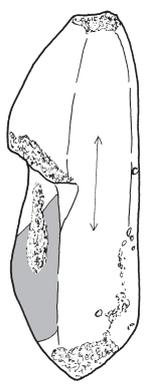
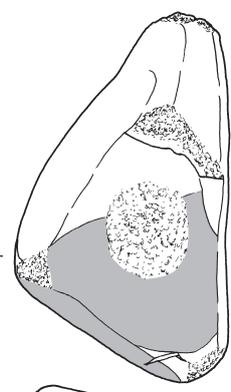
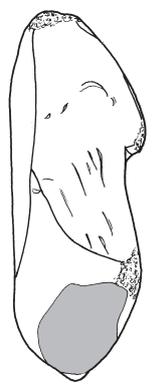
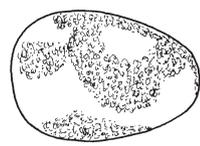
161



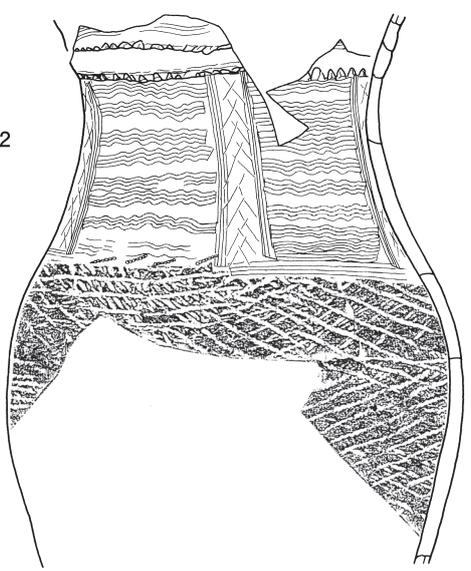
162



Q21



Q22



163



第 60 图 第 30 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

第30号 竪穴建物跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
160	弥生土器	高坏	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成	覆土中	
161	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 3本以上の櫛歯状工具	覆土中（床直上）	
162	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体による刻み 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成 3本以上の櫛歯状工具 貼瘤	覆土中	PL22
163	弥生土器	広口壺	-	(22.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	二条の隆帯下端に縄文原体による刺突 4本櫛歯状工具 平行沈線による格子目文 スリットにより5区画 附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成	覆土中層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 21	敲石	10.2	7.6	5.2	608.4	安山岩	前面に敲痕 擦痕2か所	覆土上層	
Q 22	砥・敲・磨石	14.8	8.7	5.7	776.7	砂岩	砥面2か所 敲痕6か所 磨面3か所	覆土中層	PL23

第31号 竪穴建物跡（第61～63図 PL11・12）

調査年度 2016年度

位置 調査区南部のE4f7区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.78m、短軸5.05mの長方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁は高さ18～34cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺及びP1周辺を除いたピットの内側が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。覆土の堆積や炉石の出土状況から、第3・4層を埋め戻し、北側に付設し直している。最終段階の形状は、径68cmの円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面はそれぞれ火熱を受けて赤変硬化しており、その状況から最終段階の炉は短期間の使用と考えられる。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 3 暗 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ57～76cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ56cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

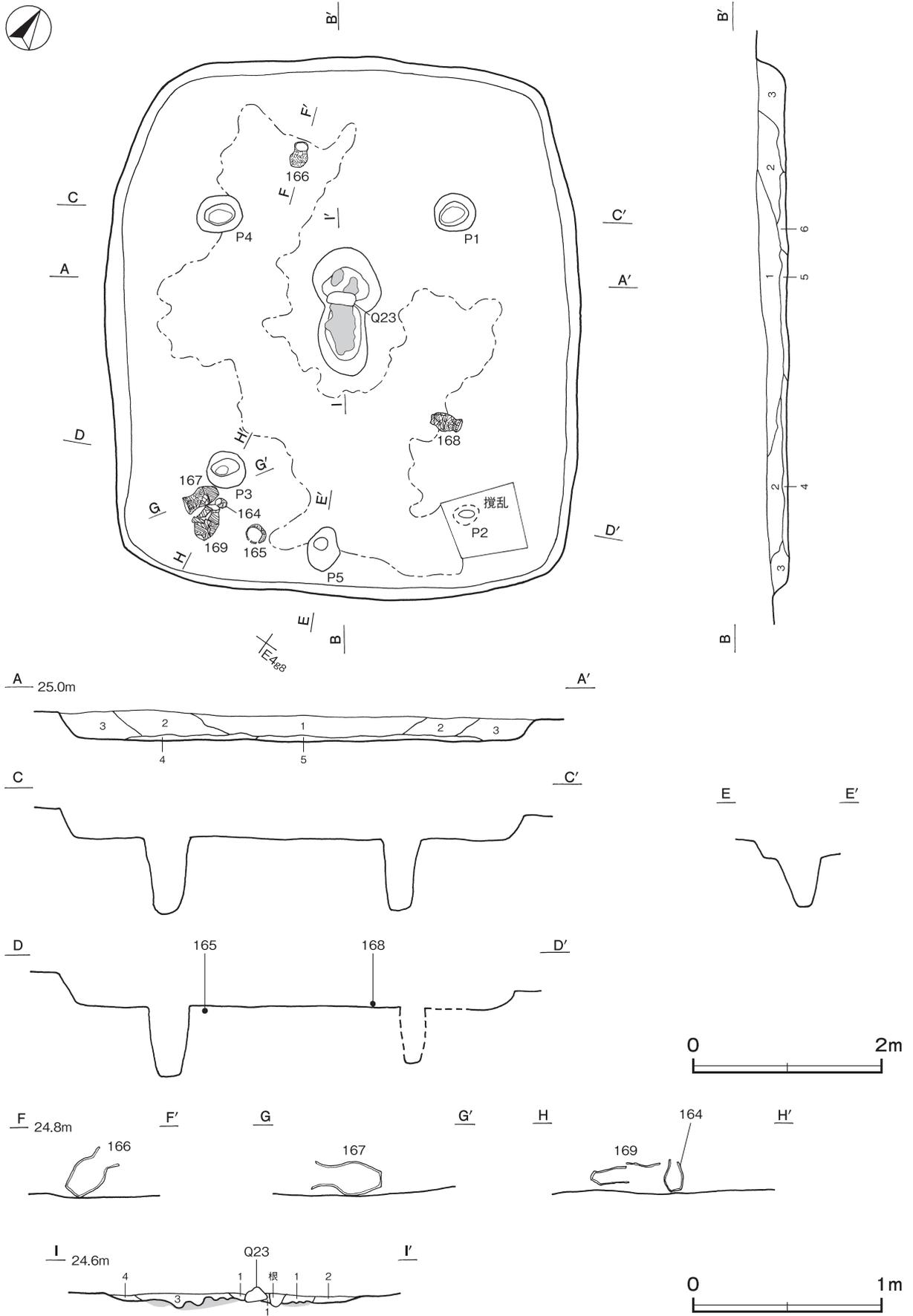
覆土 6層に分層できる。黒褐色土を主体とする第5・6層が堆積した後、ロームが多く含まれる第1～4層が埋め戻されている。

土層解説

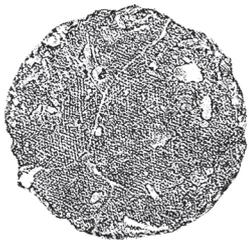
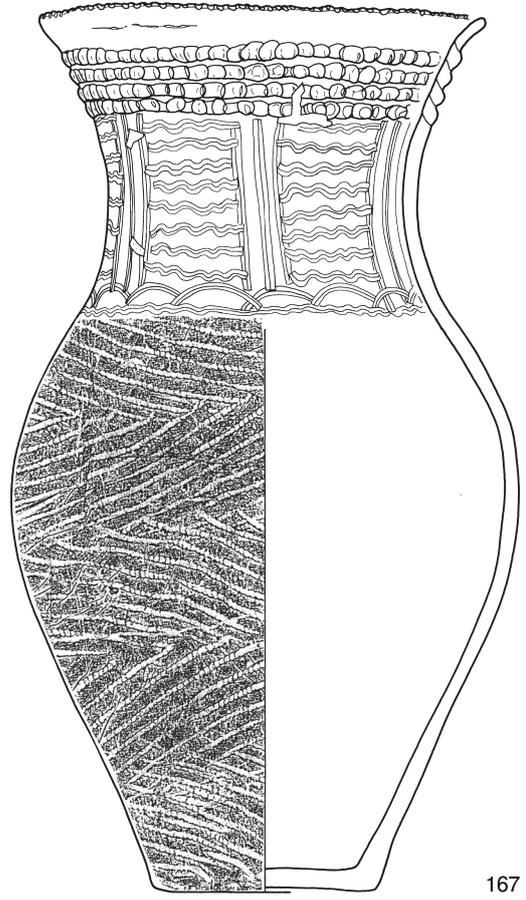
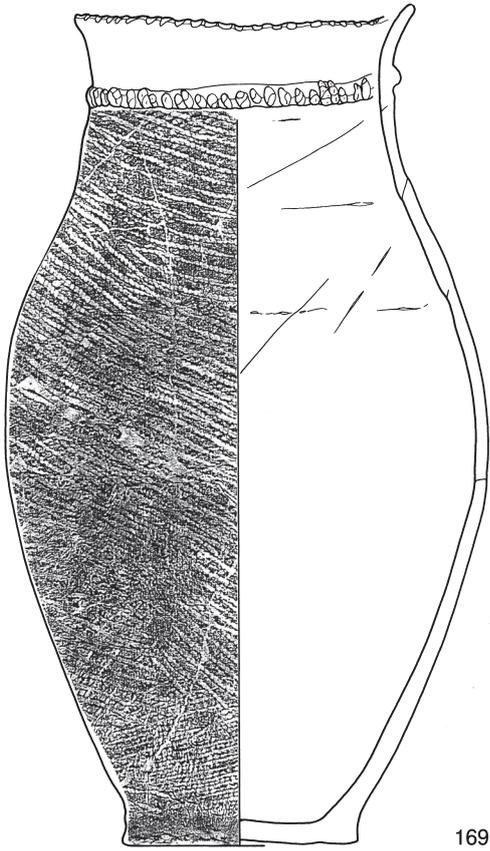
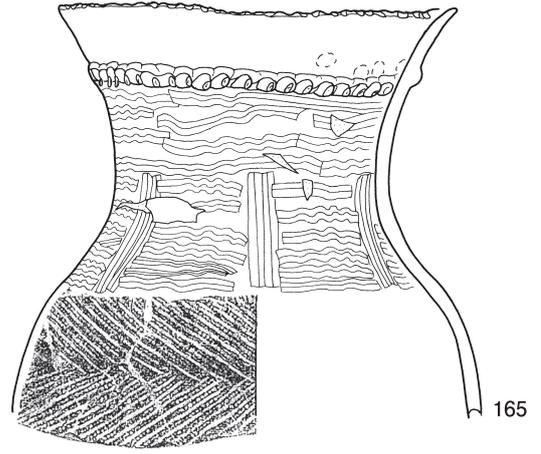
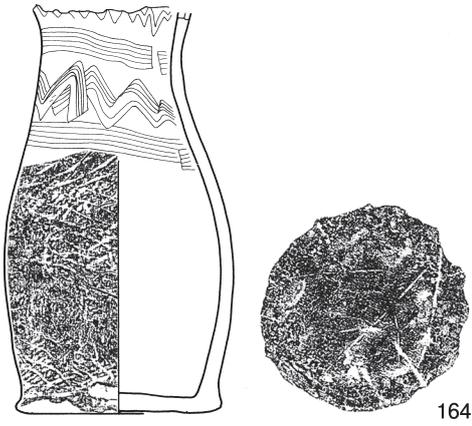
- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 4 暗 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 褐 色 ロームブロック・炭化粒子中量 | 5 暗 褐 色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子中量 | 6 黒 褐 色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |

遺物出土状況 弥生土器片58点（広口壺57、壺1）、石器10点（磨石7、石皿₉1、台石1、炉石1）が出土している。164・167・169は南コーナー付近、168は炉の南東、166は炉の北西の床面から完形で出土しており、それぞれ遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。165も床面から出土しているが、出土状況や残存状況から、埋め戻す際に投棄されたと考えられる。Q23は、炉石で被熱の状況から、付け替え以前から使用されていたものが、炉の移設に伴い設置し直されたと考えられる。

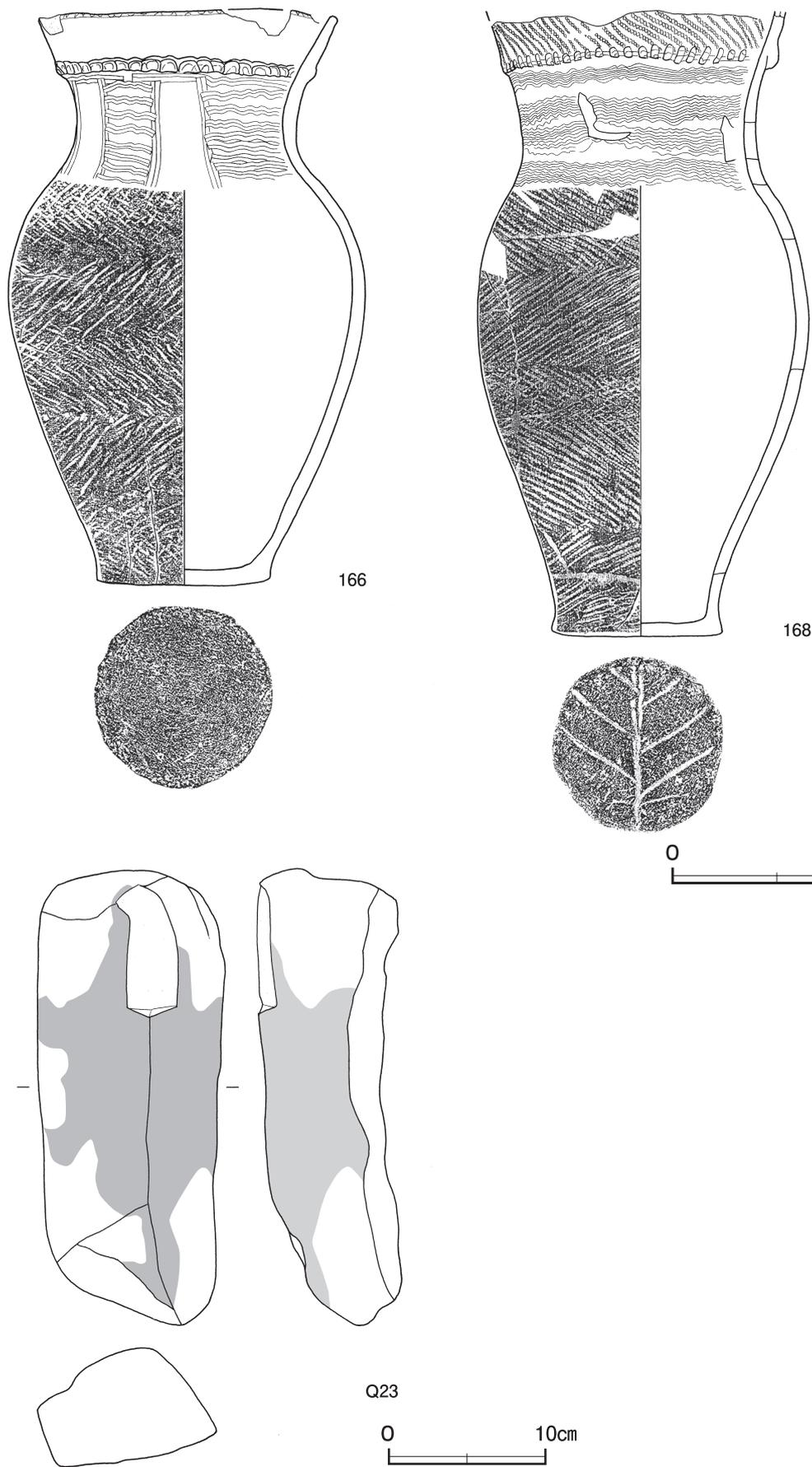
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第 61 图 第 31 号竖穴建物迹实测图



第 62 図 第 31 号 竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 63 図 第 31 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 31 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 62・63 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
164	弥生土器	広口壺	-	(16.8)	8.2	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	6本櫛歯状工具による羽状構成 附加条二種(附加1条) 縄文底面一部ヘラナデ	床面	80% PL20 風化
165	弥生土器	広口壺	15.8	(16.5)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み(一部回転) 3本櫛歯状工具 スリットにより7区画 附加条一種(附加2条) 縄文による羽状構成	床面	50% 外面煤
166	弥生土器	広口壺	14.7	27.8	8.4	長石・石英・雲母	浅黄	普通	口唇部縄文原体回転押圧 3本櫛歯状工具 スリットにより5区画 附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面ナデ調整	床面	100% PL19 内面煮沸痕
167	弥生土器	広口壺	17.6	35.5	8.9	長石・石英・細礫	明黄褐色	普通	口唇部棒状工具による刻み 3本櫛歯状工具 スリットにより6区画 附加条軸不明縄文による羽状構成 底面布目痕	床面	85% PL19 外面煤 内面煮沸痕
168	弥生土器	広口壺	-	(30.4)	8.2	長石・石英・細礫	褐	普通	複合口縁下端縄文原体による刺突 9本櫛歯状工具 附加条一種(附加2条) 縄文による羽状構成 底面木炭痕	床面	90% PL19 外面煤 内面煮沸痕
169	弥生土器	壺	13.3	33.8	9.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 貼付隆帯に縄文原体で刺突 附加条二種(附加1条) 縄文を一方方向、下端の一部のみ附加条一種(附加2条) 縄文を羽状に施文 底面布目痕	床面	90% PL19 外面煤 内面煮沸痕

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 23	炉石	29.5	11.9	7.8	(4290.3)	流紋岩	火熱を受け赤変	炉火床面	PL23

表 3 弥生時代竪穴建物跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規 模	壁 高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設					覆土	主な出土遺物	時 期	備 考
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	D 4 c2	N - 34° - W	隅丸方形	5.86 × 5.70	18 ~ 33	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	本跡→第1号竪穴遺構
2	C 4 j0	N - 41° - E	方 形	5.52 × 5.13	35 ~ 46	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土製品, 石器, 石核, 剥片	後期後半	
5	D 4 a6	N - 38° - W	[楕円形]	6.57 × (5.50)	37 ~ 51	平坦	-	4	-	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	
6	D 4 b6	N - 60° - W	隅丸長方形	3.08 × 2.75	34 ~ 55	平坦	-	-	1	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	本跡→SK23, TM1
9	C 3 d6	N - 52° - W	[長方形]	(5.56 × 4.56)	40 ~ 45	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	本跡→SD 2
10	C 3 g3	N - 82° - W	[隅丸長方形]	5.40 × (5.36)	28 ~ 55	平坦	-	4	-	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	本跡→SD 2
11	D 2 b9	N - 41° - W	隅丸長方形	(6.28) × 6.24	15 ~ 35	平坦	-	6	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 土製品, 石器	後期後半	
12	D 2 f0	-	[方形-長方形]	5.05 × (2.52)	13 ~ 22	平坦	-	-	-	-	-	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 土製品, 石器	後期後半	本跡→SD 2・3
13	C 3 h9	N - 23° - E	楕 円 形	5.53 × 4.94	18 ~ 40	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 石器	後期後半	
14	C 4 j1	N - 36° - W	隅丸長方形	(3.89) × 3.41	6 ~ 8	平坦	-	4	-	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器	後期後半	
15	C 3 j7	N - 37° - W	隅丸長方形	4.84 × 3.98	12 ~ 36	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 石器	後期後半	
16	D 3 d4	N - 49° - W	隅丸方形	5.32 × 5.05	13 ~ 38	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	
17	D 3 g2	N - 50° - W	円 形	5.46 × 5.32	12 ~ 23	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 石器	後期後半	
18	C 3 e3	N - 34° - W	[方形-長方形]	5.00 × (3.48)	30 ~ 42	平坦	-	2	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	本跡→SD 2
19	D 3 c7	N - 22° - W	隅丸長方形	5.48 × 4.50	15 ~ 40	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	本跡→SD12
21	D 3 e6	N - 31° - W	隅丸方形	5.78 × 5.64	8 ~ 40	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	
22	D 3 f0	N - 74° - W	隅丸長方形	5.35 × 4.77	1 ~ 5	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 石器	後期後半	本跡→SD 8
23	D 3 g8	N - 45° - W	円 形	5.74 × 5.66	12 ~ 27	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 石器	後期後半	本跡→SD 7
24	D 3 i7	N - 37° - W	隅丸方形	5.56 × 5.46	6 ~ 17	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 石器	後期後半	
25	E 3 a0	N - 24° - E	[隅丸方形]	6.92 × (5.93)	25 ~ 39	平坦	-	-	-	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 石器	後期後半	SI30→本跡→SD17
27	E 4 a5	N - 26° - W	隅丸方形	5.68 × 5.33	18 ~ 52	平坦	-	3	1	1	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土師器, 石器	後期後半	
28	E 4 c3	N - 12° - E	隅丸長方形	6.40 × 5.72	8 ~ 28	平坦	-	4	-	-	地床炉	-	人為	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	
29	E 4 e5	N - 38° - W	円 形	5.95 × 5.80	22 ~ 40	平坦	-	1	1	-	地床炉	-	人為自然	弥生土器, 土製品, 石器	後期後半	
30	D 4 j1	N - 32° - W	隅丸長方形	7.06 × 6.33	34 ~ 50	平坦	-	4	1	-	地床炉2	-	人為	弥生土器, 土師器, 石器	後期後半	本跡→SI25, SD17
31	E 4 f7	N - 32° - W	長 方 形	5.78 × 5.05	18 ~ 34	平坦	-	4	1	-	地床炉2	-	人為	弥生土器, 石器	後期後半	

(2) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構 (第64図)

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD4d3区, 標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

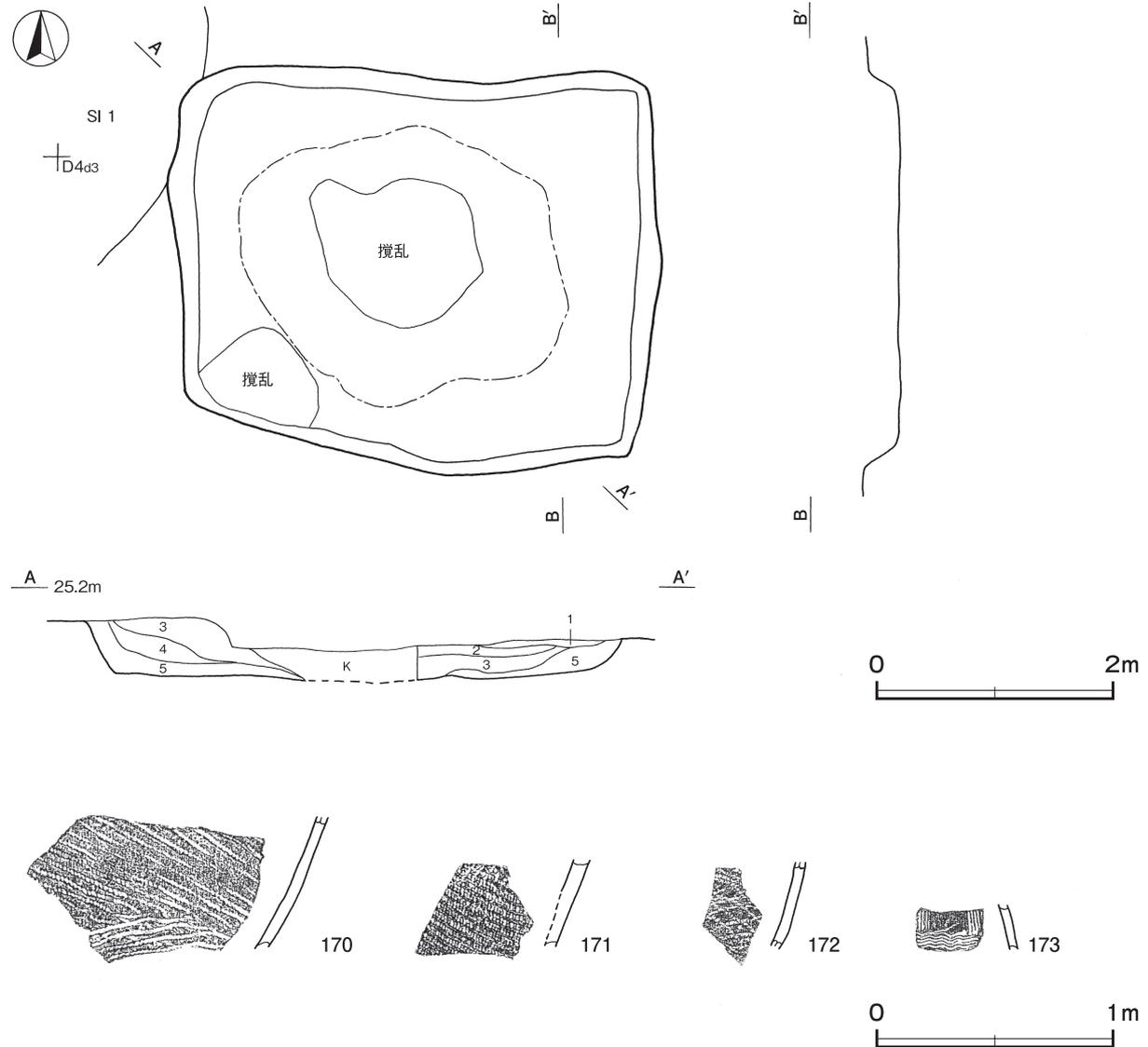
規模と形状 長軸4.16m, 短軸3.39mの長方形で, 長軸方向はN-80°-Wである。壁は高さ22~48cmで, 外傾している。

床 平坦で, 壁際を除いて踏み固められている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる第4・5層が埋め戻された後, 第2・3層が自然堆積している。第1層は流入土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |



第64図 第1号竪穴遺構・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 23 点（高坏 1， 広口壺 22）が出土している。土器片はすべて細片で， 全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は， 出土土器から後期後半に比定できる。規模がほかの竪穴建物跡よりも小さく， 柱穴や炉が確認できないことから， 簡易な上屋を設けた倉庫のような施設であったことが考えられる。

第 1 号竪穴遺構出土遺物観察表（第 64 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
170	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土中	
171	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい褐	普通	附加条一種（附加 2 条）縄文による羽状構成	覆土中	
172	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	明赤褐	普通	附加条軸縄不明縄文による羽状構成	覆土中	
173	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	良好	5 本櫛歯状工具	覆土中	

第 2 号竪穴遺構（第 65・66 図）

調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の D 3 d8 区， 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.92 m， 短軸 2.90 m の隅丸方形で， 長軸方向は N - 41° - W である。壁は高さ 8 ~ 23cm で， 外傾している。

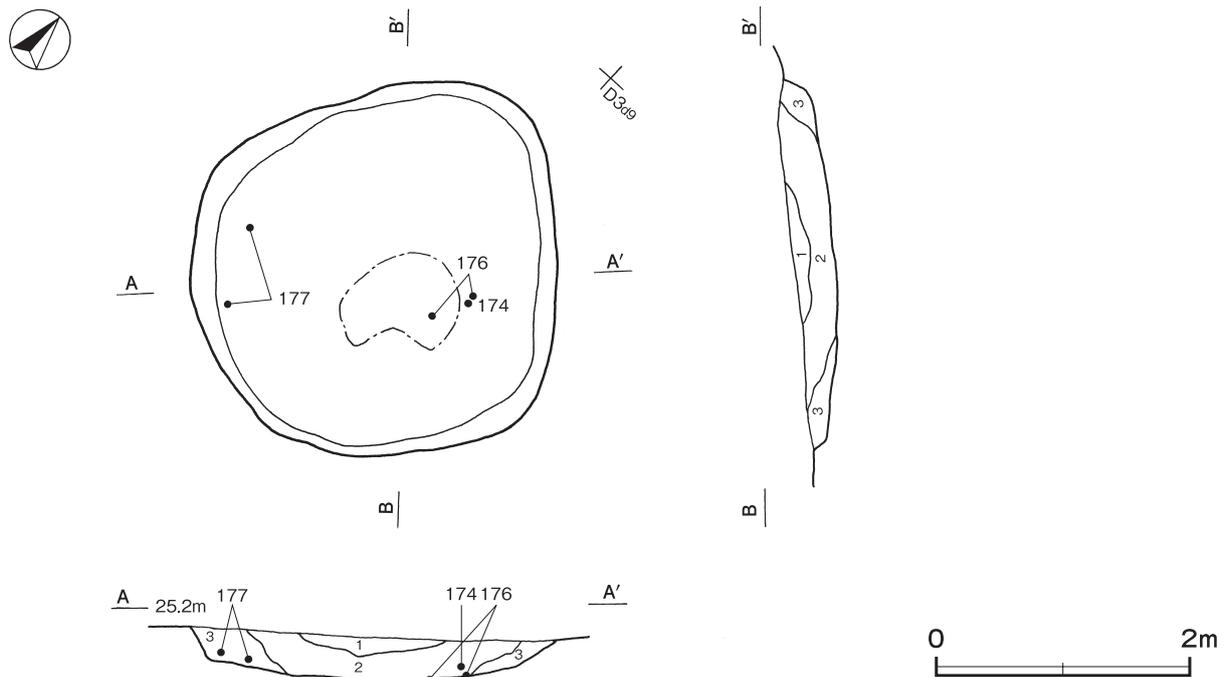
床 平坦で， 中央部がわずかに硬化している。

覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれることから， 埋め戻されている。

土層解説

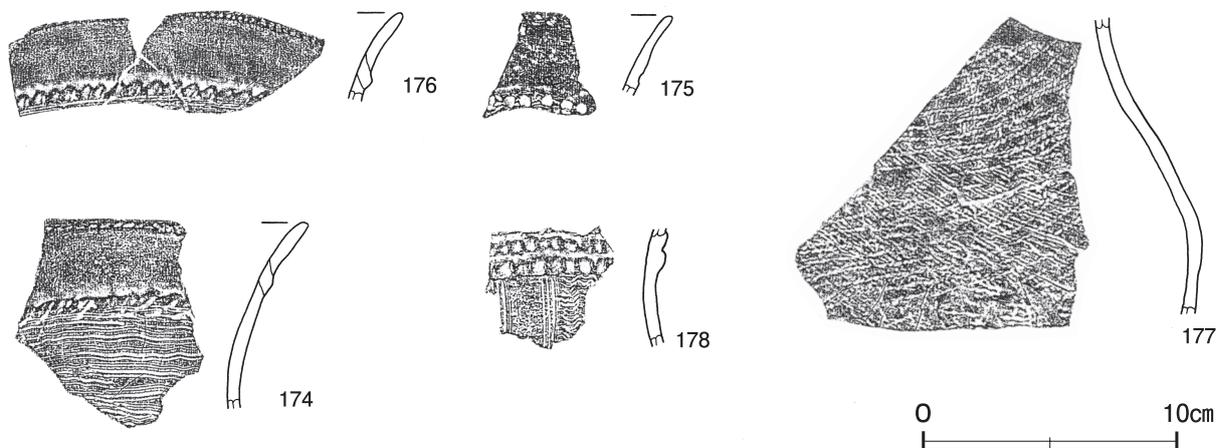
- 1 褐色 ロームブロック中量， 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片 138 点（広口壺）， 石器 3 点（磨石， 敲石， 台石）， 剥片 3 点のほか， 縄文土器片 2 点（深鉢）， 自然礫 2 点が出土している。土器片はほとんどが細片で， 全域に散在した状態で出土している。



第 65 図 第 2 号竪穴遺構実測図

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。規模がほかの竪穴建物跡よりも小さく、柱穴や炉が確認できないことから、簡易な上屋を設けた倉庫のような施設であったことが考えられる。



第 66 図 第 2 号竪穴遺構出土遺物実測図

第 2 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 66 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
174	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体押圧 4本櫛歯状工具	覆土下層	
175	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 縄文原体による帯状刺突列	覆土中	
176	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	浅黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 4本以上の櫛歯状工具	覆土下層	
177	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成	覆土下層	
178	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	褐	普通	4本櫛歯状工具	覆土中	

表 4 弥生時代竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)						
1	D 4 d3	N - 80° - W	長方形	4.16 × 3.39	22 ~ 48	外傾	平坦	人為 自然	弥生土器	後期後半	SI 1 → 本跡
2	D 3 d8	N - 41° - W	隅丸方形	2.92 × 2.90	8 ~ 23	外傾	平坦	人為	弥生土器, 石器	後期後半	

(3) 土坑

第 22 号土坑 (第 67 図 PL12)

調査年度 2015 年度

位置 調査区東部の D 4 d9 区, 標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 0.74 m, 短径 0.64 m の楕円形で, 長径方向は N - 41° - W である。深さは 18cm で, 底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。各層にロームが含まれていることから, 埋め戻されている。

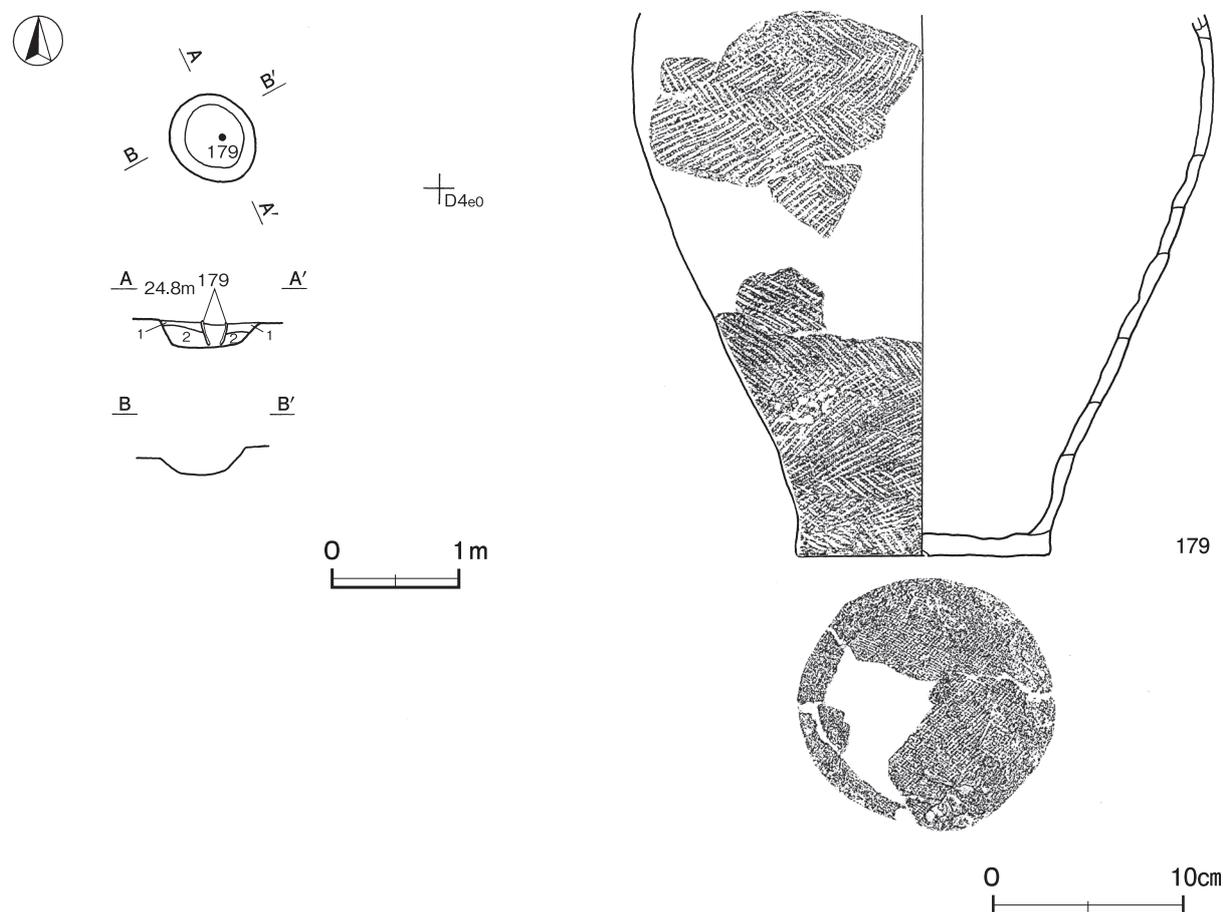
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片3点（広口壺），被熱礫1点が出土している。179は，土坑中央部に立位で埋設された状況で出土している。

所見 時期は，出土土器から後期後半に比定できる。上部は削平されているが大形の広口壺が埋設されており，土器棺墓の可能性はある。



第67図 第22号土坑・出土遺物実測図

第22号土坑出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
179	弥生土器	広口壺	-	(28.7)	13.3	長石・石英・細礫・砂多量	にぶい黄橙	普通	附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成	底面	30%二次焼成

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竖穴遺構1基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

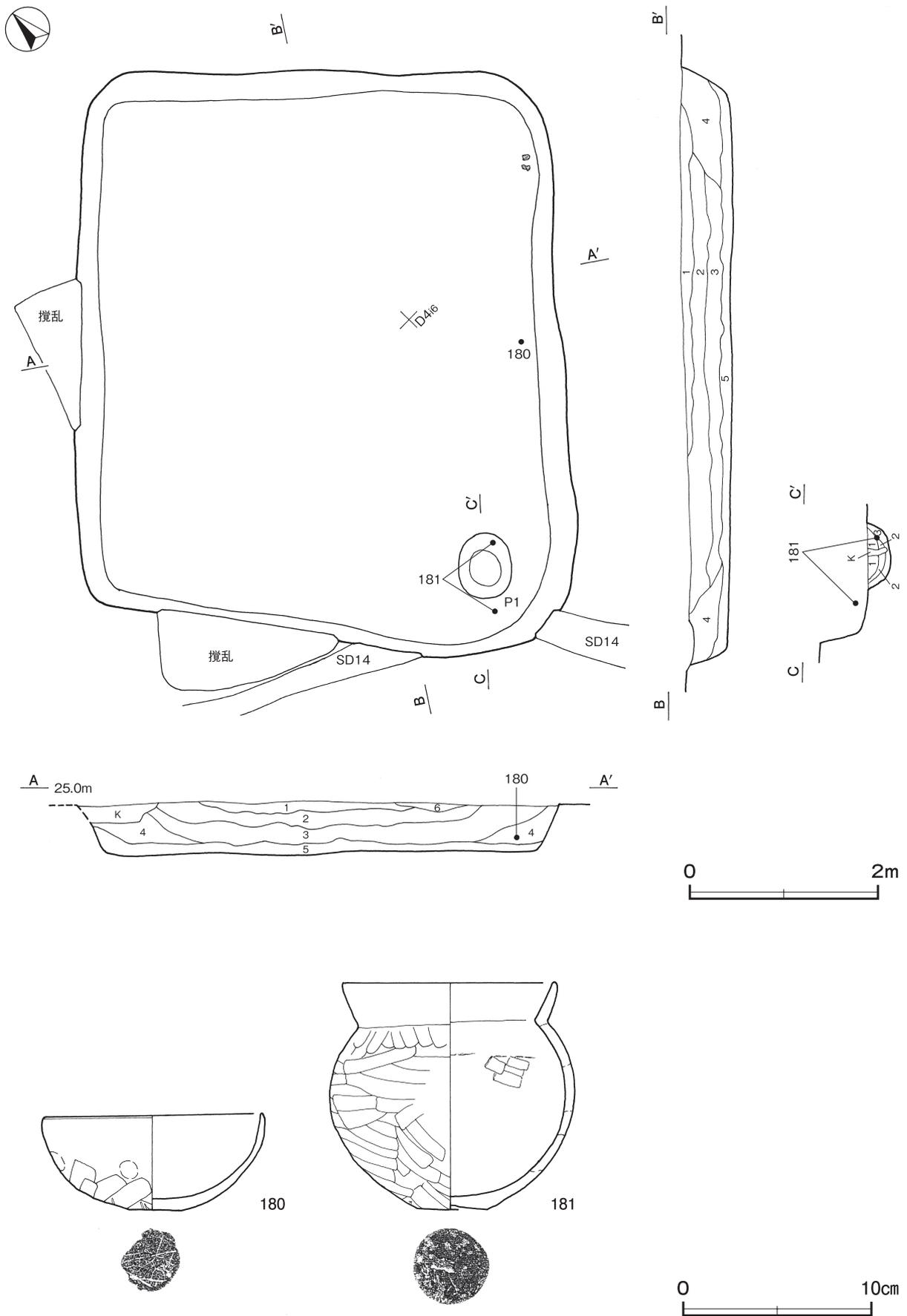
竖穴遺構

第3号竖穴遺構（第68図）

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のD4h5区，標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第14号溝に掘り込まれている。



第 68 图 第 3 号竖穴遺構・出土遺物実測図

規模と形状 長軸 6.13 m, 短軸 5.20 m の長方形で, 長軸方向は N - 47° - E ある。壁は高さ 41 ~ 53cm で, 外傾している。

床 平坦である。

ピット P 1 は深さ 27cm で, 規模と配置から貯蔵穴と考えられる。第 2・3 層が堅穴の埋め戻しに伴う層で, その後第 1 層が自然堆積している。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 4・5 層が埋め戻された後, 第 1~3 層が自然堆積している。第 6 層は流入土である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 42 点 (高坏 3, 椀 1, 埴 19, 甕 18, 小形甕 1), 炭化材 3 点 (アカガシ亜属) のほか, 縄文土器片 8 点 (深鉢), 弥生土器片 265 点 (広口壺), 石器 9 点 (磨石 6, 磨・敲石 3), 石核 2 点, 剥片 1 点, 被熱礫 4 点, 自然礫 1 点が出土している。出土遺物の大半は弥生土器片であるが, 摩滅した細片が全域から出土しており, 混入したものと考えられる。181 は, 覆土下層及び P 1 覆土下層から出土した破片が接合したもので, 炭化材同様, 埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。180 は, 窪地状に堆積した黒色土中から出土しており, 後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。炉や支柱穴が確認できないことや, 床面に踏み固められた痕跡が見られないことから, 建物として機能しないまま埋め戻された可能性がある。

第 3 号堅穴遺構出土遺物観察表 (第 68 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
180	土師器	椀	11.9	5.2	2.8	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外・内面ヘラナデ	覆土上層	70% PL24 二次焼成
181	土師器	小形甕	11.5	12.2	3.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面ヘラナデ 内面輪積み痕 体部外面赤彩痕	覆土下層	60% PL24

4 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 堅穴建物跡 3 棟を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

堅穴建物跡

第 3 号堅穴建物跡 (第 69・70 図 PL12)

調査年度 2015 年度

位置 調査区東部の D 5 il 区, 標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.35 m, 短軸 2.98 m の長方形で, 長軸方向は N - 55° - E である。壁は高さ 40 ~ 45cm で, 直立または外傾している。

床 平坦で, 中央部から竈にかけて踏み固められている。

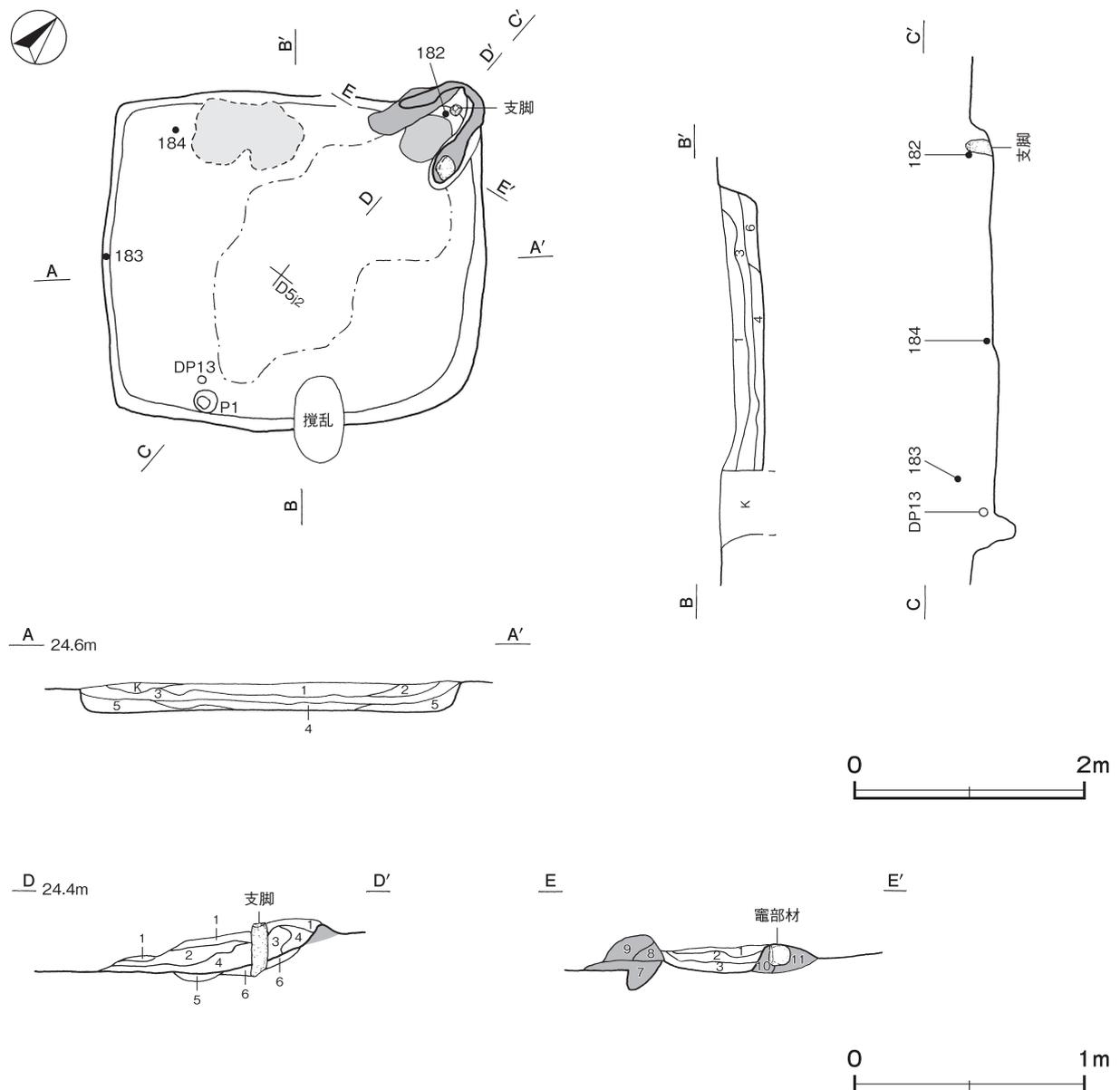
竈 北コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは 82cm, 燃焼部の幅は 35cm である。燃焼部は床面から 4 cm ほど掘りくぼめられ, 第 5・6 層で埋め戻されている。この際第 6 層で支脚を固定している。袖部は,

泥質凝灰岩を芯材とし地山の上に第10・11層を積み上げて構築されている。第7～9層は崩れており、第7層が堆積している左袖の掘り込みは、芯材を固定するために掘り込まれた可能性がある。袖の内壁は火熱を受けて赤変硬化しているが、第5・6層上面の火床面はやや赤変しているものの硬化は確認できない。煙道部は壁外に29cmほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第2～4層は、焼土ブロックや凝灰岩片が含まれていることから、壊されている。第1層は、建物跡の覆土である。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------|-----------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子少量 | 8 黒褐色 | 粘土ブロック・凝灰岩片中量, 焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 9 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・凝灰岩片中量, 粘土粒子少量 | 10 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子少量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | | |

ピット P1は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットの可能性がある。堆積状況から、柱は抜き取られている。



第69図 第3号竪穴建物跡実測図

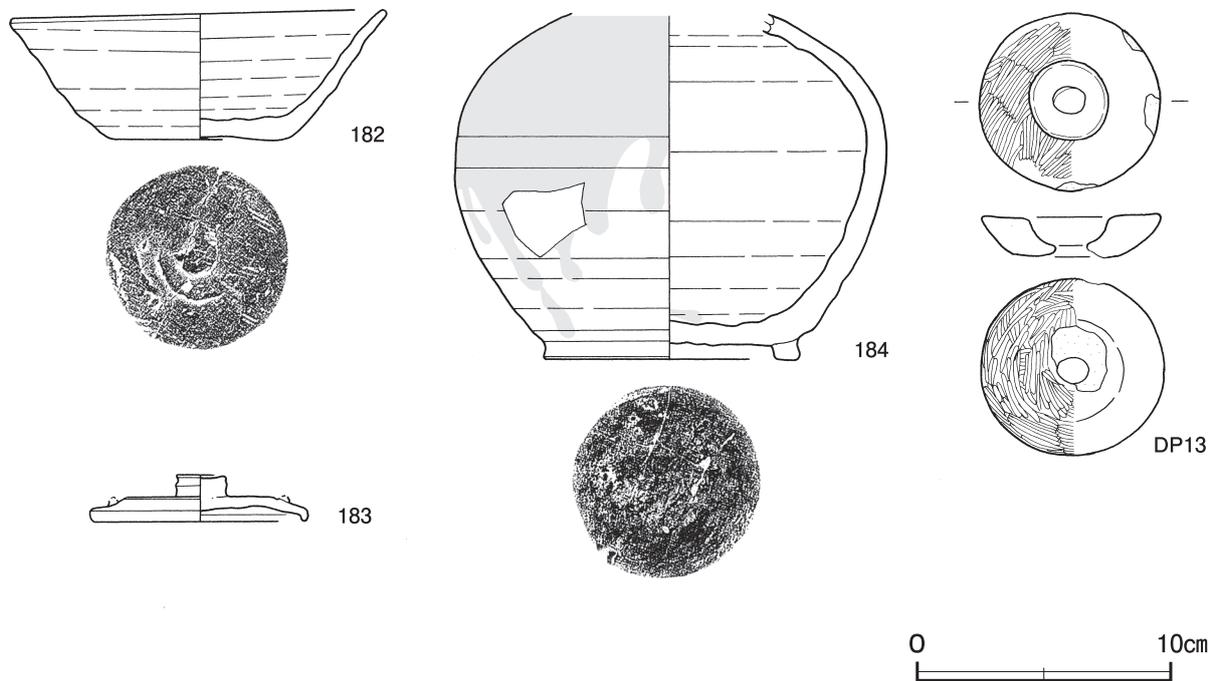
覆土 6層に分層できる。ロームが多く含まれる第3～5層が埋め戻され、第1・2層が自然堆積している。北西壁際に焼土を伴う第6層が確認できる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|----------|--------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 | 6 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 68点 (甕), 須恵器片 7点 (坏6, 蓋1), 灰釉陶器片 1点 (瓶), 土製品 3点 (紡錘車1, 不明2), 石器 2点 (砥石), 被熱礫 7点のほか, 縄文土器片 62点 (深鉢), 弥生土器片 64点 (広口壺) が出土している。182・184・DP 13は, 竈覆土上層及び覆土下層から出土しており, 埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。183は, 後の投棄または混入と考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。北西壁際の一部ではあるが, 焼土が集中して確認できる範囲があり, 焼失建物の可能性がある。



第70図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
182	須恵器	坏	14.6	5.3	7.0	長石・石英・細礫	灰黄	普通	底面回転ヘラ切り後多方向の削り	竈覆土上層	60% 木葉下窯	
183	須恵器	蓋	[8.8]	1.9	-	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	70% 木葉下窯	
184	灰釉陶器	瓶	-	(13.8)	10.2	長石・細礫・黒色粒子	灰 暗オリーブ	良好	外面施釉	覆土下層	60% 猿投産	
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
DP13	紡錘車	7.2	1.7	1.2	(67.8)	長石・石英・雲母	黒	上面斜位の磨き色処理	下面周縁に沿った磨き	全面黒	覆土下層	PL24

第7号竪穴建物跡 (第71・72図)

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD4i9区, 標高24mほどの台地平坦部に位置している。

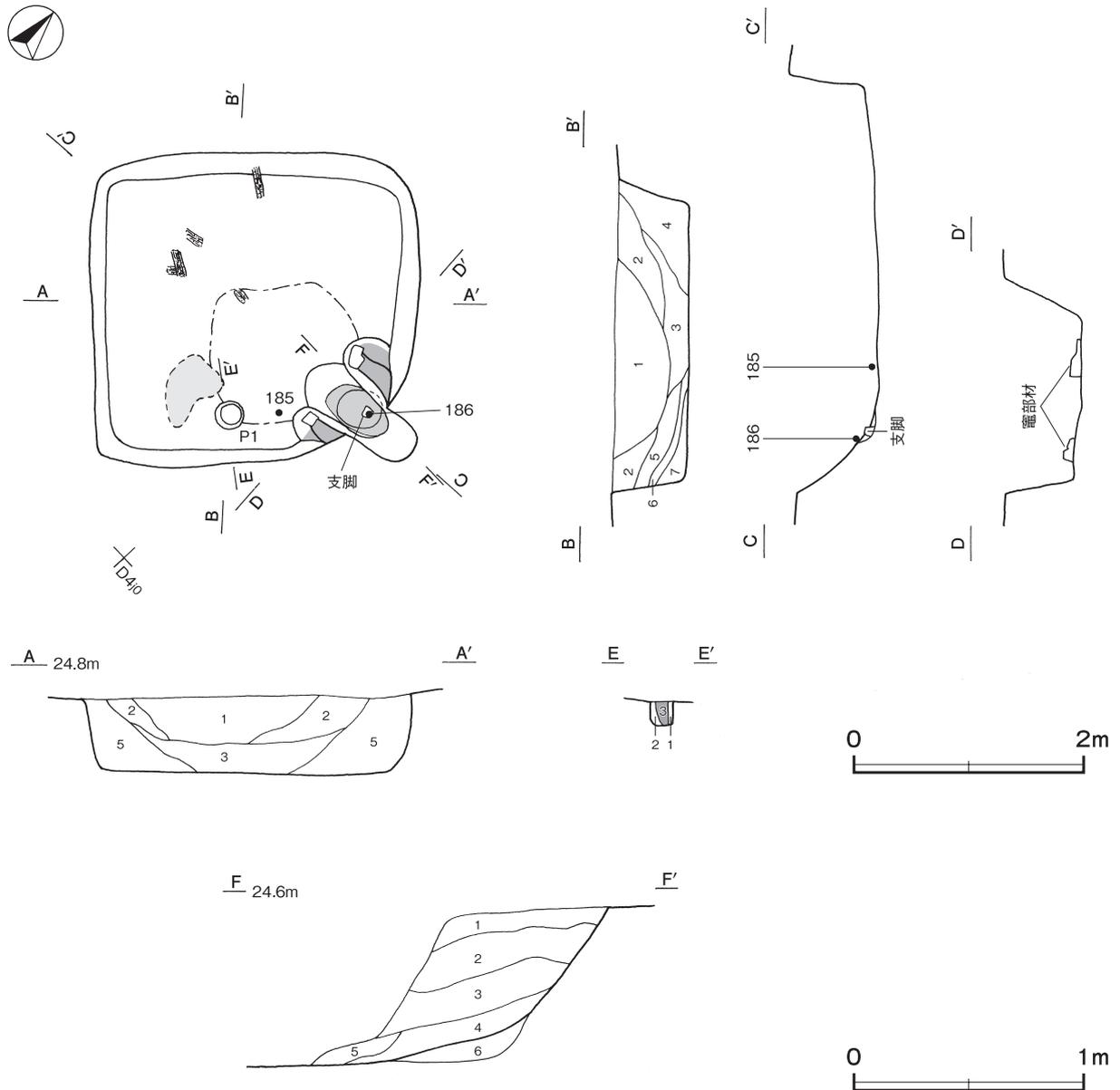
規模と形状 長軸 2.85 m, 短軸 2.71 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 42° - W である。壁は高さ 60 ~ 65cm で, 直立している。

床 平坦で, 中央部から竈にかけて踏み固められている。

竈 東コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは 111cm, 燃焼部の幅は 32cm である。燃焼部は支脚を固定するために第 6 層を床面から 10cm ほど埋め戻して作られている。袖部は, 泥質凝灰岩を芯材とし地山の上に粘土を積み上げて構築されている。火床面は第 6 層の上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 39cm ほど掘り込まれ, 火床面から緩やかに立ち上がっている。第 2 ~ 4 層にロームブロックや焼土ブロックが含まれていることや, 竈周辺には凝灰岩のブロックが散在していること, 支脚が第 6 層より上に延びていないことから壊されている。第 5 層は天井の崩落で, 第 1 層は竈が壊された後の建物跡の覆土である。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | 炭化物・焼土粒子中量, ロームブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |



第 71 図 第 7 号竪穴建物跡実測図

ピット P1 は深さ 21cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1・2層は埋土、第3層は柱痕跡である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

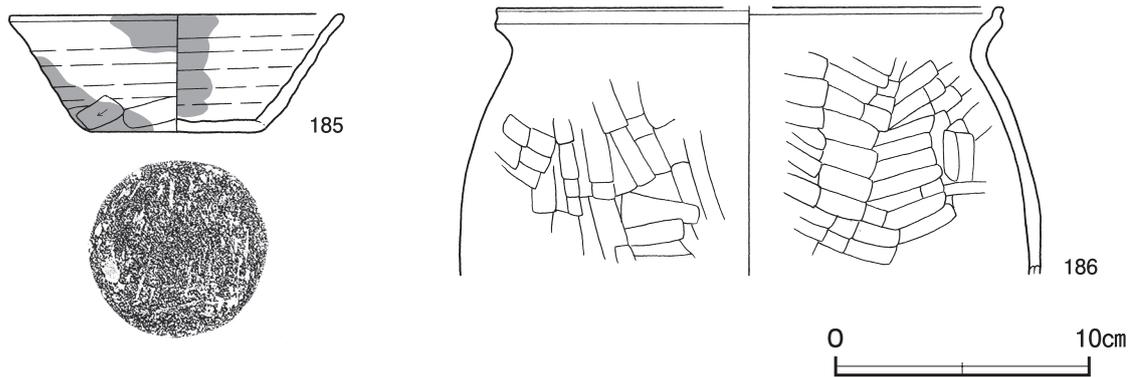
覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3～7層が埋め戻され、第1・2層が自然堆積している。南東壁際に焼土を伴う第5・6層が確認できる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 5 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 43点 (甕), 須恵器片 7点 (坏5, 蓋2), 土製品 1点 (支脚), 石器 10点 (磨石5, 磨・敲石2, 敲石2, 台石1), 炭化材 5点, 被熱礫 21点のほか, 縄文土器片 28点 (深鉢), 弥生土器片 56点 (広口壺) が出土している。185は, 床面から完形で出土しており, 遺棄されたものと考えられる。186は, 竈の覆土中層から破片の状態で出土しており, 竈を壊す際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。焼土や炭化材が確認できることから焼失建物の可能性がある。



第72図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
185	須恵器	坏	13.1	4.8	7.0	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底面一方向のヘラ削り	床面	100% PL24外・内面油煙付着新治蓋
186	土師器	甕	[20.0]	(10.7)	-	長石・石英・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部外内面横ナデ 内面横・斜位のナデ 体部外面縦・斜位のナデ	竈覆土中層	10%

第8号竪穴建物跡 (第73・74図 PL13)

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD5g3区, 標高24mほどの緩斜面に位置している。

重複関係 第19号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.92m, 短軸2.80mの方形で, 長軸方向はN-79°-Eである。壁は高さ49~60cmで, 外傾または緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で, 壁際を除き踏み固められている。

竈 南東コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは55cm、燃焼部の幅は47cmである。燃焼部は床面から4cmほど掘りくぼめられている。袖部は、深さ6cmほどの掘り込みに、荒く割って形を整えた安山岩片を設置し第8層で固定した後、外側に第6・7層を積み上げ構築されている。安山岩片の上部には187・188が横位に連なった状態で出土しており、焚き口の天井部を構成していたものと考えられる。火床面は、赤変硬化しておらず明確ではない。煙道部は壁外に41cmほど掘り込まれ、燃焼部から緩やかに立ち上がっている。第1～3層が天井部材や内壁崩落土、煙道部からの流入土であることから、自然崩壊したものと考えられる。第5層は、掻き出された炭が集積した層である。

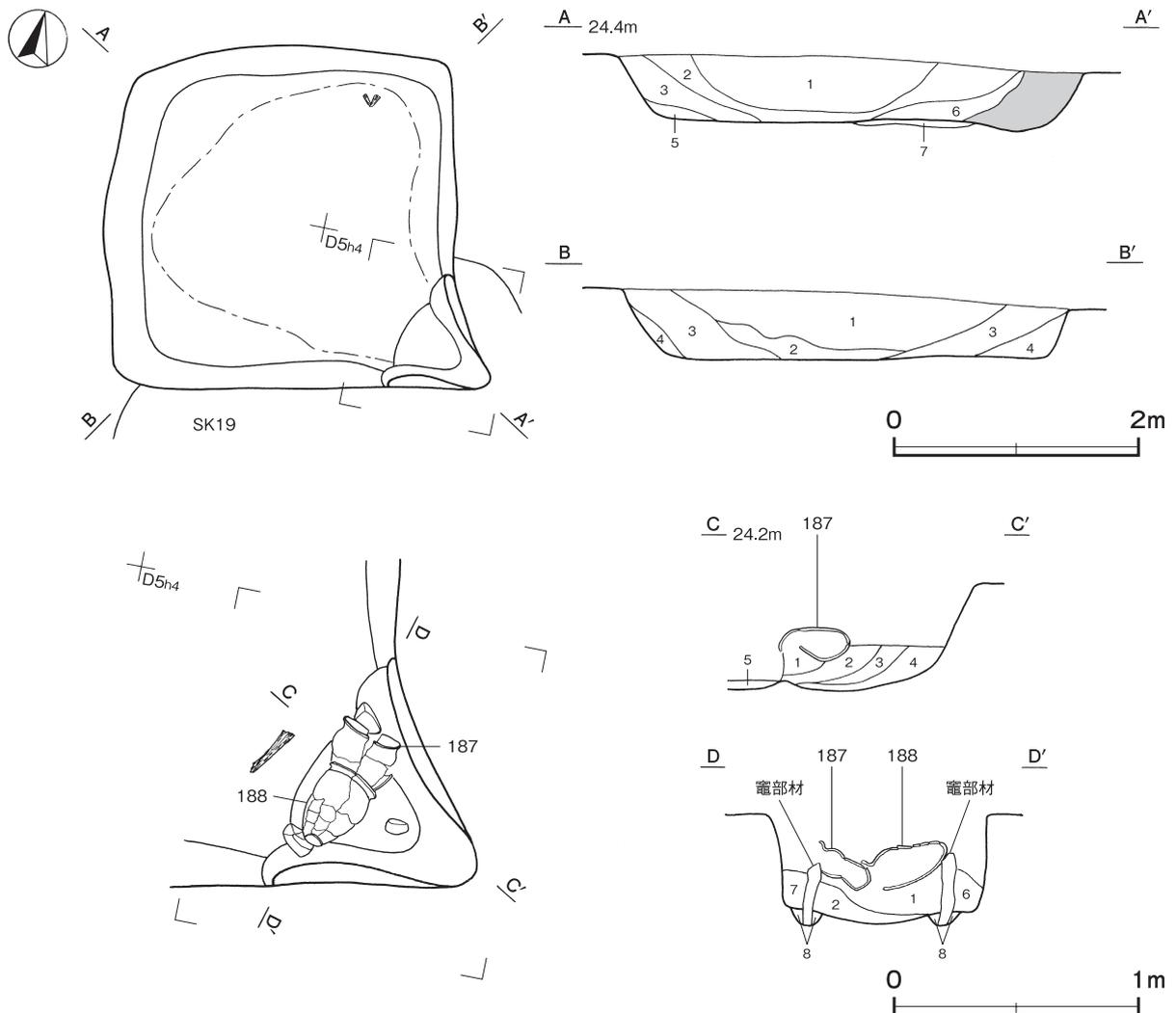
竈土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 | 5 黒褐色 | 炭化物中量, ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |

覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる第2～6層が埋め戻され、第1層が自然堆積している。第7層は貼床の構築土である。

土層解説

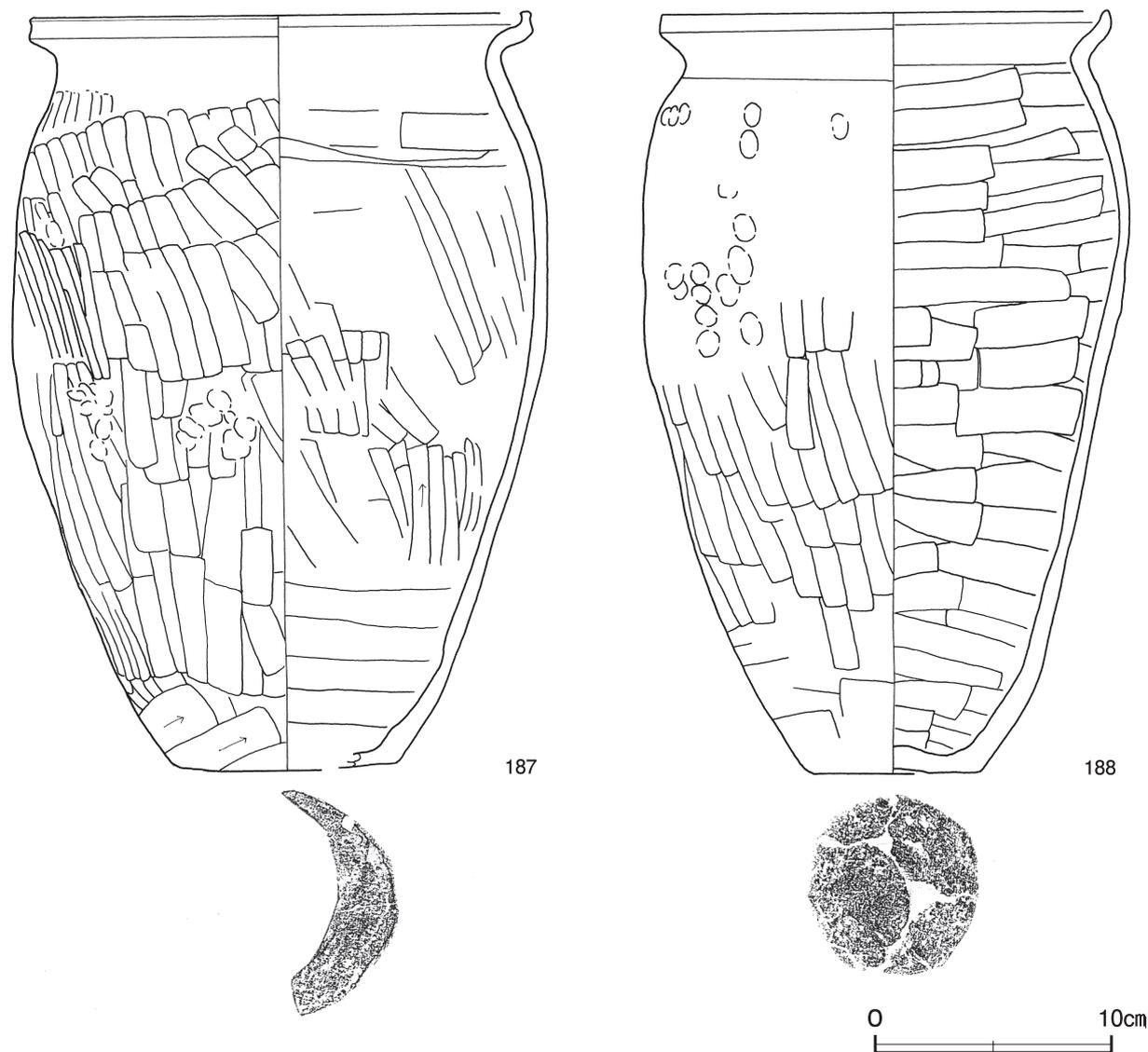
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化物少量 | | |



第73図 第8号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 10 点 (甕), 須恵器片 10 点 (坏7, 甕3), 土製品 1 点 (支脚_カ), 石器 1 点 (砥石_カ), 石製品 3 点 (竈部材), 被熱礫 20 点のほか, 縄文土器片 33 点 (深鉢), 弥生土器片 23 点 (広口壺) が出土している。土器片はほとんどが細片で, 全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 74 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 74 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
187	土師器	甕	21.0	32.5	(9.6)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面中位以下に縦位のナデ下端横位のナデ 内面横位のナデ 底面多方向の削り	竈天井部	80% PL24
188	土師器	甕	19.1	32.7	7.2	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦ナデ後下位に削り 内面縦・横位のナデ	竈天井部	95% PL24 底面摩滅

表5 平安時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
3	D 5 i1	N - 55° - E	長方形	3.35 × 2.98	40 ~ 45	平坦	-	-	1	-	竈	-	人為 自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製品	9世紀 中葉	
7	D 4 i9	N - 42° - W	隅丸方形	2.85 × 2.71	60 ~ 65	平坦	-	-	1	-	竈	-	人為 自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石器	9世紀 前葉	
8	D 5 g3	N - 79° - E	方形	2.92 × 2.80	49 ~ 60	平坦	-	-	-	-	竈	-	人為 自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石製品	9世紀 中葉	本跡→SK19

5 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、塚1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

塚

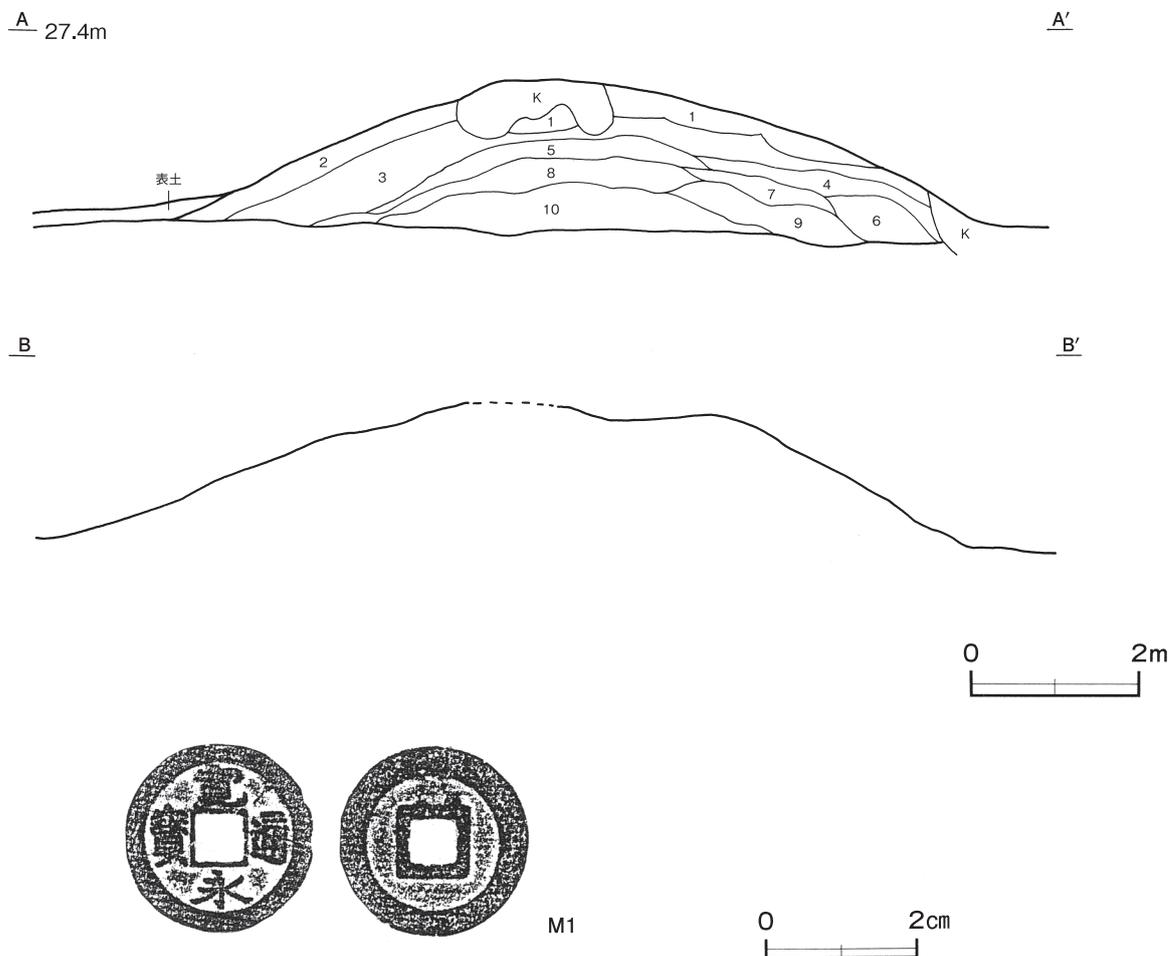
第1号塚 (第75図・付図 PL13)

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD 4 b5 ~ D 4 e7区, 標高25mほどの台地平坦面に位置している。

調査状況 現状保存のため, 測量及びトレンチを入れて構築状況の確認のみを行った。

重複関係 第6号堅穴建物跡の埋没後に構築されている。



第75図 第1号塚・出土遺物実測図

規模と形状 長径 10.92 m, 短径 10.72 mの円形である。基本層序第2層上面に盛土して構築されており, 墳頂部までの高さは182cmである。

構築土と構造 構築土は10層に分層できる。中心部と東部に第4～10層を交互に盛土した後, 第2・3層を全体に被せるように盛土している。第1層は堆積状況から, 構築後に塚頂部を掘り返した痕跡と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 (締まり強い) |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子微量 (締まり強い) |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量 (締まり強い) | 9 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子少量 (締まり強い) | 10 黒褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 銭貨2点 (寛永通寶, 不明) のほか, 弥生土器片77点 (広口壺), 土師器片3点 (坏), 石器2点 (磨石, 敲石), 石核1点, 被熱礫4点が出土している。

所見 構築時期は, 出土した銭貨から寛永13 (1636) 年以降である。トレンチによる調査のため, 詳細は不明である。

第1号塚出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	銭貨	寛永通寶	25	0.6	0.1	2.9	銅	1636年	古寛永 背無銭	塚構築土	PL24

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で, 時期や性格が明確でない道路跡1条, 溝跡18条, 土坑43基, 集石遺構2基, 遺物包含層1か所を確認した。以下, それらの遺構について記述する。

(1) 道路跡

第1号道路跡 (第76図・付図)

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD5a3～D5d2区, 標高24mほどの台地緩斜面部に位置している。

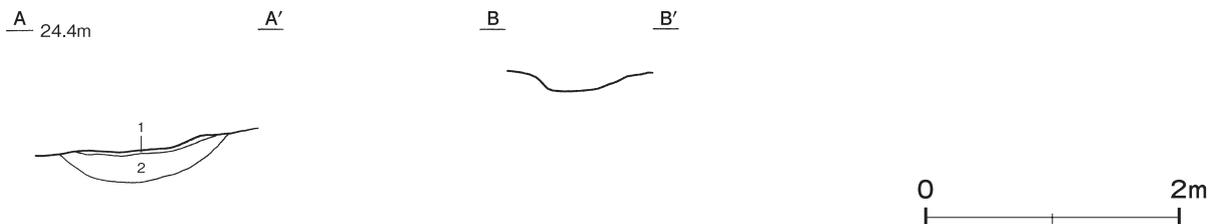
規模と形状 北東部が調査区域外に延びていることから, 幅は0.3～1.1mで, 長さは1.6mしか確認できなかった。D5a3区から北東方向 (N-30°-E) へ直線状に延びている。路面は第1号溝跡の覆土上面を使用している。路面は平坦で, 地形の傾斜に沿っている。

覆土 2層に分層できる。周囲から土砂が流入した自然堆積である。

第1号溝跡 (第1号道路跡) 土層解説

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (締まり強い) | 2 暗褐色 ローム粒子少量 |
|-------------------------------|---------------|

遺物出土状況 第1号溝跡覆土から, 弥生土器片5点 (広口壺), 石器1点 (磨石), 剥片1点, 金属製品1点 (指貫), が出土している。

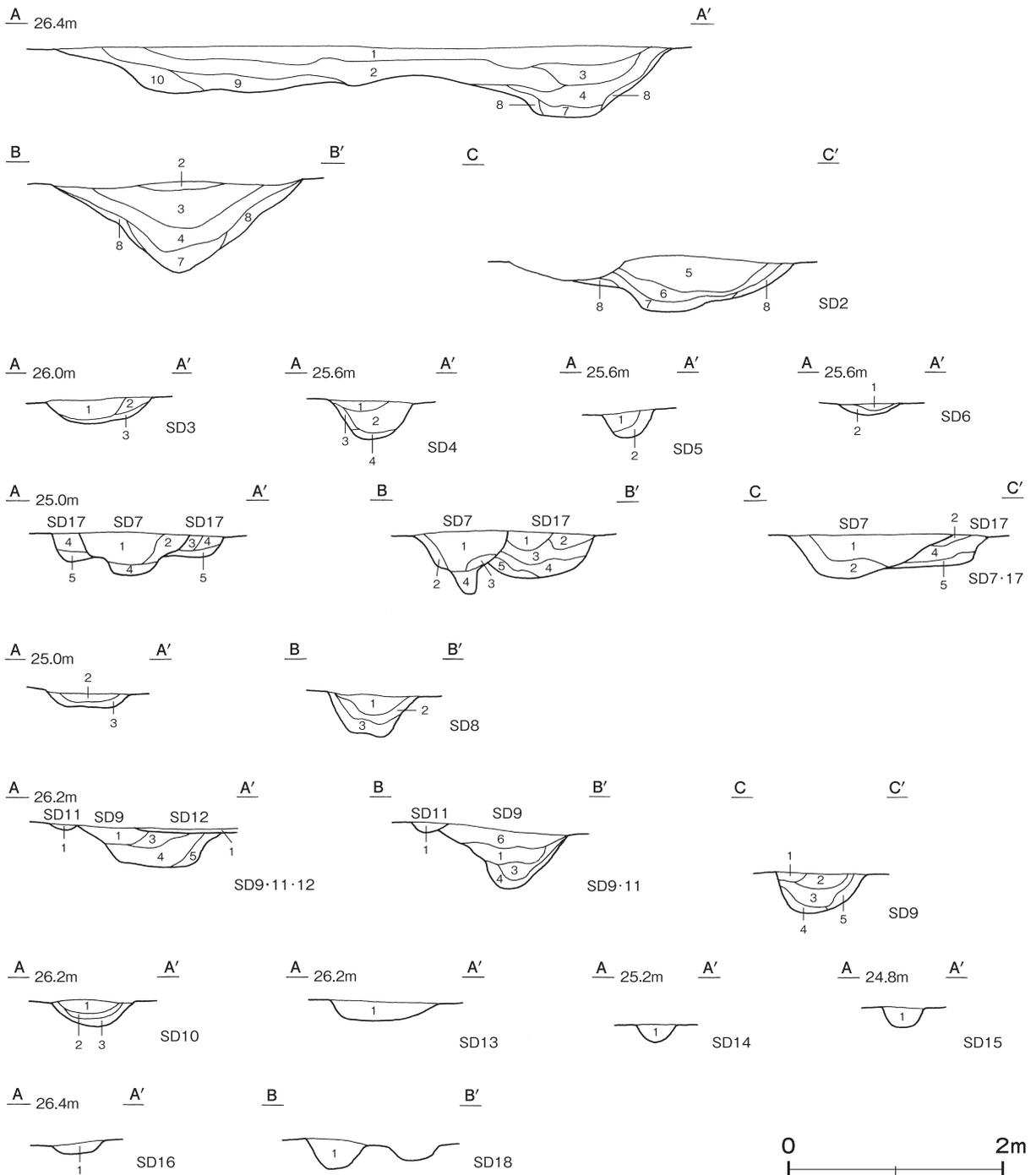


第76図 第1号溝跡 (第1号道路跡) 実測図

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。第1号溝跡が埋没した後に、溝状の窪地を道路として利用したと考えられる。調査区域外に斜面を降りる林道があり、そこに向かい延伸することから、近年まで利用されていたことが推測される。

(2) 溝跡

溝跡については、実測図（第77図・付図）、土層解説及び一覧表にて掲載する。調査年度はすべて2016年度である。



第77図 その他の溝跡実測図

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 灰黄褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量
- 9 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第4号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

第5号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 黄褐色 ロームブロック中量

第6号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

第7号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第17号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第8号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第9号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第11号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第12号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

第10号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第13号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量

第14号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量

第15号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第16号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量

第18号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

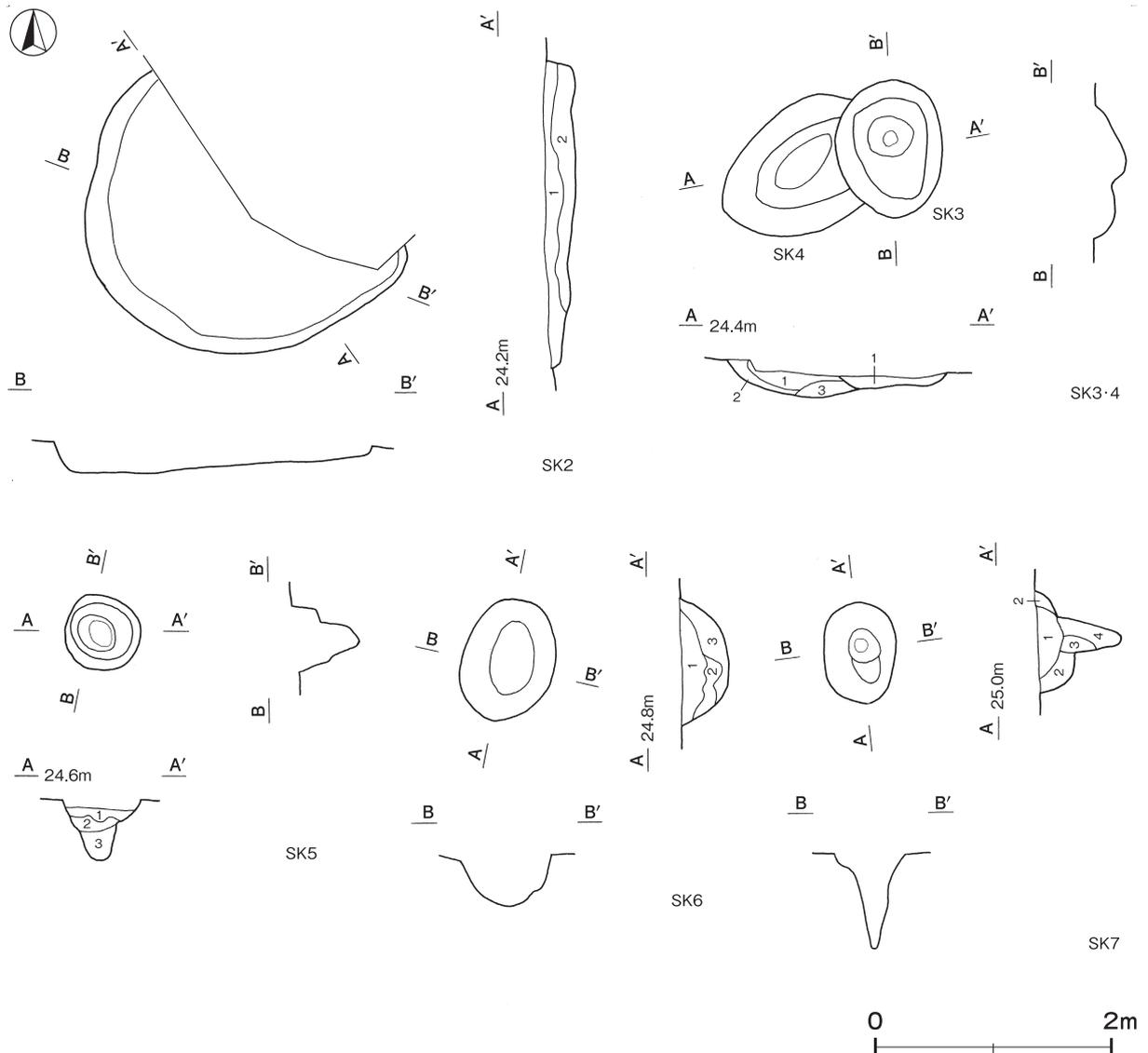
表6 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	D 5 b3~D 5 d2	N - 30° - E	直線	(11.52)	0.50 ~ 2.00	0.17 ~ 0.65	50	皿状	緩斜	人為	弥生土器, 石器, 金属製品	
2	C 3 c6~D 2 g0	N - 32° - E N - 69° - W	直線	(66.74)	1.78 ~ 2.56	0.12 ~ 0.52	25 ~ 85	V字状・逆台形	緩斜	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶器, 磁器, 石器, 剥片	S I 9・10・12・18 → 本跡 → S D 3・10, S K 24 ~ 39
3	D 2 d7~D 2 f0	N - 64° - W N - 26° - E	L字状	(15.58)	0.42 ~ 1.07	0.07 ~ 0.45	7 ~ 10	U字状	緩斜	自然	土師器, 土師質土器, 石器	S D 2 → 本跡
4	D 3 e2~D 3 g1	N - 22° - E	直線	(9.18)	0.80 ~ 1.05	0.27 ~ 0.42	39	逆台形	外傾	人為	弥生土器, 須恵器, 土師質土器, 陶器	
5	D 3 f2~D 3 g1	N - 21° - E	直線	(5.00)	0.32 ~ 0.55	0.08 ~ 0.30	26	逆台形	外傾	人為		
6	D 3 e3~D 3 f2	N - 30° - E N - 110° - E	L字状	(5.12)	0.25 ~ 0.75	0.10 ~ 0.42	10 ~ 25	逆台形	緩斜	人為		
7	D 3 g6~E 3 b9	N - 120° - E N - 163° - W	L字状	(29.06)	0.36 ~ 1.50	0.15 ~ 0.46	57	逆台形	外傾・緩斜	人為	弥生土器, 土師質土器, 石器	S I 23・25・30, S D 17 → 本跡
8	D 3 c0~D 4 d1 D 4 d1~D 3 h9	N - 65° - W N - 30° - E N - 31° - E	L字状 蛇行	7.45 20.47	0.50 ~ 0.70 0.62 ~ 0.90	0.33 ~ 0.51 0.20 ~ 0.48	11 ~ 25 14 ~ 36	逆台形	外傾・ほぼ直立	人為 自然	弥生土器	S I 22 → S D 8
9	D 3 a4~D 3 e2	N - 156° - W	直線	14.20	0.81 ~ (1.27)	0.23 ~ 0.43	33 ~ 60	逆台形	外傾・緩斜	人為		本跡 → S D 11・12
10	D 2 a0~D 3 a1	N - 115° - E	直線	5.22	0.60 ~ 0.89	0.28 ~ 0.42	18 ~ 32	浅いU字状	緩斜	自然	弥生土器, 石器	S D 2 → 本跡

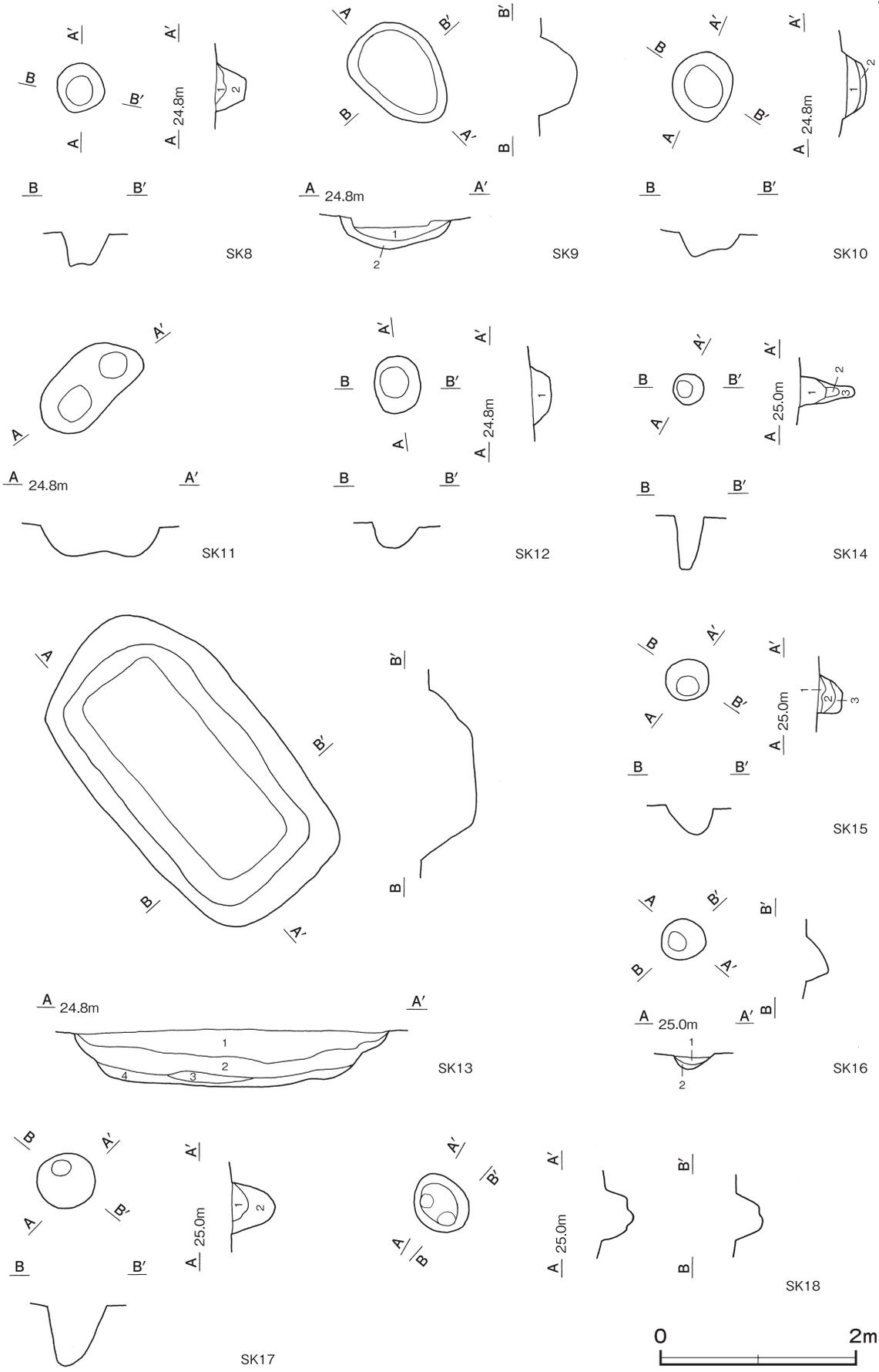
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
11	D 3a3~D 3c3	N - 24° - E	直線	5.70	0.19 ~ 0.31	0.10	10	浅いU 字状	緩斜	自然		SD 9 → 本跡
12	D 3a4~D 3c6	N - 60° - W	直線	11.28	0.43 ~ 0.77	0.26 ~ 0.59	11	逆台形	緩斜	人為		SI 19, SD 9 → 本跡
13	D 3a4	N - 30° - E	直線	(3.71)	0.41 ~ 0.51	0.25 ~ 0.32	18	逆台形	緩斜	人為		本跡 → SD 9
14	D 4i4~E 4a7	N - 60° - W	蛇行	(12.98)	0.25 ~ 0.72	0.09 ~ 0.35	15	逆台形	外傾	人為	弥生土器	SI 26 → 本跡
15	E 5c3~E 5e1	N - 46° - E	直線	11.60	0.28 ~ 0.41	0.13 ~ 0.27	18	逆台形	外傾	人為	弥生土器	
16	C 3i6~D 3a5	N - 13° - E N - 120° - E	鉤状	17.20 6.00	0.28 ~ 0.78	0.16 ~ 0.58	11	逆台形	外傾・ 緩斜	人為	石器, 銭貨	
17	D 3i9~E 3b9	N - 117° - E N - 163° - W	L字状	(16.88)	1.64	0.50 ~ 1.40	20 ~ 45	逆台形	外傾	人為		SI 25・30 → 本跡 → SD 7
18	C 3i4~C 3j4	N - 18° - E	直線	5.46	0.23 ~ 0.59	0.11 ~ 0.31	17 ~ 26	逆台形	外傾	人為		

(3) 土坑

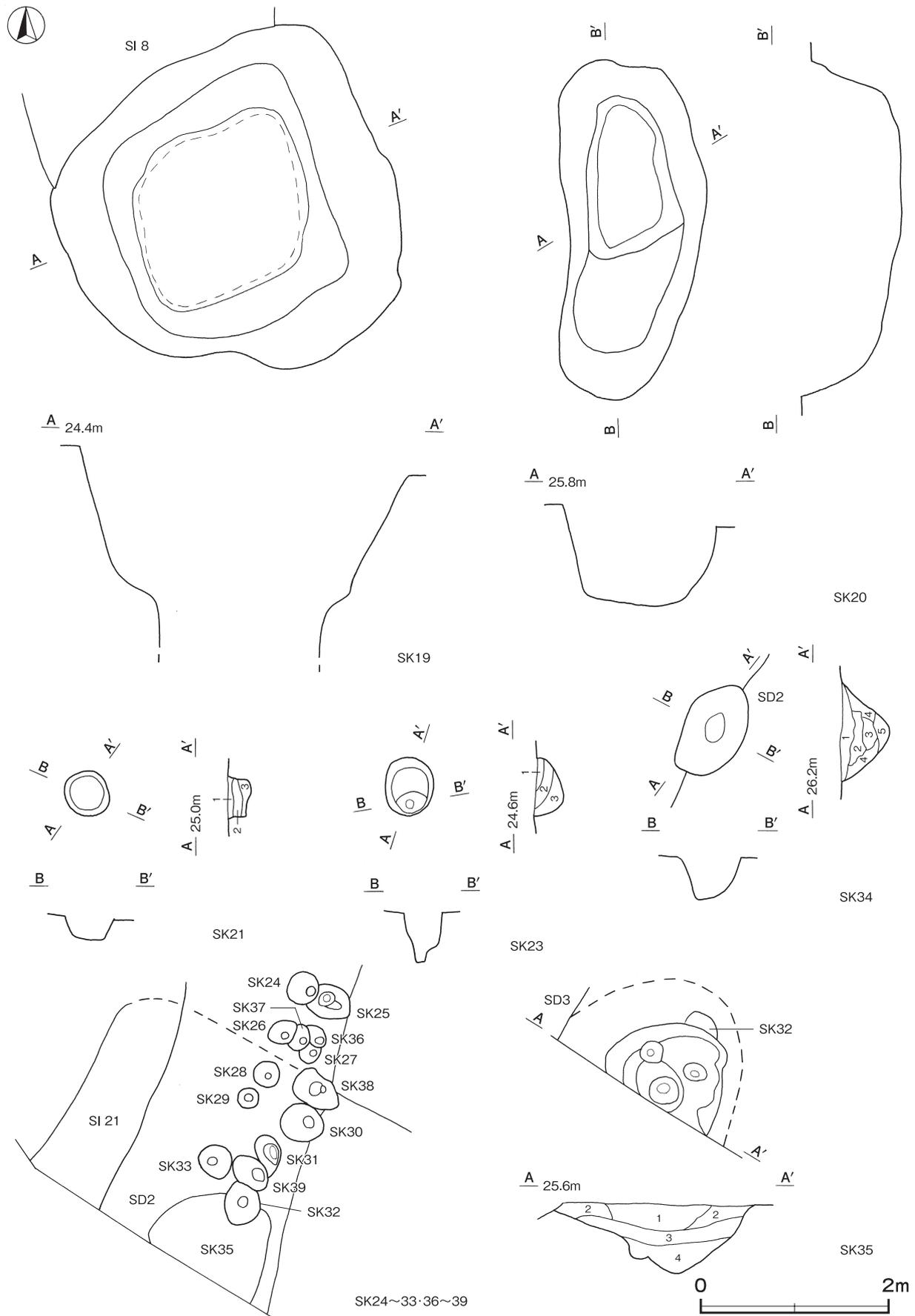
土坑については、実測図（第78～81図）、土層解説及び一覧表にて掲載する。調査年度は、第2～23号土坑が2015年度、第24～45号土坑が2016年度である。



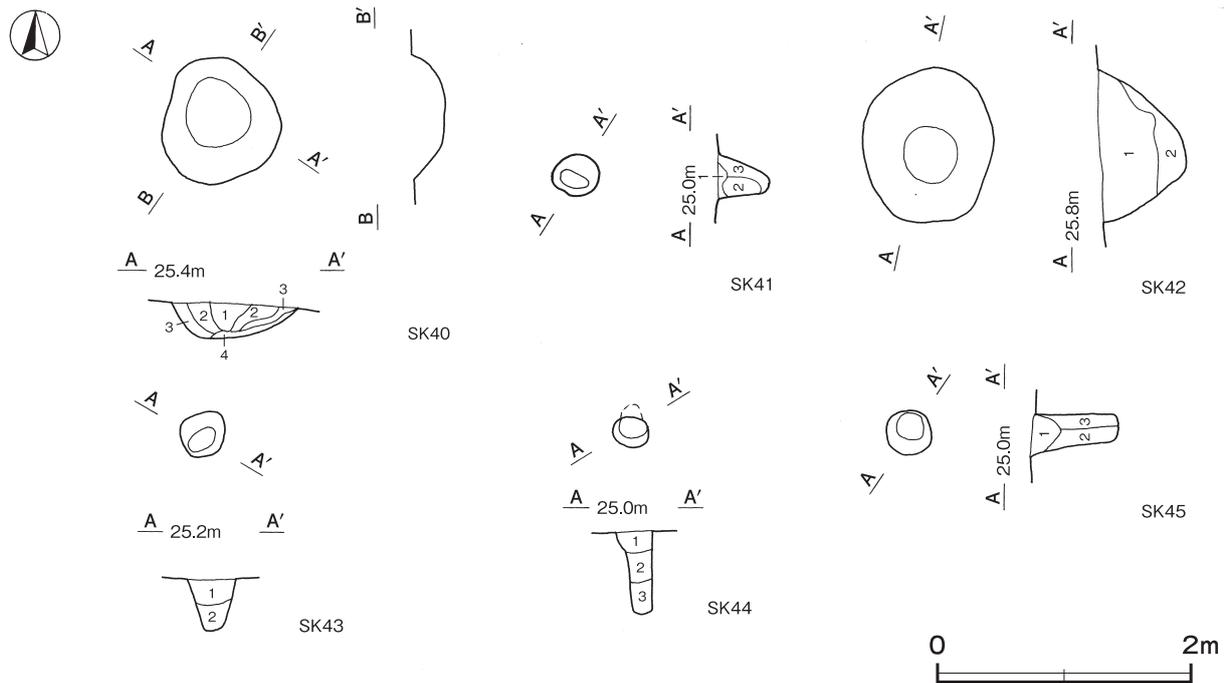
第78図 その他の土坑実測図(1)



第79図 その他の土坑実測図(2)



第 80 図 その他の土坑実測図(3)



第 81 図 その他の土坑実測図(4)

第 2 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第 3 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第 4 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量

第 5 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第 6 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 7 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第 8 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第 9 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量

第 10 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第 12 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量

第 13 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

第 14 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 15 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 16 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第 21 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 23 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量

第 34 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化物中量, ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 5 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

第 17 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第 35 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第 42 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 黄褐色 ロームブロック多量

第 40 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量
- 3 褐色 ロームブロック多量, 炭化物中量
- 4 にぶい黄褐色 ローム粒子多量

第 41 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第 43 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第 44 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第 45 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

表 7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	D 5 h5	-	[円形・楕円形]	2.73 × (1.38)	25	外傾	平坦	人為 自然	縄文土器, 弥生土器, 石器	
3	D 5 d2	N - 12° - W	楕円形	1.15 × 0.90	20・31	外傾	凸凹	人為		S K 4 → 本跡
4	D 5 d2	N - 65° - E	楕円形	(1.26) × 1.07	27	緩斜	皿状	人為		本跡 → S K 3
5	D 4 b0	-	円形	0.64 × 0.63	54	外傾	平坦	自然	縄文土器	
6	D 4 d0	N - 22° - E	楕円形	1.07 × 0.78	41	外傾	平坦	人為	縄文土器, 弥生土器	
7	D 4 c8	N - 3° - W	楕円形	0.85 × 0.62	83	外傾	平坦	自然	縄文土器, 弥生土器, 石器	
8	D 5 d1	-	円形	0.52 × 0.52	32	外傾	平坦	自然		
9	D 4 a9	N - 42° - W	楕円形	1.18 × 0.80	35	外傾	平坦	自然	縄文土器	
10	D 4 b0	-	円形	0.68 × 0.65	22	外傾 ほぼ直立	平坦	人為		
11	D 5 c1	N - 56° - E	楕円形	1.22 × 0.63	50	外傾	凸凹	自然	縄文土器	
12	D 5 d1	N - 5° - W	楕円形	0.61 × 0.50	27	外傾	平坦	人為	縄文土器, 被熱礫	
13	D 4 c9	N - 43° - W	長方形	3.40 × 1.88	40	外傾	平坦	人為 自然	縄文土器, 弥生土器, 石器, 被熱礫	
14	D 4 e4	-	円形	0.34 × 0.32	53	直立 ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	
15	D 4 b7	-	円形	0.44 × 0.43	26	外傾 緩斜	平坦	自然		
16	C 4 h9	-	円形	0.46 × 0.45	21	外傾 緩斜	平坦	自然		
17	C 4 i8	-	円形	0.61 × 0.58	64	外傾	皿状	自然		
18	C 4 h0	N - 33° - W	楕円形	0.67 × 0.50	27・33	外傾	凸凹	人為		
19	D 5 h4	-	不整形	3.60 × 3.59	225	外傾	平坦	人為	縄文土器, 弥生土器, 石器, 被熱礫	本跡 → S I 8
20	D 4 c4	N - 90°	不定形	3.65 × 1.54	94	ほぼ直立	平坦	人為		
21	D 4 a8	-	円形	0.49 × 0.47	27	外傾	平坦	自然		
23	D 4 a6	N - 5° - W	楕円形	0.65 × 0.52	53	ほぼ直立	凸凹	自然	弥生土器	
24	D 2 f0	-	円形	0.36 × 0.33	68	直立 外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
25	D 2 f0	N - 56° - W	楕円形	(0.40) × 0.37	61	外傾	凸凹	人為		S D 2 → 本跡
26	D 2 f0	N - 24° - E	[楕円形]	(0.35) × (0.26)	74	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
27	D 2 f0	N - 55° - E	不定形	0.23 × 0.20	69	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
28	D 2 f0	N - 62° - W	楕円形	0.29 × 0.26	72	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
29	D 2 f0	-	円形	0.23 × 0.22	52	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
30	D 2 f0	-	円形	0.44 × 0.41	41	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
31	D 2 f0	N - 8° - W	不整形楕円形	0.47 × 0.27	62	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
32	D 2 f0	N - 15° - E	[楕円形]	(0.45) × 0.37	81	外傾	皿状	人為		S D 2, S K 35 → 本跡
33	D 2 f0	N - 32° - W	楕円形	0.37 × 0.33	71	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
34	D 3 b1	N - 26° - E	楕円形	1.06 × 0.67	50	外傾	皿状	自然		S D 2 → 本跡
35	D 2 f0	N - 30° - E	[楕円形]	(2.11) × (1.35)	75	外傾 緩斜	凸凹	人為		S D 2 → 本跡 → S D 3, S K 32

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
36	D 2 f0	N - 52° - W	[楕円形]	0.30 × 0.20	34	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
37	D 2 f0	N - 50° - W	[楕円形]	0.26 × (0.19)	68	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
38	D 2 f0	N - 58° - W	楕円形	0.52 × 0.36	55	外傾	凸凹	人為		S D 2 → 本跡
39	D 2 f0	N - 38° - W	楕円形	0.45 × 0.32	83	直立 外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
40	C 4 i1	-	不整形	1.01 × 0.95	26	緩斜	平坦	自然		
41	C 4 j2	-	円形	0.33 × 0.32	41	直立	皿状	自然		
42	D 3 c5	N - 11° - E	楕円形	1.25 × 1.05	68	外傾	平坦	人為		
43	E 4 e3	N - 38° - E	楕円形	0.41 × 0.37	42	ほぼ直立	平坦	人為		
44	E 4 d4	N - 80° - W	楕円形	0.31 × 0.25	66	直立	平坦	自然		
45	E 4 d5	-	円形	0.37 × 0.36	71	直立	平坦	自然		

(4) 集石遺構

第1号集石遺構 (第82図)

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD 5 i5区、標高24mほどの緩斜面部に位置している。

規模と形状 掘方は長径0.66m、短径0.57mの楕円形で、長径方向はN - 35° - Eである。深さは7cmで、底面は平坦で礫が敷かれている。壁は外傾している。

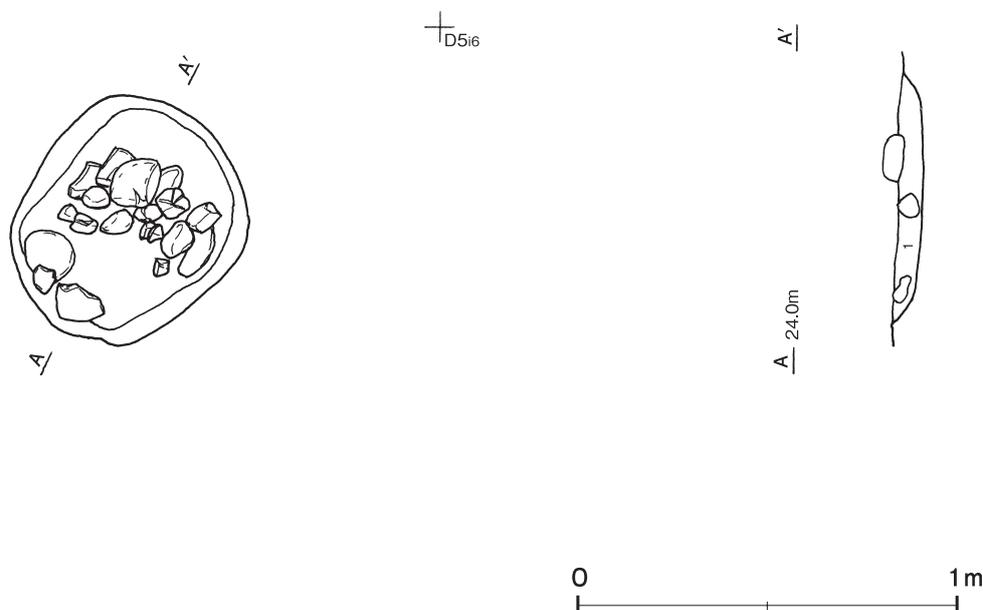
覆土 単一層で、混入物のほとんどない黒褐色土が礫間に入り込んでいることから、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 被熱礫15点、石器7点(磨石)が、土坑状の掘り込みの底面に敷かれた状況で出土している。石材は安山岩と砂岩で、総重量は9.7kgである。磨石も全点被熱しており、再利用されたものと考えられる。

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。礫の出土状況や赤変した状況から、集石の中央部で火を燃やしたと考えられる。



第82図 第1号集石遺構実測図

第2号集石遺構（第83図）

調査年度 2016年度

位置 調査区東部のE4b5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 掘方は、径0.61mの円形である。深さは12cmで、底面は皿状で礫が敷かれている。壁は緩やかに傾斜している。

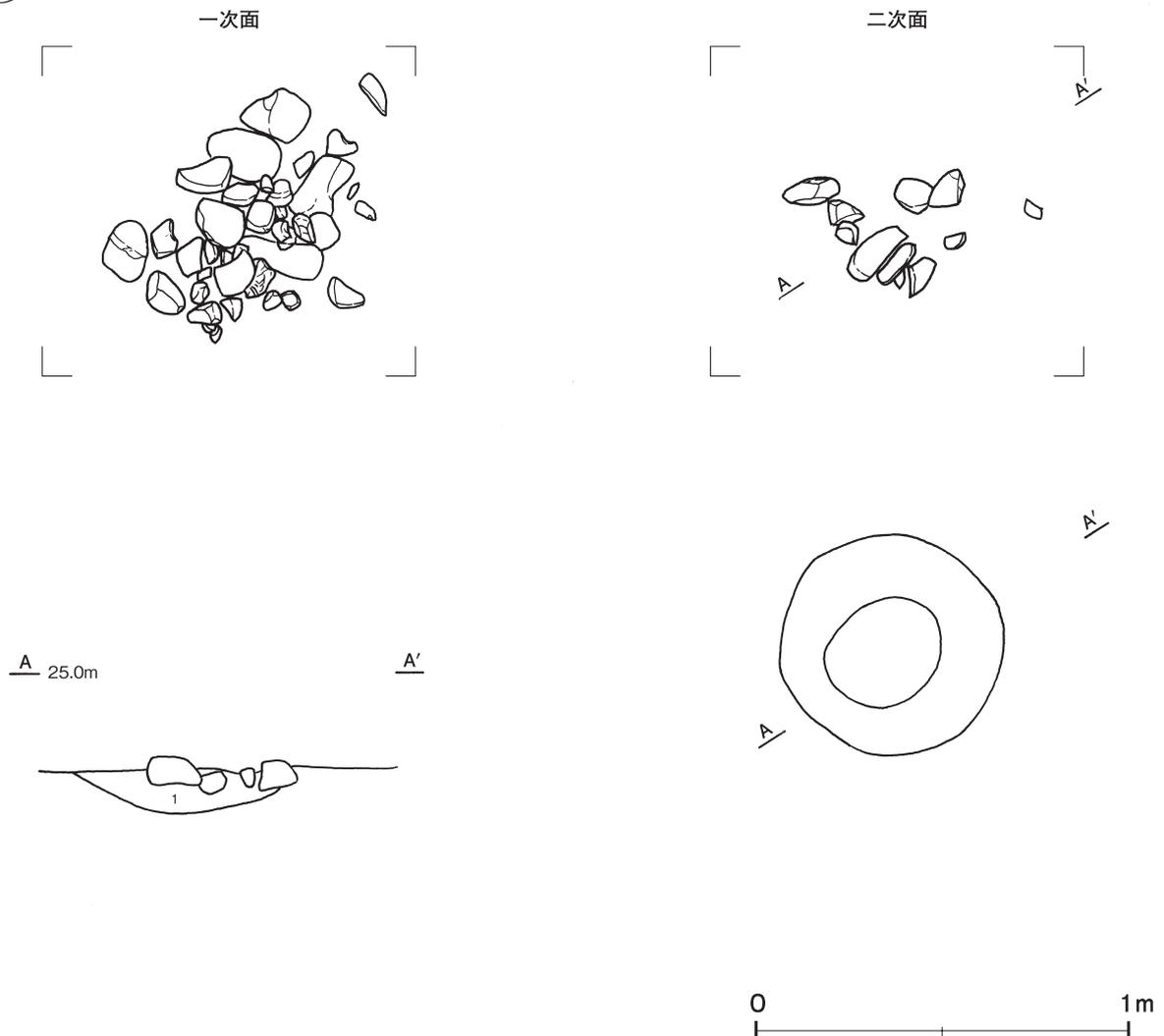
覆土 単一層で、混入物のほとんどない黒褐色土が礫間に入り込んでいることから、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 被熱礫42点、石器14点（磨石10、敲石2、台石2）が、土坑状の掘り込みの底面に敷かれた状況で出土しているほか、弥生土器片1点（広口壺）が出土している。石材は安山岩と砂岩で、総重量は22.3kgである。石器も全点被熱しており、再利用されたものと考えられる。弥生土器は、細片で混入と考えられる。

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。礫の出土状況や赤変した状況から、集石の中央部で火を燃やしたと考えられる。遺構の形状や遺物の出土状況から、第1号集石遺構と同時代と考えられる。



第83図 第2号集石遺構実測図

表8 その他の集石遺構一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	D 5 i5	N - 35° - E	楕円形	0.66 × 0.57	7	外傾	平坦	自然	被熱礫	
2	E 4 b5	-	円形	0.61 × 0.61	12	緩斜	皿状	自然	被熱礫	

(5) 遺物包含層

第2号遺物包含層 (付図)

調査年度 2016年度

位置 調査区東部のE 4 a9 ~ E 4 b0区にかけての標高25mほどの台地平坦部に位置している。

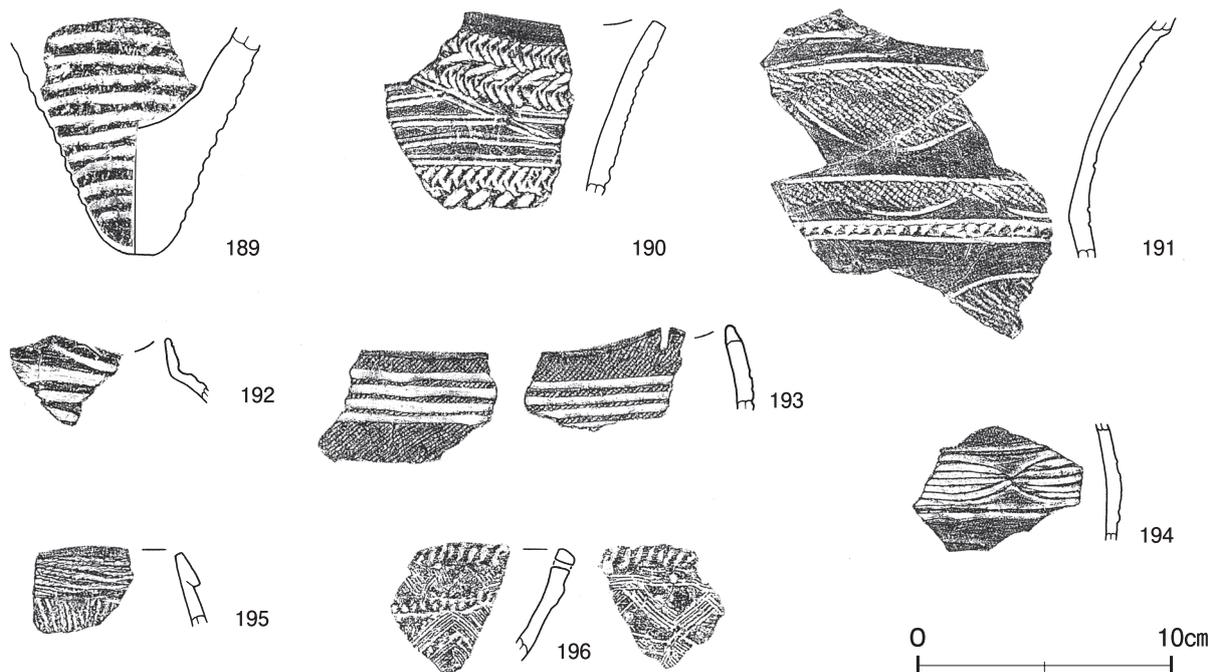
規模 東西幅・南北幅それぞれ約7mにかけて確認した。

遺物出土状況 被熱礫792点、石器29点(磨石20、磨・敲石4、敲石3、砥石1、台石1)、自然礫18点、縄文土器片9点(深鉢)、弥生土器片9点(広口壺)のほか、土師器片1点(椀)が基本層序の第3層中から出土している。石器を含むすべての石類は安山岩と砂岩を主体としており、そのほか流紋岩・泥岩・チャート・瑪瑙を確認した。石器・自然礫を含む石の総重量は、78.7kgで、9割以上を被熱礫が占めている。被熱礫の多くが破碎された状態で出土しており、接合する破片もあることから、投棄されたものと考えられる。

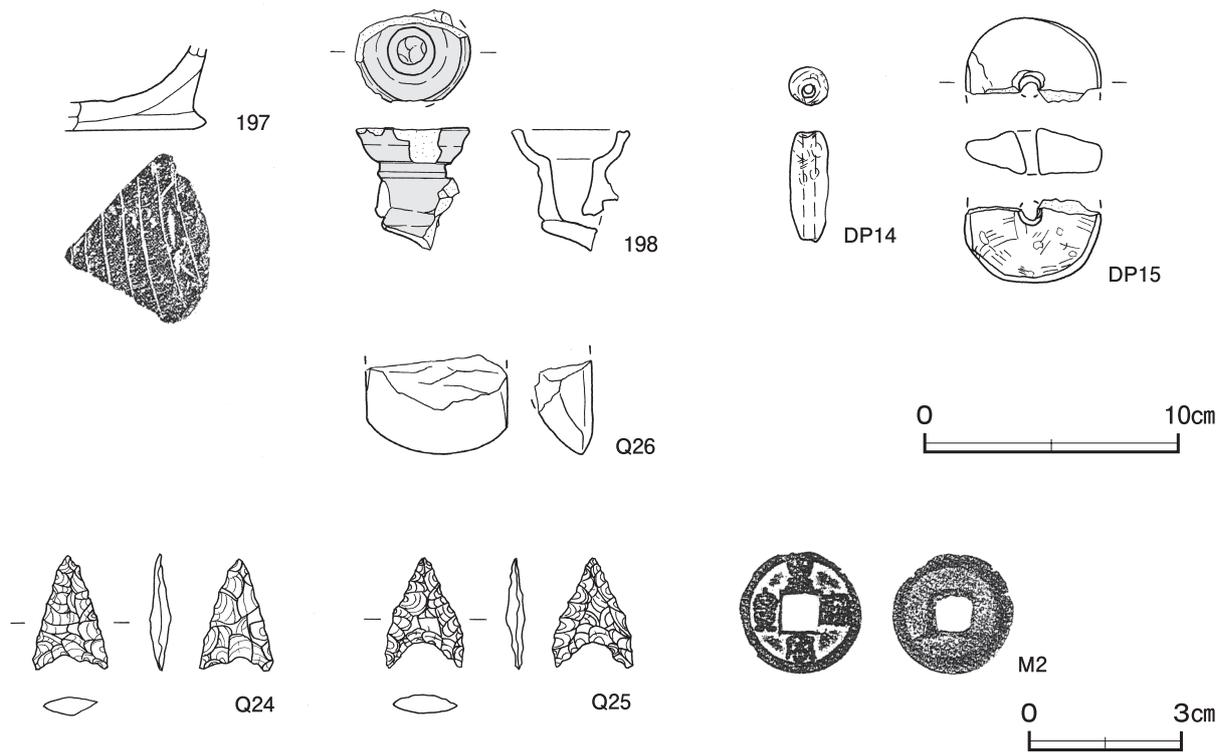
所見 時期は、出土遺物や層位から、縄文時代から弥生時代の範疇に入ると推測される。破碎され不要となった被熱礫の捨て場として利用されたと考えられる。遺構の配置や出土した被熱礫から、第1・2号集石遺構との関連が考えられる。

(6) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物について、実測図(第84・85図)及び観察表を掲載する。



第84図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 85 図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第 84・85 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
189	縄文土器	深鉢	-	(9.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	横位の沈線	D 4h3	5% PL22 早期中葉
190	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	橙	普通	波状口縁 貝殻腹縁圧痕 横・斜位の平行沈線	S I 8 覆土中	前期中葉
191	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	沈線で区画した R L 単節の磨消縄文 刺突文	S I 1 覆土中	後期後葉
192	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	波状口縁 横位の沈線	第 3 号堅穴 遺構覆土中	晚期中葉
193	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	黒褐	普通	波状口縁 横位の単節縄文 LR 後横位の沈線	S I 2 覆土中	PL22 晚期中葉
194	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	暗灰黄	普通	外面磨き 沈線・浮線文	S I 2 覆土中	PL22 晚期中葉
195	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	明黄褐	普通	捺糸文	S I 2 覆土中	PL22 晚期中葉
196	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による刻み 6 本櫛歯状工具 隆帯に縄文原体による刺突 焼成前穿孔 2 か所	2015 年度表土	後期中葉
197	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	橙	普通	底面条線文	2015 年度表土	後期後半
198	灰釉陶器	浄瓶	[4.6]	-	-	長石・黒色斑点	灰白 灰オリーブ	良好	外・内面施釉	E 5 d1	5% PL24 猿投産

番号	器種	径	長さ/厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP14	管状土錘	1.5	4.5	0.4	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	全面ナデ調整	D 3 d4	PL24
DP15	紡錘車	5.4	1.8	0.6	(26.8)	長石・石英・角閃石・赤色粒子	にぶい褐	上下面ハケ目後ナデ調整 一方向からの穿孔	D 4 h4	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 24	鎌	2.3	1.5	0.4	1.0	黒色ガラス質 安山岩	無茎	2016 年度表土	PL23
Q 25	鎌	2.3	1.6	0.4	0.9	安山岩	無茎	E 4 f4	PL23
Q 26	磨製石斧	(3.8)	5.6	2.3	(73.3)	緑岩	基部欠損 刃部表裏から砥ぎ出す 裏面敲打痕残る	2015 年度表土	

番号	種別	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 2	銭貨	皇宋通寶	2.5	0.7	0.1	2.4	銅	1039 年	篆書	2016 年度表土	PL24

第4節 ま と め

1 はじめに

当遺跡は、那珂川支流の桜川と沢渡川が合流する台地先端部に位置している。今回の調査では、縄文時代の遺物包含層1か所、弥生時代後期後半の竪穴建物跡25棟、竪穴遺構2基、土坑1基、古墳時代の竪穴遺構1基、平安時代の竪穴建物跡3棟などを確認した。確認した遺構遺物の大半は、弥生時代後期後半に比定されるものである。ここでは、遺構を確認できた主な時代について概観し、検討を加えまとめとする。

2 縄文時代

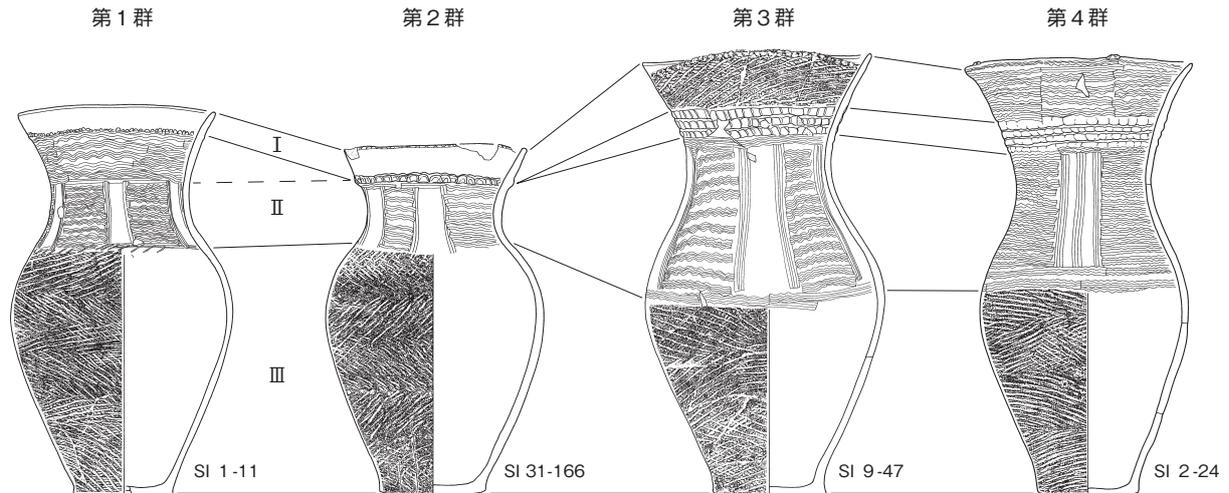
今回の調査で、遺物包含層1か所を確認した。中心となるのは早期中葉の田戸下層式土器で、この時期に捨て場として利用されたものと考えられる。また、直前の撚糸文期末葉にあたる天矢場式に比定できる土器片も2点確認しており、掲載したものでは8（第5図）が該当する¹⁾。このほか、遺構に伴うものではないが、後期後葉の安行式や晚期中葉の大洞A式併行の時期に比定できる土器片も複数出土している。当遺跡や隣接する植松遺跡では、水戸市の確認調査によって縄文時代中期の土器片が発見されていたが²⁾、早期・後期・晩期にも遺跡が形成されたことが判明した。

3 弥生時代

(1) 十王台式土器について

当遺跡は、弥生時代後期後半には十王台式土器の文化圏に含まれており、今回の調査では十王台式土器が多量に出土している。十王台式土器は、1939年に山内清男氏によって設定され³⁾、二軒屋式土器との分別を行った鈴木正博氏によって研究の基礎が築かれている⁴⁾。その後、当財団の弥生時代研究班⁵⁾や海老澤稔氏⁶⁾、鈴木素行氏⁷⁾らにより研究が進められ、それぞれ十王台式の細分が行われている。ここでは、これら先学の成果を参考にして当遺跡から出土した十王台式土器を検討することにする。

十王台式土器は、胴部下半に附加条縄文を施文し、上部には櫛描文によるスリットで形成した縦区画内に同じく櫛描文による充填波状文を施文していることが特徴である。附加条縄文は、附加条二種(附加1条)を主体とし、そのほか頸部に押圧隆起線と呼ばれる隆帯が付くことが典型である。器種構成はほとんどが広口壺で、前述した櫛描文で施文される土器のほか、櫛歯を用いず附加条縄文を全体に施文する土器がある。その他の器種として高坏や浅鉢があるが、当遺跡の出土土器の組成には浅鉢は含まれておらず、代わりに蓋が加わっている。これらの蓋が十王台式の組成に含まれているかどうかは明確でない。広口壺は、形状は類似するが、大きさに小・中・大の3タイプがあり、作り分けがされていたことが考えられている。当遺跡の出土した土器のうち器高が測れるものが30点あり、16.3～23.0cmのものを小形、26.7～35.5cmのものを中形とすることができる。大形のものに器高を測れるものはないが、底径は中形が9.4cm以下に対し大形のは12.8～16.9cmで、口径は中形が18.9cm以下に対し大形は21.6cm・23.2cmと有意の差を持って作られていることから判別は可能である。逆に小形・中形の別では、口径・底径の計測値が一部混在する。これは、鈴木素行氏の定義した細頸・中頸・太頸の形態差⁸⁾によるもので、口縁部片や底部片のみで小形・中形を分けるのは難しい場合がある。この小・中・大の3タイプは、主に用途による違いと考えられ、中形の中頸のものが主に煮沸具として利用されたようである。当遺跡からの出土土器で煮沸痕が確認できる



第86図 十王台式土器の変化（S：1／6）

ものは、35点あり、そのうち30点が中形である。

次に当遺跡から出土した十王台式土器の特徴を比較し、分類を行う。対象はスリットによる縦区画内充填波状文を持つ中形の土器とする。今回出土した中形の十王台式土器は、全体像が復元できるものに関しては全て中頸タイプである。特に注目した点は、器形、I（口縁部）文様帯、II（頸部）文様帯、隆帯の4項目で、そのほか櫛歯の本数、スリットの区画数、縄文原体の別を参考にした。それぞれの特徴を比較していくと以下の4群に分けられる（第86図）。

第1群…11（SI 1）、165（SI 31）が該当する。

口径が胴部最大径より小さく、胴最大径部が頸括れ部と底部の中央より上に位置することから、やや肩の張った印象を受ける器形となる。I文様帯は無文で、最大の特徴はII文様帯が分化している点にある。隆帯は1条で、縄文原体による刺突を施すもの、爪痕を付けながらしっかりと押圧を行った押圧隆起線を持つものが確認できる。施文に使用する櫛歯は3・4本、スリットによる区画は6・7単位、胴部の縄文は附加条一種（附加2条）または附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成である。

第2群…166・167（SI 31）が該当する。

器形やI文様帯が無文である点は第1群と類似するが、II文様帯の分化がないものとなる。隆帯は爪痕を付けながらしっかりと押圧を行うもので、条数は166は第1群同様1条であるが、167は押圧隆起線が4条と多く、その分I文様帯が狭まっている。施文に使用する櫛歯は3・4本、スリットによる区画は5・6単位、胴部の縄文は附加条一種（附加1条）または附加条二種（附加1条）または附加条軸縄不明縄文による羽状構成である。附加条一種（附加1条）縄文は、当遺跡において非常に稀な施文具と考えられる。また、附加条軸縄不明縄文は、軸縄の縄文が土器に付されないため、撚糸文と同様の施文状態になっているものである。

第3群…46・47（SI 9）、123（SI 23）、140（SI 27）などが該当する。

口径が胴部最大径と同じくらいで、胴最大径部が頸括れ部と底部の中央付近に位置することから、やや丸みを帯びた印象になる。I文様帯は第1・2群よりやや広く、そこに櫛歯によるスリットや波状文、または胴部と同じような附加条縄文が施文される。47や123のようにII文様帯も広くなり、文様帯が下がった印象を受けるものもある。押圧隆起線は中形に関しては3条でまとまっており、押圧は粗くなり凹凸がわかる程度に圧してあるだけのものが多い。47は、第2群と同じように爪痕を付けているが、

凹凸ははっきりせず、平坦な印象を受けるものである。施文に使用する櫛歯は3～7本、スリットによる区画は4・5・8単位、胴部の縄文は附加条二種（附加1条）または附加条軸縄不明縄文による羽状構成である。

第4群…21・24・25（SI 2）、74（SI 13）、96～98・101（SI 19）などが該当する。

口径が胴部最大径と同じくらいかそれよりも大きく、胴最大径部の位置は第3群と同じような位置であるが、器高に対し胴部最大径が短く細身の印象である。I文様帯は第3群よりもさらに大きく主に波状文が施されている。口唇部に突起が付くものがある。押圧隆起線は中形に関しては3・4条で、押圧は粗く、第3群と比較しても凹凸がはっきりしないものが多い。施文に使用する櫛歯は4～6本、スリットによる区画は3・4単位、胴部の縄文は中形に関しては附加条軸縄不明縄文による羽状構成である。

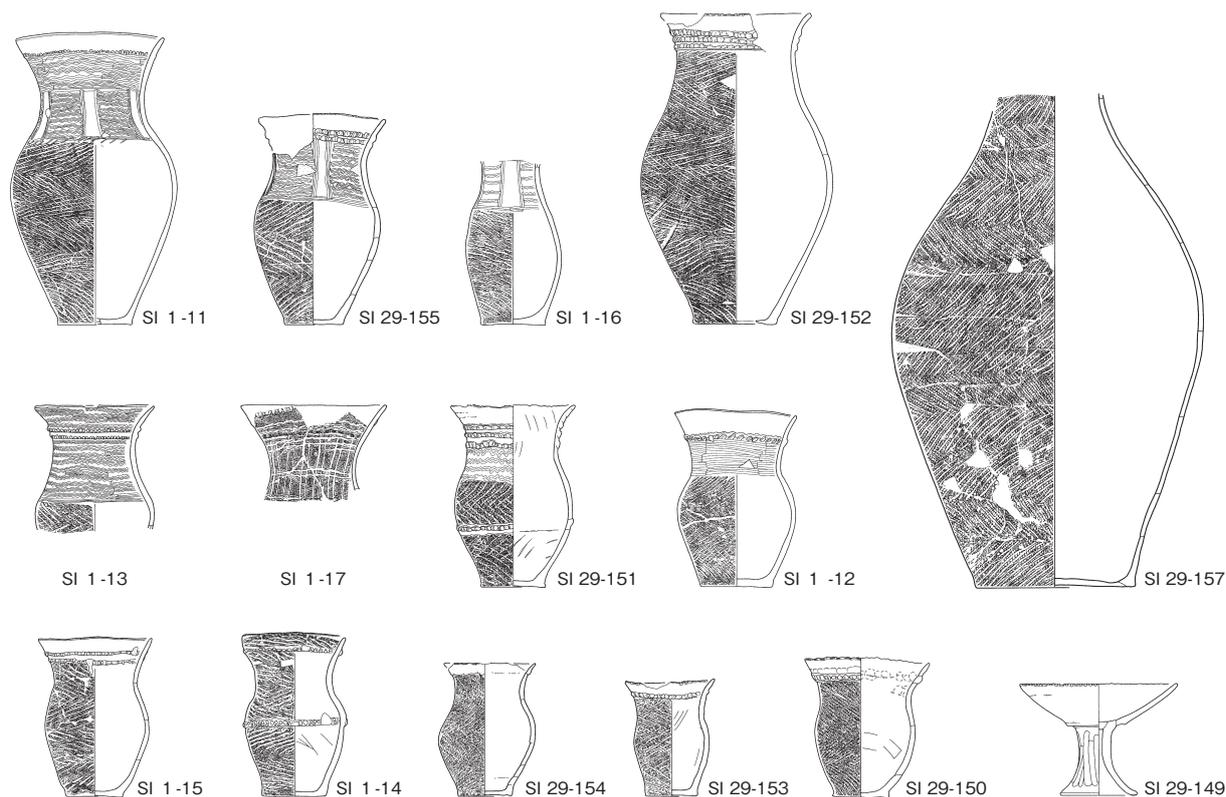
以上の分類結果は時間の経過に伴った変化と考えられ、第1群が最も古く、数字の順に新しくなっていくものと考えられる。器形は、第1群の口径が胴部最大径より小さく肩の張った形状から、第3群の口径と胴部最大径が同じで丸みを帯びた形状に変化し、第4群の口径が胴部最大径より大きく細身の形状へと変化していく。酒沼川流域の茨城町大戸遺跡群でも、大畑遺跡と矢倉遺跡出土の十王台式土器を比較して、当遺跡の第3群から第4群への変化と同じ傾向が指摘されている⁹⁾。I文様帯の幅は、第1・2群では幅2～3cm程度で、第3群では3～4cmに、第4群では5cm前後に広がっている。それに伴い、第1・2群では無文だったものが、第3群になると櫛描文や縄文が施文されるようになり、第4群では波状文が使用されるようになる。隆帯は第1群の1条から第2群の2～4条、第3群の3条、第4群の3・4条と幅を持ちながら徐々に条数を増やしていく傾向にある。また、隆帯の押圧の仕方も、変化がみられる。第1群では縄文原体で隆帯に刺突するものや、しっかりと押圧を施し波状の凹凸を形作る押圧隆起線がある。押圧隆起線は、第2群でも引き続きしっかりと押圧したものがみられ、中には爪痕をつけて装飾するものもある。第3群になると、押圧が粗くなる傾向がみられ、前段階ほど凹凸のはっきりしたものがみられなくなる。また、第2群同様、爪痕をつけるものが確認できる。当遺跡出土土器には、押圧隆起線に爪痕をつけるものは、多い遺構でも10点に1点ある程度で、さほど主体的な文様ではないようである。第4群ではさらに凹凸が目立たなくなり、爪痕をつけるものはみられなくなる。当遺跡から出土した十王台式土器の中形土器は、以上のような変遷を遂げており、これらをもとに、当遺跡の十王台式期集落は第1期から第4期に分けることができる。第1期から第4期は、それぞれ第1群から第4群の土器に対応させるものとする。

(2) 各時期の土器様相と遺構

前項で確認した各時期の土器様相を概観し、確認した遺構の時期を検討する。当遺跡の十王台式期の遺構の埋没状況は、全て埋め戻されているか、埋め戻した後に黒色土が中央の窪地に自然堆積したかのどちらかに該当する。遺構の時期決定にあたっては、層位を含めた出土状況から判断した同時期性も検討に入れた。

第1期（第87図）

当地に弥生時代の集落が営まれ始めた時期である。この時期は中形土器のII文様帯が分化しており、前述した11・165（第62図）のほかにも第23号竪穴建物跡から出土した118（第45図）も該当すると考えられる。これらは十王台式直前段階として十王台1a式という細分型式が与えられている¹⁰⁾。この時期の遺構として挙げられる第1号竪穴建物跡から出土した土器で、十王台式土器の特徴を備えているのは11・16のみである。そのほかは、1条の隆帯下に櫛歯による横走文を施文する12や、2条の押圧隆起線で区



第87図 第1期の土器 (S : 1 / 8)

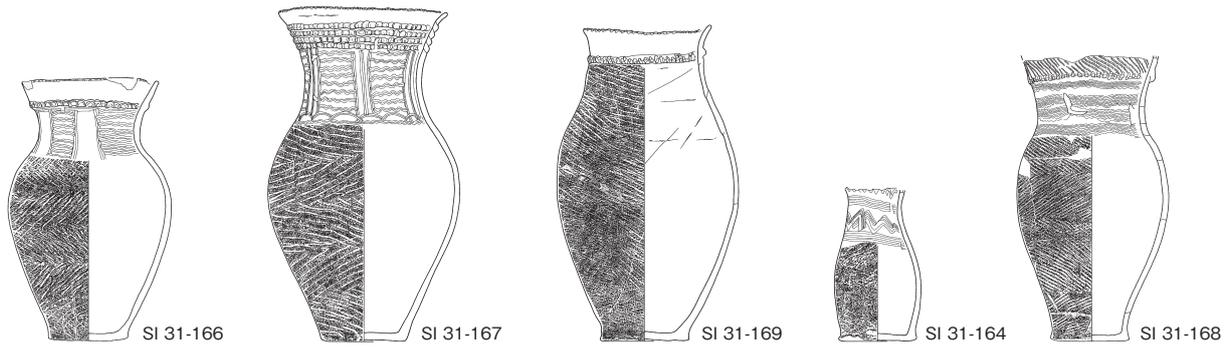
画されたⅠ・Ⅱ文様帯に櫛歯による波状文を施文する13などがあり、これらの特徴を持つ土器群は長峯(新)式に比定できる¹¹⁾。長峯式の特徴をまとめると、以下の通りである¹²⁾。

- (1) 基本組成は広口壺の精製・粗製土器の組み合わせで、ほかに鉢・高坏などがある。
- (2) 口縁部は素縁のものと複合口縁とがあり、口縁部が無文のものは素縁化が進む。素縁の場合、口縁下に押圧隆起線がつく。長峯(新)式になるとⅠ文様帯に波状文が施されるものがある。
- (3) Ⅱ文様帯には、櫛歯4本前後の横走波状文、横走波状文+円形刺突文、連弧文、格子目文、縦区画充填波状文などが施されるものがある。十王台1a式のように文様帯が分割されることはほとんどない。長峯(新)式では、頸部に無文帯を持つ土器が出現する。
- (4) Ⅲ文様帯には附加条縄文が羽状に施文される。附加条縄文は一種(附加2条)が多く、一種(附加1条)のものもある。長峯(新)式になると附加条二種(附加1条)も施文されるようになる。

同じような組成は、第29号竪穴建物跡にもみられる。155は、十王台式の特徴を持っているが、胴部の縄文が附加条一種(附加1条)で、前述した長峯式の要素も持っている。小形のためⅡ文様帯が分化していないが、十王台1a式の土器とすることができるだろう。150～154も長峯(新)式と考えられる。

また、他地域との交流を示す資料も出土している。第1号竪穴建物跡出土の18・19・20(第8図)・第29号竪穴建物跡出土の159(第58図)は二軒屋式の特徴を持つ土器である。18は縄文原体による帯状刺突列と櫛歯による山形文内充填波状文が施文され、胴部に附加条一種(附加2条)を羽状に施文したものである。19の胎土は在地のものと考えられ、20・159は細礫を含む胎土で、搬入品と考えられる。

以上のように、第1期の遺構は第1・29号竪穴建物跡で、そこから出土した土器群は、長峯(新)式土器を主体とし、その中に十王台1a式土器や二軒屋式土器が含まれる様相を呈している。この2棟から出土した土器群は、十王台式の成立を考える上で非常に興味深い資料である。



第88図 第2期の土器 (S : 1 / 8)

第2期 (第88図)

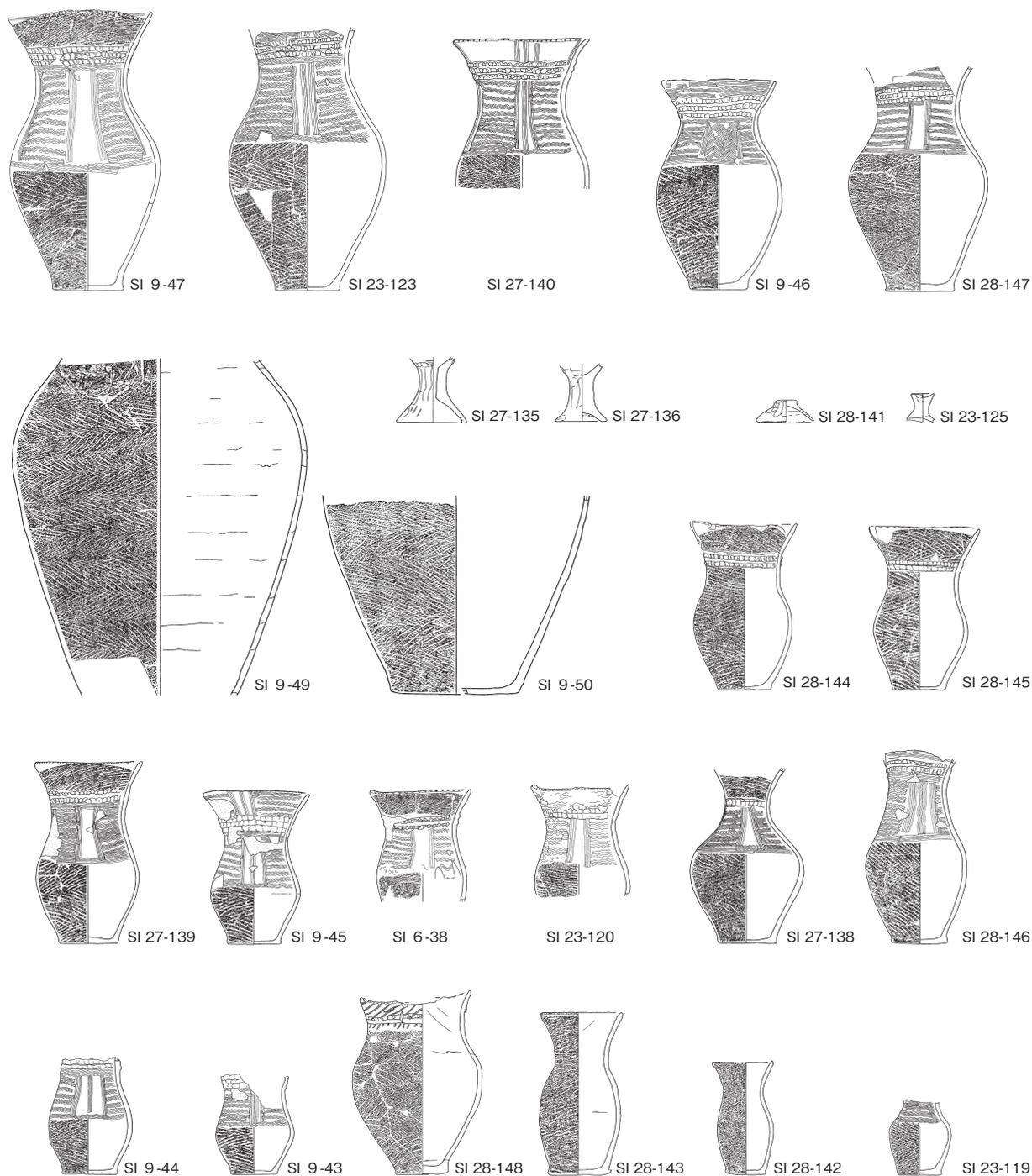
中形の土器にⅡ文様帯の分化がなくなる時期で、第2群の十王台式土器として第31号竪穴建物跡出土の166・167を挙げた。166は、1条の押圧隆起線下に櫛歯による横走文を1段施文し、その後スリットによる縦区画充填波状文を施している。十王台式土器は、Ⅲ文様帯に縄文を施文した後に、Ⅱ文様帯とⅢ文様帯の区画として横走文、波状文、下向き連弧文などを全周させることが典型となる。しかし、この個体は、区画の施文を行わず、Ⅱ文様帯に施文した後にⅢ文様帯に縄文を施文しており、十王台式土器に多くみられる作法に則ったものではない。十王台式土器の範型となるイメージが定まっていない段階のものと考えられる。166は、後の段階に続く製作作法が確認できるものである。164は、櫛歯による文様構成は長峯(新)式のものと考えられるが、櫛歯の数が6本と多く、二軒屋式の影響を受けたものと考えられる。169は口縁が広がらない器形で、他の土器と比べて非常に重量感がある土器である。大洗町長峯遺跡第42号住居跡出土土器¹³⁾や、同町髭釜遺跡第4号竪穴建物跡出土土器¹⁴⁾に類似した器形を確認できる。これら二つの土器には櫛歯描文が入れているが、169は1条の隆帯下に縄文を施文しているのみである。168は、二軒屋式土器で、胎土は在地のものではなく搬入品である。

第2期の遺構は、第21・31号竪穴建物跡である。第31号竪穴建物跡は、前段階の土器である165が埋め戻しの際に投棄されており、第1期直後の建物跡と考えられる。第21号竪穴建物跡に関しては、埋め戻された下層の出土遺物全体から判断した。このほか、第1期から第2期の間比定できる遺構として、第2号竪穴遺構と第22号土坑がある。第22号土坑出土の179(第67図)は大形広口壺の胴部以下が土坑に埋設されていたもので、附加条一種(附加1条)縄文が羽状に施文されている。胎土は168などにみられる細礫を含んだもので、二軒屋式文化圏からの搬入品と考えられる。

第3期 (第89図)

この時期になると十王台式土器の定型化が進み、小形のものも含み、ほとんどの土器がスリットによる縦区画充填波状文を持つようになり、文様帯の区画や構造が安定する。一方で、中形土器の観察でも確認できたように、各文様帯への施文方法にはバリエーションがみられる。Ⅰ文様帯の施文パターンには、附加条縄文、櫛歯による横走波状文、スリット、スリットと波状文の組み合わせが確認できる。Ⅱ文様帯のスリットは、2条のものと3条のもの、2条のスリット間に山形文を施文するもの、スリットが波状のものなどがある。そのほか、第30号竪穴建物跡出土の163(第60図)のように2条のスリット間に格子目文を施すものもこの時期のものと考えられる。49・50のような大形の土器もしっかりと焼成されており、焼成技術の向上がみられる。

また、十王台式土器にも搬入されたものが確認できる。十王台式土器には、那珂川流域で製作されたも



第89図 第3期の土器 (S : 1 / 8)

のと久慈川流域以北で製作されたもので違いが確認されている。久慈川流域の土器の胎土には金雲母が含まれていることや、底面の圧痕に久慈川流域では砂目痕が多く、那珂川流域では布目痕が多いことが挙げられる。そのほか、久慈川流域以北の十王台式土器は、大半がスリットが2条で構成され、那珂川流域では3条のものが多くみられる。久慈川流域以北の十王台式の遺跡では、ほぼ在地の十王台式土器で占められるのに対し、那珂川流域では久慈川流域で製作されたと考えられる十王台式土器が一定数みることができる。このことは十王台式土器の移動が久慈川流域から那珂川流域への一方向に限り盛んに行われていた結果と捉えられており¹⁵⁾、当遺跡でもその状況を確認することができる。46は、胎土に金雲母を含み底

面に砂目痕がつくもので、久慈川流域で製作されたものである。

第3期とした土器群の中でも、古い要素を持った土器がいくつか確認できる。38・163は、隆帯下に縄文原体で刺突を行うものであり、この段階ではほとんどみられないものである。147は、文様構成は完全に本期のものであるが、器形は前段階のものとみられるものである。120は、口唇部に5単位とみられる突起をもつものであるが、次の時期によくみられる突起とは形状を異にする、天王山式土器にみられるような突起となっている。

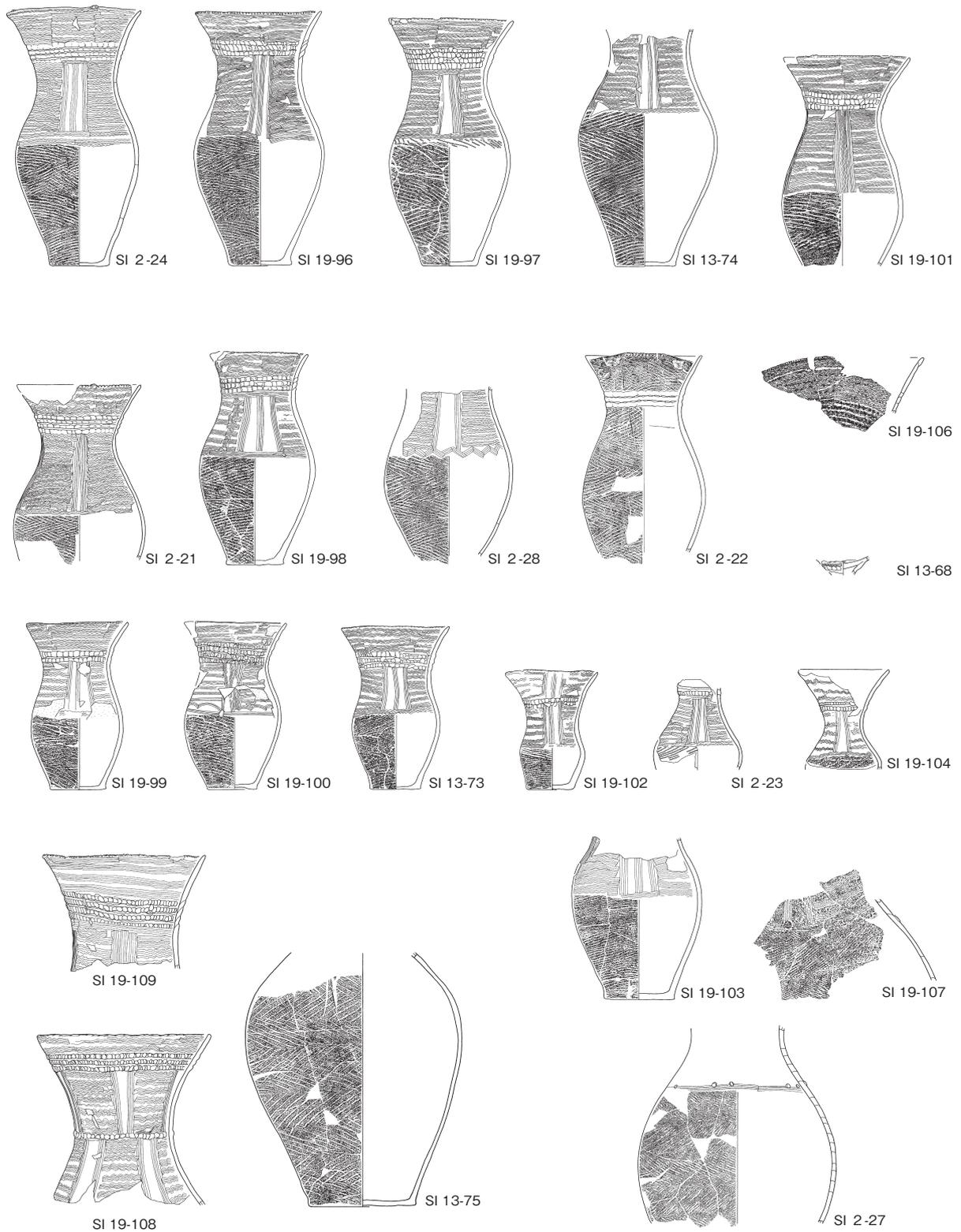
十王台式以外のものとして、119・142・143・148がある。119は、胎土は在地のものであるが、7本櫛歯で施文された二軒屋式土器である。142・143は、全体に附加条縄文を施文しただけの土器で、器形は十王台式土器とは異なり底部が外側に張り出すようになっている。時期は古くなるが類例として、長峯遺跡第42号住居跡出土遺物（第46図3）¹⁶⁾がある。特筆することとして、内面に赤色顔料が付着していることが挙げられる。特に142では明確に認められ、顔料の容器として用いられていたことが推測される。148は、素縁で撚糸文を施文された、十王台式の組成には入らない甕である。施文方法が異なる上、時期は遡るが、美浦村陣屋敷遺跡第32号住居跡出土遺物（第104図571）¹⁷⁾や、土浦市根鹿北遺跡第22号住居跡出土遺物（第48図2・3）¹⁸⁾に同じ器形を確認することができる。しかし、これらの土器の器形もそれぞれ在地の土器型式の中に含まれないようで、さらに南方の臼井南式やその系譜を引き継いだ土器の影響を受けたものと考えられる。148はその流れを受けた土器として捉えた。また、146は施文の構造は十王台式のものであるが、櫛歯が太いことや附加条一種（附加2条）が施文されていることから、樽式や二軒屋式の影響を受けて製作された土器と考えられる。

第3期の遺構数は格段に多くなり、第6・9・12・23・27・28・30号竪穴建物跡が挙げられる。この中で第6・30号竪穴建物跡は、出土遺物の様相から古い段階に位置づけられる。

第4期（第90図）

十王台式土器の規格化がピークに達する。中形の土器の製作手順も均一化され、I文様帯には櫛歯による波状文、隆帯には凹凸の弱い押圧隆起線が3・4条、II文様帯にはスリットによる縦区画充填波状文、III文様帯には附加条二種または軸縄不明の羽状構成が同じように施文される。櫛歯は4～6本で、スリットによる区画は3～5区画である。21・24・101のように口唇部に4単位の突起が付されるものが散見できる。106のように複合口縁を持つものもある。複合口縁を持つ十王台式土器は、山内清男氏の『日本先史土器図譜』¹⁹⁾でも紹介されており、大洗町一本松遺跡の第II調査区第45号住居跡（第152図114）²⁰⁾などで出土しているが、組成に含まれる割合は極めて稀である。また、前段階同様、久慈川流域で製作されたものも当遺跡に搬入されている。28は、胎土に金雲母を含み、II文様帯が2条のスリットで区画されたもので、II文様帯とIII文様帯の区画として山形文が採用されている。久慈川流域では鈴木素行氏の編年による「小祝式梶巾段階」になると、II文様帯とIII文様帯の区画には下向き連弧文が採用されるようになる²¹⁾のだが、28の山形文区画はその前段階に位置づけられるものであろう。第25号竪穴建物跡出土の133（第49図）も、28と同じ段階と考えられる。当遺跡では、第24号竪穴建物跡出土の127（第47図）が「小祝式梶巾段階」に比定できるものであるが、遺構に伴うものは確認できていない。小形土器も同様に均一化されており、大形土器の焼成の状態から前段階よりさらに焼成技術が向上したものと推測される。

他地域との交流をうかがわせる土器は本段階でも確認することができる。27は、スリットが入らず、頸部の横走文上にボタン状突起が張り付けられるもので、二軒屋式土器の特徴を持っている。107は、スリットによる縦区画充填波状文が施文されているが、27同様ボタン状突起が張り付けられ、胴部には附



第90図 第4期の土器 (S : 1 / 8)

加条一種（附加2条）縄文が羽状に施文されており、二軒屋式の影響を受けて製作された土器である。103は、文様構成は十王台式土器であるが、太い櫛歯状工具が用いられており、樽式の影響を受けたものと考えられる。

第4期の遺構も前期から引き続き多く確認され、第2・11・13・15・16・19・22・24・25号竪穴建物跡が挙げられる。このほか、第3期から第4期の間に比定できる遺構として、第5・10・14・17・18号竪穴建物跡がある。

これらの時期の変遷を先学の研究成果と対応させると、表9のように整理されよう。鈴木素行氏の武田西塙段階（新）からは古墳時代に相当すると考えられている²²⁾ことから、今回調査を行った十王台式土器を有する集落は概ね3世紀代に営まれていたと考えられる。

表9 十王台式土器細分の対比

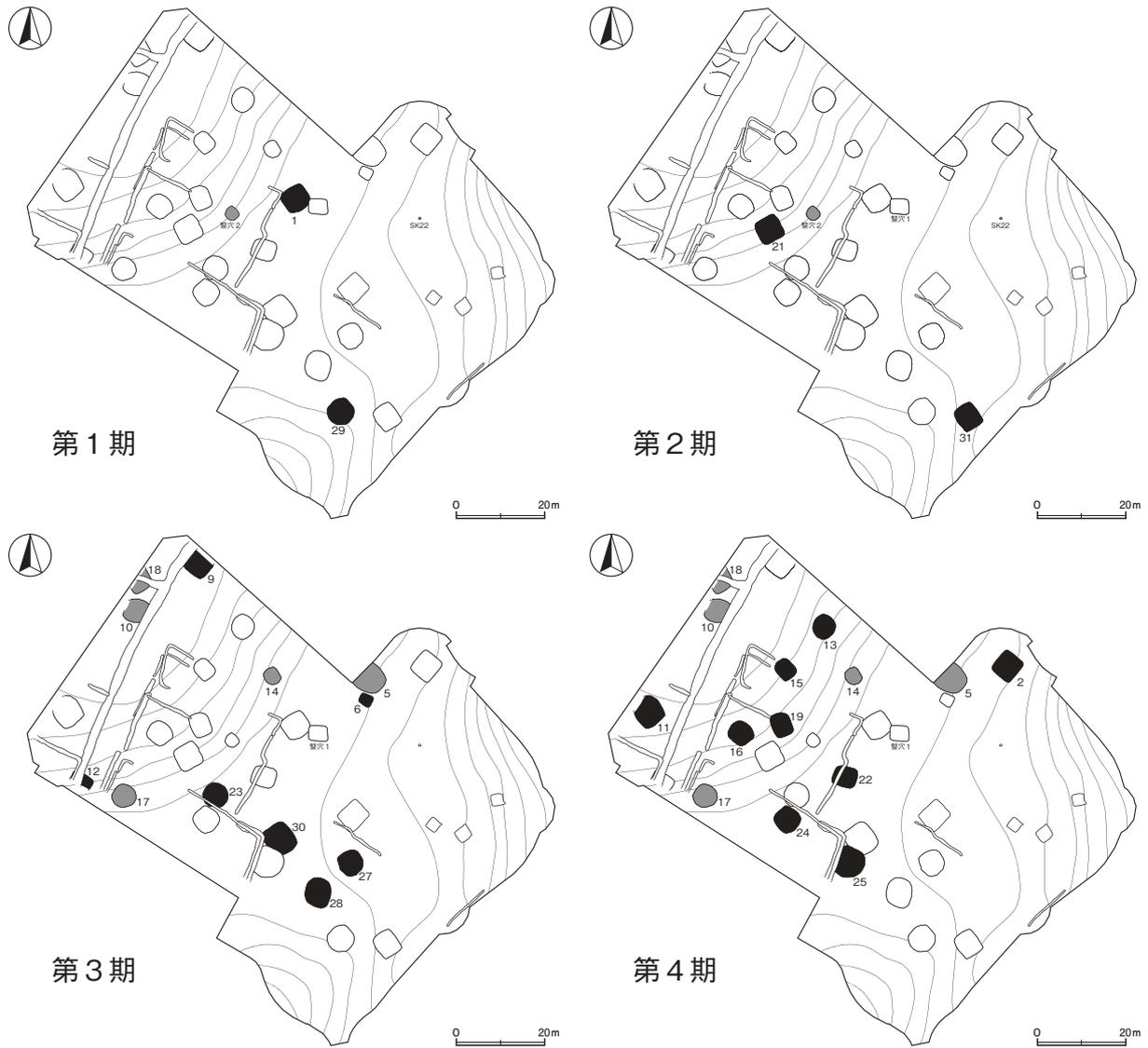
本論		弥生時代研究班 ²³⁾		鈴木（正）・海老澤 ²⁴⁾		鈴木（素） ²⁵⁾
第1期		1 a 式		1 a 式		1 a 式
第2期		1 式		1 式十王台段階		大畑式
第3期				1 式紅葉段階		武田式西塙段階（古）
第4期				2 式矢倉段階		
		1（新）式				

(3) 弥生時代後期後半の集落の様相（第91図）

前項で、当遺跡の弥生時代後期後半土器様相が、4期に渡り変遷することを確認した。ここでは、確認した集落の様相を概観する。

第1期は当地に集落が営まれ始めた時期である。今回の調査では、その前の段階の弥生土器は出土していない。第1・29号竪穴建物跡が該当し、調査区中央部・南部に展開する。詳細は付章に譲るが第29号竪穴建物跡出土の158の底面には、キビ・イネの可能性のある圧痕を確認している。現段階では可能性を示すのみであるが、新しい土地に移住した弥生人が農耕を行ったことが考えられる資料である。第2期には第21・31号竪穴建物跡が該当し、第1期の2棟からやや場所を移して西部・南部に展開している。第2号竪穴遺構は、倉庫的な役割を考えているが、第1・21号竪穴建物跡のどちらかに付随する施設であろう。また、第22号土坑は、上部が削平されており明確にはできないが土器棺墓の可能性はある。第3期になると、建物数が増加し、第4期にピークを迎える。第91図からは、集落の範囲が北西に移動していく様子が伺える。第4期を境に、その後の遺構は確認できない。前述した127や古墳時代前期の土師器が、自然堆積した遺構覆土上層から出土しており、集落は引き続き営まれていたと考えられる。当遺跡の範囲は、今回の調査区域より南側の彰考館や徳川ミュージアムの敷地一帯まで広がっており、古くは「徳川家宅地内弥生遺跡」と呼称されていた。また、調査区北東の谷津を挟んで対岸にある護国神社の境内には植松遺跡があり、十王台式土器が散布する弥生時代の遺跡とされている²⁶⁾。集落はこれらの場所に移動したものと考える。

今回確認した25棟の竪穴建物跡の形状は、隅丸方形や隅丸長方形のものが多いが、円形や楕円形のものも含まれている。全体を確認できなかったものも含め5棟が円形または楕円形で、第2期以外の時期で確認できる。このことから、形状の違いは時期を示すものではなく、系統を異にする集団が存在していたことを示したものとする。炉は25棟中24棟で確認しており、そのうち8棟から炉石を検出している。うち5棟からは据えられた状況で出土しており、各時期において確認できる。これら5つの炉石は、それぞれ炉床の入り口側の際に主軸と直交する形で据えられており、定型化された設置方法であったことが伺



第91図 見川塚畑遺跡における集落の変遷

える。また、炉石が確認されなかった16棟のうち、5棟の炉で被熱していない粘土を確認した。被熱しておらず、炉床上に設置されていることから、廃絶時に置かれたものである。時期は第3・4期に限定される。類例を見つけることはできなかったが、注目すべき事例である。

(4) 遺物から確認できる特徴

出土遺物の中に赤色顔料の利用を示す遺物が確認できた。容器として用いられた142や、赤彩された土器片114（第42図）や、顔料を磨った可能性がある磨・敲石Q14（第45図）である。赤彩土器や顔料の付着した石器は、矢倉遺跡²⁷⁾やひたちなか市武田西塙遺跡²⁸⁾で確認されているが、資料は少ない。当遺跡でも出土したことで、那珂川流域の十王台式文化圏で赤彩が行われていたことがより確実なものとなった。石器は、炉石のほかは磨石・敲石が主である。金属製品は出土していないが、金属器を研いだことをうかがわせる砥石が出土しており、鉄器等を利用していたことが推測できる。

また、自然科学分析により、土器の底面に付いた布目圧痕に、平織や綾織の編組製品のものが含まれることが判明した。今回は確認した事例が少ないため時期による技術の変遷等の分析は難しいが、データを蓄積することによってそうしたことも明らかになる可能性がある。

4 古墳時代

古墳時代の遺構は、第3号竪穴遺構のみであったが、前述したように弥生時代の竪穴建物跡の覆土上層からは4世紀代の土師器片が複数出土しており、周辺に集落が営まれていたことが考えられる。第3号竪穴遺構は、貯蔵穴として設置されたと推測されるピットはあるが、炉や柱穴が存在せず、床面に明確な硬化がみられない。長軸は6mを超え、掘り込みも50cm程度確認できたが、建物として機能したと判断できなかった。遺構に伴う遺物もほとんど確認できないことから、何らかの理由で構築を中断してしまったものと推測した。出土した炭化材は、埋め戻しの際に投棄されたもので、樹種は分析の結果アカガシ亜属に同定される。建築部材として利用されることが多いものであり、想像の域を出ないが、柱として利用するために持ち込まれた可能性がある。

5 平安時代

平安時代の竪穴建物跡が3棟確認できた。これらは9世紀前葉および中葉に比定でき、全てコーナー部に竈を持つ建物跡である。駒澤悦郎氏らの分析によるとコーナー部に竈を持つ「壁隅竈の竪穴建物」は、集落の外縁部にあたる台地縁辺部に構築されている傾向がある²⁹⁾。駒澤氏はこれらの竪穴建物が外界との接触地帯を選択して構築された可能性を述べている。当遺跡で確認した3棟の竪穴建物跡も台地縁辺部に構築されており、同様の可能性を指摘することができる。一方で、壁隅竈の竪穴建物跡は、壁の中央部付近に竈が付設される一般的な竪穴建物跡群の中に少数派として確認されることが多いのであるが、当遺跡では壁隅竈の竪穴建物跡のみが存在し、周辺に一般的な竈の竪穴建物跡の存在が確認できなかった。集落の構成としては特殊なものと考えられる。また、特徴的な遺物として、須恵器の短頸壺の蓋や灰釉陶器の瓶、灯明具として使用されたと考えられる須恵器の坏がある。ほかに遺構には伴わないが灰釉陶器の浄瓶が出土しており、これらの遺物を総じてみると仏教との関りが想起される。仏教系遺物と壁隅竈の竪穴建物の関係は、つくば市下大井遺跡でも確認することができる。下大井遺跡では、仏教系遺物が出土する壁隅竈の竪穴建物跡のほか、仏堂の可能性のある四面庇の掘立柱建物跡を確認している³⁰⁾。今回の調査ではそうした施設を確認することはできなかったが、当遺跡における平安時代の集落が、下大井遺跡の集落と同様の性格を持ったものであった可能性がある。

6 終わりに

今回の調査区域では9世紀後葉以降、700年以上に渡り明確な人間の痕跡を確認することができなかった。次に確認できるのが江戸時代で、塚が構築されている。トレンチによる堆積状況の確認のみであり、特徴的な遺物の出土もないため、当時の状況を判断することは難しい。そのほか時期を比定できた遺構は無く、現在に至るまでほとんど人の手が入った様子がない。そのため、弥生時代や平安時代の集落が良好な状況で遺存しており、その一部を確認できたことは大きな成果である。一方で、得られた情報量が膨大であり、検討に至らない点が多く残った。各時代の竪穴建物の構造や軸方向の検討、石器や土製品の分析を交えた生業の検討、近隣遺跡との関係の検討などが挙げられる。こうした課題の検討を重ねていくことで、水戸市域の歴史がより明らかになっていくことが期待できる。

註

- 1) 中村信博ほか「天矢場－民間開発に伴う天矢場遺跡第2次発掘調査報告書－」『茂木町埋蔵文化財調査報告書』第2集 2002年3月
- 2) 水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書」1999年3月
- 3) 山内清男「十王台式」『日本先史土器図譜』第1輯 1939年
- 4) 鈴木正博「『十王台式』理解のために－分布圏西部地域を中心にして」『常総台地』7号 常総台地研究会 1976年5月
- 5) 弥生時代研究班「茨城後期弥生式土器編年の検討(Ⅲ)」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団 1993年7月
- 6) 海老澤稔「茨城県における弥生後期の土器編年」『婆良岐考古』第22号 婆良岐考古同人会 2000年5月
- 7) 稲田健一編「舟窪遺跡」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第32集 2005年3月
- 8) 鈴木素行編「武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第15集 1998年1月
- 9) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 10) 鈴木正博ほか「リュウガイ遺跡」高萩市教育委員会 1976年3月
- 11) 鈴木正博「髭釜」研究抄『婆良岐考古』第4号 婆良岐考古同人会 1982年3月
- 12) 海老澤稔「長峯式土器について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団 1992年7月
- 13) 大洗町長峯遺跡調査団「茨城県大洗町長峯遺跡」『大洗町文化財調査報告書』第4集 1973年12月
- 14) 天野早苗「髭釜遺跡 行人塚古墳 都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第421集 2017年3月
- 15) 前掲註8)
- 16) 前掲註13)
- 17) 陸平調査団「陣屋敷遺跡」『陸平研究所報告』1 1992年12月
- 18) 関口満編「根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書 土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書」土浦市教育委員会 1997年3月
- 19) 前掲註3)
- 20) 井上義安編「一本松遺跡」茨城県大洗町一本松埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 21) 前掲註7)
- 22) 鈴木素行「茨城県域「十王台式」の土器と社会」『公開講座「ひたちなか市の考古学」第6回 弥生時代後期の北関東』ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2014年1月
- 23) 前掲註5)
- 24) 前掲註6)
鈴木正博「茨城弥生式の終焉－「統十王台式」研究序説－」『古代』第100号 早稲田大学考古学会 1995年9月
海老澤稔「茨城県城里町北方滝の上遺跡出土の弥生土器について－住居跡出土の穿孔された土器の性格－」『研究ノート』第14号 公益財団法人茨城県教育財団 2017年3月
- 25) 佐々木義則編「武田遺跡群 総括・補遺編」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第40集 2010年3月
- 26) 前掲註2)
- 27) 前掲註9)
- 28) 鈴木素行編「武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第21集 2001年3月
- 29) 駒澤悦郎ほか「茨城県内における壁隅竈の竪穴建物について(2)－特異な竈を付設した竪穴建物の分析(1)－」『研究ノート』第14号 公益財団法人茨城県教育財団 2017年3月
- 30) 島田和宏「下大井遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第197集 2003年3月

付 章

茨城県水戸市見川塚畑遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

茨城県水戸市見川に所在する見川塚畑遺跡は、弥生時代の竪穴建物跡や溝跡、土坑の他、平安時代の遺構・遺物も検出される複合遺跡である。

本報告では、弥生時代後期から古墳時代前期に帰属するとされる竪穴建物跡から出土した炭化材の同定を実施し、当時の木材利用について検討する。また、弥生時代後期後半の土器に確認された圧痕を対象として、マイクロスコブ観察を実施し、圧痕の由来について検討する。

2 炭化材同定

(1) 試料

試料は、第3号竪穴遺構（SI26）から出土した炭化材1点（炭化材①）である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

炭化材は、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、道管は単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

(4) 考察

弥生時代後期から古墳時代前期の範囲に入る第3号竪穴遺構から出土した炭化材①は、径20-30cmとされ、出土状況から建築部材に由来する可能性がある。分析試料として採取された部分は、土壌塊に最大で2cm角程度の炭化材片が多数含まれている状況であり、破片間の接合関係は確認できなかった。最も大きい破片で5年分の年輪が認められる。この炭化材片は、常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。確認のために、全ての破片について樹種を同定したが、同定可能な大きさを持つ破片10片は全てアカガシ亜属

であった。

アカガシ亜属の木材は比較的重硬で強度が高い材質を有しており、建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。茨城県内で弥生時代から古墳時代の建築部材について樹種同定した事例をみると、沿海地でアカガシ亜属などの常緑広葉樹が多いのに対し、内陸部では落葉広葉樹のクヌギ節・コナラ節を主体とした木材利用であり、植生の違いを反映したことが指摘されている（高橋，2012）。水戸市周辺では、東に隣接するひたちなか市の半分山遺跡，ほんぼり山遺跡，猪谷津遺跡，船窪遺跡，武田原前遺跡等で弥生時代から古墳時代の住居跡出土炭化材について樹種同定が実施され、遺跡によってクヌギ節主体となる結果も見られるが、全体的にアカガシ亜属，モチノキ属，ヤブツバキなどの常緑広葉樹が目立つ結果となっている。水戸市内では同時期の調査事例がほとんど無いが、今回の結果から少なくとも水戸市内まではアカガシ亜属が生育しており、その木材を建築部材等に利用していたことが推定される。

3 土器圧痕観察

(1) 試料

試料は、弥生時代後期後半の土器5点（SI23（122），SI29（156），SI29（158），SI28（144），SI 9（46））の底部に確認された圧痕11箇所である。SI23（122）では、葉圧痕と楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI29（156）では、葉圧痕と編組製品圧痕1箇所，楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI29（158）では、楕円状圧痕1箇所，卵状圧痕1箇所を対象とする。SI28（144）では、編組製品圧痕と不定形圧痕1箇所，楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI 9（46）では、不定形圧痕1箇所を対象とする。

(2) 分析方法

面相筆を用いて、圧痕内部に充填する泥を除去する。クリーニング後の圧痕を肉眼およびマイクロスコープ（株式会社キーエンス製；VHX-1000）で観察する。

SI23（122），SI29（156），SI29（158）の楕円状圧痕については、マイクロスコープ深度合成・3D合成処理を実施する。SI28（144），SI 9（46）は、土器接合後の状態であることから、マイクロスコープ観察を実施する。

(3) 結果

・SI23（122）（図版2）

葉圧痕を形成する物質は、双子葉類の葉の裏面で、広葉樹のカシワ（*Quercus dentata* Thunb. ex Murray；コナラ属コナラ亜属）の可能性がある。葉圧痕は、径7.2cmの円形を呈す土器底部外面全面に確認され、先端や基部、葉縁は確認されない。葉脈痕は凹状で細脈まで明瞭に確認されることから、葉裏と考えられる。主脈（1次脈）は、長さ6.9cm，幅2mm，深さ1mmで、側脈（2次脈）は、4対が主脈に対して45～65°の角度でほぼ平行配列し、最長4.3cm，幅・深さ0.5～0.7mm，上下側脈間は0.7～2.6cmを測る。3次脈は側脈に対して概ね垂直に配列し、上下の側脈に到達し連結する。4次脈や5次脈等も連結し、4～5角形の微細な網目模様を成す。主脈より計測した半分の最大幅は4.2cmであることから、圧痕を形成する葉の幅は8.4cm以上と推測される。

幅8cm以上の大形の葉をもつ所有現生標本（カシワ，ナラガシワ，ミズナラ，ヤマグワ，カジノキ，コウゾ，ホオノキ，クス，トチノキ，ヤマブドウ，クロカンバ，ケンポナシ等）や濱野（2005），田中（2008）

等を参考に、圧痕との比較を試みた結果、側脈の間隔・角度や細脈まで葉裏に隆起する点でカシワに最も似ることがわかった。ただし、同定根拠となる葉の先端や基部、葉縁が確認できないため、葉裏圧痕はカシワの可能性にとどめている。

一方、楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部に位置し、長さ2.8mm、幅1.7mm、深さ0.8mmの歪な楕円形で一端が突出する。表面は粗面・不明瞭で模様等は認められず、土器胎土を構成する砂粒が確認される程度である。

・SI29 (156) (図版3)

葉圧痕を形成する物質は、双子葉類の葉の裏面で、広葉樹と考えられるが分類群は不明である。葉圧痕は、径8.8cmの円形を呈す土器底部外面全面に確認され、先端や基部、葉縁は確認されない。葉脈痕は凹状で2側脈まで明瞭に確認され、3次脈は細溝状に確認されることから、葉裏と考えられる。主脈は、長さ6.1cm、幅3～3.5mm、深さ0.5mmで、中央よりややずれた位置に幅1mmの稜があり、2本にみえる。側脈は、3対が主脈に対して40°の角度でほぼ平行配列し、最長6.3cm（うち2.5cmは編組製品痕が覆う）、幅1mm、深さ0.3～0.4mm、上下側脈間は1.2～2cmを測る。一部の側脈には主脈と同様に稜があり、2本にみえる。3次脈は主に土器底部外面周縁に確認され、側脈に対して垂直に配列し、上下側脈に到達し連結する。4次脈等細脈は不明瞭である。主脈より計測した半分の最大幅は5.9cmであることから、圧痕を形成する葉の幅は12cm以上の大形の葉をもつ分類群と推測される。ただし、主脈や側脈の一部が2重線を呈すことから、人による線状痕を含む可能性がある。

編組製品圧痕は、土器底部外面中央約4cm範囲に確認され、重複する葉脈痕は不鮮明で一部消えている。圧痕は、幅0.5mm程度の細糸状が縦横交互に浮き沈みさせて編まれた左右対称な平織状で、微細な網目模様を呈す。圧痕を形成する編組製品は布製品等の可能性がある。

楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より0.6cmに位置し、長さ4.6mm、幅2.7mm、深さ1.7mmの楕円形で表面は粗面・不明瞭である。圧痕のマイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、イネ表面にみられる2本の縦隆条がかりうじて確認されたが、一端1/3付近で段差があり急に浅く細まることから、不明としている。

・SI29 (158) (図版4)

楕円状圧痕を形成する物質は、栽培種のイネ (*Oryza sativa* L.; イネ科イネ属) の胚乳(米)の可能性がある。圧痕は、土器底部外面周縁部より1.4cmに位置し、長さ6.0mm、幅3.2mm、深さ1.7mmの楕円形で、一端が斜切状であることから基部の胚の可能性がある。表面は粗面・不明瞭である。圧痕のマイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、イネの表面にみられる2本の縦隆条がかりうじて確認された。

卵状圧痕を形成する物質は、栽培種のキビ (*Panicum miliaceum* L.) *Oryza sativa* L.; イネ科キビ属) の果実(背面)の可能性がある。圧痕は土器底部外面周縁部に位置し、長さ6.0mm、幅2.7mm、深さ0.7mmの広卵形で、表面はやや平滑である。マイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、全体的に丸みを帯びることから、背面の可能性がある。また、正中線上の一端が尖ることから、基部の可能性がある。

・SI28 (144) (図版5)

編組製品圧痕は、土器底部外面全面に確認され、幅0.5mm程度の細糸状が縦の割合が多く編まれた左右非対称な綾織(斜文織)状で、微細な縦長の網目模様を呈す。圧痕を形成する編組製品は、SI29 (156) とは技法が異なる布製品等の可能性がある。

不定形圧痕を形成する物質は、岩片の可能性がある。圧痕は土器底部外面周縁部に確認され、長さ 4.8 mm と 4.7 mm、幅 2.5 mm、深さ 0.6 mm の L 字状を呈す。一端に径 2.5 mm の岩片が残る。土器胎土を構成する細礫と考えられ、この細礫の移動により圧痕が形成された可能性がある。

楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より 1.6 cm に位置し、長さ 4.2 mm、幅 2.9 mm、深さ 1.4 mm の楕円形で表面は粗面・不明瞭である。

・ SI 9 (46) (図版 5)

不定形圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より 0.8 cm に位置し、径 5 mm、深さ 1 mm の不定形で表面は粗面・不明瞭で模様等は認められず、土器胎土を構成する砂粒が確認される程度である。

(4) 考察

弥生時代後期後半の土器底部外面に確認された圧痕のマイクロスコブ観察の結果、圧痕形成物質は、SI23 (122) が双子葉類（カシワの可能性）の葉裏、SI29 (156) が双子葉類（広葉樹？）の葉裏および人による葉脈状痕の可能性と平織状編組製品、SI28 (144) が綾織状編組製品、SI29 (158) が栽培種のイネの胚乳（米）の可能性とキビの果実（背面）の可能性が指摘された。一方、SI28 (144) は岩片（細礫）の可能性、SI23 (122)、SI29 (156)、SI28 (144) の楕円状圧痕と、SI 9 (46) の不定形圧痕は、種類・部位ともに不明であった。

SI23 (122) の葉圧痕は、広葉樹のカシワの可能性が指摘された。カシワは、沿海地や丘陵の日当たりの良いやせ地や礫地などに生育する落葉高木で、現在の本地域にも分布し、コナラやミズナラと雑種を作りやすい。大形の葉は食物を蒸すとき等に利用され、現在でも広く柏餅に利用される。当時の土器製作時において、大形の葉をもつカシワが選択的に採取・利用された可能性は十分に考えられる。

また、SI23 (122) と SI29 (156) の土器底部外面全面に確認された葉圧痕は、葉脈痕が凹状であることから、土器成形後焼成前の段階で、土器底部に葉裏が接していたことが示唆される。さらに、SI29 (156) は、葉圧痕に編組製品圧痕が重なることから、葉裏の上に編組製品を置き、その上に土器を置いた可能性と、葉裏の上に土器を置いた後、土器を移動し編組製品の上に置き替えた可能性等が挙げられる。一方、SI29 (156) は、葉脈痕の一部が 2 重線を呈すことから、葉脈痕に沿って人が線状痕をつけた可能性がある。

引用文献

濱野周泰, 2005, 原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木, 柏書房, 334p.

林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

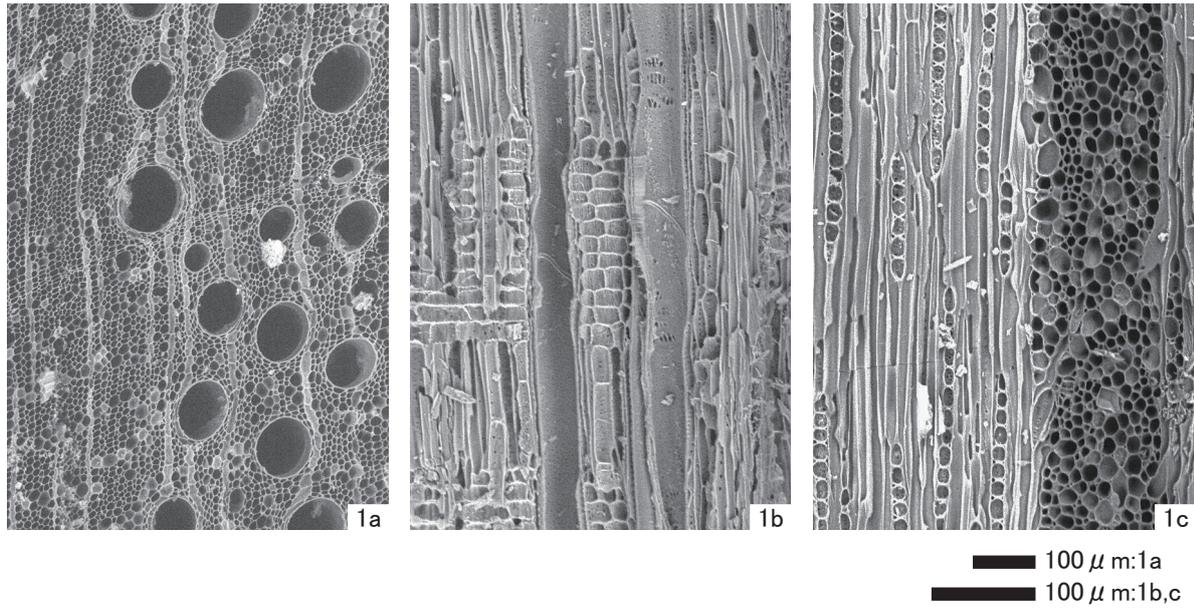
島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

高橋敦, 2012, 北関東・甲信-茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県-「木の考古学 出土木製品用材データベース」.

伊東隆夫・山田昌久(編), 海青社, 157-178.

田中啓幾, 2008, 落葉樹の葉, 山溪ハンディ図鑑 12, 山と溪谷社, 447p.

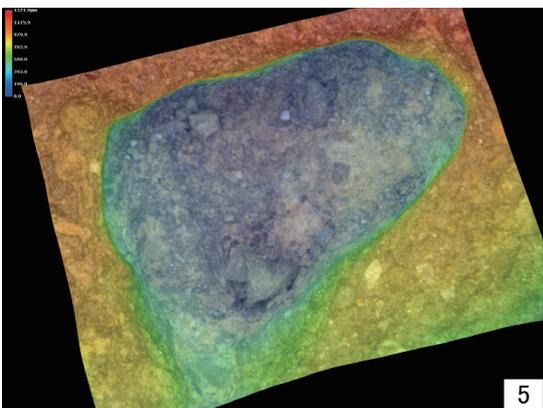
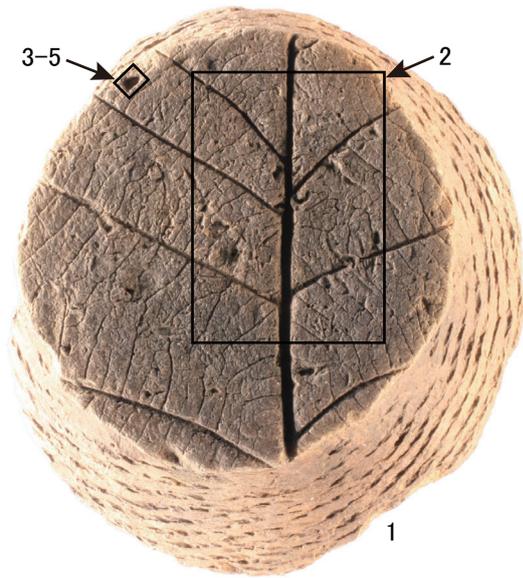
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



図版1 炭化材

1. コナラ属アカガシ亜属 (第3号竖穴遺構; 炭化材①)

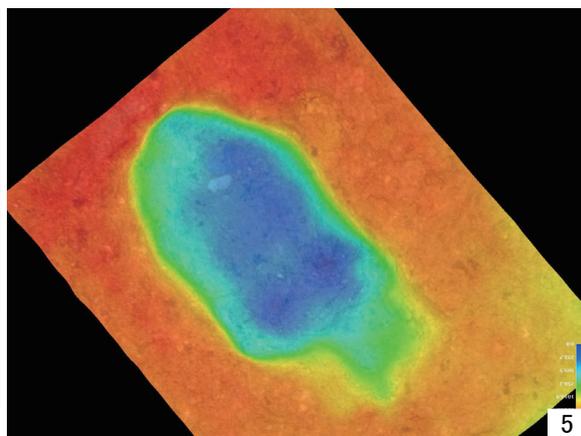
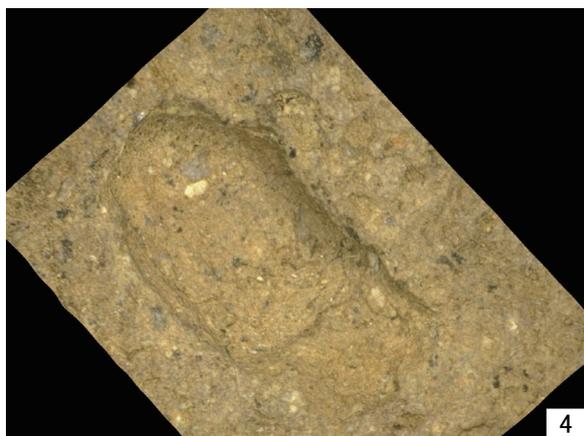
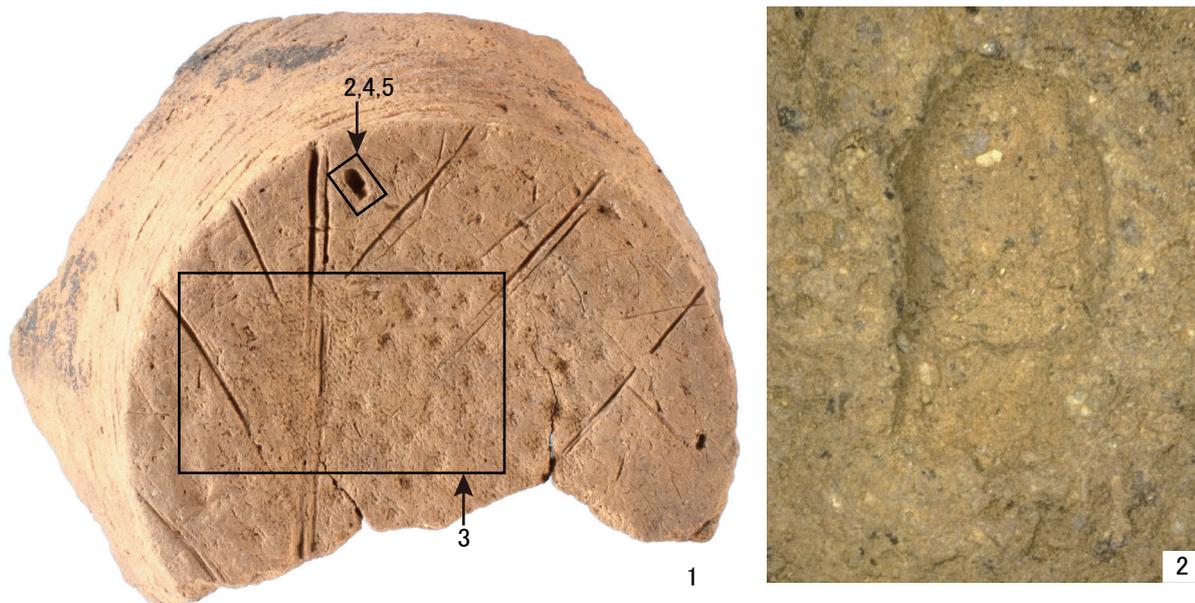
a: 木口, b: 柁目, c: 板目



1cm 5mm 1mm
 (1,6) (2) (3)

図版2 土器圧痕 (SI23 : 122)

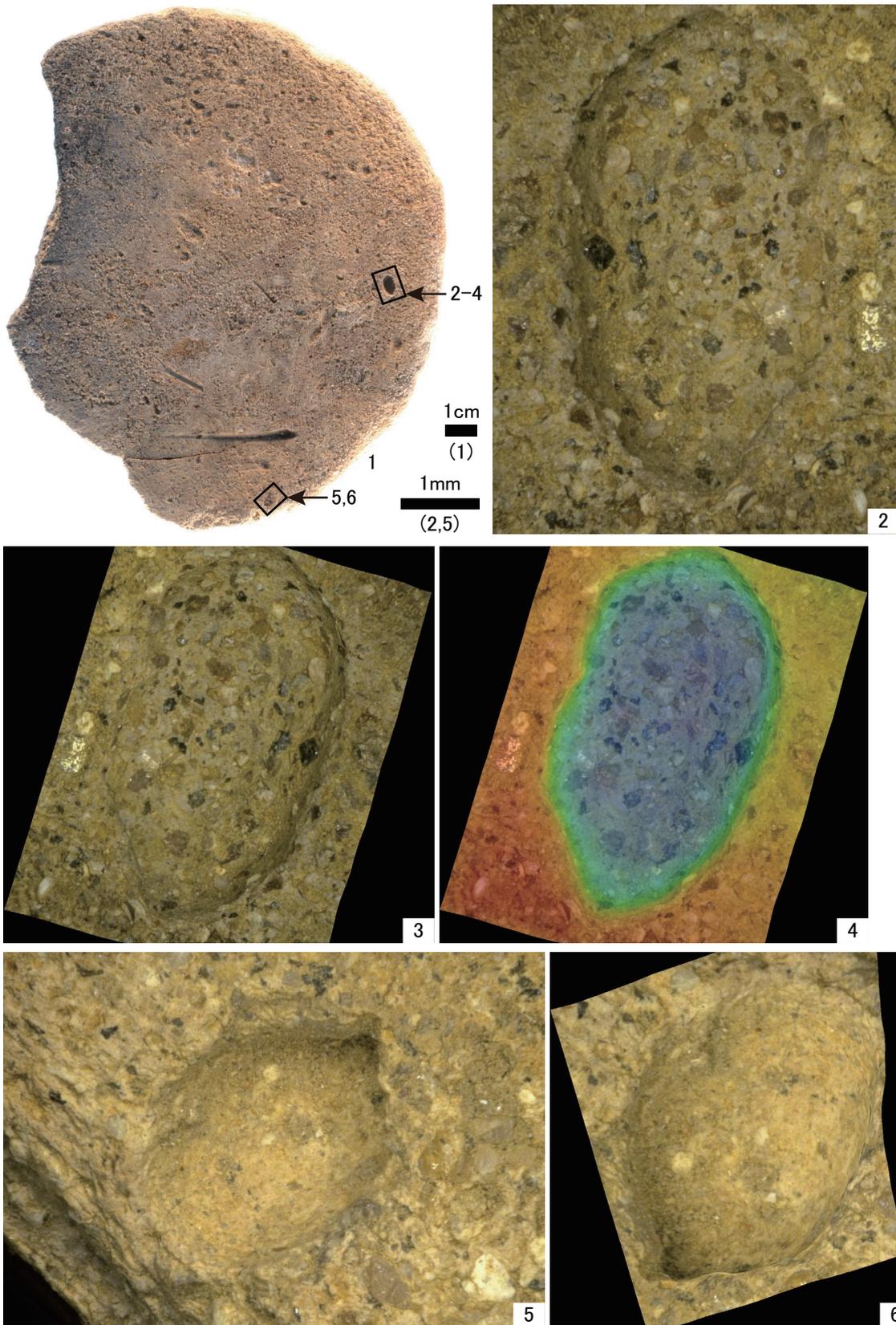
- 1. 土器底部外面 2. 双子葉類 (カシワの可能性) 葉裏圧痕
- 3. 不明圧痕 (マイクロスコープ深度合成画像) 4. 不明圧痕 (マイクロスコープ3D合成画像)
- 5. 不明圧痕 (マイクロスコープ3D合成画像) 6. カシワ葉裏 (現生標本; 群馬県産 TWTw20582)



1cm 5mm 1mm
 (1) (3) (2)

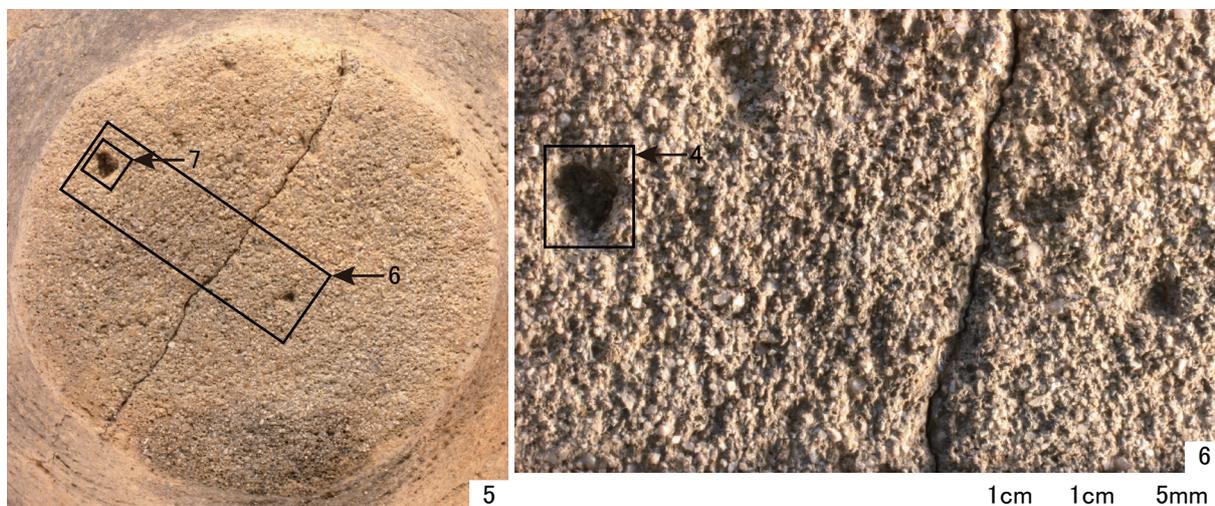
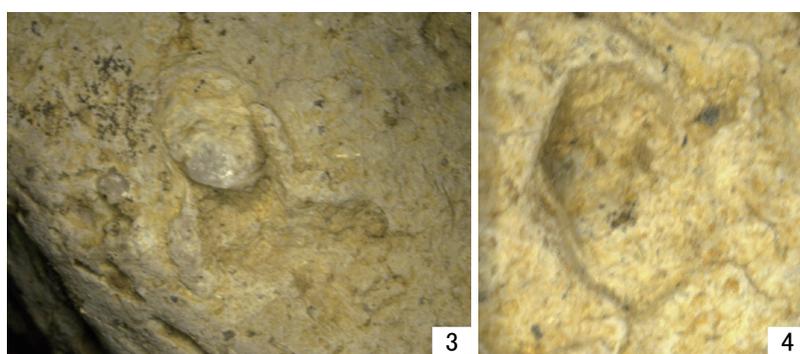
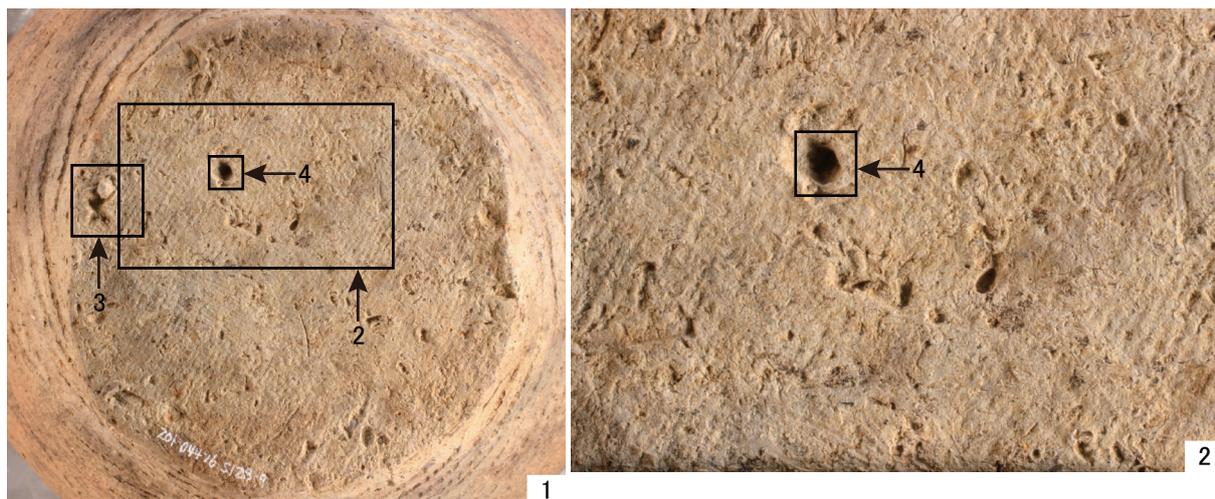
図版3 土器圧痕 (SI29:156)

1. 土器底部外面 2. 不明圧痕 (マイクログラフ深度合成画像) 3. 双子葉類 (広葉樹?) 葉裏圧痕の上に編組製品圧痕が重なる 4. 不明圧痕 (マイクログラフ3D合成画像) 5. 不明圧痕 (マイクログラフ3D合成画像)

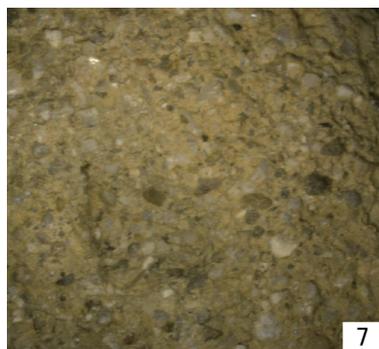


図版4 土器圧痕 (SI29:158)

1. 土器底部外面 2. 不明 (イネ胚乳の可能性) 圧痕 (マイクروسコープ深度合成画像) 3, 4. 不明 (イネ胚乳の可能性) 圧痕 (マイクروسコープ3D合成画像) 5. 不明 (キビ果実の可能性) 圧痕 (マイクروسコープ深度合成画像) 6. 不明 (キビ果実の可能性) 圧痕 (マイクروسコープ3D合成画像)



1cm 1cm 5mm
 (5) (1) (2,6)



図版5 土器圧痕 (SI28 ; 144/SI 9 ; 46)

1. 土器底部外面 (SI28 ; 144) 2. 編組製品圧痕 (SI28 ; 144) 3. 岩片? 圧痕 (マイクロスコブ画像) (SI28 ; 144) 4. 不明圧痕 (マイクロスコブ画像) (SI28 ; 144) 5. 土器底部外面 (SI 9 ; 46) 6. 不明圧痕 (SI 9 ; 46) 7. 不明圧痕 (マイクロスコブ画像) (SI 9 ; 46)

写 真 图 版



遺跡全景 (2016年度)



遺跡遠景 (2016年度)

PL2



調査区全景
(2015年度)



調査区全景
(2016年度)



第1号遺物包含層
遺物出土状況

第2号竖穴建物跡
遺物出土状況



第9号竖穴建物跡
遺物出土状況(全体)



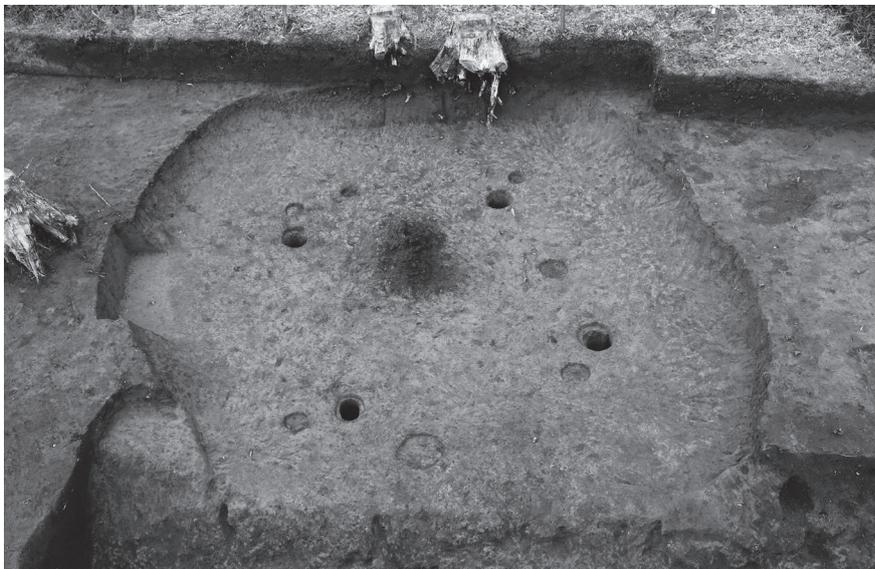
第9号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分)



PL4



第9号竖穴建物跡



第10号竖穴建物跡



第11号竖穴建物跡



第13号竖穴建物跡



第15号竖穴建物跡



第16号竖穴建物跡

PL6



第17号竖穴建物跡



第19号竖穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第19号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分)



第19号竖穴建物跡



第21号竖穴建物跡

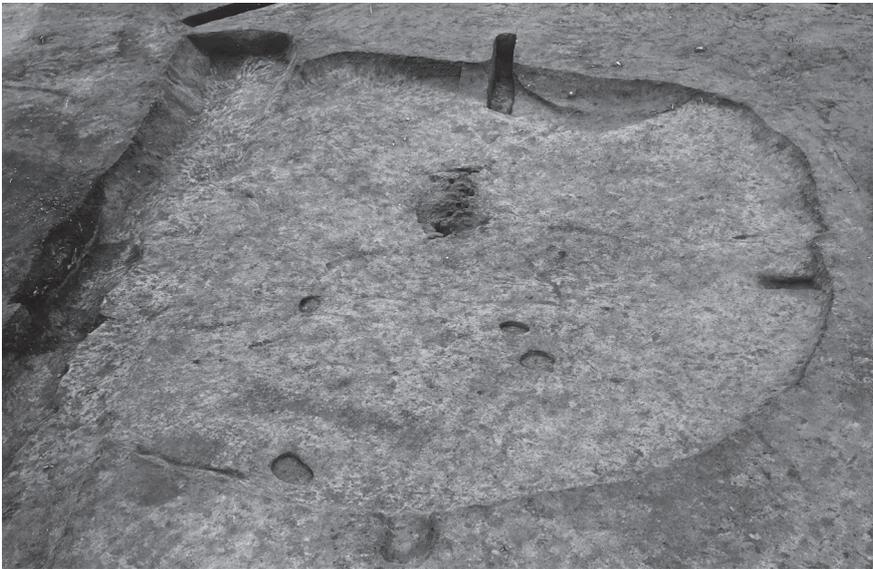


第23号竖穴建物跡

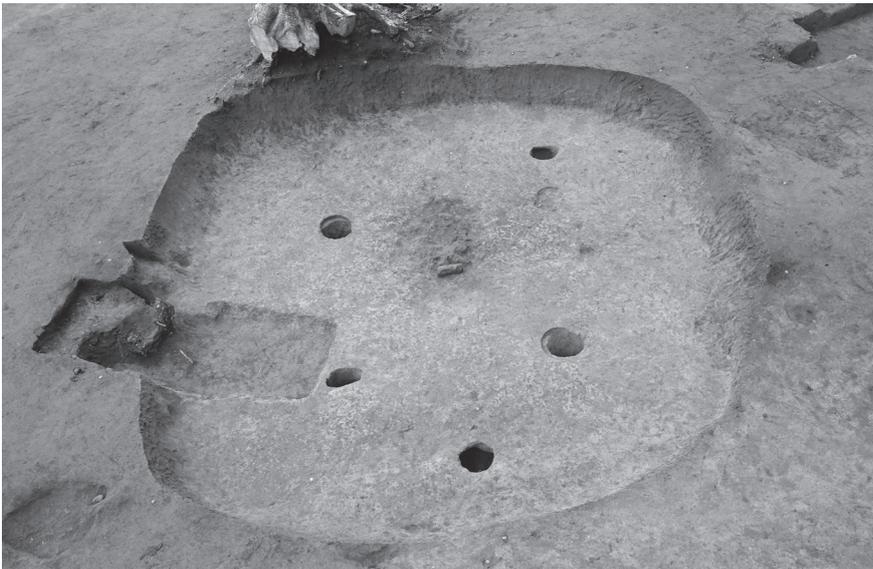
PL8



第24号竖穴建物跡



第25号竖穴建物跡



第27号竖穴建物跡

第28号竖穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第28号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分)



第28号竖穴建物跡



PL10



第29号竖穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第29号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分①)



第29号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分②)



第30号豎穴建物跡



第31号豎穴建物跡
遺物出土狀況(全体)



第31号豎穴建物跡
遺物出土狀況(部分)

PL12



第31号竖穴建物跡



第 22 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 3 号 竖 穴 建 物 跡
竈

第8号竖穴建物跡
竈遺物出土状況



第 1 号 塚



第 2 号 溝 跡



PL14



第1号竖穴建物跡
出土弥生土器



第28号竖穴建物跡
出土弥生土器



第31号竖穴建物跡
出土弥生土器

第1・28・31号竖穴建物跡出土土器



第1・2・9・19号竖穴建物跡出土土器

PL16



SI 2-21



SI 9-46



SI 19-96



SI 19-98

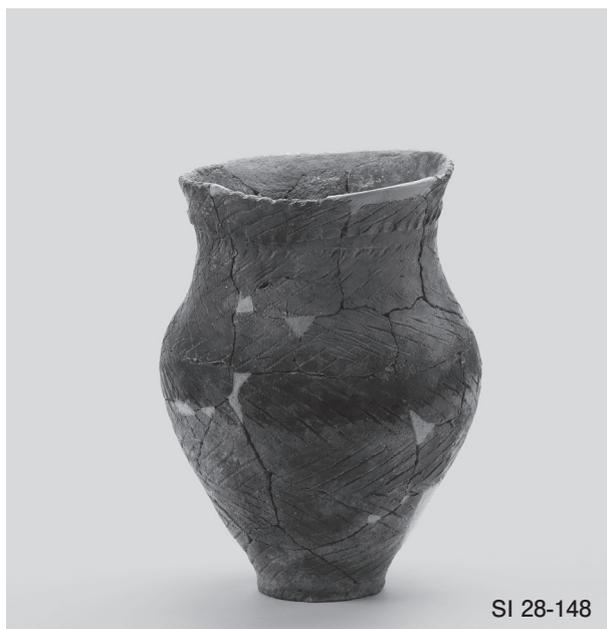


SI 19-108



SI 19-109

第2·9·19号竖穴建物跡出土土器

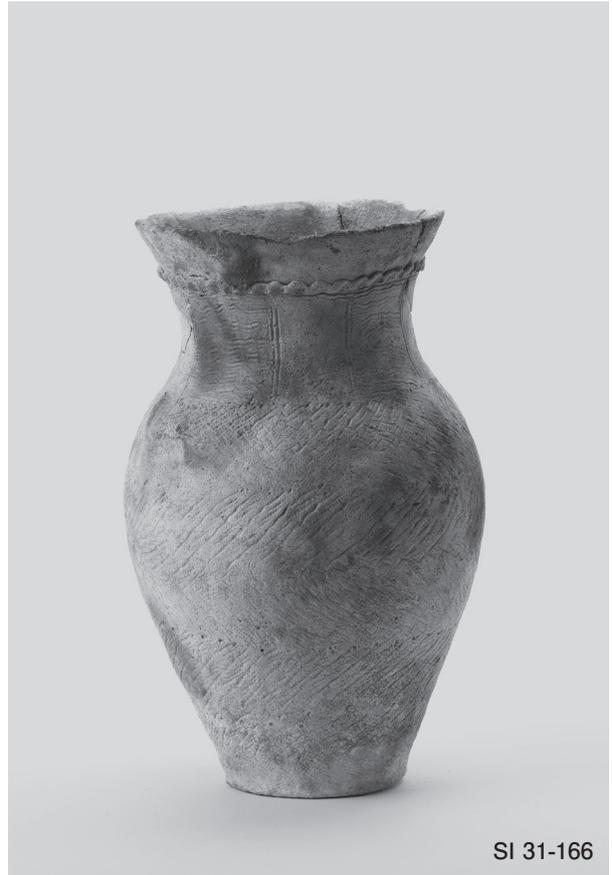


第28号竖穴建物跡出土土器

PL18

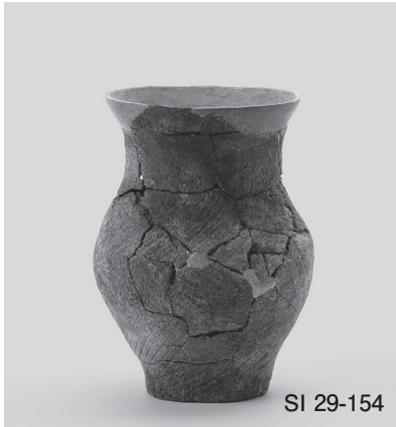


第29号竖穴建物跡出土土器

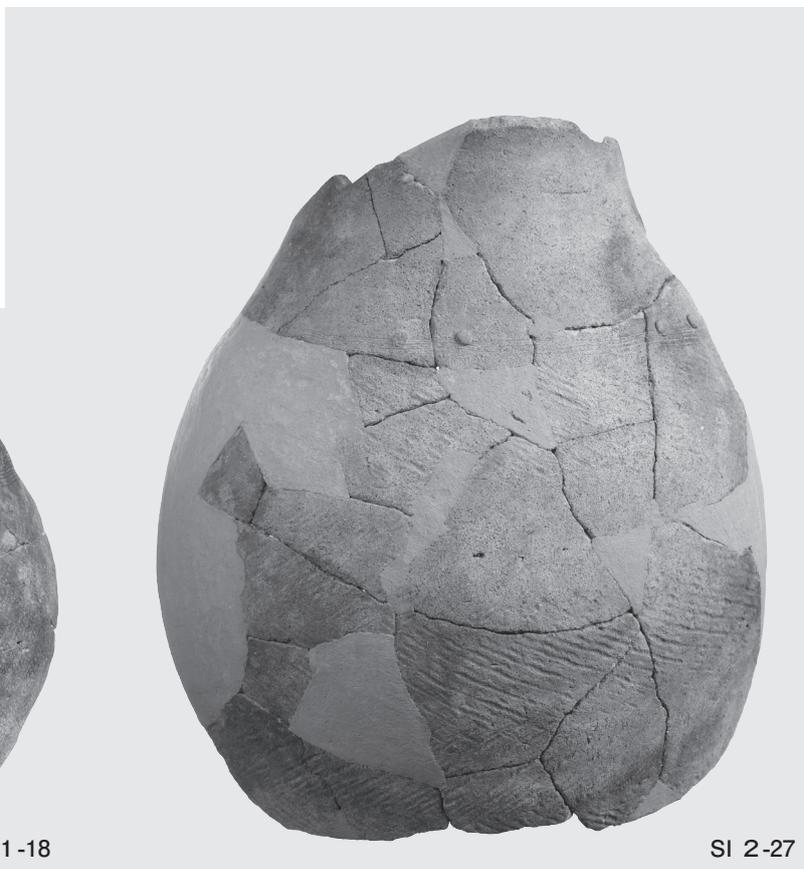


第31号竖穴建物跡出土土器

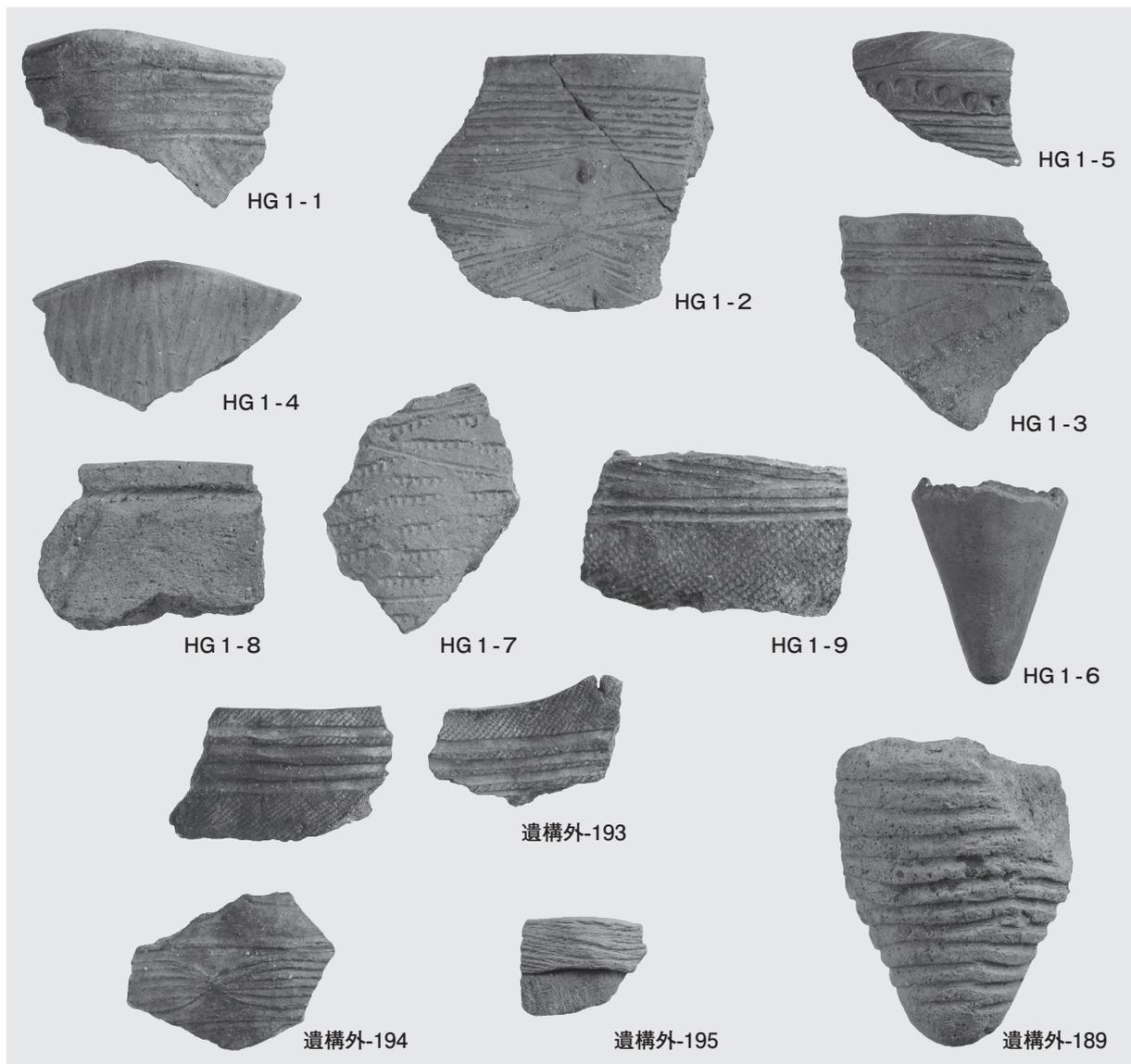
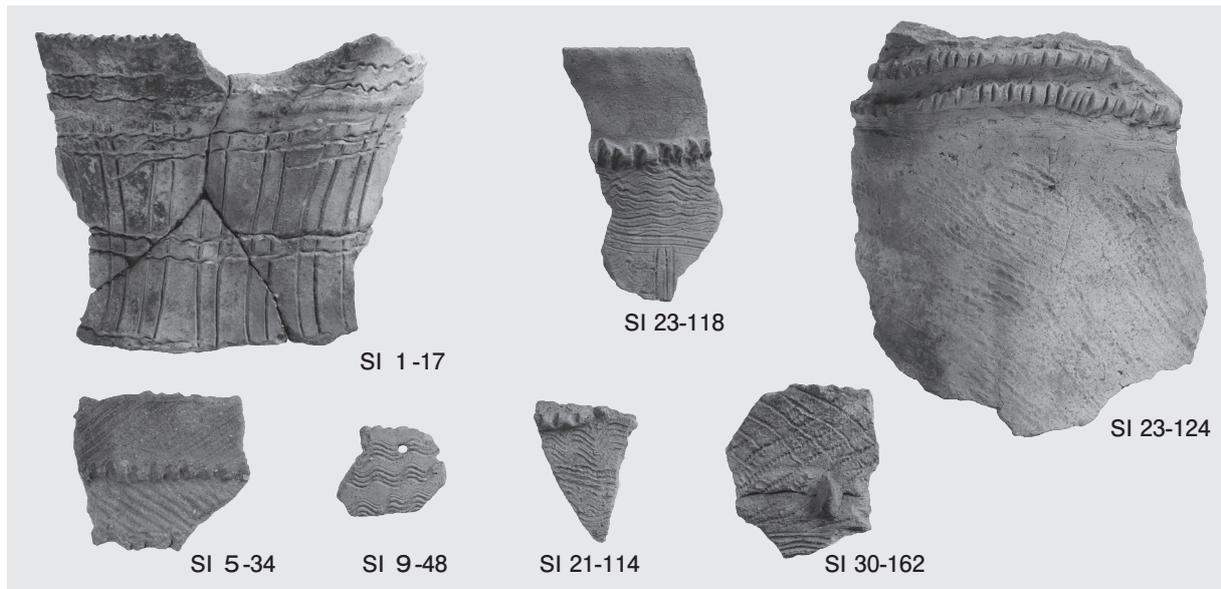
PL20



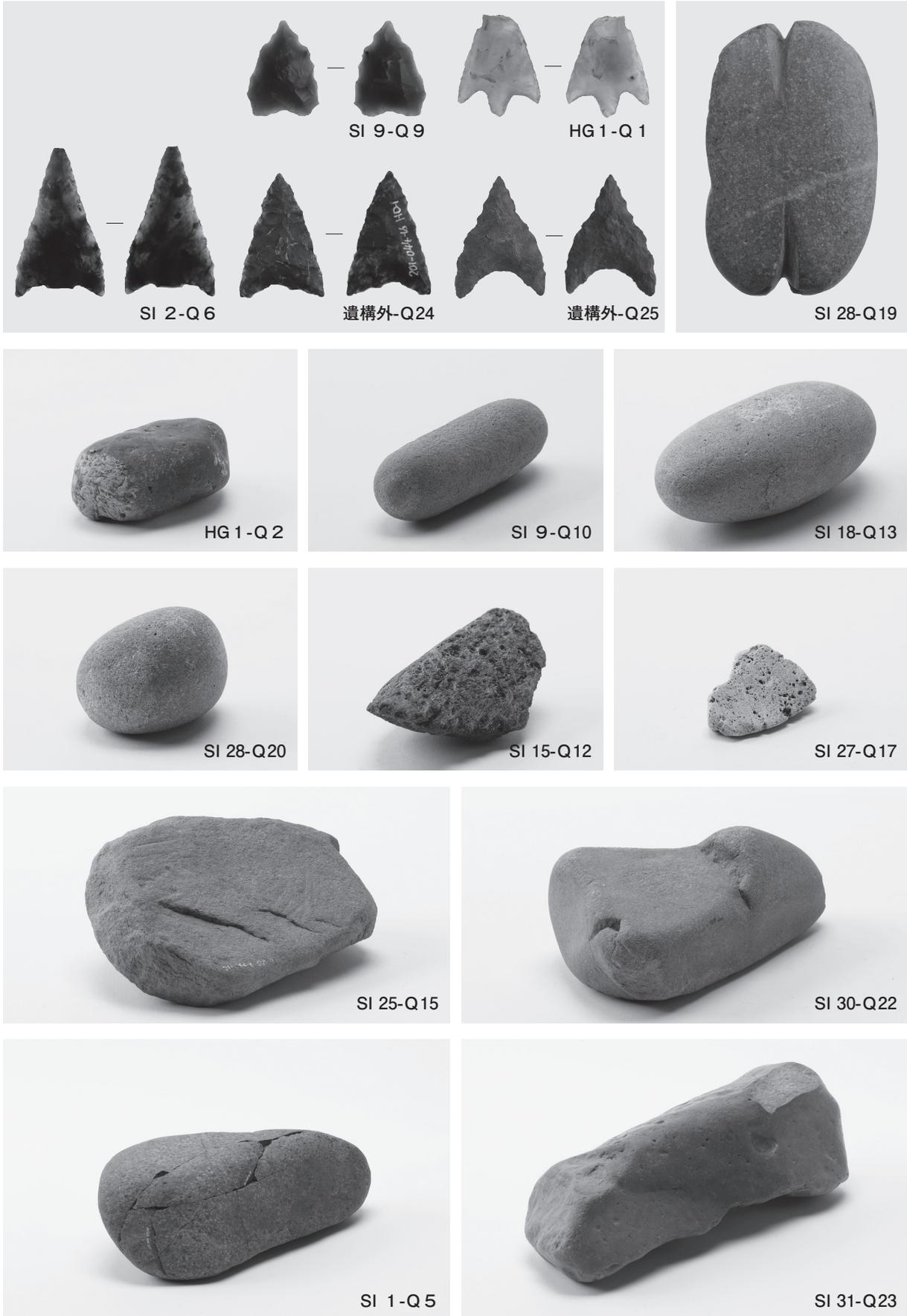
第1・9・19・29・31号竖穴建物跡出土土器



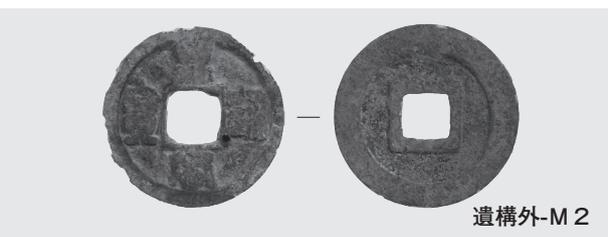
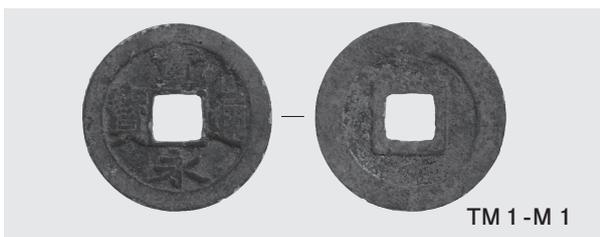
第1・2・6・10・11・27・28・29号竖穴建物跡出土土器，土製品



第1・5・9・21・23・30号竖穴建物跡，第1号遺物包含層，遺構外出土土器



第 1 · 2 · 9 · 15 · 18 · 25 · 27 · 28 · 30 · 31号豎穴建物跡，第 1号遺物包含層，遺構外出土石器



第3・7・8号竖穴建物跡，第3号竖穴遺構，第1号塚，遺構外出土土器，土製品，錢貨

抄 録

ふりがな	みがわつかはたいせき							
書名	見川塚畑遺跡							
副書名	広域公園偕楽園公園園路広場整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第430集							
著者名	盛野浩一							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2018(平成30)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
見川塚畑 遺跡	茨城県水戸市 見川1丁目 1234番地の1ほか	08201 044	36度 22分 24秒	140度 26分 40秒	24 ~ 26m	20160101 ~ 20160331 20160401 ~ 20160731	2,465㎡ 5,535㎡	広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
見川塚畑 遺跡	包蔵地	縄文	遺物包含層 1か所		縄文土器(深鉢), 石器(鏃・敲砥石), 剥片			
	集落跡	弥生	竪穴建物跡	25棟	弥生土器(蓋・高坏・広口壺・壺・甕), 土製品(紡錘車・不明土製品), 石器(鏃・石鏃・磨石・敲石・石錘・砥石・台石・炉石), 剥片			
		古墳	竪穴遺構	1基	土師器(椀・器台・壺・甕・小形甕)			
		平安	竪穴建物跡	3棟	土師器(甕), 須恵器(蓋・坏), 灰釉陶器(瓶)			
	塚	江戸	塚	1基	銭貨(寛永通寶)			
	その他	時期不明	道路跡	1条	石器(磨製石斧), 土製品(環状土錘), 銭貨(皇宋通寶)			
		溝跡	18条					
		土坑	43基					
		集石遺構	2基					
		遺物包含層	1か所					
要約	縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。主体となるのは、弥生時代後期後半の集落跡で、多数の十王台式土器や紡錘車が出土している。十王台式土器成立期から最盛期にかけての遺構と遺物を良好な状態で確認した。当時の土器様相や他地域との交流などが確認できる資料である。また、平安時代の竪穴建物跡は、3棟ともコーナーに竈が設置される特徴的な造りである。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Home
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning 図面類	RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

見川塚畑遺跡

広域公園偕楽園公園園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30（2018）年 3月15日 印刷

平成30（2018）年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433-33

TEL 029-252-8481